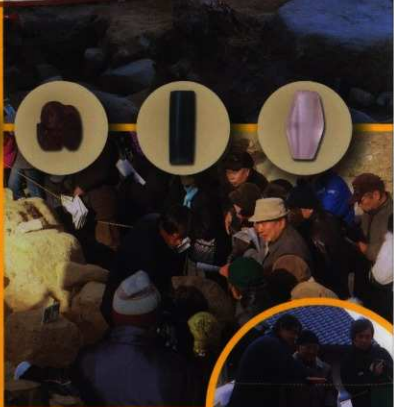
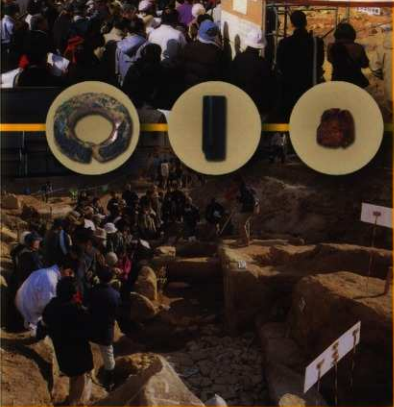


現地説明会

芦屋市文化財調査報告 第67集

八十塚古墳群・岩ヶ平石切場

Survey Report of a Megalithic Chambered Tomb in the Yasotuka and a quarry in the Iwagahira
岩ヶ平第45・46・58号墳と第108地点の発掘調査成果



2007.3

芦屋市教育委員会

八十塚古墳群・ 岩ヶ平石切場

(徳川大坂城東六甲採石場 VII)

—岩ヶ平第45・46・58号墳と
第108地点の発掘調査成果—

2007年3月

芦屋市教育委員会



大阪湾上空から芦屋市街地や六甲山東南麓を望む（矢印が調査地、芦屋市広報課撮影・提供〔平成14年〕）



Ⅱ区 第58号墳 石室床面検出状況（南から）



Ⅱ区 第58号墳 石室床面遺物出土状況（北から）



Ⅱ区 岩ヶ平第58号墳 石室（玄室）床面下層の分割掘削状況（右側壁側から）



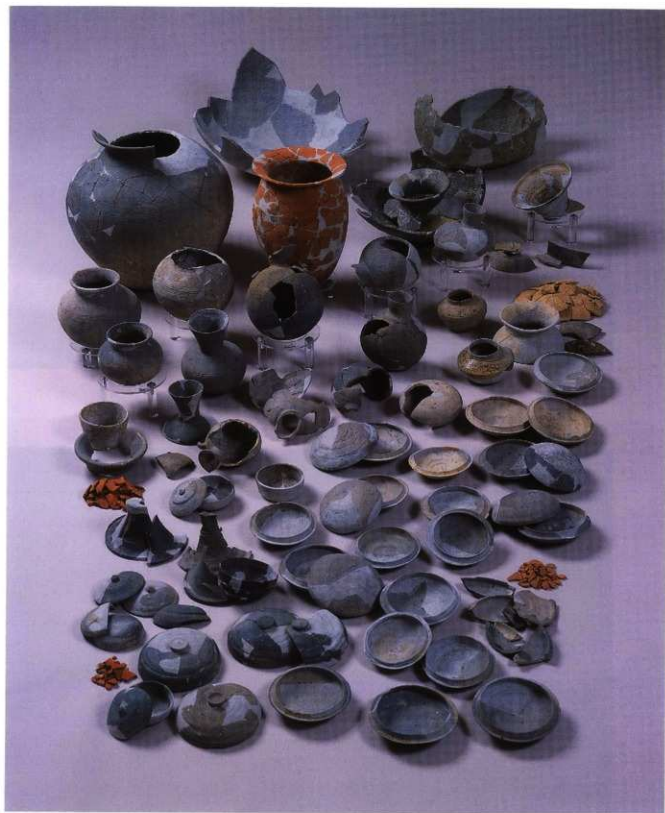
Ⅱ区 岩ヶ平第58号墳 石室主軸断ち割り土層断面（左側壁側から）



Ⅲ区 岩ヶ平刻印群〔第108地点〕 1号石材と刻印 全景（南から）



Ⅲ区 岩ヶ平刻印群〔第108地点〕 2号石材と刻印 全景（移設後の状況）



出土土器主要復元品〔梅原章一氏撮影〕



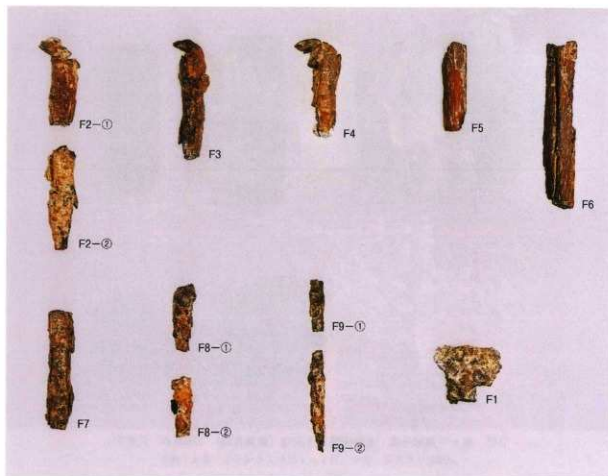
Ⅱ区 岩ヶ平第58号墳 玄室床面出土遺物（装身具類）〔梅原章一氏撮影〕
上段左より耳環・管玉・管玉、下段左より切子玉・薬玉・薬玉



Ⅱ区 第58号墳 土器溜り口出土遺物



Ⅱ区 第58号墳 墳丘西裾部ほか出土遺物
〔梅原章一氏撮影〕



Ⅱ区 第58号墳 玄室床面で検出した鉄製品（原寸大） 鉄釘・鉄鋸（梅原章一氏撮影）



第39図-43



第27図-37



第35図-18

漆黒色を呈する異質な胎土・色調の須恵器

（上）Ⅱ区 第58号墳 前庭部出土遺物（杯身）

（右上）Ⅱ区 第58号墳 墳丘内出土遺物（高杯）

（右下）Ⅱ区 第58号墳 石室内出土遺物（高杯）

序 文

全国には、古墳が20万基近くあると言われていています。その大半が「群集墳」と呼ばれる地域に根ざした民衆のお墓です。

墓の主は土地土地の生産活動の基礎を担い、地域の発展を真に支えた人たちであったと思います。この芦屋にも学界で著名な「八十塚古墳群」が存在し、神社や住宅地の中にかろうじて残っている横穴式石室のいくつかが市民の憩いの場として親しまれています。市街化されたまちに群集墳の存在が実感できるのです。

このたび住宅建設に先駆けて実施された発掘調査では、こうした名も無き人びとの家族を葬った石室古墳1基の完全発掘と石室古墳2基の部分発掘を行い、後者は地権者のご協力を得て庭地に保存することができました。

また、本事業地では古墳時代の遺跡以外に芦屋の特性の一つでもある徳川大坂城の江戸時代初期の石切場もみつきり、類例の少ない刻印石などが注目されました。

事業者をはじめ、この調査に種々のご協力をいただいた関係各位に対して、衷心からお礼申し上げます。

平成19年3月31日

芦屋市教育委員会

教育長 藤 原 周 三

例 言

1. 本書は、芦屋市文化財調査報告第67集（正報告書）であり、平成17・18年度事業として芦屋市教育委員会の責任の下、事業者大興業株式会社との事業協定に基づき、今年度末を期限に公開するものである。
2. 本書は、芦屋市教育委員会が民間宅地造成並びに建築事業に伴い事前調査を実施した八十塚古墳群・岩ヶ平刻印群の発掘調査結果の正報告書である。調査期間は、平成17年12月6日～平成18年2月25日であり、延日数およそ67日を費やして行った。遺跡は、兵庫県教育委員会が平成16年3月に公開している『兵庫県遺跡地図—第1分冊—（発掘調査の手引き・遺跡地名表）』の地名表編P11に「遺跡番号70009八十塚古墳群」（種類：古墳、時代：古墳）、「遺跡番号70049岩ヶ平刻印群」（種類：生産遺跡、時代：近世）として掲げられている。また、その位置や範囲については、同『兵庫県遺跡地図—第2分冊—（遺跡分布地図）』の図版96（国土地理院発行2万5千分の1地形図複製「西宮」）に周知の埋蔵文化財包蔵地として記載されている。同遺跡は、〔芦屋市教育委員会2001〕でも周知されている。なお、書名は「八十塚古墳群岩ヶ平刻印群」から採った。
3. 調査地は、兵庫県芦屋市六菰荘町170番地2、3、4に所在する。
4. 発掘調査は、芦屋市教育委員会が調査主体となり、社会教育部生涯学習課の主査森岡秀人（学芸員）と嘱託坂田典彦（学芸員）両名が担当した。調査・整理事業に係る事務は、同課課長の川崎正年、課長補佐の長谷川易司、主事（庶務担当）春木和子、臨時的任用職員の国政恭子が主担当した。
5. 本発掘調査の実施に際しては、兵庫県教育委員会の下記の方々から指導・助言を受けた。
岡崎正雄（文化財室課長補佐兼審査指導係長、平成17年度）、深井明比古（同課長補佐兼審査指導係長、平成18年度）、平田博幸（同主査、平成17・18年度）
6. 現地の発掘調査および出土遺物など整理作業は、森岡・坂田が担当し、下記の調査・整理補助員並びに文化財ボランティアの方々に従事した。また、守田めぐみ嘱託にも遺物図版作成をはじめ種々作業の補助を得た。
天羽育子 楠 貴大 小泉信吾 清水杏奈 水津真実 須藤 歩 武田 剛 竹中 充 西岡崇代
萩原美香 広瀬八郎 藤田明弘 山本麻理（以上、調査補助員、1日のみの参加も含む）
上記の整理補助員に加えて、数千点におよぶ遺物片の基礎整理や遺物接合・復元作業を中心に、芦屋市整理補助員OBの方々にお手伝い頂いた。お名前を記し、献身的なご協力に対し、感謝の意を表する。
相澤淳子 梅本素子 久保ふく子 小島静子 中井みどり 仲谷由利子（以上、文化財ボランティア）
7. 遺物写真については、梅原章一写真事務所にて専門撮影を委託した。
8. 本書の執筆は、森岡・坂田が担当した。執筆分担の責は目次および担当節・項末尾に掲げたとおりである。
9. 現地調査および調査前後の検討、報告書の作成において、下記の方々に専門的な立場や地元の経験的な視野から多岐にわたるご教示、ご協力、ご支援を賜った。所属と名前を記し、深く感謝の意を表する。
荒木幸治（赤穂市教育委員会）、伊井孝雄（文化財保存全国協議会・加茂遺跡を守る会）、勇 正広（元 兵庫県埋蔵文化財パトロール監視員）、太田宏明（河内長野市教育委員会）、角上孝行（東海アナース株式会社）、喜多貞裕（株式会社総合文化企画、現 文化財サービス）、北垣聡一郎（元 東大阪短期大学）、棚山秀徳（財団法人古代学協会）、合田茂伸（西宮市教育委員会）、関野 豊（神戸市教育委員会）、竹村忠洋（芦屋市教育委員会）、寺岡 洋（むくげの会）、富山直人（神戸市立博物館学芸課）、中村博司（大阪城天守閣）、西村 歩（財団法人大阪府文化財センター）、白谷朋世（芦屋市教育委員会）、濱野俊一（当時 香芝市二上山博物館、現 大和高田市教育委員会）、藤川祐作（芦の芽グループ）、古川久雄（摂陽文化財研究所）、三瓶裕司（財団法人 かながわ考古財団）、村川行弘（芦屋市文化財保護審議会委員）、山村 薫（城郭談話会）、山本徹男（市内遺跡ビデオ撮影担当、映像作家）、渡辺邦雄（住吉東高等学校）〈以上、順不同〉
10. 確認調査・発掘調査並びに整理作業費や報告書印刷費は、すべて事業者の大興業株式会社が負担した。記してその協力に感謝したい。また、現場の発掘作業・整理作業の一部は、東海アナース株式会社に作業委託した。
11. 本書名称および文中で大板城と大板城を使い分けて記載した。これは、当時の古文書や絵図等に見られる用例に拠った。歴史的な理由は諸説みられるが、字義の縁起直しによるものとされる。
12. 本書の編集は、森岡秀人・坂田典彦が担当した。

本文目次

序文	芦屋市教育長 藤原周三	i
例言		ii
本文目次		iii
挿図目次		v
表目次		vi
図版目次		vi
I 調査に至る経緯		
(1) 調査の原因と調査協議の経過	(森岡秀人)	1
(2) 調査前史と確認調査の結果	(森岡)	1
(3) 遺跡地の取り扱いと本発掘調査	(森岡)	3
II 遺跡をとりまく環境		
(1) 地理・地質的環境と調査地の位置	(坂田典彦)	5
(2) 芦屋地方の歴史概観	(森岡)	6
III 八十塚古墳群・岩ヶ平刻印群研究の沿革		
(1) 八十塚古墳群調査・研究の半世紀	(森岡)	10
(2) 徳川大坂城東六甲採石場の調査活動と岩ヶ平刻印群	(坂田)	16
IV 発掘調査の方法と調査経過		
(1) 調査の手順と地区割	(森岡・坂田)	19
(2) 調査の経過	(森岡・坂田)	21
発掘調査日誌 抄録		
V 発掘調査結果		
(1) I 区の調査概況	(森岡・坂田)	28
① 基本層序と所見		28
② 配石遺構		28
③ 焼土・炭層面		32
④ 出土遺物		32
⑤ 小 結		33
(2) II 区の調査概況	(森岡・坂田)	33
① 岩ヶ平第58号墳		33
A. 基本層序と所見	B. 墳丘 墳丘内出土遺物	C. 石室構造
D. 石室内遺物出土状況および出土遺物		
E. 周濠想定部の土器溜り (A～C) および出土遺物について		
F. 前庭部遺物出土状況および出土遺物		
G. 墳丘裾部、後道西方のコッパ層下部、遊歩道より東の近現代盛土層出土土器など		
② 小 結		58
(3) III 区の調査概況	(森岡・坂田)	60
① 基本層序と刻印石の検出状況		60
② 1号石材の観察記録と所見		60
③ 2号石材の観察記録と所見		64
④ 出土遺物		64

⑤ 小 結	64
(4) IV区の調査概況	(森岡・坂田) 67
① 基本層序と所見	67
② 埴 状 遺 構	67
③ 近・現代盛土に含まれる遺物の経緯	67
④ 出 土 遺 物	71
⑤ 小 結	71
(5) V区の調査概況	(森岡・坂田) 72
① 岩ヶ平第45号墳	72
A. 位置と立地条件 B. 基本層序と所見 C. 墳丘 D. 石室構造 E. 近世の遺構 F. 羨道部遺物出土状況 G. 前庭部遺物出土状況 H. 墳丘内外とその他出土遺物	
② 岩ヶ平第46号墳	84
A. 基本層序と所見 B. 墳丘 C. 石室構造 D. 羨道部遺物出土状況	
③ 小 結	86
VI 総括と考証	
(1) 第108地点検出の3古墳の所見整理と二、三の問題について	(森岡・坂田) 88
① 調査の概括と保存動向覚書	88
② 調査古墳を含む岩ヶ平文群の特質	88
③ 築造時期と群形成および支群・小支群形成	89
④ 第58号墳石室検出の装身具類について	90
⑤ 石室外の土器類の扱いをめぐって	91
⑥ 出土須恵器をめぐる諸問題	92
⑦ F小支群内での位置と古墳群・支群の構成について	93
⑧ む す び	94
(2) 石切場の機能的検討	(森岡・坂田) 95
① 大坂城の割替蹟、石切丁場割との関わりについて	95
② 丁場機能からみた本調査地	99
出土遺物観察表	100
引用・参考文献一覧	106
報告書抄録	
編集余瀝	(森岡・坂田) 末尾

#

第51図	Ⅱ～Ⅳ区 東壁土層断面図	70
第52図	Ⅳ区 出土遺物	71
第53図	V区 遺構配置図	73
第54図	V区 第45・46号墳間 東西トレンチ土層断面図	74
第55図	V区 第45号墳 南トレンチ西壁・西トレンチ南壁土層断面図	75
第56図	V区 南トレンチ東壁土層断面図	76
第57図	V区 第45号墳 石室・天井石平面図	77
第58図	V区 第45号墳 石室 平面・立面図	78
第59図	V区 第45号墳 主軸セクション（羨道部）断面図	79
第60図	V区 出土遺物	80
第61図	V区 土器散布面平面図（須恵器）	81
第62図	V区 土器散布面平面図（土師器）	81
第63図	V区 土器散布面出土遺物	82
第64図	V区 第46号墳 石室上面展開図	85
第65図	岩ヶ平刻印群 刻印石の分布と各番採石範囲	97
第66図	1・2号石材類似刻印の検出石垣と担当大名対照図	98

表 目 次

第1表	2号石材矢穴計画表	65
第2表	八十塚古墳群（有袖式）玄室幅・玄室長比率分布	91
第3表	八十塚古墳群 口径の小さい順	93
第4表	八十塚古墳群 立ち上がり口の小さい順	93
第5表	出土遺物観察表 (1)	100
第6表	出土遺物観察表 (2)	101
第7表	出土遺物観察表 (3)	102
第8表	出土遺物観察表 (4)	103
第9表	出土遺物観察表 (5)	104
第10表	出土遺物観察表 (6)	105

図 版 目 次

巻頭カラーⅠ（上）	大阪湾上空から芦屋市街地や六甲山東南麓を望む（矢印が調査地、芦屋市広報課撮影・提供〔平成14年〕）	巻頭カラーⅤ（上）	Ⅱ区 岩ヶ平第58号墳 玄室床面出土遺物（装身具類）〔梅原章一氏撮影〕 上段左より耳環・管玉・管玉、下段左より切子玉・素玉・素玉
（左下）	Ⅱ区 第58号墳 石室床面検出状況（南から）	（左下）	Ⅱ区 第58号墳 土器溜りB出土遺物
（右下）	Ⅱ区 第58号墳 石室床面遺物出土状況（北から）	（右下）	Ⅱ区 第58号墳 墳丘西側部ほか出土遺物〔梅原章一氏撮影〕
巻頭カラーⅡ（上）	Ⅱ区 岩ヶ平第58号墳 石室（玄室）床面下層の分割掘削状況（右側壁側から）	巻頭カラーⅥ（上）	Ⅱ区 第58号墳 玄室床面で検出した鉄製品（原寸大）鉄釘・鉄鏃〔梅原章一氏撮影〕 漆黒色を呈する異質な胎土・色潤の須恵器
（下）	Ⅱ区 岩ヶ平第58号墳 石室主軸断ち割り土層断面（左側壁側から）	（上）	Ⅱ区 第58号墳 前庭部出土遺物（杯身）
巻頭カラーⅢ（上）	Ⅱ区 岩ヶ平刻印群〔第108地点〕1号石材と刻印 全景（南から）	（右上）	Ⅱ区 第58号墳 墳丘内出土遺物（高杯）
（下）	Ⅲ区 岩ヶ平刻印群〔第108地点〕2号石材と刻印 全景（移設後の状況）	（右下）	Ⅱ区 第58号墳 石室内出土遺物（高杯）
巻頭カラーⅣ	出土土器主要復元品〔梅原章一氏撮影〕		

図版1 (左上) I区 配石遺構検出状況(北から)	(中) II区 第58号墳 玄室部床面検出状況(左側壁側から)	
(右上) I区 配石遺構検出状況(東から)	(下) II区 第58号墳 礎床面検出後の石室玄室部の検出状況(奥壁側から)	
(左中上) I区 配石遺構焼土・炭層検出状況(南西から)		
(右中上) I区 配石遺構焼土・炭層検出状況(北西から)	図版7 (左上) II区 第58号墳 石室主軸半截状況(開口部から)	
(左中下) I区 SK103 四分法による掘削状況(北西から)	(右上) II区 第58号墳 玄室床面半截状況(奥壁側から、溝槽前)	
(右中下) I区 SK101 検出状況(南東から)	(左中) II区 第58号墳 石室主軸半截状況(奥壁側から)	
(左下) I区 北壁・東壁の土層断面(南西から)	(右中) II区 第58号墳 礎床の取り除き状況(奥壁側から)	
(右下) I区 完掘状況(南西から)	(左下) II区 第58号墳 玄室床面敷石使用石材	
	(右下) II区 第58号墳 玄門石付近の床面下礎断面土層	
図版2 (左上) II区 第58号墳 調査前の状況(北西から)		
(右上) II区 第58号墳 玄門部付近の掘削状況(東から)	図版8 (上) II区 第58号墳 玄室床面断面断面(東から)	
(左中) II区 第58号墳 表土・掘削土の除去途中の状況(南東から)	(中) II区 第58号墳 礎道石材抜き取り痕(東から)	
(右中) II区 第58号墳 玄門石検出状況(東から)	(下) II区 第58号墳 石室礎道床面下に現れた石材抜き取り痕(東から)	
(左下) II区 第58号墳 玄門部周辺の掘り下げ状況(東から)		
(右下) II区 第58号墳 石室内堆積土掘削過程の状況(奥壁側から)		
図版3 (左上) II区 第58号墳 主軸セクションベルト設定状況(北から)	図版9 (左上) II区 第58号墳 玄室床面鉄釘出土状況(東から)	
(右上) II区 第58号墳 石室遺存状況(奥壁側から)	(右上) II区 第58号墳 石室床面遺物出土状況(南東から)	
(左中) II区 第58号墳 奥壁基底部の状況(玄室内側から)	(左中) II区 第58号墳 玄室床面耳環出土状況(東から)	
(右中) II区 開口部付近で検出された割石の集積(南から)	(右中) II区 第58号墳 玄室床面切子玉出土状況(南から)	
(左下) II区 第58号墳 左側壁遺存状況(開口部側から)	(左下) II区 第58号墳 玄室床面管玉出土状況(南西から)	
(右下) II区 第58号墳 床面検出状況(開口部から)	(右下) II区 第58号墳 玄室床面鉄線出土状況(南から)	
図版4 (左上) II区 第58号墳 墳丘東西セクション(北から)	図版10 (左上) II区 第58号墳 墳丘裾部遺物出土状況(西から)	
(右上) II区 第58号墳 墳丘東西セクション(北西から)	(右上) II区 第58号墳 墳丘裾部遺物出土状況(西から)	
(左下) II区 第58号墳 石室床面検出状況(南から)	(左中上) II区 第58号墳 確認調査10トレンチの残存出土遺物(西から)	
(右下) II区 第58号墳 玄室右側壁背面の基壇照形(開口部側から)	(右中上) II区 第58号墳 墳丘内土器集積部出土状況(東から)	
図版5 (左上) II区 第58号墳 墳丘調査状況(南西から)	(左中下) II区 第58号墳 墳丘内遺物出土状況(北西から)	
(右上) II区 第58号墳 墳丘東西セクションベルト断面(北西から)	(右中下) II区 第58号墳 墳丘内土器集積部上層出土状況(接写)	
(左中) II区 第58号墳 墳丘西半部の封土掘り下げ状況(西から)	(左下) II区 第58号墳 墳丘内遺物出土状況(西から)	
(右中) II区 第58号墳 墳丘東半部遺存確認トレンチ(南東から)	(右下) II区 第58号墳 墳丘内土器集積部出土状況(北東から)	
(右下) II区 第58号墳 墳丘東半部の状況(北から)	図版11 (上) II区 第58号墳 墳丘西側裾部土器溜りA検出状況(北から)	
(左下) II区 第58号墳 墳丘西半部の土層断面(南から)	(中) II区 第58号墳 西墳丘裾部土器溜りA検出状況(北から)	
図版6 (上) II区 第58号墳 玄室床面検出状況(礎道部から)		

	(下)	Ⅱ区 第58号墳 前庭部西側遺物散布状況(南から)	図版18 (左上) V区 第46号墳 調査前の状況(北東から)
			(右上) V区 第46号墳 右側壁玄室相当部
図版12 (左上)	Ⅱ区	調査前の状況(北西から)	(左中上) V区 第46号墳 玄室相当部試掘状況〔Ⅰ〕(奥壁側から)
(右上)	Ⅲ区	表土除去後の状況(北西から)	(右中上) V区 第46号墳 玄室相当部試掘状況〔Ⅱ〕(奥壁側から)
(左中上)	Ⅲ区	セクションベルト設定状況(北西から)	(左中下) V区 第46号墳 玄室深掘トレンチ(右側壁側から)
(右中上)	Ⅲ区	完掘状況(北から)	(右中下) V区 第46号墳 玄室全景(奥壁側から)
(左中下)	Ⅲ区	採掘作業風景	(左下) V区 第46号墳 墳丘封土の状況(玄室右側壁裏込め部分)
(右中下)	Ⅲ区	1号石材の刻印	
(左下)	Ⅲ区	2号石材(刻印石) 移設後の状況	
(右下)	Ⅲ区	2号石材刻印面とAタイプの矢穴列	
		痕	
図版13 (上)	Ⅳ区	近・現代の盛土層より出土した遺物の出土状態(西から)	図版19 I区 トレンチ外・Ⅳ区出土遺物
(中)	Ⅳ区	が状遺構検出状況(西から)	図版20 Ⅱ区 墳丘内出土遺物
(下)	Ⅳ区	が状遺構発掘状況(西から)	図版21 Ⅱ区 墳丘内出土遺物
図版14 (左上)	V区	調査前の状況(西から)	図版22 Ⅱ区 墳丘内出土遺物
(右上)	V区	第45・46号墳間先行トレンチ設定状況(西から)	図版23 Ⅱ区 墳丘内出土遺物
(左中)	V区	トレンチ設定状況(北西から)	図版24 Ⅱ区 石室床面出土遺物
(右中)	V区	調査状況全景および南方の景観(北西から)	図版25 Ⅱ区 石室床面出土遺物
(左下)	V区	第45・46号墳間トレンチ掘削状況(西から)	図版26 Ⅱ区 土器溜り出土遺物
(右下)	V区	第45号墳 遠景(東から)	図版27 Ⅱ区 土器溜り(B・C)・出土遺物
図版15 (左上)	V区	第45号墳 調査前の状況(現況開口部から)	図版28 Ⅱ区 前庭部出土遺物
(右上)	V区	第45号墳 下草除去後の状況(現況開口部東寄りから)	図版29 Ⅱ区 前庭部出土遺物
(左中上)	V区	第45号墳 羨道部および墳丘残存部検出状況(南から)	図版30 Ⅱ区 前庭西部出土遺物
(右中下)	V区	第45号墳 羨道部検出状況(天井石から)	図版31 Ⅱ区 前庭西部出土遺物
(左下)	V区	第45号墳 石室全景(羨道部から)	図版32 Ⅱ区 前庭西部・墳丘下層・墳丘内・その他出土遺物
(右下)	V区	第45号墳 羨道部(右側壁側から)	図版33 その他出土遺物
図版16 (上)	V区	第45号墳 玄室内の状況(羨道部から)	図版34 その他出土遺物
(中)	V区	第45号墳 全体測量中の玄室内の状況(奥壁側から)	図版35 その他出土遺物
(下)	V区	第45号墳 天井石下面状況(奥壁側から)	
図版17 (左上)	V区	第45号墳 前庭部西側遺物出土状況(墳丘上から)	図版36 Ⅱ区 西甕口ほか出土遺物
(右上)	V区	第45号墳 前庭部西側遺物出土状況(西から)	図版37 Ⅳ区・V区 出土遺物
(左中)	V区	第45号墳 前庭部西側遺物出土状況(東から)	図版38 V区 出土遺物
(右中)	V区	第45号墳 羨道部遺物出土状況(左側壁側から)	図版39 V区 出土遺物
(左下)	V区	第45号墳 前庭部西側遺物出土状況(北から)	
(右下)	V区	第45号墳 墳丘東側の状況(南から)	

I 調査に至る経緯

(1) 調査の原因と調査協議の経過

周知の埋蔵文化財包蔵地としてよく知られた当該地について、宅地としての再開発が浮上してきたのは平成16年度に入った頃からである。平成16年10月5日、(株)アシスト芦屋の新谷氏(代理人)が来室され、平成15年度に松葉氏から提出している発掘届出書は、アートプランニング株式会社に土地所有権移動が生じたため、取り下げたい旨、申し出があり、これに対し、市教育委員会は取下書提出を指導するとともに、新たな計画の照会について聞き取った。その概要を記すと、当該地の南側全体には岩ヶ平第45・46号墳をはじめ横式石室を内蔵する古墳が数多く遺存するため、1m前後の盛土を施して整地し、庭としてできる限り保存する。新しい建物は従来通り北半部分に建築する。埋蔵文化財の新たな届出(法第93条第1項)については、新規の計画なので必要であり、確認調査は兵庫県教育委員会と計画図を見て取り扱いを決定することなどを指導並びに協力要請として新谷氏に伝えた。

平成16年10月7日、アートプランニング株式会社の高場氏とフレッシュライフの深見氏が来庁したため、埋蔵文化財発掘届出書の書式一式を渡した。同年10月18日から残土を敷地内に入れる計画があったが、10月8日の時点でこれについては中止し、再度計画の見直し期間をとった。この後、平成16年12月3日には、小林英夫氏(礎建築事務所)から個人住宅として車27台分の駐車場を建設する計画があり、年末の12月27日でも協議中の状況が窺った。

平成17年3月25日になって、アートプランニング株式会社の高場氏が来庁。当該地について、会社社長の居宅用住宅を法人名義で建築する計画を受けた。発掘調査の全体工程や調査費の区分などについて説明するとともに、書頭としての整備を促した。翌年度に入って、平成17年4月27日に礎建築設計事務所の小林英夫氏が、設計担当のアートプランニング株式会社の島本秀樹氏とともに来庁。当該地には法人名義で邸宅建築を計画、これに対して様式に基づき届出書の作成を指導する。5月9日には、両氏が三条事務所に来室し、今後の取り扱いについてのアウトラインを県教育委員会に指導を受けながら説明、事業地全体の見直しのため、敷地全域の確認調査を行うことで合意が得られた。その後、確認調査の計画などを進行させ、7月11日の時点で基本計画を作成した。

平成17年6月17日、神戸市中央区元町通2丁目9番1号の大一興業株式会社(代表取締役 岡本芳邦)から当該地、芦屋市六蔵町170番2、3、4(1,541.78㎡)において住宅建設のための埋蔵文化財発掘届出書が文化財保護法第93条第1項により提出されたため、これを受け、協定書並びに調査経費見積書の作成の準備を急ぎ、芦屋市教育委員会は平成17年8月1日付で事業者と発掘調査全体の協定書を締結し、平成17年8月17日～9月12日に事業地全体の確認調査を実施した(担当 竹村忠洋・白谷朋世)。なお、この間、調査費や遺跡の取り扱いなどについて、9月20日、21日に兵庫県教育委員会文化財室の岡崎正雄課長補佐から行政指導を二、三受けた。(森岡秀人)

(2) 調査前史と確認調査の結果

諸般の事情で再度宅地開発の計画が進捗した当該地(1,541.78㎡)には、八十塚古墳群を構成する岩ヶ平支群の第45・46号墳などが所在する。この2古墳については、『兵庫県遺跡地図』[兵庫県教育委員会2004]の上で、遺跡番号070119・070120として記載されており、芦屋市教育委員会が行った平成元年度の確認調査で(森岡担当)で、これに加え現状の地形実測調査から第47・48・49号墳の3墳も推定されている(第1図、同遺跡番号070121～070123)。また、別途、徳川大坂城東六甲採石岩ヶ平刻印碑の分布範囲(兵庫県遺跡地図番号070049)にも入っており、20数年来、埋蔵文化財の保全がなんとか維持されてきた場所である。過去の調査記録については見直しを図ったが、現状では横式石室の遺存を推定できる岩ヶ平第45・46号墳と古墳の存在が未だ推定の域を出ない岩ヶ平第47・48・49号墳とに分かれるため、該当地の遺跡の取り扱いを決定するためには再度の確認調査が必要と判断された。

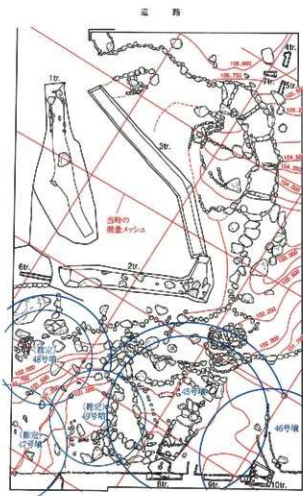
このため、本市教育委員会で平成17年6月17日に建築主である大一興業株式会社代表取締役 岡本芳邦氏よ

り提出された発掘届出書に基づき、計画地内の埋蔵文化財の損壊範囲などを細かく点検し、その有無を明確にすべく確認調査の計画を進め、上記の通り、調査に関わる協定書を地権者と締結してその実施に踏み切った。

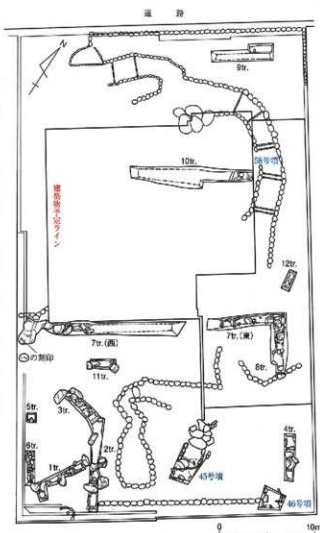
その結果と取り扱いについては、調査担当者が確認調査の結果報告書にまとめているが、いまだ一度それに基づき、その内容の要点を集約してみよう。

事業地南南部の庭園部分は、平成元年度の確認調査や測量調査以降、あまり大きな地形改変はなく、概ね旧状が保たれていた。岩ヶ平第45・46号墳の残存状態も10数年以上の歳月の隔たりとは無関係に当時の埋没環境をよくとどめていたと考えられる。事業地は大略3段の地形段差となっている。確認調査のトレンチの設定は、平成元年度に探入されたトレンチとの重複を意識的に避けて1～6・11の7トレンチを事業地の下段部分に、7・8・12の3トレンチを中段部分に、9・10の2トレンチを上段部分に設定し、下段に関しては地形改変を最小限にとどめるため、重機を使用せずすべて人力により掘削した。

その結果、各トレンチで多くの所見が得られた。1トレンチ（幅1.0m、長さ6.8m）は、L字形に一部拡張を加えたが、須恵器を包含する地層を検出するにとどまった。この地点に推定されていた岩ヶ平第47号墳については、非古墳と判断した。2トレンチ（幅1.0m、長さ9.8m）は、1トレンチの東方、第49号墳推定箇所南北方向に設けたものである。水成地層層と一部須恵器の包含を確認しているが、遊離資料であり、古墳はこの地点にもないと判断された。3トレンチ（幅1.0m、長さ4.7m）は、2トレンチ北端に接続して探入され、石塊の露出の多い部分に入れられたが、近代の擾乱も大きく、花崗岩の自然露頭を確認するのみであった。第48号墳も非古墳とみた。第46号墳の所在箇所には4トレンチ（幅1.0m、長さ5.0m）を探入した。石室構造が幾分明らかとな



第1図 第45～49号墳現況墳丘測量図・トレンチ配置図
(平成元年度実測図より一部改変 S=1/400)



第2図 平成17年度 第1次確認調査トレンチ配置図
(S=1/400)

り、石室右側壁の遺存と玄室が長さ5m程であることが判明したが、現状では遺物の出土はなかった。5トレンチ(1m×1m)は、第48号墳推定地点に設定、掘り下げたが、3トレンチ同様、攪乱が著しかった。敷地南西隅の堺ぎわに設定した6トレンチ(幅1.0m、長さ3.6m)は、第47号墳の有無を確認するためのものであるが、昭和初期の洪水堆積層を検出し、古墳の兆候は得られなかった。段差部分に東西方向に設定した7トレンチ(幅1.5m、長さ25.8m)は、西端で刻印石(岩ヶ平№41、[森岡・古川・濱野ほか2003])に接し、石切場の状況を把握するためのものである。東西に2分して掘削している。採石土坑や花崗岩の集中がみられたため、周辺を精査する必要があった。8トレンチ(幅1.5m、長さ5.0m)は、7トレンチ東坑と直交するもので、Cタイプの矢穴をもつ割石が近現代盛土に包含されており、さらにその下層からは須恵器を数多く含む土器集積が確認された。遺構があるとみてよい状況である。上段部最北端の底部分には9トレンチ(幅1.1m、長さ6.7m)を設定したところ、焼土を含む炭層の広がりを検出した。1.0×2.7mの面積を北に拡張して性格を調べると、焼土塊や17世紀初頭の唐津焼なども出土し、近世の遺構の存在をつきとめた。上段中央に東西方向に設けた10トレンチ(幅1.2m、長さ13.0m)には、西側では大きな攪乱が見出せるのに対し、東側では石室の一部と墓坑や墳丘の一部が検出された。トレンチ東端から西4mの所には須恵器杯、甕などの集中が認められ、新たに横穴式石室墳1基を確認することができた。当墳については、その後、「岩ヶ平第58号墳」と命名した。ただし、古墳の遺存状態については、不明な点を多く残す。

11トレンチ(幅1.1m、長さ2.7m)は空白地にダメ押しで設けたものである。旧地形は見出されたものの、明確な遺構はなく、同様に8トレンチ北方の底部分に入れた12トレンチ(幅1.0m、長さ2.2m)では、焼土を含む炭層を埋土とする土坑を検出している。

以上が、確認調査の各トレンチの所見であるが、旧地形としては、事業地の中央を南下する小さな谷地形が確認され、庭池はその部分を利用して形づくられていることが判明した。岩ヶ平第45・46・58号墳の3古墳はその東側の起伏のみられる尾根筋状地形に築造されたものと考えられ、西側については旧状がかなり損なわれていることも判った。また、9・12トレンチでは採石場関連の搬出場などが散開しているようすが知られ、周辺に広がる可能性をもつ。

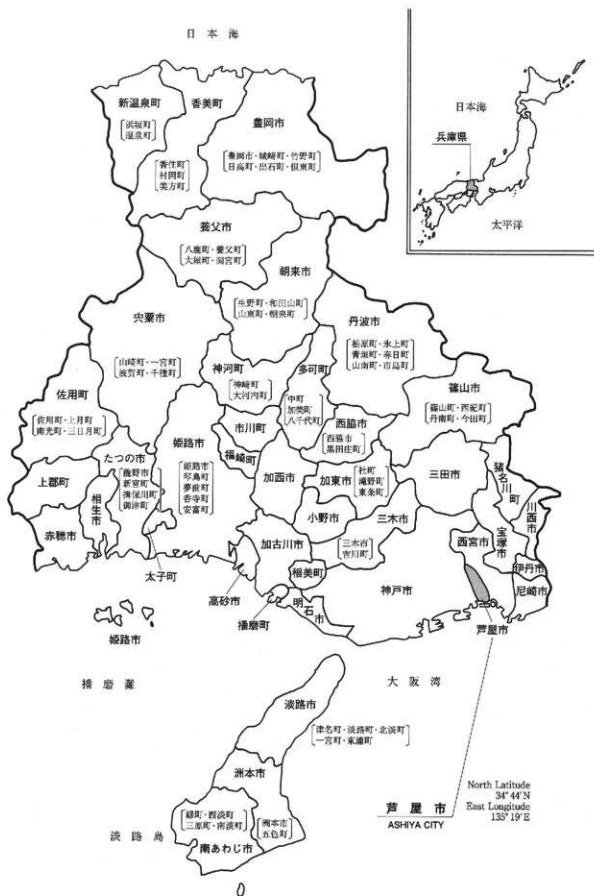
確認調査による出土品はコンテナ約2箱分であり、古墳時代の遺物と江戸時代や近代を中心とする遺物がみられた。特筆すべきことは、これらが流出資料のみならず、それぞれ遺構を伴うことであり、新たに横穴式石室1基(58号墳)を確認した他、周辺に江戸時代初期、おそらく元和～寛永期の石切場関連施設の広がりを掌握することができた。

(森岡)

(3) 遺跡地の取り扱いと本発掘調査

前節ではとくに触れていないが、平成元年度実施の予察調査(森岡担当)でも建築物予定地を中心に数本のトレンチを探索して、古墳など埋蔵文化財の存否確認を行っている。当時の調査では、住宅が直接建つ部分にかなり長めのトレンチを設定し、土層観察などを行ったが(1～3トレンチ)、とくに墳丘や石室などの遺存する兆候は把握できなかった。ただ、3～7トレンチ間の空白域については、未調査部分として判断に不明瞭な部分を残した。

竹村・白谷両名が担当した確認調査では、平成元年度に実施した確認調査の欠を補うとともに、岩ヶ平第45・46号墳の実態をより明らかにし、さらに新たに1基の古墳(岩ヶ平第58号墳)を確認した。また、8トレンチなど各所で須恵器の集積や炭化物、焼土塊などの遺存を認め、何らかの遺構の存在が予測できた。古墳については、敷地内においてさらに増加する可能性もあり、石切場も刻印石の存在から地に着いたものと判断できる。したがって、当事業地の埋蔵文化財の取り扱いについては、住宅建築に伴う造成や基礎工事、並びに舗装工事などによって遺構が損壊される部分について、本発掘調査が必要となると判断し、事業者にその旨通知した。(森岡)



第3図 兵庫県と芦屋市の位置図（平成18年10月作図、市町合併状況含む）〔 〕は旧市町を示す

II 遺跡をとりまく環境

(1) 地理・地質的環境と調査地の位置

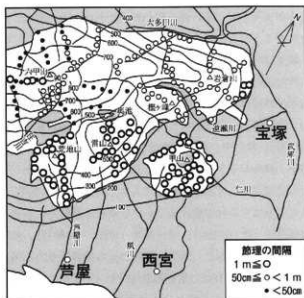
八十塚古墳群は、六甲山南東麓の高位段丘上に所在し、阪神間では最大規模を誇る古墳時代後期の古墳群である。行政的位置は、芦屋市（第3図）の北東部から西宮市の西端部にかけて存在し、東西0.45km、南北1.1kmの範囲に分布する。現行町名では、芦屋市岩屋町・六麓荘町、西宮市苦楽園四番町・同五番町・同六番町に該当し、関西地方では名高い高級住宅街に広がりをみせている。標高60～150mの岩ヶ平・六麓荘台地に造墓され、眼前に大阪湾や緩急に富んだ地形を眺望することができる〔森岡・古川編1979、森岡・古川ほか編1979〕。

また、当該地は、古墳群造墓期から約千年の歳月を隔てた後、徳川大坂城東六甲採石場（江戸時代初期）の奥山刻印群・岩ヶ平刻印群・越木岩刻印群などの石切場（埋蔵文化財包蔵地範囲）とかなり重複する〔芦屋市1971〕。石材利用を共通項とするこのことこそが、当該地の立地する地理・地質的環境の本質と大きく関係している。

横穴式石室を主体とする八十塚古墳群と、徳川期大坂城石垣再築用材の採石場は、いずれも六甲山崗岩の転石を母材とする遺構であり、石材の供給源を共有する。そこで、六甲山地の形成過程を紐解いてみると、六甲山崗岩は約7000万年前の中生代白亜紀後期頃から地下のマグマが時間をかけてゆっくりと冷え固まったものであり、100万年前より始まった六甲造山運動（六甲変動）による東西の圧縮を受け、その上に堆積した大坂層群と呼ばれる海成層までもを含めて隆起した経緯を持つ。その後、25～15万年前から六甲山の基盤岩である六甲山崗岩の浸食・風化・流下作用が始まり、山地斜面に転石化した花崗岩が再堆積して段丘化することとなった。いわゆる段丘礫層の形成である〔前田1971、池田1998、先山2003・2005、地学団体研究会大阪支部 編1999〕。以上のような地質的環境を背景として、古墳群と江戸時代の採石場が当該地を含め遺地に反映したと考えられる。さらに、〔池田1998〕が示したように、六甲山南東麓斜面の花崗岩体の節理条件、段丘礫層中に含まれる転石の粒度相などが、上記の遺構の石材用途を十分に満たす法量を兼ね備えていることもあり（第4図）、地理的条件の点からも海路を通じて大坂城と密接に結ばれる最短の好適地に立地した遺跡群と言える〔村川1970 a・b〕。

次に、今回の調査地の位置と周辺環境を詳しく見ていきたい。所在地は、芦屋市六麓荘町170番地2、3、4で、舌状に南下する長背尾根やどんどん川の東、六麓荘町全体から見れば南西エリアの一角に位置する。最寄りには阪急バスの停留所として、古墳群の名称を冠した「八十塚橋」や「日の出橋」がある。当古墳群は、地形変化、個々の古墳の内容・性格、造墓・追葬の時代的様相などから、それぞれ5つの大別支群（西から朝日ヶ丘支群、岩ヶ平支群、老松町支群、苦楽園支群、廻谷支群）に分けられており〔森岡1973・1979 a・b〕、その中では岩ヶ平支群に相当する（第6図）。

岩ヶ平支群は、朝日ヶ丘尾根と老松町尾根の間に位置する岩ヶ平尾根上に造墓された古墳群のグループを指し、支群内に遺存する古墳数の多さ、支群占有面積、造墓期間の長さ、石室のバリエーションなどの点からみても、大別5支群のなかで最も中心的な意味あいを持つ支群である。さらに、岩ヶ平支群は、A～Iの9小支群に分けられ〔森岡1979 b〕、今回の調査地は、その中のF小支群に属する（第6図）。敷地内南部の庭地には、これまで周知の古墳2基（第45・46号墳）と、推定墳3基（第47～49号



第4図 六甲山地東部における六甲山花崗岩の節理間隔〔池田1998〕

花崗岩の割れ目の規模を定量的に測定することは、大変難しいが、小割れ・中割れ・大割れの経験的分級がなされている。巨大割れ（3 m以上）も含め、大割れ（1～3 m）、中割れ（50 cm～1 m）、小割れ（50 cm以下）を一つの目安とする。

墳)が測量や分布調査によって確認されており(第1図)、F小支群北城の一角の群形成として理解し得る。まさに、八十塚古墳群の分布範囲全体を眺めても高所かつ要所に位置していると言える。

一方、東六甲採石場の視点から見た調査地の位置付けはどうなるか。まず、東六甲採石場は、神戸市東灘区から芦屋市、西宮市におよぶ東西6.5kmの範囲に分布し、地形変化や尾根・河川などの立地環境や、刻印の分布密度から住吉川流域の割石分布範囲と、城山刻印群・奥山刻印群・岩ヶ平刻印群・越木岩刻印群・北山刻印群・甲山刻印群の6群が設定されており、相互の関連性や意味づけについて言及されてきた〔藤川1985a・1985b・1985c、森岡・古川1998・2002、森岡・坂田2005b、竹村・白谷2004、森岡・竹村・坂田2006、森岡・古川編1979〕。調査地はそのうち岩ヶ平刻印群の西半域に位置し(第6図)、西に長州藩毛利家、北西に小浜藩松家、北には鳥取藩池田家の採石領域が推定されている。調査地には、単独刻印(1号石材、第47図)1個と併刻刻印(2号石材、第48図)の都合2石3個の刻印石と刻印が確認されており、採石領域そのものなのか、それとも石曳き道や作業者の飯場などの共有エリアなのか、という視点でも興味深い位置環境に立地している。(坂田典彦)

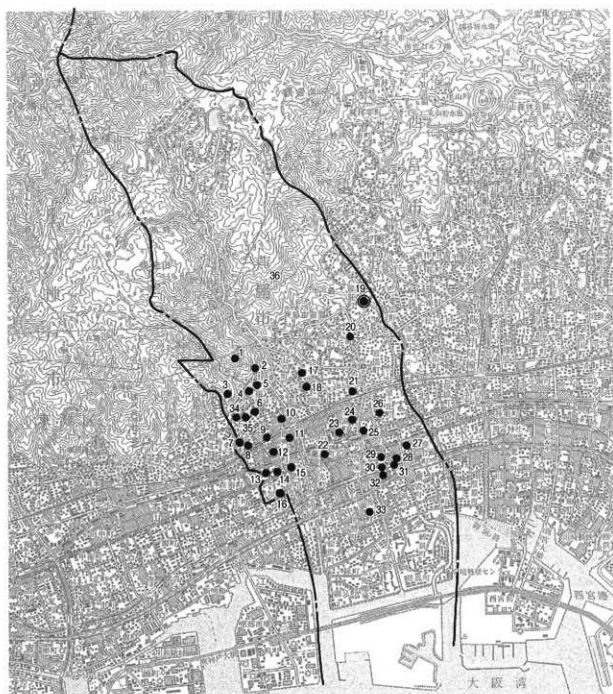
(2) 芦屋地方の歴史概観

本節では、遺跡環境を理解する上に必要な本市域の歴史のあらましを粗削りながら記し、八十塚古墳群の存在意義を通史の中に位置づけておきたい(第5・6図)。

芦屋地方の歴史の概観は、今から2万年前の氷河期、旧石器時代に遡ることができる。芦屋川の左岸上流域、奥山山塊に芦有道路(芦屋-有馬間の連絡道路)を建設する際、標高320mの地点でナウマン象の臼歯が出土している。この化石は六甲山系ではきわめて貴重な存在であり、人と関わる自然史の第一ページを飾る。同様に、対岸の芦屋川右岸、城山の南西斜面に位置する山手小学校の東側でも象の牙化石が出土している〔武蔵・村川1971、田辺・森岡はか1979〕。人類活動の痕跡がはじめて確認できるのは、こうしたナウマン象の活動時期とも一部重複する旧石器時代後期からである。紅野芳雄氏が『考古小録』〔紅野1940〕で紹介した岩岡町採集の国府型ナイフ形石器をはじめ〔藤井・森岡1974・藤井1976〕、朝日ヶ丘遺跡第1・2地点でも縄文時代の土器・石器とともに、旧石器時代後期の貴重な石器が出土している〔村川1966e〕。また、翠ヶ丘台地上では、打出小槌遺跡(第4・22地点)で同様な国府型ナイフ形石器が発掘調査により検出されており〔大手前大学史学研究所文化財調査室1990、芦屋市教育委員会1997〕。芦屋川右岸の扇状地間低地に立地する津知遺跡(第4地点)では、瀬戸内技法の翼状剥片が出土している。旧石器の狩人たちの活動の場は、海面の低い当時であって、高所に存在する良好な気場ということになろうか。

縄文時代に入ると、草創期を除く早期から晩期までの広範な時期の遺跡分布が確認できる。早期の例としては山芦屋遺跡があり、楕円や山形の押型文土器や石器が多数出土している〔森岡1982a、芦屋市教育委員会・関西大学山芦屋遺跡調査団1983〕。前期は先述の朝日ヶ丘遺跡において爪形文などを特徴とする羽鳥下層Ⅱ式や北白川下層段階の土器が出土している。栗平遺跡第31地点も相前後する時期の土器・石器が出土している〔吉田・金森1997〕。次いで、山芦屋遺跡S8地点では中期末から後期初頭に比定される磨治縄文を施す有文土器と無文土器が、狭小なトレンチ調査にもかかわらず多量に出土している。部分調査ながら堅穴住居跡もあった。この時期の生活遺構として稀少な価値をもつ〔森岡1996〕。後期末から晩期の遺跡に至っては、市域を縦走する芦屋川・宮川の形成する沖積扇状地上および扇状地間低地に点在し、若宮遺跡(第1・2地点)や堂ノ上遺跡(第20地点)、津知遺跡(第123地点)、寺田遺跡(第95・104地点)、前田遺跡などの各所で確認されている。

弥生時代に入ると、遺構・遺物の分布地域は格段と増加する。前田遺跡(第20地点)では、近年クローズアップされているAMS法(加速器質量分析法)を県下で初めて本格的に採用し、前期の初期水田の動態に言及している〔森岡編2004〕。後期には高地性集落として阪神間では初めて調査された会下山遺跡や城山遺跡があり〔村川・石野1964、村川・森岡1976、村川・石野・森岡1985、森岡1988〕、会下山遺跡では遺構が露出保存され、県史跡公園として整備・活用されている〔芦屋市1971、芦屋市教育委員会2007〕。市内には、他に城山・寺田・月若・山芦屋・冠・芦屋廃寺(下層)・三条九ノ坪・津知・六条・栗平・若宮・打出小槌・打出岸造りなどの主だった弥生遺跡が点々と存在する。その中にあって、会下山遺跡は将来、国史跡としての整備も多くの人々から希求されている。なお、旧石器から弥生時代にかけての遺跡の古記録として、吉岡昭が戦前に残した分布メモ地図はき



- | | | | |
|--------------|---------------|------------|--------------|
| 1. 城山遺跡 | 2. 城山南麓遺跡 | 3. 会下山遺跡 | 4. 山戸屋遺跡 |
| 5. 城山・三条古墳群 | 6. 冠遺跡 | 7. 三条岡山遺跡 | 8. 三条九ノ坪遺跡 |
| 9. 芦屋庵寺遺跡 | 10. 西山町遺跡 | 11. 月若遺跡 | 12. 寺田遺跡 |
| 13. 六条遺跡 | 14. 清水遺跡 | 15. 前田遺跡 | 16. 津知遺跡 |
| 17. 芦屋神社境内古墳 | 18. 熊ヶ谷遺跡 | 19. 八十塚古墳群 | 20. 朝日ヶ丘遺跡 |
| 21. 山口遺跡 | 22. 兼平遺跡 | 23. 大坂遺跡 | 24. 打出岸造り遺跡 |
| 25. 久保遺跡 | 26. 阿保親王塚古墳 | 27. 堂ノ上遺跡 | 28. 金津山古墳 |
| 29. 打出小櫃古墳 | 30. 打出小櫃遺跡 | 31. 小松原遺跡 | 32. 若宮遺跡 |
| 33. 呉川遺跡 | 34. 三条町50音地遺跡 | 35. 三条会下遺跡 | 36. 徳川大坂城石切場 |

第5図 芦屋市主要遺跡分布地図 (1/50,000)

わめて貴重な資料として伝存すること〔吉岡1944、村川・森岡1976、武藤・森岡1976〕を付言しておきたい。

古墳時代に入ると、前期段階から市街地東方の翠ヶ丘台地上にいくつかの有力古墳が築造される。前期（4世紀）に築造された古墳としては、現在「阿保親王墓」として宮内庁書陵部に管理されている阿保親王塚古墳があり〔村川1971〕、中期には5世紀後半段階の金津山古墳、5世紀後半～6世紀初頭の打出小槌古墳が造営される〔森岡1995、竹村・白谷編2007〕。後2者は前方後円墳である。後期になると、芦屋川右岸に立地し、渡来系氏族との関係が注目される城山・三条古墳群〔森岡1984b〕や、本書では詳しく取り扱われる八十塚古墳群など、横穴式石室を基本とする規模の大きい群集墳が次々と築造される〔森岡・古川編1979、森岡・古川ほか編1979、関西大学考古学研究室編2002〕。

飛鳥～奈良時代には、市街地北西部の現西山町付近に芦屋廃寺が創建される〔村川1970c〕。特徴的な遺物には7世紀末までの年代を示す法隆寺系や7世紀後半の高句麗系の瓦〔寒川・森岡・竹村2001〕、焼成前に「寺」とスタンプされた鉄鉢形の須恵器がまとも出土している〔芦屋市教育委員会2001b〕。寺域の中核はわかつてきたものの、伽藍配置を確定する材料はまだ断片的であって、将来に期待するところが大きい。古代摂津国菟原郡管下では、菟原駅が存在や郡衙なども本市場の中で改めて考える必要が生じている〔森岡2007〕。

中世以降になると、本市場の平野部や低丘陵が生産域として定着するようになり、各所で水田遺構を確認することができる〔森岡・竹村編1999、竹村編2002、竹村編2004、森岡・坂田2004、森岡・坂田2005a〕。特記すべきことは、南北朝期の内乱に伴い、足利尊氏勢と楠木正成の軍が陸・海交通の要衝で戦った「打出浜の合戦」と、室町時代後期に摂津の有力な国侍の一人、瓦林正頼が鷹尾山山頂に築いた山城をめぐる攻防である。

近世に入ると、元和3年（1617）に尼崎藩主戸田氏鉄の統治下に入り、元和6年（1620）から寛永6年（1629）には後述する徳川大坂城再築に伴う採石活動が広域な地域で行われた。寛永12年（1635）、青山幸成が当地に移封され、以後青山氏が4代76年間にわたって尼崎藩主となった。岩ヶ平・朝日ヶ丘などの段丘斜面への新田の開墾も該期にはほぼ完成したと言える。次いで、正徳元年（1711）、松平氏が統治をひき継いで7代180年間を経て明治維新を迎えた。幕府領（芦屋・打出）と尼崎藩領（三条・津知）とに二分されて近代を迎えた本市場の四か村は、慶応4年〔明治元年〕（1868）、前者が兵庫鎮台（改称して兵庫裁判所）の管下に入り、のちに兵庫県（一次）に属した。後者は明治2年（1869）の版籍奉還により尼崎藩領となり、同4年の廃藩置縣の断行で尼崎県の管下に属した。同年11月、尼崎県は兵庫県（二次）に編入され、ここに四か村が初めて同一行政管下におかれることとなった。現在の芦屋市の原形と住民の結束ができ上がる歴史的契機をなしたといえる（芦屋市1971）。

明治4年（1871）、区政が新設され、兵庫県（一次）において芦屋・打出二か村は第17区に属し、兵庫県（二次）再編後は四か村が第16区（のち第6区）に所属する経過をたどった。

明治11年（1878）、区政は廃され、菟原郡役所の管内となり、同13年7月から実施された連合町村戸長制によって、芦屋・三条・津知の三か村は深江村に戸長役場をおき、打出村は単独で戸長を配した。明治22年（1889）4月、町村制施行に伴い、従前の四か村は合併、学校名をとって精道村が発足し、村役場が精道小学校内に設けられた。同27年、兵庫県では郡制施行により兵庫・菟原・八都三郡を合し、新たに武庫郡としたが、大正12年には機能的に消滅するに至っている〔田辺・森岡ほか1979〕。

近代交通に関しては、明治7年（1874）、大坂～神戸間の官設鉄道が開通し、大正2年（1913）には芦屋駅が新設された。また、明治38年（1905）の阪神電鉄敷設に伴い、打出・芦屋駅が、大正9年（1920）の阪急電鉄神戸線の開通により芦屋川の停留所がそれぞれ開設。さらに大正3年（1914）には、村内里道の改善整備がなされて、昭和2年（1927）に阪神国道（現国道2号線）が開通した。南北僅か2km程度の扇状地形を中心とする沖積地に東西交通はすこぶる密度を増した〔森岡・島田1988〕。こうした交通事情の急速な発達を背景に、明治から大正にかけて山手の丘陵地帯を中心に邸宅建設が広がり、昭和初年には安宅住宅街が形成され、農地から宅地へと地目が著しく変貌した。また、生活環境改善事業の一環として、二度にわたって芦屋川の大改修が行われたが、昭和9年（1934）と同13年（1938）の風水害により空前の被害が生じた。芦屋川による被害は、昭和42年（1967）の長雨によっても生じている。村勢の発展を戸口の増加によって概観すると、精道村誕生当時の明治22年（1889）には597戸、3,028人であったが、昭和2年（1927）には4,305戸、20,779人と急激に上昇している〔芦屋市1971、森岡1988〕。大正時代以前の本地方の主要産業はやはり農業であったが、明治時代中期には芦屋川の

余水を利用した水車による粉挽業がみられ、素麺製造などが家内工業的に営まれた。本村の乏しい産業の中で特筆すべきは牧畜乳業であり、他に酒造業・水産業も僅かながらみられた。かつて川西町にあった東洋牧場を知る人は今はきわめて少ない。

昭和15年(1940)11月10日、市制施行、全国で第173番目の市となった。村から市へ町を飛び越えて一躍移行したことは注目すべきことであり、全国では僅か宇部・岡谷二市の前例をみるにすぎない。当時の人口は41,925人、戸数8,147戸であった。また、同19年には旧村時代の四大字と200余の小学名が町名に一斉変更され、新たに43町が成立、新番地は各町ごとに東北隅を1番とし、順次南西隅を終番とする形で付された。

第二次世界大戦の空襲によって本市も4回被災し、総戸数の4割の家屋が焼失した。戦後はその再建復興に全力を傾注し、駐留軍の家屋接収、旧制度の改廃の下、戦災指定都市による復興土地区画整理事業を推進、隣接諸地域との合併構想を基礎に、昭和26年(1951)2月には「芦屋国際文化住宅都市建設法」が公布され、独自の都市づくりを目指して邁進するに至った。昭和35年(1960)には芦屋川畔に新市庁舎が竣工。同37年(1962)5月施行の「住居表示に関する法律」に基づいて、本市も街区符号と住居番号によって表示する方法を採用、43年(1968)5月より順次実施されている。土地区画整理事業は、30年代後半に北部で、40年代後半には中部で着手され、その後、南の春日地区が進められ、西国街道も大半が消滅した[田辺・森岡ほか1979]。また、昭和42年(1967)以来、芦屋背山グリーンベルトの計画も進んでおり、平成13年8月以降は六甲グリーンベルト整備事業が具体化しつつある。

戦後は文教政策に力が注がれ、学校建設の進展により、県立高校1を筆頭に市立の小学校6、中学校2、高等学校1が整えられ、私立学校も数多くの設立をみ、また病院・霊園・奥山貯水池なども完成した。また、国際交流の一環として、昭和36年(1961)にはアメリカ合衆国のモンテベロ市と姉妹都市提携を締結した[芦屋市1971]。以後、「芦屋市民憲章」の制定や、「緑ゆたかなまちづくり条例」の制定、高度地区指定などは、本市の性格を特色づけるものといえよう。昭和45年(1970)には「芦屋市同和対策審議会答申」があり、教育行政を通じてその推進をはかるとともに、具体的な同和対策事業への取り組みも行われた。また、市民生活の向上をめざした福祉事業への努力が今日も続けられている。

流入による人口も激増し、昭和28年(1953)には5万人を超え、昭和45年(1970)段階には約7万人に達して、県下第9位を占めている。さらに、昭和57年(1982)には、芦屋シーサイドタウンと称する人口約2万人の新しい海浜街が完成した。また、海岸部を中心に文化施設ゾーンの整備もなされていった。しかし、海浜埋立事業・交通公害・自然破壊など、本市は市民の生活環境を守るため、解決されねばならぬ問題も数多く抱えており、平成7年(1995)に発生した阪神・淡路大震災を受けての復興計画の推進も市政の急落とともに大きな課題として残っている。これらの詳細に関しては、芦屋市文化財調査報告第30～66集の中に随時叙述されている。

平成17年10月1日の国勢調査の速報集計によれば、本市の人口も総数90,580人(男41,396人、女49,184人)を数え、37,759世帯が居住するデータとなっている。これは対平成12年人口増加率8.0%、6,746人増であり、対7年(震災年)人口増加数は15,548人の多きに達するもので、目覚しく回復していることが判る。本市最南端の芦屋川河口部には「潮芦屋」という甲子園球場の約32倍の面積を有する巨大な人工島ができ、芦屋浜の旧景観を「潮芦屋ビーチ」として現代に再現し、総合公園やウォーターパーク、ヨットハーバー、緑豊かな公園などが整備されつつある。

以上が本市の歩んだ原始・古代以来の長い歴史のあらましである[森岡・島田1988など]。

(森岡)

Ⅲ 八十塚古墳群・岩ヶ平刻印群研究の沿革

(1) 八十塚古墳群調査・研究の半世紀

① はじめに

本古墳群の調査・研究に費やした数10年の流れを学史的に行政史的に現在の目録に立って一度整理しておくことは、重要な作業と考えられる。都市化の波を兵庫県下でもいち早く被り、古墳群の旧態の多くを既に失った阪神地方にあっては、群集墳の地域研究自体の歩みの中で先駆的な位置を占めているからである。

その数の多さで近世の地誌学者をして驚かした八十塚は、その後、近世・近代と時代を経て、とりまく環境も考究の条件や視点も大きく変貌している。本節では、その調査・研究の沿革を都合10期の画期として捉え直し、地域史研究の動向と関連させながら研究の進展を回顧すると共に、かなり以前に執筆した旧稿〔森岡1979a・b〕以降の調査の流れ、問題点や学説の整理などもこの際果たしておきたい。

② 地誌・地方史に見える近世・近代の「八十塚」と識者の動き

八十塚古墳群への関心は比較的古く近世に遡る。江戸時代に盛行した地誌類にその記述が散見され、その背景には、当時の尾崎藩主青山氏の治政下、寛文期以降、元禄・享保期までの約半世紀間（17世紀中葉～18世紀初期）に著しく進められた旧打出村岩ヶ平の新田開発があり〔芦屋市1971〕、台地上を対象とした農耕地の開発と岩ヶ平集落の形成に伴う頻繁な人々の往来とも無関係ではなからう。

文献史料における嚆矢は、享保19年（1734）の『摂津志』で、「打出村西、岩平山中有數家、呼曰八十家」とみえ〔並河1734〕、全国的に散在する「百塚」「千塚」同様、古墳の群集地域独特の呼称が与えられたようである。摂津では、類似する「塚原八十塚」などの呼称が大阪府高槻市にみられる。その後、寛政8年（1796）になって『摂津名所図会』にその位置と名称の由来が簡潔に示され〔秋里1796〕、そうした呼称はそのまま踏襲され、やがて近代を迎える。

明治44年（1911）刊行の『西摂大観』〔仲1911〕や大正年間（1912～1926）に著された『武庫郡誌』〔武庫郡教育会編1921〕などの近代地誌類に再び現れるが、これら近代に入ってから諸史料の多くは、明治34年（1904）に発表された福原潜次郎氏の論文〔福原1904〕を引用・採引したものも多く、その古墳境にふれ、古墳の周辺景観を記し、江戸時代の地誌類の評価へと筆を及ぼしている。また、時を前後して、村上欣三氏も岩ヶ平丘陵を歩き、打出村の古墳を興味深くとり上げている〔村上1906〕。

③ 明治末年・大正・昭和初期における先学者の活動

阪神地方の考古学の草創は、紅野芳雄氏の遺物収集調査によって始まったといっていよい。氏の踏査活動は明治41年（1908）頃から昭和13年（1938）くらいまで継続し、その成果は第二次世界大戦直前に出された『考古小録』に結実している〔紅野1940、西宮市郷土資料館1998〕。詳細が尽くされた日誌風の几帳面な記録であり、今はなき古墳の記載を筆頭に各遺跡の当時の状況が詳らかに録されている。明治末年頃よりみられるこうした在地研究者の活動は、吉井良尚・田沢金吾氏らを含めての西宮史談会の結成を促し、郷土史の研究として大正・昭和初期へと次第に高揚していく。この一連の動きに触発されてか、戦前、芦屋市域では青年吉岡昭氏による熱心な遺跡の探索があり、その遺著『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』や付載地図には、今日現地確認のできない本市域の古墳や遺跡が数多く記載され、きわめて貴重な古記録となっている〔吉岡1944、武庫・森岡1976〕。

④ 昭和30年代～40年代初期の乱開発の進行の中で

芦屋が六甲南麓の風光明媚な自然環境の下、阪神間随一の住宅都市として発展をみせ始めたのは大正時代に入ってからである。とりわけ、昭和4年頃からは本古墳群の所在する六蔵荘一帯の宅地・別荘開発がスタートし、近世農村像はまたたく間に崩壊し、多数の古墳が損なわれ、群集墳の基礎構造は壊滅の一途を辿った。この期間には、歴史的には江戸時代の新田開発以来、最も多くの古墳が消滅した時期と考えられるが、地元の朝比奈勲兵衛氏採集の遺物〔勇・藤岡1976〕を除いては、初期の出土にかかる資料があまり伝わっていない。

昭和15年頃、西宮市老松町の一画（大谷哲平氏宅）で造園工事に際して須臾器が出土し、その後10数年を経て、古墳の存在が記録されるに至る〔熊田1949〕。同じ頃、隣接する地域で古墳2基が確認され、そのうちの1基が

ら出土したという須恵器が堀内達郎氏宅（芦屋市六蔵荘町）と県立芦屋高校社会科準備室に分蔵されており、県立芦屋高校史学研究部有志により紹介されている〔木村・辻・山口・田辺・森岡1974〕。昭和30年代前後、朝比奈貞雄・若林泰岡氏らが本古墳群関係の遺物を数多く採集し〔藤岡・橋爪1966〕、35年以降は藤川祐作氏が踏査を重ね、道路や宅地の造成工事に伴う遺物を克明に記録・収集している〔森岡・藤川1980〕。

さて、この八十塚に本格的な考古学のメスが採り入れられ始めたのは、昭和31年の六蔵荘町176番地における陶植片検出が契機となる。その年の5月、直ちに緊急調査が実施され〔村川1959〕、昭和34年4月、さらに周辺2基の古墳を含む計3基（当時A～C号墳と呼称）が芦屋市教育委員会によって発掘された〔村川1966a〕。この須恵質陶植片については、A号墳より掘出されたものと解釈され、家形四注式の形態に復原となり、当時阪神間では唯一の出土例として、当時編纂中であった『芦屋市史』〔魚澄編1957〕をはじめ広く学界に紹介された〔武藤1957・1958、神戸新聞社など1961〕。当地域における古墳の学術発掘の開幕となったのである。この調査の期間中、周辺住民の協力を得て新たに遺存する古墳を20基前後確認したことも重要な成果の一つであった。

同年6月、八十塚古墳群の北限をなす通称鏡谷で1基の古墳の発掘調査が行われた。当地に30年来居住された西川繁吉氏によると、昭和12年頃まで付近に70～80基の古墳が遺存していたらしく、その出土品の主要なものが旧閑院官家に保管されているとの報告がある〔村川1966b・c〕。このように昭和30年代の初期には、まだ芦屋市域では緊急的側面よりもむしろ学術研究の場として、考古学研究者の格好の対象でありえたわけである。

昭和39年8月、道路開設及び宅地造成に伴う事前調査として、朝日ヶ丘1・2号墳の2基の横穴式石室が緊急発掘された〔村川1966a〕。副葬品に純金製断面六角形の垂飾付耳飾が見出され、荒廃しながら八十塚古墳群の西限を画する古墳であり、その初現の様相が目された。ただし、当時は「朝日ヶ丘古墳群」として別途認識され、眺望のきくその特異な立地条件が案目を引いた。

昭和40年10月、八十塚A・B・C号墳に隣接する地域のクノーク邸の庭園工事に際して石室が露頭し、同年11月、緊急発掘調査が実施された。結果は、八十塚E号墳として2年後に報告をみ〔藤岡1967〕、古墳は土地所有者の好意により庭内に地下保存されるという好例を残した。しかし、その保存活用の長期継続的な維持は代替わりの段階で困難な事態となっている。同じ頃、文化財行政の着手が遅れていた西宮市でも同古墳群に属する苦楽園五番町古墳が調査され、「化粧石垣」を有し、一封土に2石室を内蔵する特異な構造が目目を浴びた〔村川1966d〕。同古墳は発掘完了後、西宮市立大社中学校敷地内に移葬保存されている〔西宮市教育委員会1967〕。

昭和30年代から40年代にかけては、芦屋のみならず六甲山系の山脚開発が拍車をかけて進行した時期であり、昭和初年の開発に引き続いて数多くの古墳が消失していった。かような状況の下、芦屋市が主体となって数基の古墳が発掘され、その保護に可能な限りの手立てが講ぜられた点は、当時の阪神地方の文化財行政を先導するものとして高く評価されねばならない。また、他市に先駆けて定められた地方史編纂の気運は、こうした成果をいち早く吸収、還元し、八十塚古墳群の名を学界に定着せしめるところとなった〔魚澄編1956・57〕。具体的な研究は、武藤誠氏を中心に、村川行弘氏らによって深められ、従来漠然としていた「八十塚」について、近辺の古墳群を呼び分けることにより、その範囲を限定して捉える見解を生んでいる。即ち村川行弘氏は、各地区での古墳の確認と発掘調査が一段落着いた1960年代の後半頃、5地区におよぶ横穴式石室墳の群集状況をそれぞれ独立した「古墳群」として捉え、個々の古墳群に主として町名をもって呼称を与え、岩ヶ平丘陵（岩岡町・六蔵荘町）に集塊する古墳についてのみ「八十塚古墳群」と呼んでいる〔村川1966a・d〕。以下、この場合を狭義の「八十塚古墳群」と理解し、学史上意味をもつこととして捉え、弁別を図って整理しておきたい。

一方、全国レベルでは、この時期に群集墳分析の新しい視座が開拓され、社会構成の基礎的単位としての共同体論を基軸とする理論展開も試行をみ、後期群集墳の被葬者層を家父長的家族と規定づける仮説（近藤1952）が提示され、その後の調査・研究にも定着し、多大な影響を与えるところとなった。

⑤ 昭和40年代前半における古墳分布調査の進捗

昭和30年代の会下山遺跡の発掘を大きな契機として、昭和39年、「芦の芽グループ」が誕生した。長年の調査に参加した市立山手中学校歴史研究部の卒業生を母体とする文化財保護青少年団体であり、その後も会員を次々と拡大し、機関誌も継続的に編み、その中には群集墳に関する研究論文や関連文獻目録なども散見される。

昭和41年4月には芦屋市教育委員会の委託により、成長をとげた芦の芽グループが市内の文化財パトロールに

着手し、初年度の事業の中で、市内の埋蔵文化財の分布調査を手掛けている。調査の成果は、翌年、「芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳」として実り〔藤岡弘ほか1967〕、その時点で八十塚に関しては基礎データの概要が把握された。これら分布調査の実績は、開発にかかって未知のまま消滅する古墳を少しでも未然に防ぎ、古墳群の構成に関して、小グループの存在を調査者に抱かせるなど〔佐々木1965・1967〕、群構造解明への問題意識向上につながっていく。全国的な群集墳研究もこの頃から一つのピークを迎えており、開口している石室が研究者単独の調査を可能とし、地域的な研究の活性化と共に優れた論考が現れるようになった〔白石1966〕。発掘を伴わない基礎的な実態調査の集積が全国レベルでも十分成果をあげる事実が明示されたものといえ、その後の調査もこれらの成果をより確かなものとする方向で進んだのである。これを契機に、間欠的に古墳の発見があいついだり、本古墳群における発掘調査はしばしば空白期間として経過した。市立山手中学校生徒榎木薫による昭和43年の16号墳の発見や昭和44年5月の県立芦屋高校史学研究部部長森岡秀人・古川久雄による老松古墳（当時、未発掘）での耳環ほか遺物採集は、その頃の踏査によるものであった。

昭和46年2月、八十塚A・B・C・E号墳と道路を隔てて東に隣接する地域（六菰莊町162・163の2）で、宅地造成の計画が起り、八十塚古墳群の中核部に近いため、事前に予察調査された。数ヶ所のトレンチ調査の結果、古墳の存在は確かめられていない〔藤岡1971、天野1971〕。芦屋市史編集室の岩本昌三と関西大学学生森岡秀人がその隣接地で葦の芽グループと山林をかき分け分布調査したこともあった（昭和48年2月）。

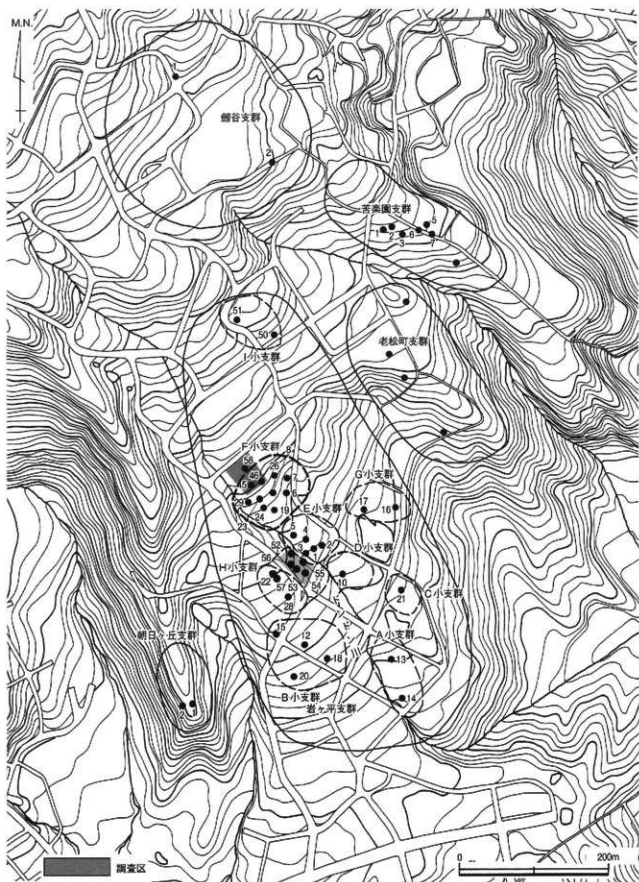
⑥ 昭和40年代後半に始まった青少年グループによる活発な測量調査とその成果

個々の古墳の保全を先取りするには、測量調査に基づく実態把握とその保護啓蒙が地域に根ざして行われることが不可欠である。地元の若者たちが中心メンバーとなった「六甲南麓群集墳測量調査団」（代表 藤川祐作・森岡秀人、顧問 県立芦屋高校教諭 田辺真人）は、そうした在地の意識高揚を背景にして結成された青年たちの民間団体（葦の芽グループと兵庫県立芦屋高等学校史学研究部並びにOB・OG）で、昭和47年7月よりその地道な活動を開始した。同年8月の14号墳の外形実測を皮切りに、47年10月に13号墳、48年7月に15号墳、49年5月には12号墳と着実に進められ、これら4基の古墳の測量結果略報は資金なく孔版ながらも順次通報されており〔森岡1972、森岡ほか1973a・1973b、渡辺ほか1975〕、今となつては貴重な記録である。

これら一連の報告では、近年の群集墳解析の方向から、従来認識されていた古墳群の地理的範囲と構成に新たな検討が加えられ、従前の5つの古墳群を包括する中規模群集墳の存在を想定し、それを広義の「八十塚古墳群」と呼んでいる〔森岡1973〕。これら5つの古墳群は、後に詳述されるようにマクロ的にみると、その東及び西において展開する他の古墳群と地形的には明らかに隔絶しており、「古墳群」・「支群」・「小支群」などの術語に一定の性格（造営主体・造墓集団の相違）を厳密に付与する立場に立つ時、有機的関連の度合はこれら複数の古墳群を包括して一つの造営集団を想定するのが自然と考えられた。また、従来称されてきた行政地名を中心とした個々の古墳群名は、芦屋・西宮という現行市境の介在とも相俟って、ともすれば歴史的連関を薄れさせる要因にもつながっており、群集墳の全容を将来にわたって保存していく上に何らかの支障をきたすことも考慮に入れ（例えば、古墳群ごとの分割的選択保存、自治体ごとの保全策の相違）、急速その一体系理解を前提とした総称の必要性が生じてきたのである。

広義の「八十塚古墳群」を提唱し始めた主たる理由は上記のとおりであるが、近世・近代へと伝承され、古来から引き継がれてきた呼称「八十塚」をなお適切とし、温存せしめた根拠は、当時の報文に基づきさらに下記に列挙しておきたい〔森岡1972「考察とまとめ」〔八十塚14号墳の測量調査〕〕。

(1) 岩ヶ平丘陵が地理的に新しく設定された古墳群のほぼ中央に位置し、かつ旧来の八十塚古墳群がこの地域一帯では最多現存数を有すること。(2) 「八十塚」なる呼称が古くから文献史料に散見され〔摂津志〕〔摂津名所図会〕など、伝統的歴史的に由緒があること。(3) 最も早くから発掘調査が実施され、学界でも最も慣用されているので、向後の学史的な混乱をできるだけ避けるため、等々。その提唱は、支群関係による造墓主体の有機性を主張するものであり、群形成の過程の予察的な素描を既に可能にし〔森岡1973〕、漫然と称されていた「八十塚」はこの時以来「岩ヶ平支群」と呼称されるようになった。と同時に、他の4つの古墳群も「朝日ヶ丘支群」「老松町支群」「吾楽園五帯町支群」「鵜谷支群」と呼び改められ、測量調査に関わった若者たちの間で議論も交され、それに伴って個々の古墳の統一呼称についての整理も古川氏などから試案が提出された。



第6図 八十塚古墳群の古墳分布・支群と地形（関西大学考古学研究室編2002を一部改変）（S = 1/5,000）

古川久雄氏は、従来の遺跡台帳〔森岡・佐々木1967〕登録番号を広義の「八十塚古墳群」を捉える立場で整理・再検討した結果、「老松町支群」が「岩ヶ平支群」から完全に分離されていない点、市境を越えて西宮市域に現存する古墳には統一番号が付与されていない点を強調し、芦屋市域に点在する消滅確認墳・新確認墳の取扱いをも含めて体系的呼称の必要性と試案を提示している〔古川久雄1974「八十塚古墳群における呼称統一の一試案」〔八十塚12・15号墳の調査〕〕。その要点は、従来の登録番号を極力温存させて各支群ごとに1番からの通し番号を与えたもので、これまで芦屋市教育委員会が報告してきた本古墳群岩ヶ平支群の一連番号は、その趣意にしたがって新たに整理が試みられたものを踏まえている。

こうした測量調査の積み重ねは、非力ながらも在地的に行われたが故、古墳群のものに対する問題意識をすこぶる高め、周辺諸団体や大学の考古学クラブなどの調査研究活動に少なからず影響を与えたものと思われる（森岡1977a、岡野ほか1975、小島ほか1976、坂井ほか1978、西森ほか1978、後神ほか1984、渡邊ほか1992）。

⑦ 昭和40年代末～50年代における西宮市教委の学術調査時代とその意義

本古墳群の東半は、西宮市域に属している。その調査活動は、芦屋市側に選れることおよそ10年、兵庫県の埋蔵文化財特別地域に指定された昭和43年度に始まる遺跡台帳作成に伴う分布調査をその基礎としてスタートした。勇正広・橋爪康至両氏や関西学院大学考古学研究会会員・OBの努力によって、昭和45・46年度には西宮市の年次計画として進捗をみ、その結果、苦楽園五番町などの山林・宅地・道路下で4基にのぼる半壊墳の遺存が再確認されている〔勇ほか1972〕。また、昭和48年2月には、藤川祐作・森岡秀人の踏査によって苦楽園5号墳が新たに発見され〔前田1974〕、苦楽園地区における遺存度が再認識されると共に、その保存が将来的にも要請される時期を迎えるに至った。当時、西宮市教育委員会には専門職として嘱託1名の配備があり、昭和49年4月には芦屋市教育委員会もようやく正規の文化財担当専門職員1名を採用した。

このような状況の下、西宮市教育委員会では先の分布調査の成果を契機に、八十塚で遺存する多くの古墳について、開発計画や自然崩壊に対処するため、その残存状況の確認と具体的な遺跡保護策が急務と考えられ、その施策を講ずる目的での学術的調査が計画された。昭和49年3月の苦楽園5号墳、50年8月の同6・7号墳、51年8月の老松古墳、52年3月の廻谷2号墳の計5基の発掘調査がそれで、就を一にして調査された高麗町具足塚古墳も同様な配慮の下、発掘の行われた事例である。これら一連の調査は、すべて西宮市の市費負担で実施するという画期的な基本方針が貫かれ、学問的な問題意識が一支部に投入されているだけに、その意義は高く、随時刊行をみた報告書〔勇ほか1974、勇・藤岡・前田・古川1976、勇・藤岡・前田1977、西宮市教育委員会編1982〕にそれらの成果が結集されている。開発に押しまくられ、原因者負担による無目的な緊急調査の多い情勢下、西宮市教育委員会によるこうした取組みは、放置されたままの個人所有地内における古墳の存在をより明確にし、保存対策上の基礎資料が比較検討される程に蓄積されつつある。また、随時「市指定文化財」としてそれらの保護を図り、解説板などの設置や西宮市郷土資料館での展示、啓発・普及活動で出土品などが公開活用されている。今後はその具体的な広域整備計画と地域地域での教育的活用をいかに図るかが大きな課題となてこよう。

なお、この間、芦屋市域では地下保存されていた八十塚E号墳が所有者替わりと共に問題となり、再開発に際して市教委が立ち会いしていること〔森岡1974b〕を付言しておきたい。宅地内での古墳の保存が難しくなり始めたのである。

⑧ 宅地開発の激増と緊急発掘が続発した昭和50～60年代の状況

昭和40年代後半以降は、調査の進行と共に群構成が毎年1～2基新たに確認され、その分布把握の悉皆度が増していった。昭和49年2月、開発の進捗に対応して芦屋市教育委員会が八十塚堀以西の地域を分布調査し、とくに六腕荘町181番地において古墳状隆起を何ヶ所か認めており（郷土史料室遺跡台帳）、49年3～4月の苦楽園5号墳の発掘調査期間中、西宮市苦楽園四番町83にて、廻谷3号墳が発見された。また、岩ヶ平支群第19～25号墳が追認された。なお、この間、広義の八十塚古墳群の全容が地方史ながら初めて公刊物として紹介され〔勇・藤岡1976〕、本古墳群副葬須恵器の複数の生産地・供給ルートなどについても具体的な検討の緒につくようになった〔森岡1977b〕。

昭和52年7月5日、森岡・古川の堀内氏宅探訪により2基の横穴式石室の存在が確認された。2基の古墳は老松町支群に属し、出土遺物のうち、堀内氏藏品は須恵器杯身、県立芦屋高校藏品は同提瓶各々1点であり、後者

については伝八十塚出土の3点の須恵器と共に既に資料紹介されている〔木村・辻・山口・田辺・森岡1974〕。

一方ではまた、開発が古墳所在地をめぐる競争合戦、土地の売買・その仲介、申請手続きなど事前協議段階でのトラブルが関係者間でしばしば起こるようになった。昭和53年3月、周知の古墳3基を含む六蔵荘町174番地の一面に開発許可のおりである事実が「声の芽グループ」によって確認され、その旨芦屋市教育委員会に通報があった。現地は本古墳群の中核部（岩ヶ平支群F小支群の一部）であり、関係者間の保存協議が県教委・文化財課の指導により進められる中、同年6月、新確認墳1基を含む一小支群の地形実測が実施された〔森岡1978、森岡・古川ほか編1979〕。既成市街地の土地改造成は点から線へ、さらには一街区単位にも及ぶ面にまで拡大されてきており、この頃から本立の中に点在した八十塚群集墳の最後の景観が失われようとする事態の確認調査が行われた。これら一連の調査の一部は、F小支群西半部として概要報告がまとめられている〔森岡編1983〕。また、1983年には岩ヶ平第22号墳の確認調査が進められた〔藤岡1986〕。前後して、充足されたこれまでの資料に基づき、群構造と石室プランの系統や類別の研究も多少深化した〔森岡1984b〕。

⑨ 平成バブル期以降の状況変化と調査・研究動向

この間不測の損壊を被り、文化財保護法違反の犠牲となった岩ヶ平第10号墳のような例も存在し、悔やまれる事態が発生している。群内では珍しく残っていた天井石や上部壁石が一気に削平され、墳丘がかなりの部分無くなってしまった。直ちに損壊確認調査が実施され〔芦屋市教育委員会1988〕、その後報告書も刊行されている〔森岡・和田・古川ほか1990〕。この古墳については、10数年を経て宅地造成に伴い再発掘され、最終的には記録保存の扱いとなった〔白谷編2006〕。同様に、再度発掘が試みられたものに鉾谷支群の2号墳があり、解体的な調査がなされている〔合田・西川編1991〕。

昭和から平成の時代が目まぐるしく推移し、バブル期以降は山麓部の宅地開発も下火になってきたが、平成2年から平成3年にかけて、岩ヶ平第50号墳が造成工事に伴い発掘調査された。木棺1棺分の鉄釘などが配置の現状をとどめて検出され、群中で初めての未盗掘墳であることが判明した〔森岡・白谷編1992〕。この古墳は一時、事業地に凍結保存されたが、平成10年度に最終的には建物工事に伴い完全記録保存のための発掘調査が実施され、解体の方途を辿った〔森岡・竹村2006〕。また、新しい動きとしては、関西大学文学部考古学研究室が調査団を編成し、主として学務実習を兼ねて面的な発掘調査を実施した。目的とした発掘調査作業を計画し、八十塚古墳群岩ヶ平支群を研究対象とした発掘調査を実施している。具体的に対象となった古墳は、同支群H小支群東半部の第52～56号墳の5墳であり、新たにこれまで顕微鏡をみない堅穴系小石室も確認されている。この調査は平成6年6月26日から開始され、同年9月30日に終了、その間、網干善教氏も来所して現地説明会も開催されている。また、数年間の整理作業を積み重ねて学術性の高い報告書を独自に刊行している。その結果、これまでの長期に及ぶ調査・研究の進展を総括し、多くの視角からの研究論文や統計的検証がていねいにまとめられている〔関西大学考古学研究室編2002〕。昭和時代から平成時代の長きにわたって、土地利用の変化に伴って二度三度と発掘調査が実施されている岩ヶ平第22号墳は、最終的には同事業地から第57号墳の小石室もみつかつて、2基が連関するという特殊な古墳配置をもたらしている〔竹村・山内1999〕。

⑩ 展望と学史的ゆくえ

以上、紙幅を使って当古墳群の研究史を渉猟し、50年の長きにわたる調査・研究の動態を追ってきた。書き漏らした点も多々あるが、以下では指針の二、三を示し、向後の若い調査関係者への課題の提示にかえたい。

群集墳としての八十塚古墳群は、景観論として既に末期的状況に直面している。宅地造成や住宅建築は市民の日常生活に密着したものであり、それに伴う事前の発掘調査は不可欠な行政的施策として今後も続くが、このまま突き進んでゆくと、群そのものが全壊することは時間の問題であることを痛感している。都市化の進んだ市街地にかろうじて残存している個々の古墳は、(1)神社の境内地や公園内にあって当面は保護された状況で推移を見守れるもの。(2)宅地として築山や庭園下に石室などが地下保存されているもの。(3)山林や田畑の脇などに墳丘や石室などが遺存しているもの。(4)公共用地に調査後移設保存されたもの。(5)存在しながら未確認のもの。などに弁別できる。(1)の代表的存在が岩ヶ平第12・13・14号墳である。とくに第13・14号墳は岩間天神社の境内の南と北に存在し、未発掘ながらこの数10年間、土砂の多少の流出を除いて大きな変化はない。(2)は調査件数の多いF小支群を中心に岩ヶ平支群や苦楽園支群などに多い。しかし、これらの保存形態は時限付きのものであり、居

宅の改築、新築や造園など再建事業で再び追加調査の必要性が生ずるケースが目立ってこよう。今回の調査地がまさにこれに該当しよう。(3)も八十塚古墳群では各所に散見され、古くから知られている岩ヶ平第1～4号墳は石室調査後、墳丘城の調査を十分経ないまま、土地利用を待っている状況にあり、再度の調査が必要となつてこよう。また、岩ヶ平第16・17・18・20・21号墳などは、土地所有者の御好意により未調査のまま現状を維持してきている。数少ないながら岩ヶ平第56号墳などは(4)の目的を担って部材の移設保存を図ったものである。(5)に関しては、今後も増加の傾向は認められ、再度の分布調査が実施されるべきであろう。

また、整理作業を実施しつつも未報告が多い本古墳群の問題点は、今後、国庫補助申請を行い、随時報告書の刊行に向けて最善の努力をなすべきであろう。とくに当時補助金事業として行った岩ヶ平第6・7・8・19・23・24・28・29号墳や第22・57号墳などは基礎的な整理作業は概ね完了しており、本格整理費と印刷費をつけ、時を見て報告書を公刊していく必要がある。

ともあれ近畿地方において、長い学史を残す八十塚古墳群は、調査関係者の資質に起因する不備や未熟さがあるにせよ、市街地に残る群集墳のタイプサイトとして、貴重な基礎データの蓄えがあり、それらを地域の貴重な歴史遺産として保存・活用していく手立てが希求され続けられねばならない。(森岡)

(2) 徳川大坂城東六甲採石場の調査活動と岩ヶ平刻印群

徳川大坂城の採石場研究が全国レベルで定着しつつある現在、いまだ一度、足掛け40年におよぶ地道な調査活動に目を向ける必要がある。江戸時代初期の元和・寛永期に大坂城の再築がおこなわれた歴史的背景については、これまでの研究成果や報告書〔森岡2003・2005 a・b、森岡編1980・1998、森岡・坂田編2005 b、森岡・藤川2005、藤川1969・1979、古川1988・1993・2003、古川編2002、村川1962・1970 b・1971・2002〕など各所で詳述されているため、本節では割愛し、以下では調査・研究のこれまでの歩みを中心に記述していきたい。

東六甲採石場の研究史をふり返れば、目的地である大坂城そのものの研究と、供給地である採石場の研究という二つの流れがあり、相互が独自に、時には連携を持ちながら一歩一歩積み上げられてきた経過がある。2005年には国際シンポジウム(於 大阪市中央公会堂)が催され、大坂城研究者をはじめ、東六甲採石場研究者、中世城郭・近世城郭研究者、石垣研究者、金沢城城郭研究者、韓国倭城研究者等が初めて一堂に集い、これまでの調査・研究成果や、今後の課題・方向性などが学際的に議論されたのも記憶に新しい。

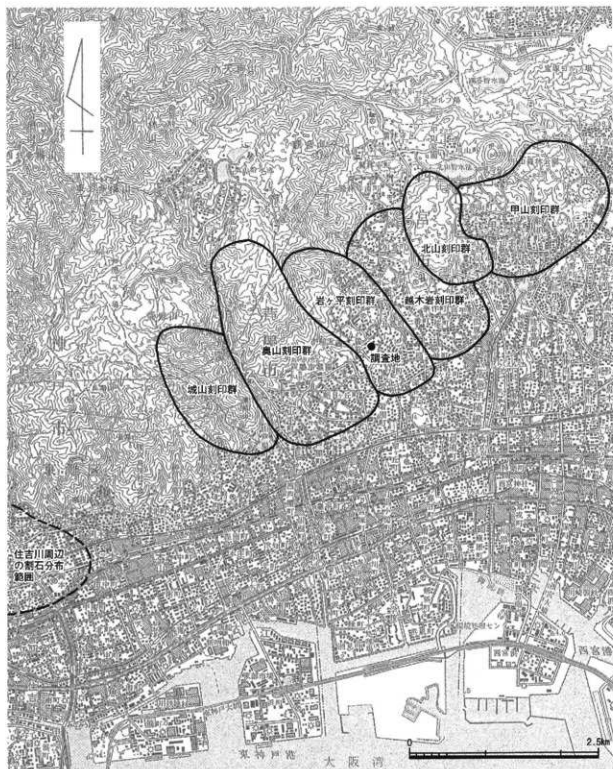
大坂城の石垣の年代や性格をめぐる研究の発端は、昭和34年(1959)の大阪城総合学術調査が重要な位置を占めている。この年、西外堀の水枯れが生じ、本来水没している石垣の裾部分が目前に現れた。すぐさま「大阪城総合学術調査団」が大阪市・文化財保護委員会・読売新聞社三者の共同事業として立ち上げられ、西外堀の堀底調査に加え、豊臣秀吉の金明水井戸調査、ボーリング調査・サウンディング調査の地盤調査が行われた。調査結果は研究者のみならず広く市民をも巻き込む衝撃的な事実が明らかとなった。それは、現在見ることできる切石積み石垣のさらに下に、野面積みの石垣が遺存していることがわかったからである。これこそが想定の外にあった初期大坂城、豊臣期大坂城の土台石垣であり、徳川家が豊臣大坂城の改築、および新装を図ったという史実とその調査結果が合致することが証明された。調査団のひとりである村川行弘氏は、「当時、大阪市民の太閤秀吉びいきは根強く、東国徳川の再築した城を日々眺めているはずがない。」と、大阪市や多数の市民より苦情を受けたことを黎明期の調査現状、世相も含めて述べ、回顧しておられた。

さらに、石垣の刻印調査では、徳川期大坂城再築に関わった大名の刻印が次々と確認され、現在見ることできる石垣は徳川期に再築されたものであることが物証をもって確実となった。その後、昭和48年(1973)～昭和56年(1981)の継続的なボーリング調査、昭和59年(1984)の本丸詰の丸石垣の発見、昭和63年(1988)の天守台石垣の発見へと段階を経てつづいていった。近年では、「オーサカキング」と題した年1度の夏祭りや、「謎の井戸」としてボーリング坑から豊臣期の石垣を見学する催しも行われた。通史の中に記載しなかったが、この他、築城史研究会・城郭談話会や古城友の会など、民間や個人の城郭研究者の地道な基礎調査・作業も研究躍進の大きな原動力となっているし、その総決算として〔築城史研究会2006〕は中間報告として大いに評価されてよい。

一方、元和・寛永期に大坂城に石材を供給した採石場は、兵庫、岡山、京都、奈良、大阪、瀬戸内海の島々

(塩飽諸島)などが知られ、再築大坂城に伴う遺跡の行政的な周知保存の例として、古くは香川県小豆島の「大坂城石垣石切丁場跡」が昭和47年(1972)に国指定史跡となったことが挙げられよう。

今回発掘調査を行った東六甲採石場は、市内研究団体や個人・民間研究者が連携を取りながら、40年におよぶ調査・研究の軌跡がある。研究の歩みを通観すれば、東六甲採石場を対象とした記録に残る調査の最初は、昭和43年(1968)に遡る。地元の県立芦屋高校生徒(芦の芽グループ会員)小倉幸一氏が六甲山中、野外活動センター内で第一刻印石を発見し、村川行弘氏(芦屋市市史編集委員・芦屋市文化財保護審議会委員)や芦の芽グループ、地元の研究者が精力的かつ地道に山中を歩き、刻印石のドットマップ作成に努めたことによってそのス



第7図 東六甲採石場における刻印群の分布範囲 (1/50,000)

IV 発掘調査の方法と調査経過

(1) 調査の手順と地区割

本発掘調査は、I-(2)で述べた確認調査結果とI-(3)の遺跡地の取り扱いを受け、埋蔵文化財遺存範囲において、工事損壊部分を対象とした平面調査を実施した。調査地は段差をなす南向きの傾斜地であることから、排土スペースや作業空間の確保を考えると、対象範囲を同時並行して掘削することは不可能と判断し、I～V区の調査区を便宜的に設定し(第9図)、各々の掘削着手時期を1～4週間ずつスライドさせて開始した。

掘削は、重機と人力を併用して行い、岩ヶ平第45・46・58号墳の遺存範囲であるⅡ・Ⅲ区は重機の自重による遺構破壊を危惧して現地表面から人力掘削のみで作業を進めた。それ以外のトレンチは、確認調査トレンチ(第2図)をまず再掘削し、順序を確認しながら近・現代の盛土は重機を使用し、以下は人力で分層発掘を行った。なお、石室内掘削土のすべてと墳丘前庭部の土器散佈面など微細遺物が含まれると判断した排出土は、土嚢袋に取り置きして、随時跡にかけて遺物採取を行ってから捨てることとした。調査終了後の埋め戻しは、掘削深度の深い箇所や安全が確保できない部分のみを埋め戻した。

調査地の地区割りは、確認調査で絞り込まれた埋蔵文化財遺存範囲を、前述した調査工程の都合からI～V区に分割した(第9図)。また、I～V区とは別に古墳と特定されているものに関しては、第45号墳・第46号墳・第58号墳の遺構名称表記(古墳登録番号)も使用している。詳細は、V. 発掘調査結果で記述するが、概ねⅡ区=第58号墳、Ⅲ区=第45・46号墳と置きかえることができる。測定の基準杭($X \cdot Y = 0$)は調査地西コーナーに設定し($T0-W$)、道路沿いの北西ラインを $X = 0$ として北西方向にプラス値を、南東方向にマイナス値を与え、調査地全体に仮座標を組んだ。さらに、3基の古墳を調査するにあたって、それぞれの石室主軸をもって各墳の墳丘に単独座標を設定した。したがって、今回の調査では、4種の調査座標が存在する(第9図)。真北は全体座標 Y 軸から 35° 東偏する。測量調査におけるすべての基準点は、これら4種の座標のいずれかを使用するとともに、平面図に記入して、相互の関係がうかがえるようにした。調査図面は、遺構の性格に応じて1/10、1/20、1/40、1/100、1/200の縮尺を使い分け、作成した。

古墳についての調査は、岩ヶ平第58号墳を記録保存化する方針を採った。石室の壁体ならびに墳丘と考えられる証左が既に得られていたため、確認トレンチ(10tr.)を利用して再発掘するとともに、石室および墳丘の全容を明らかにすべく、広範囲に表土や底石を除去し、またその範囲を確定することを目的にⅡ区の調査区を全面的に拡張した。その結果、Ⅰ区との境界は現地で不鮮明となったが、この時点で第58号墳関係の遺構・遺物はすべてⅡ区の調査区で取り扱い、Ⅰ区については北半部分の諸遺構に集約させた。

Ⅱ区の第58号墳は、調査開始後の早い時期に当初予想したような無袖式の小石室ではないことが判明したため、主として左側壁列を追求するとともに石室幅の確定を目指した。その結果、本墳の石室がりっぱな玄門石を有する有袖式の畿内型石室であることが確認されたため、墳丘全体の構造の把握と掘部の状況などを調べる目的で、石室直交トレンチを西側に入れた。このトレンチは終盤時には境域を明確化するため、西側に大幅に延長し、土層断面図を作成した(第24図上段A)。また、墳丘の南半域、羨道部の裏込め、墳丘の調査を行い、墳丘内環状の須恵器群や墳丘裾部、開口前庭部の須恵器群などの調査を行った。第58号墳石室の東側と墳丘はこれまでの開発で大破していたため、地山を露呈させつつ、底石の移動状況や古墳外へと拡散した副葬品などの精査に努め、略南北方向の土層断面図を作成した(第51図)。石室に関しては、通常の平面図・断面図を実測するとともに、残り具合の悪い副葬品群の出土位置に関する調査や石室内の堆積環境に留意した調査を実施した(第23・29・30・31図)。

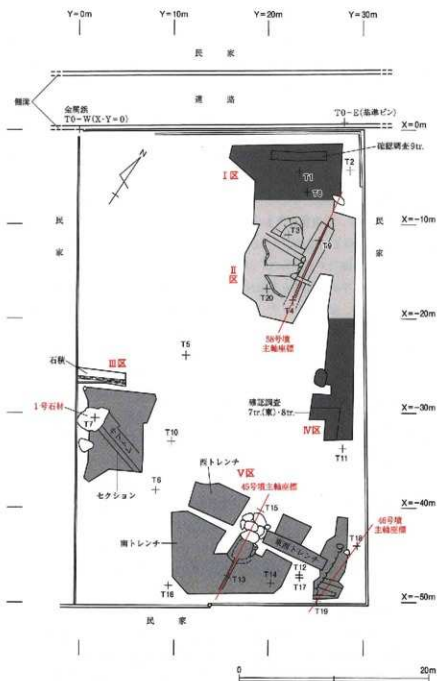
岩ヶ平第45・46号墳の2古墳は、前述したように今後も邸内に保存されるため、石室構造と墳丘構造などを確めるための最小限の発掘調査を実施した。特に工事区域で損壊を受ける部分は全面調査とし、2墳の築造時期差などを把握するため東西方向のトレンチを長さ7mで設定し、東西土層断面図の実測を行った。第45号墳については、床面並びに石材抜き痕などの調査も徹底し、前庭部に広がっていた散布土器群についても記録保存を必要とした。この部分は、事業地の南端であり、擁壁工事の変更できずに入る予定である。

第46号墳については、過去の調査部分を再発掘し、石室の規模と構造をとらえるための調査を実施したが、将来に残る古墳であり、新計画では擁壁の外となるため、消失を前提とする記録保存の調査は墳丘の一部を除き一切実施しなかった。石室内の落石を除去し、支室で一部床面を確かめた部分もあるが、室内の調査は基本的に後世に委ね、石室壁体の実測調査は、第45・46号墳両方ともに実施したが、時間の関係もあり、不十分に終わっている。

また、Ⅲ区の岩ヶ平刻印群関連石材（検出順に1・2号石材と命名）の刻印部分は採拓を行い、拓影として記録保存した。

基準高は、調査地北西を東西に走る市道のマンホール高T.P.+106.289m（本市下水道部所管台帳参照）から水準測量によって求めた。写真撮影は、35mmリバーサルフィルム、35mmモノクロフィルム及びデジタルカメラを使用し記録するとともに、梅原章一氏（写真家）、山本徹男氏（映像作家）に一部写真やビデオ撮影の協力を得た。

（森岡・坂田）



第9図 調査区配置図と座標設定図 (1/400)

(2) 調査の経過

本発掘調査は、平成17(2005)年12月6日から開始した。年末の仕事納め日に予定していた12月22日は阪神地方が今年初めての大雪に見舞われ、調査担当者・作業員ともに現場に到達することができず、当日の調査を断念し、12月26日を年内調査の最終日とした。予想を超える調査成果があがったため、調査の終盤には現地説明会を開催し、それまでの発掘調査成果を市民・研究者に公開した。当日は、近隣住民や考古学関係者が現地を訪れ、参加者180名を得て、盛況のうちに終えることができた。平成18年2月23日に、アートプランニングの島本氏(地権者代理・設計士)立会いのもと、調査終了立会を行った。以後、現場の工事は凍結されていたので、地権者の立入許可を得て平成18年7月20日の1日で第45号墳の石室の追加実測を完了させた。翌週の7月25日には、第45・46号墳の埋没保存工事の立会いを見届け、本格的な工事に入った。

出土品や調査記録の整理作業は、一部現地作業にも組み入れたが、調査終了後より継続して行い、9月末を目途に出土遺物の台帳図表作成、洗浄・ネーミング作業を終わらせ、10月より遺物接合・図面整理・写真整理・遺物実測の諸作業と並行して、報告書の本文原稿の作成に着手した。

以下、本発掘期間中の調査日誌を要約し、天候とともに記載する。

発掘調査日誌 抄録

平成17(2005)年

12月6日(火) 晴れ

本日より現地調査を開始する。現地にて、アートプランニングの島本氏、小林氏(地権者代理・設計担当)と発掘担当者の森岡・坂田(本市学芸員)、作業委託会社の藤田氏(東海アナース)が立ち会い、掘削範囲の隔出しと、調査を進める上での注意事項を申し合わせた。加えて、調査工程と調査区の配分、トレンチ名および残土スペースの設定を行った。

調査機材・備品・ユニットハウスを搬入し、先行して調査する調査地北域のⅠ・Ⅱ区の草刈りを開始した。

12月7日(水) 晴れ

Ⅰ区では、機械掘削が可能なレベルを把握するため、確認調査9tr.を先に再掘削した。その後、表土を含む有機質砂質土を重機と人力を併用して掘削し、焼土塊や炭化物を濃密に含む不定形土坑を被覆する黄褐色系の礫混じり砂質土層からを人力で調査する方針とした。確認調査9tr.より1m東で、50cm大のやや方形を呈す

る石材が列をなしていることが観察できた。小石室である可能性も考えられたため、掘形の有無などを確かめるべく、石列に直交するようにサブトレンチを設定した(第10図)。

Ⅱ区は、第58号墳を検出した確認調査10tr.を先行掘削。既に確認されていた右側壁を再検出し、調査の段取りを検討した。確認調査10tr.の南方には、天井石になり得る法量と形態を持つ石材が露頭しており、この石材周辺の掘削に着手した。その結果、石室とは石材種を異にする安山岩であり、庭石として搬入された石材と同種であることから、天井石ではないと判断した。

12月8日(木) 晴れ

Ⅰ区は、北東コーナー付近で花崗岩の石敷きを検出した。層位の検討は明日以降になろうが、おそらく炭層より上層に属すると考えられる。現状観察では、3石ほどであるが板状の石材を垂直に立て、シスト状の形態を持っている。また、庭石などに転用されていた移動石材群の中にAタイプの矢穴痕を持つ割石(大き



第10図 Ⅰ区 調査開始状況(西から)



第11図 Aタイプの矢穴痕を持つ割石

さ長軸(130cm)を1石確認し、野帳にメモ図を作成した(第11図)。

Ⅱ区は、墳丘西半の表土剥ぎに着手し、墳丘構成層と擾乱の見極め掘削を行った。さらに、確認調査10tr.で検出した右側壁を追っかけ北方に拡張し、玄門石と思われる直方体を呈する石材を確認した。

12月9日(金) 晴れ

Ⅰ区で検出した礫集積は、一辺40cm前後の礫石状の板石、もしくはシスト状の礫配置にも見受けられ、この花崗岩礫集積の検出状況を撮影した。確認調査9tr.で観察されている16世紀末から17世紀初頭に比定される炭化物・焼土層より上層に当り、これらの礫集積は17世紀初頭以降と判断している。明日、再度サブトレッチを設定して検証する必要がある。

Ⅱ区は、旧家屋の遊歩道の脇石によって左側壁が破壊されているが、遊歩道と石室主軸がほぼ同位置を通り、かつ、遊歩道の脇石が左側壁と重なる位置に設置されているため、転用もしくは側壁をそのまま用いている可能性が考えられる。先ずは平板によって平面実測(1/50)を行い、確実に脇石と判断できる石材のみを重機で注意しつつ撤去した(第13図)。

Ⅲ区は、確認調査7tr.周辺の草刈りを行う。以前より、隣地境界西端の巨礫には、丸の中に「八」を穿つ刻印が確認されているが、岩ヶ平刻印群に目立って見られる同一石材複数刻印の可能性もあり、礫表面の再チェックが必要である。

12月12日(月) 晴れ

Ⅰ区で、礫集積を浮かしながら炭化物・焼土層の検出できるレベルまで数cmずつ掘削し、明確になった時点で撮影した。炭化物層は、確認調査9tr.東半を中心に比較的狭い範囲に分布するようである。焼土塊も一定量出土するものの、炉壁を呈する遺存状態は本日のところ看取できない。



第12図 Ⅰ区 配石遺構実測風景

Ⅱ区では、第58号墳石室主軸に直交するように羨道部推定位置にセクションベルトを残し、これを境に羨道北半部と南半部と仮称し、さらに南に打設した調査杭以南は石室前庭部とした。前庭部付近で左側壁と思われる3石を確認した。ここでは遊歩道造成による擾乱との境界があり、焼土層位は不明瞭であるが、TK209段階の須恵器杯身片がコンクリートに巻かれた状態で出土した。羨道部では、北半・南半部で焼土塊を検出した。現時点の掘削レベルは床面より30~40cm上であり、この焼土塊は墳丘築成時期より後続することは明らかである。

関東で江戸城の石切場調査の経験をもつ三瓶裕二氏(財団法人かながわ考古財団技師)が来訪し、岩ヶ平・六蔵荘台地上に分布する遺跡の説明を行った。

12月13日(火) 晴れ

Ⅰ区で、礫集積・炭層の分布範囲の平面図をトランシットで実測(縮尺1/10)し、エレベーションまで完了した。炭層の広がりをも不定形土坑ととらえSK101・SK102…と付記した。実測終了後、SK101・102を半裁掘削、SK103を4分割で掘り進め、SK101・102の遺構断面図(1/10)を作成した。

Ⅱ区では、第58号墳奥壁付近の遊歩道コンクリート底板を剥がした。コンクリートは25~40cmと厚さが不揃いであるものの、脇石にも巻きついているため、なかなか剥がれなかった。以前から露頭していた巨礫が奥壁に相当する可能性も考えられるようになった。

Ⅲ区は、本日より表土剥ぎを開始した。

12月14日(水) 晴れのち曇り

Ⅰ区は、SK103の南北・東西両断面の実測(縮尺1/10)、土層観察を完了させ、完掘作業に取りかかった。焼土塊や炉壁状の固形物はすべて浮かし掘りを進めたが、被熱面は本日のところ確認できない。

Ⅱ区は、玄室右側壁側の庭石を3石と切り株をワイ



第13図 Ⅱ区 遊歩道除去風景(南から)

ヤーを架けて取り除いた。また、庭石の裏込め土内より黒レンガ2点を検出した。黒レンガと言えば、戦前～戦中期に多用された廉価なレンガであり、当地での近・現代資料として興味深い。玄室右側壁抜き取り部の土量がかかなりあると判断されたため、ベルトコンベアー（5m）を2台連結させ、玄門付近の流入土の掘削を進める。

Ⅲ区は、表土剥ぎが完了し、旧庭地風景が復旧した。撮影後、庭石や移動石材に印を付け、ワイヤーを架けて十数石を取り除いた。

12月15日（木）快晴

Ⅱ区は、作業員を3グループに分け、炭道南半・北半部、玄門部の掘り下げを行う。前2区は石室内床面に近いので、手ガリとヘラで慎重に掘り進めた。北半部では、浮いている割石2石を撤去した。

Ⅲ区は、残存する庭石関連石材をすべて取り上げた。その後、新しいトレンチを設定し、セクションベルトを残し、その両側を掘り進めた。

12月19日（月）晴れ

I区は、手を着けずシートを被せたままにしておく。

Ⅱ区は、先週より着手した墳丘北西部で、封土遺存面まで掘り下げる。今のところ西側の掘乱ラインの延長には、当たっていない。石室内は羨道部に主軸セクションを設定して、4分制で床面認定に向けて掘り下げる。玄門部の礫集積を記録撮影し、遊離割石・自然石を除去した。

Ⅲ区は、先日に続き、発掘予定区に合わせ、暗黄灰色土（2層）まで、掘り下げる。一部は、地山が露出し始める。

12月20日（火）晴れ

I区は、石敷き遺構の図面をチェックし、西城より段丘礫層を目指して掘り下げた。石敷き遺構部分については、焼土塊を図面（縮尺1/10）に追記した後、ナンバーを付して取り上げた。

Ⅱ区は、石室内に新しい調査杭を打設し、平面図（縮尺1/10）の作成を行った。床面認定は、完形の杯が斜め下方に転倒して検出されており、床面に近いことは確かであるが、まだ直上ではないと判断される。奥壁については、下端に掘乱が確認されたため、一部掘り進めたところ、奥壁自体も遊歩道整備時に向きが変わっていることが判明した。地権者と設計担当者来訪。

12月21日（水）晴れのち曇り

I区は、土の変化を見て礫を浮かしながら、段丘礫

層上面まで掘削した。調査杭束付近で、暗黄灰色礫混じり砂（段丘礫層）と、きな粉状の黄色砂の層理面より江戸時代の灯明皿を検出した。よって、東区石敷き遺構は上限が近世になると思われる。

Ⅱ区は、掘削を行わず、石室平面図（縮尺1/10）を完了させた。

Ⅲ区は、セクションベルト北壁際に幅1mのサブトレンチを設定し、採石土坑の確認と地山の認定を行う。

12月22日（木）雪

今朝から降り始めた大雪のため、現場に到達できず。やむなく、本日の作業を中止した。昼過ぎに、タイヤチェーンを装着し、現場の見まわりに行く。現場の雪景色を撮影し、三条整理事務所に戻る（第14図）。

12月23日（金）

祝日。天皇誕生日。調査停止。

12月26日（月）晴れ時々雪

今年の仕事納め。年末年始期間の現場に安全対策を施した。ベルトコンベアーの連結解除、門扉の仕立て直し、ブルーシートの養生を行う。

I区は、北壁・西壁の土層断面の撮影。西壁より実測を始める。礫敷き遺構と炭層の関係は、間層が介在しており、同時期の形成ではないことが確認された。

夕方、安全対策のチェックを行い、貴重品を三条整理事務所に持ちかえった。西園補助員、見学のため来訪。

平成18（2006）年

1月6日（金）晴れ

新しい歳を迎え、仕事始め。I区は北壁土層断面の分層を完了し、午後から実測を開始した。本日中には完成できず、来週に持ち越した。

Ⅱ区は、墳丘北西部の掘乱を除去。羨道部の遊離石材のレベルを測り、取り上げた。玄門石付近の掘乱坑を、石室平面図に追加実測。



第14図 調査地の雪景色（南西から）

調査地平面図の作成。Ⅲ区のトレンチ配置図作成。

1月9日(月)

祝日。成人の日。調査停止。

1月10日(火) 晴れ時々曇り

Ⅰ区は、北壁・東壁土層断面の実測を行った。

Ⅱ区は、第58号墳北西地で、年末より確認されていた土器溜りの浮かし掘りを開始した。検出状況から3グループに分けることが可能と思われる。

Ⅲ区は、昨日作成したトレンチ配置図に、刻印石以外の自然石を追加実測した。

1月11日(水) 曇り

Ⅰ区は、3グループの土器溜り全体平面図(1/50)とレベル測量。土器溜りごとの詳細平面図(1/10)は後日に回した。東壁・北壁の土層注記を完了した。

Ⅱ区は、第58号墳の石室床面が見えてきた。床面は敷石が確認でき、拳大の半載された自然石や一部では板状の割石が敷き詰められている。敷石は、現時点で玄門石付近までしか確認されておらず、おそらく羨道部には隙は敷かれていなかったようである。床面からは、釘3点、管玉1点と、骨片と思われるスポンジ質灰白色の碎片が出土した。

Ⅲ区は、トレンチ配置図の作成を進めた。

V区は、本日より調査を開始した。岩ヶ平第45・46号墳間にトレンチを設定する予定で、まずは下草刈りを行った。また、確認調査4tr.の再掘削を行った。

藤川祐作氏(芦の芽グループ代表)が来訪し、周辺の既往調査の内容や発掘時の状況などの教示を得た。

1月12日(木) 晴れ

岩ヶ平第58号墳(以下、本節に限り「Ⅰ・Ⅱ区」の表記をまとめて「第58号墳」と呼び換える)は、石室をメインに掘えた写真撮影を行うため、朝から清掃・精査に着手した。精査時に、玄室北東部で切子玉1点が出土した。撮影の待機時間を利用して、取り置きしていた石室内排土の篩かけを行った。

撮影前の精査で、奥壁の下にコンクリート片やガラが入っていることが確認され、羨道造成時に当石材が移動していることが判明した。加えて、降雨によって奥壁を支えている土砂が流出した場合、転倒する可能性が出てきたため、早急な対応策を要する旨を本課と作業委託会社に連絡した。

Ⅲ区は、刻印石の平面・断面図の割り付けと図面作成を行った。

V区は、第45・46号墳間に新設したトレンチの表土層を除去した。

仲谷由利子夫妻(元 本市臨時的任用職員)、現場見学のため来訪。

1月13日(金) 曇り

第58号墳は、掘削・実測の作業は行わず、今晚からの雨に備えて、ビニール袋土壌で石室内出土遺物すべての固定作業を進めた。奥壁の転倒防護対策は、単管を使用して多方向からつっぱり棒をかませることとした。

Ⅲ区は、セクションベルト断面図の土層注記を行う。1号石材は刻印以外の人為的痕跡はなく、当石材自体は石垣用材の母岩としていないことが予測された。セクションベルトの観察においても、採石土坑は確認されなかった。

Ⅳ区は、本日より掘削を開始した。確認調査7・8・12tr.の掘形を再検出し、完掘を目指した。近・現代の盛土から須恵器の裏口縁部(80%残存)をはじめ、複数個の須恵器片が出土した。

V区は、表土除去が終わり、第45号墳の封土上面を検出した。一方、第46号墳は遊歩道による攪乱が著しく、G.L.-80cmに至ってもコンクリート塊が見られた。

1月16日(月) 晴れ

週末の降雨でトレンチ内に溜まった雨水の汲み出しを先行した。

第58号墳は、前庭部から玄室奥壁まで1mのメッシュ貼りを終日行った。Ⅲ区は、セクションベルトの分層掘削。遺物は出土しなかった。

Ⅳ区は、確認調査7・8tr.の土層を確認して、今後の掘削段取りを立てた。掘削方法は、表土・盛土から遺存状態の良好な遺物が出土するため、すべて人力掘削で進めることとした。

V区は、第46号墳の天井石があったとみられるレベルで、遊歩道の延長が確認されたため、コンクリートを破り取り上げた。

1月17日(火) 晴れ時々曇り一時雨

第58号墳に設定した1mメッシュを使用し、羨道部・玄室部の2班体制で平面実測(1/10)を開始した。

Ⅲ区は、1号石材の立面図(刻印面から)の作成。

Ⅳ区は、旧表土下面で精査を試みたが、南端の攪乱に伴う礫群が邪魔で精査が進まなかった。重機で1石ずつ取り上げることとした。

V区は、層位ごとに掘削を進めた。第45・46号墳の新旧関係が断面で確認できるかが重要である。夕方、現時点での記録撮影を行った。

1月18日(水) 曇り

第58号墳は、玄室床面平面実測を続行し、右側壁立面図の作成準備。

Ⅲ区は、1号石材立面図作成を継続。Ⅳ区は、旧表土下面での遺構面精査と、攪乱部の除去作業。

1月19日(木) 晴れ時々曇り

第58号墳は、石室平面図が完了し、墳丘コンター測量図の作成準備に着手した。

V区は、第45号墳の南側で側壁・羨道部の続きを確認した。すぐに、主軸ラインを見極め中央セクションを設定した。調査区南壁(隣地境界側)において、G.L.-75cmまで掘削、それから5cm程下げたレベルで、ようやく攪乱が除去できた。羨道部の床面に近く、正体は平成元年度のトレンチ坑と思われる。

Ⅳ・V区のトレンチ配置図の追加作成(1/200)。

1月20日(金) 晴れ

第58号墳は、墳丘コンター測量図の作成。右側壁立面図の続きを作成。石室平面図のレベリング。

Ⅲ区は、他のトレンチ作業を優先して作業を行わず。

Ⅳ区は、南側から分層掘削を進めた。今晚から雨または雪が降る予報が出ており、確認調査12hrで検出していた焼土部分(トレンチ北側)の掘削はしなかった。

V区の第45号墳は、開口部の階段状積み直し石材の中に、Aタイプの矢穴石(端石)が含まれていることを確認した。元和~寛永期の石工が石室内を休憩場や作業場に利用していたのか、と思いをめぐらした。右前底部付近を精査中に須恵器片の散布を確認し、細片であっても浮かし掘りするよう指示した。

1月23日(月) 晴れ時々雪

朝は現場一面、うすすらと雪化粧をしていた。凍っているエリアや、霜柱の立っている箇所は、午前中放置した(第15図)。

第58号墳は、西~北域で検出した土器溜まりの平面

実測図(縮尺1/10)と、右側壁立面図の作成を続行。開口部~西墳丘裾部に設定したサブトレンチを拡張すると、完形の杯身、壺片が出土した。すぐに記録撮影を行い、土層断面でこれらの遺物が墳丘内に陥属することを確認し、面的に掘削する方針で進めることとした。

Ⅳ区は、ある程度土が乾いてきたので、炉状遺構の浮かし掘りを行い記録撮影。

V区は、旧宅の池の囲い石にAタイプの矢穴痕を持つ割石を検出し、表面の土を取り除いたところ井桁の刻印を確認した。大きな収獲物だ。

1月24日(火) 晴れ時々雪

第58号墳は、中央主軸セクション・西側壁側の断面実測(縮尺1/10)と土層観察。その後、中央東西セクションより南の主軸セクションを取り除く。セクション内からは、5点の須恵器片が出土した。

Ⅳ区は、炉状遺構の平面・立面図(縮尺1/10)の実測を開始した。V区の第45号墳は、西側の掘削を進め、旧邸宅の池の掘削が、ようやく除去できた。

午後、喜多氏(文化財サービス)、島本氏(設計担当)来踏。進行状況などを確認してもらう。

1月25日(水) 晴れ時々曇り

朝より山本徹男氏(市内映像作家、ビデオ撮影委託)が来踏し、調査区全景並びに詳細な遺構検出状況のビデオ撮影。第58号墳開口部西城付近の攪乱を除去した。中央主軸断面の追加注記を行った。玄室内出土遺物(釘・管玉・骨片)を、図面に取り上げナンバーを付して遺物ケースに入れる。

Ⅳ区では、炉状遺構図の観察注記と、被熱土と溶解鉱物粒の色分け作業を行った。性格を見究めたい。

V区の第45号墳は石室実測を開始した。第45号墳の西側、池の囲い石に含まれていた刻印石(2号石材と呼称)は、2種類の刻印があり、矢穴痕を含めた採拓



第15図 降雪の中での調査風景(北から)



第16図 遺跡の解説風景(撮影する山本徹男氏)

を補助員に指示した。

1月26日(木) 晴れ時々曇り

第58号墳の主軸セクション用小土手の取り外し。セクション内からは、管玉1点・甕玉1点が出土した。精査後、記録撮影と床面平面図に出土遺物の追加実測を行う。

V区は、第45・46号墳間の東西トレンチを北に拡張し、まずは旧表土上面までの掘削を行った。シルト～細粒砂層から須恵器片が出土した。藤川氏来跡。

1月27日(金) 晴れ

敷地北東隅に写真用足場(3段)を組んで、調査地全景と第58号墳俯瞰写真の撮影を行う。

第58号墳から耳環1点と、鉄線らしき金属片2点が出土した。撮影待機時間に、第58号墳中央主軸セクションの取り外し土の篩かけを行う。

1月30日(月) 曇り時々雨

午後から報道関係者へのプレス発表。現地にて日刊紙掲載用写真の撮影を含め、概要説明を行った。二上山博物館の濱野俊一氏来跡。

1月31日(火)・2月1日(水)

両日ともに雨天のため、作業中止。三条整理事務所にて現地説明会資料の作成、準備。

2月2日(木) 晴れ

2日間続いた雨で、調査区の各所が水没した。第58号墳は、人数を限って雨水の排水、吸い取りと、泥土の除去。南西裾部の須恵器出土状況の実測。春木本課事務職員・白谷学芸員来跡。夕方、本庁にて現地説明会の打ち合わせを行い、分担を決める。

2月3日(金) 晴れ

第58号墳玄室平面図の追加実測。南西裾部の須恵器出土状況の実測を継続。現地説明会の準備と、安全対策の確認。天羽・西岡補助員により、六麓荘町・岩間町界隈に現地説明会案内チラシを各戸配布。



第17図 2月5日、現地説明会当日の状況

2月5日(日) 晴れ時々雪

現地説明会当日。天候に恵まれ絶好の現地説明会日和であった。本市文化財保護審議委員 村川行弘氏が午前中に来跡され、50年以上にわたる文化財保護活動を回顧しながら、当現場の調査成果を賢察された(表紙門枠写真参照)。

午後2時より、現地説明会を開催。小雪のちらつくなか180名を超える見学者が訪れ、約2時間の説明会を無事終えることができた。副葬品などは現地で間近に見ていただき、市民から多くの質問を受けた。

午後4時より、遺跡説明パネルの撤収と遺構面の保護作業を行って解散。

2月6日(月) 雪時々晴れ

降水確率が80%のため、作業を中止した。午前中から雪が舞い、ハンドマイク・腕章・説明パネルを引き上げ、現場の積雪状況を撮影。三条整理事務所で図面・遺物などの整理作業を行う。

2月7日(火) 曇り

現地説明会に使用した半管・足場などを撤収。第58号墳の玄室平面図のエレベーション作業を行う。

IV区、土器溜まりの取り上げ作業を行う。

V区の第45・46号墳間の東西トレンチ南壁土層断面図の実測。2号石材の平面・断面・立面図の作成。

藤田氏(東海アナース)と今後の終盤に向けての調査段取りについて打ち合わせ。

2月8日(水) 晴れ時々雪

第58号墳の東、敷地東辺露地境界線(遊歩道の東側)の掘削。

IV区は、土器溜まりの土器類取り上げ後のエレベーションと、追加実測。V区の第45・46号墳の東西トレンチの土層断面実測と注記を完了した。

午後2時頃、大雪のため作業を一時中断、降雪の現場の風景を撮影する。



第18図 第58号墳 石室実測風景(奥壁側から)

2月9日(木) 晴れ

第58号墳は、玄室内北端の追加実測と遺物の取り上げを行った。墳丘東側の機械掘削を昨日に続いて継続。遊歩道の脇石の下で、矢穴痕を持つ割石を確認した。原位置は保っていないと思われる。西側の墳丘封土の掘り下げ作業を行う。

IV区は、東壁土層断面図の作成。V区は、第45号墳の東壁室内堆積土の実測。本日より、楠補助員参加。遅れぎみの作業に加わる。

2月10日(金) 晴れ

第58号墳石室の横断面図実測、玄室床面の敷石を追加実測。

V区の第45・46号墳東西トレンチ北面の土層注記。土層観察からは、第45号墳→第46号墳の墳丘築造の先後関係が観察でき、石室形態からも矛盾をきたさない。

末次・藤田氏(東海アナース)、森岡・坂田(本市学芸員)で今後の調査工程会議を持つ。

2月13日(月) 晴れ

第58号墳コンター測量図の作成。第58号墳玄室の見通し図の作成。V区の第45・46号墳の石室側壁実測。

2月14日(火) 晴れ

第58号墳玄室奥壁立面・見通し図の作成。

V区の第45号墳南西部出土の須恵器・土師器出土状況平面図の作成。第45号墳西側セクションの実測開始。

西村 歩氏(財団法人大阪府文化財センター係長)来跡。本日より天羽・山本補助員参加。

2月15日(水) 曇り時々雨

第58号墳裾部の須恵器出土状況の追加実測を行う。左側壁の表込め部と側壁基底石下端までの掘削を行う。

第58号墳東からIV区の東壁通し土層断面の撮影と実測。古墳時代の包含層は、IV区付近にしか遺存していないことがわかった。

V区は第45号墳西トレンチの土層セクションの実測。

2月16日(木) 晴れ時々曇り

第58号墳のマウンド北西部の掘削を開始する。前庭部須恵器散布面を延長して掘削。左側壁の表込め土の確認。裾部須恵器片出土状況の見通し図作成。藤川氏来跡。

2月17日(金) 晴れ

第58号墳裾部、須恵器出土状況の追加実測を継続。さらに、見通し図を合わせて作成。前庭部遺物散布状況図の作成を行う。

V区の第45号墳石室内の実測メッシュ設定作業を開始。玄室平面図の作成。

同区第46号墳右側壁の立面図の作成を開始した。藤川氏来跡。

2月20日(月) 雨

第45・58号墳の石室上に、テントやブルーシートを覆い、作業を続行した。

第58号墳は、床面敷石の縦断面、床面主軸断ち割り断面図に追加実測。墳丘裾部須恵器散布状況の範囲確定掘削を、歩み板を敷いて少人数で行った。

第45号墳玄室内の平面・壁面メッシュ貼りがほぼ完了し、明日から実測を再開。濱野俊一氏(二上山博物館・香芝市教育委員会)来跡。

2月21日(火) 晴れ

梅原章一氏(写真家)、山本徹男氏(本市遺跡ビデオ委託映像作家)来跡。

第58号墳裾部須恵器散布状況(墳丘前庭部、墳丘内列石外区)の実測とエレベーション。床面主軸断ち割り断面の実測を継続。墳丘裾部出土須恵器を、ナンバーを付して取り上げ開始。V区の第45号墳玄室側壁立面図の作成。第46号墳は、平面図の追加実測を行った。

2月22日(水) 晴れ

調査終盤で山本・水津・西岡補助員にも参加要請し、第45・46・58号墳の未完図面に追込みをかけた。

第58号墳墳丘断面セクションの実測図を完成させた。

V区の第45号墳左右側壁立面図の作成作業を継続。第46号墳石室横断面図と右側壁立面図の作成を行う。

2月23日(木) 晴れ

本日、調査最終日。昨日につづき、残務作業のチェックと図面の追込みで大変忙しい。

第58号墳床面主軸断面図に、基盤層まで完全に掘削した後の堆積状況を追加実測。墳丘構築前の整地層や、基盤層中の礫抜き取り痕などを検出。

V区の第45号墳羨道部基底石下部の追加実測。玄室内・左右側壁立面図の継続作業を行う。

V区の第46号墳左右側壁立面図を完成させる。

午後4時から、島本氏(設計担当)、森岡・坂田(本市教育委員会学芸員)で事業地全体を歩き、調査内容や成果について細かく説明し、終了立会を行って現地調査を無事終えた。(森岡・坂田)

V 発掘調査結果

本章では、調査結果について事実報告する。記述の便宜から、各調査区と検出遺構の帰属関係を明示し、各節において、層序・所見・各遺構・出土遺物・小結の順に報告を進める。まず、主たる発掘対象となった第58号墳関連遺構・遺物（古墳時代後期～終末期）については、Ⅰ・Ⅱ区にまたがって出土したが、すべてⅡ区の中で取り扱うこととした。したがって、Ⅰ区で扱う遺構・遺物は、近世以降に属するものに限った。次に、Ⅴ区には第45・46号の2基の古墳が帰属し、トレンチの設定は、有効な配置として第45・46号両墳にまたがる設定を行った箇所がある。このトレンチの土層の記載に関しては、第45号墳の項に併せて記載した。

基本層序の土層番号は、現地表面を含む表土層もしくは造成土を第1層とし、上から順に通し番号でアラビア数字を付した。また、同一層と認められるものでも漸次変移しており、土色・土質に違いがあるもの、異なる複数の層を有機的にセット関係で捉えたものは、細分してアルファベットの小文字を付して大別・細別の区分を示した。色調は『新版標準土色帖1998年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）と視認色を併用した。

遺構名称・墳丘構造・石室構築技法などの表記については、報告書一般に使用されている用語を用いており、新しく用いた術語についてのみあらためて定義付けしている（第9図）。

（1）Ⅰ区の調査概況

① 基本層序と所見

層序は、Ⅰ区北壁・西壁・東壁の3壁面の対応関係を捉え、検出遺構・検出遺物の下限年代から帰属年代を決定した。その結果、大別で7層に分層でき、基盤層（段丘礫層）である7層をベースに、古墳時代後期以降の6層、近世以降に比定される焼土・炭層の帰属する5層、配石遺構が帰属する4層、そして旧表土の3層として認識された。北部は旧建物がなかったようで、旧表土の上に宅地造成土である2層が遺存しており、旧表土以下の堆積層が良好に残っていた。

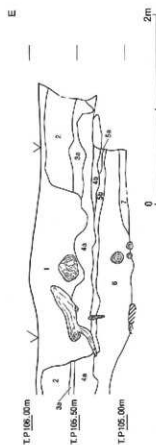
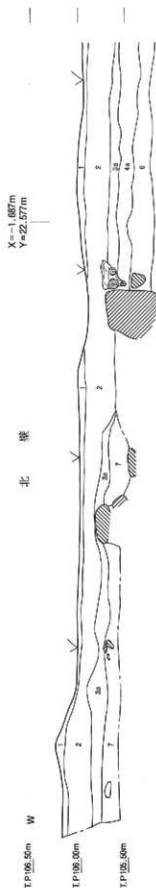
当地区は先に説明した支尾根の頂部付近に相当し、尾根断面に相当する北壁土層図（第19図、図版1）では基盤層（7層）がT.P.+105.75mレベルで確認される。そこから、Ⅱ区の第58号墳を乗せる尾根の西側がなだらかに下降傾斜していることが東壁・西壁土層図（第20図）の土層変化により理解できる。この下降傾斜部と第58号墳の墳丘周濠ラインがほぼ重なり、墳丘が埋没した後もその凹部が水みちとなり、流水堆積層が形成されたと判断している。なお、SD101・102の平面形検出は遊歩道造成により既に削平を被っており、検出できなかった。層位では、4層より後続する。すなわち配石遺構、焼土・炭層より新しい時期に比定される削平であろう。第20図上では、流水堆積・か層が一部4層の下に挟在するが、流路肩部のオーバーハングが垂直断面に反映しているものである。

なお、次のⅡ区で詳しく記載するが、土器溜りBとしたものは西壁土層断面にかかっており、詳細に観察すると、6層下位にレベルが揃い、下面ではないことが判った。かつ、土器片の堆積状況は、意図的に破砕された破片が水平方向に堆積していた。この土器溜りは、第58号墳山側（西側）の周濠痕跡を示唆するものと捉えた。最終的に、Ⅰ区の調査範囲は、東西12m、南北5.6mを計測する。

② 配石遺構

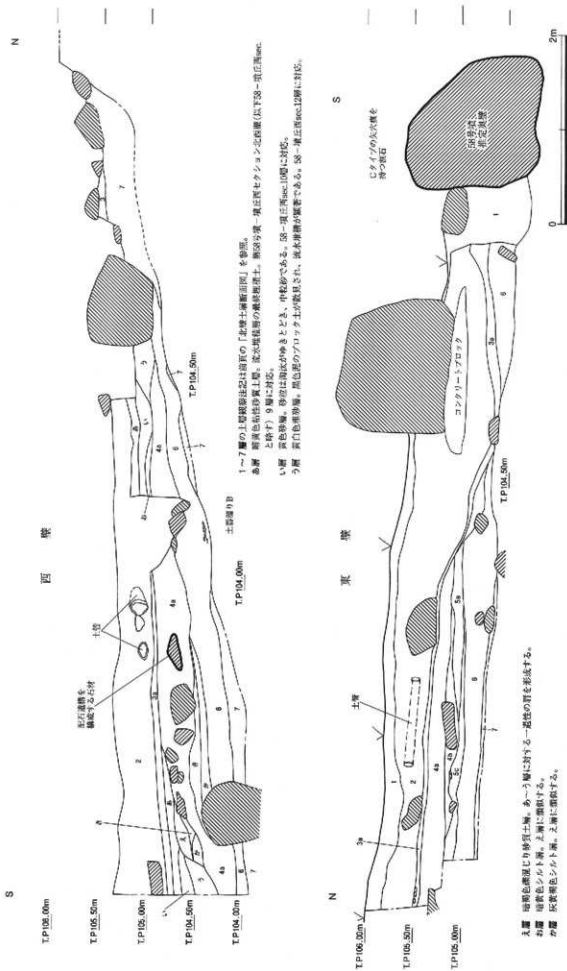
本調査区北東隅（全体座標X=-1.000~-5.000m、Y=25.000~28.000m）で検出した（第21図、図版1）。遺構の形成時期は、近世以降とみられ、検出層位は4 a層で、検出レベルはT.P.+105.3~105.5mを測る。配石の方向性は北東から南西に向って軸線を探り、検出範囲は長軸6m以上を測る。南西端は遊歩道による削平披石で消失、北東端は調査区外へと延びる。

検出状況は、30~40cm四方の板石状に割られた花崗岩が約1mの幅で敷き詰められており、第21図で編み掛けを施した石材が敷石を囲む様に立てられていた。次の遺構面で検出された焼土・炭層とは、間層（4 b層）を挟んでおり、時期差が存在する。遺構の性格は手懸かりが乏しく不明である。

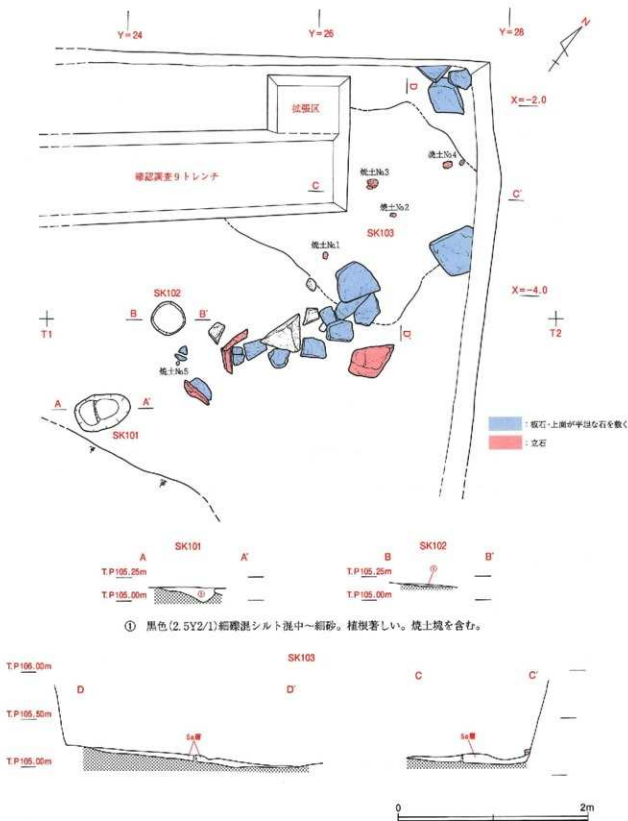


- 1 層 灰赤土層を含む赤土層。巨礫の層状土層。オリブ黒色(SY41)層状じりシルト質粗砂。2m大の塊を多く含む。
- 2 層 巨礫の赤土層。灰赤土層(SY41)層状じりシルト質粗砂。50cm大の巨礫とガラを含む。
- 3 a層 5cm未満のシルト質粗砂を多く含む。
- 3 b層 巨礫。灰赤土層(SY41)層状じりシルト質粗砂。2-10cm大の風化花崗岩を中継含む。
- 4 a層 2層によるカット後の赤土層。灰赤土層(SY41)層状じりシルト質粗砂。
- 4 b層 灰赤土層は2層に属する。時折黒色(SY6)層状じりシルト質粗砂。5cm以下の塊を含む。水平層状している。
- 4 c層 灰赤土層。赤土層の分布範囲にのみ属する。風化粗砂-シルト。露はされた砂質な土である。灰赤土層(SY41)層状じりシルト質粗砂。
- 5 a層 分布範囲は、5cm層(灰赤土)や直層と合流しており、通常に伴う人間的な層状土である。にぶい黄褐色(UOY2)の土層上流じり層状じり粗砂。灰赤土層(SY41)層状じりシルト質粗砂。5cm未満の塊を多く含む。ガラス質の岩片が散見される。灰赤土層(SY41)層状じりシルト質粗砂。5cm以下の塊を含む。水平層状している。
- 6 層 灰赤土層。風化粗砂-シルト。灰赤土層(SY41)層状じりシルト質粗砂。5cm以下の塊を含む。水平層状している。
- 7 層 赤土層。風化粗砂-シルト。灰赤土層(SY41)層状じりシルト質粗砂。5cm以下の塊を含む。水平層状している。

第19図 I 区 北壁土層断面図 (S=1/40)



第20圖 I 区 西壁・東壁土層断面図 ($S=1/40$)



① 黒色(2.5Y2/1)細粒混シルト泥中～細砂。植根著しい。焼土塊を含む。

第21図 I区 配石遺構・土坑 遺構平面・断面図 (S=1/40)

③ 焼土・炭層面

調査区北東隅で検出した（第21図、図版1）。遺構の形成時期は、確認調査第9トレンチにて唐津焼の端折れ皿（第22図-4）が出土しており、16世紀末から17世紀初頭頃の年代を与えることができた。すなわち、該期は徳川大坂城東六甲採石場の活動時期と合致し、焼土・炭層面はこの採石場に関連する遺構と考えられる。敷地内では、後述する刻印石（1・2号石材）や元和・寛永期のAタイプの矢穴直を持つ割石を検出しており、採石場運営に関わる火化（被熱）遺構と判断する。こうした火化遺構は、具体的には石工の使用する道具の修繕・修復や、飯場など火を使用した痕跡全般を指しており、本来広範な性格が付与し得る。近年では、北方の唐津藩寺澤家の丁場で、鉄滓と鍛造刮片・粒状滓を伴う鍛冶炉や建物跡を検出し（森岡・古川・濱野ほか2003）、また、当調査地から南東へ約400m程隔たった地点でも炭層や炉跡が検出されている（森岡・坂田ほか2005）。今回検出したSK101~103は、共通して焼土塊・炭化物を含んでいたが、炉跡の形態を留めるものではなく、すべて塊状で、正確に土坑と判断できるものではない。以下、遺構ごとに所見を記述する。

SK101 平面形は東西60cm、南北36cmの楕円形で、断面は二段落ちを呈し、東寄りさがさらに深くなっていた。深さは、検出面より16cmを測り、検出レベルはT.P.+105.15mである。埋土は、黒色（2.5Y 2/1）細礫混じりシルト混じり中～細粒砂で、後世の植物根痕が著しい。

SK102 平面形は径36cmの円形で、南西肩は攪乱によって明確ではなかった。断面はごく浅い皿形で、深さは5cmである。埋土は、SK101と同じである。

SK103 平面形は不定形である。焼土塊や溶解物が10~15cmの比較的大きな塊で遺存している。埋土は、5a層でいぶい黄褐色（10YR 5/4）焼土混じり礫混じり粗粒～中粒砂である。遺構の性格として当初、SK103を炉の原位置と考えていたものの、平面・断面・床面のいずれにおいても被熱痕跡や焼土面が無いことから、原位置での炉や火化遺構の可能性は低く、むしろ、炉壁状の焼土塊や炭化物の包含量の多さから、至近地での火化遺構の存在とその一部集塊が想定できよう。5層はa～cに分層でき、b・c層が強く出た層の小単位と考えられる。

④ 出土遺物

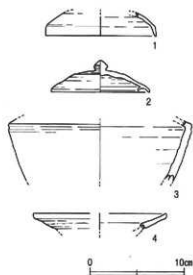
I区からは、須恵器・土師器・陶磁器・焼土塊・溶解物・炭化物などが出土し、26リットルコンテナで2箱分が出土した。I・II区境界付近の土器溜り出土の須恵器・土師器は、第58号墳に伴う遺物と考え、前述したとおりII区の出土遺物で扱うこととする（第22図、図版19）。

第22図-1は、暗黄色礫混じり砂（6層）より出土した須恵器の蓋である。天井部外面と口縁部で焼成時の焼ムラが観察できるが、焼成は概ね良好である。口縁部はやや内傾しながら1cm程度立ち上がり、明瞭な稜を持たずに天井部へと続く。内面調整は丁寧な回転ナデが施される。7世紀代の所産であるが、出土層位から二次的に移動している遺物であることは明白と言えよう。

2は、炭層・焼土より下層の黄色砂質土層（6層）から出土した須恵器の蓋である。宝珠つまみは乳頭状を維持しており、同型式の蓋の中では古相に位置する。カエリ端部は口縁端部レベルより上位（内側）にあり、内外面すべてにおいて丁寧な回転ナデによって仕上げられる。

3は、出土層位不明遺物である。須恵器の長頸瓶で、肩部から胴部の破片である。強く張り出す外面肩部屈曲点のすぐ下に、浅い沈線が1条走る。内外面ともに回転ナデによって仕上げられる。

4は、9トレンチ北東隅の炭層直上（4層直上）で出土した唐津焼端折れ皿の破片である。色調・胎土は、いぶい黄褐色（10YR 7/4）を呈し、口縁部上位内外面は茶白色の白濁釉が視認できる。施釉部の貫入はきめ細い。口縁部中位以下は露胎である。底部から立ち上がる器壁は、明瞭な角をもって上外方に大きく広がり、尖りぎみに丸くおさめた端部に至る。復元口径は、残存率が悪く求めている。帰属年代は16世紀末～17世紀初頭に比定される。



第22図 I区 出土遺物（S=1/4）

⑤ 小 結

当調査区では、徳川大坂城東六甲採石場に関わる火化遺構を検出した。比較的浅いレベルでの検出であるが、後世の削平・攪乱を免れて遺存していたものと判断される。矢穴痕を持つ割石や刻印石、また採石に伴う採石土坑など石切丁場に直接結びつけることのできる資料は得ていないものの、近年の調査例において各担当丁場における火化遺構の付帯施設としてのありかたが認識されるようになって、17世紀初頭に比定される層位における炭層や炉状遺構の存在は、採石活動に携わった石工衆の技や食を支える重要な遺構であると考えられる。なお、後述するが、Ⅲ・Ⅳ区においても該期の興味深い遺構を検出している。(森岡・坂田)

(2) Ⅱ区の調査概況

① 岩ヶ平第58号墳

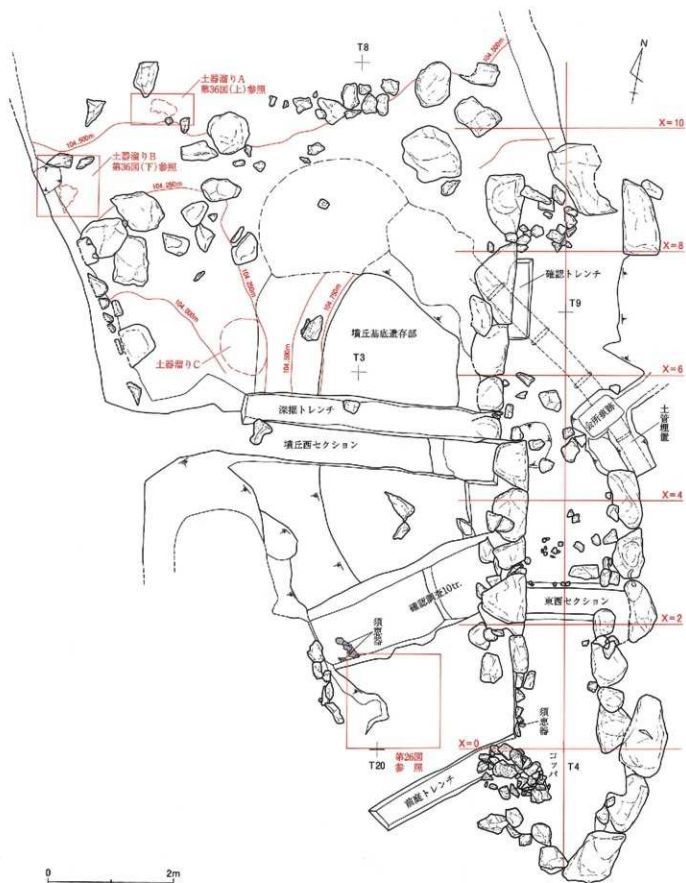
確認調査の10トレンチで今回新たに検出した古墳である。平成元年度確認調査の折、試掘した2トレンチや3トレンチでは、その存在を確認できなかったものである。本墳は、敷地全体から見ると、中央やや北寄りに位置し、支尾根頂部に占地する。立地点の標高は105m前後を測り、遠くは大坂湾沿岸・千里丘陵・生駒山西麓への眺望が良く、眼下には主として西宮市街が広がる。岩ヶ平支群内での位置関係は、F小支群の最北・最高位の場所を占め、I小支群(50・51号墳)を除く他の小支群の多くを見下ろすことが可能な立地を示す。

検出時の遺存状況は、邸内遊歩道が墳丘北半部から玄室の真上を通り、さらに羨道部左側壁へと抜けており、その結果、玄室床面の20cm上に遊歩道のコンクリート底板が遺存していた。左側壁に関しては、おそらくその際に用材のほとんどが抜き取られたとみて大過ない。よって、石室遺存状況は、玄室右側壁基底石と玄門石から羨道部を構成する基底石並びに一部2段目右側壁が確認されるのみであった。奥壁は築造当初の原位置を保っており、上部にCタイプの矢穴痕が観察できることに加え、巨石ながら遊歩道の脇石に転用されており、根入りの部分にはガラや客土が確認でき、その移動は歴然としていた。墳丘は東半部すべてと北西部の封土中程まで、さらに南西部部が削平され、平面的には全体の1/4程度がかるうじて遺存していた(第23～41図、図版2～11、20～36)。

A. 基本層序と所見

築造前に遡って、立地点の基本的層序を検討し、古墳築造時の地形や築造後の環境の変化などについて整理しておきたい(第23・24図A～D、図版4・5)。

土層図Aは墳丘西側に最後まで残したセクションの北面図を南側から見た形に反転投影したものであるが、最も基盤となる地層は45の暗赤褐色微塵混じり粘質土層で、築造地点では比較的平坦で、西側に至って上昇する。石室を構築する墓域は、39から掘開されており、39は土壌層であるため、築造時の旧地表を形成していたと考えられる。40・41はそれ以前の堆積層であるが、42と比べ締まりがなく、地質年代に遡る地層ではないだろう。39と類似した土壌層は、墳域以外の自然地形に則した25に認められ、それより下の26・27や基盤層起源の土を混じえる30などは、古墳が造られる以前に堆積を終えた地層である。墓域内を埋める42・43・44・44'は壁石の嵌込めをなす人為的な埋め土で、石室を覆う封土は築造面から形成され始めた37・37'などから築成が開始されたとみられる。39・40・41の西側における突発的なカットを勘案すれば、高まりをもって南北方向に存在した尾根状地形を意識的に要地として選択し、表層土である往時の39などが下がる旧地形を大きく加工し、それより上を盛土としたものと思われる。古墳盛土が築成当時を保っているのは31・32・34・28'あたりまでで、実測図には太い線でその境界ラインを示した。旧地表からこの間までの人為層は明らかに古墳封土に特有の互層積みが見取される。すなわち、赤褐色～暗褐色系の32・33と37・37'に対し、灰褐色系の35・36が間層として入り、粘質系の締まりの良い土によって、墓域レベル以上の墳丘を構成する。このラインを西に追跡すれば、30・27・24・25と連なり、古墳築造段階に近い地形の断面を復元することが可能である。二つの小微隆起地形の間には掘削状の比較的幅の狭い開放的な落ち込みがあり、おそらく東西小尾根状地形の間を流下する堆積物の通過する道筋を形成する。22・23・26はその低位部に初期堆積したややシルト質となった粘性土層から成っている。15・16の堆積後には粗粒砂層が厚く堆積し(14)、墳丘の周囲にも砂質土の土層(17・18など)の堆積が進む。幅を減じながらも、隆起間の低所には強い流水の痕跡をとどめており(9・10・11・12・13)、一種の下割作用が進んだことを物語る。



第23図 Ⅱ区 第58号墳 墳丘遺存状況平面図・遺構配置図 (S=1/60)

4は土壌層であり、こうした地形が埋没してから後の旧表土を示している。その上には厚さ60~70cmの造成土が乗り、調査直前の現状地盤を形成している。

以上の基本地盤のうち、墳丘を形成する基本土層は確認調査10トレンチを再掘削して得られた土層断面Bでも同様に確認できる。4が築造開始面を成す旧土壌層であり、粘土質の地山は断面Aよりもやせて隆起地形の幅が狭くなっている。10はそうした地形が一度動いて生じた土層である。墓坑は5~8層で入念に埋められ、その上を墳丘を形成するやや締った基盤封土(3)が覆っている。确实な人為的造成土は2までで、その上に乗る1は締りが悪く、断面Aでみられたような墳丘形成は認められない。

次に、土層断面Cを見てみよう。側室1段分(基底石レベル)しか土層は遺存していないが、墓坑の構築面は明らかに低くなっており、断面Aで標高104.3mあった墓坑掘削面は断面Bで104mを前後するところまでレベルを落とし、断面Cでは103.75mまで低くなる。墓坑の深さもこのセクションでは僅か35~40cmぐらいであり、側室の基底石も包み尽くせていない。7や8とともに地山起源土を顕著に含み、築造時に伴う排土を中心に墳丘裾部を形成する造成土をなすものと考えられる。したがって、裾部の6に含まれる一群の須恵器群(第22図-1)は墳丘外、基底部分で用いられた祭祀用土器の一群と推察される。

土層断面Dは本墳の最も前端となるセクションであり、明確な墓坑は把握できていない。セクション各所に土器を包含し、2・3・5・6など基本的には積み土の一部と理解している。

B. 墳 丘

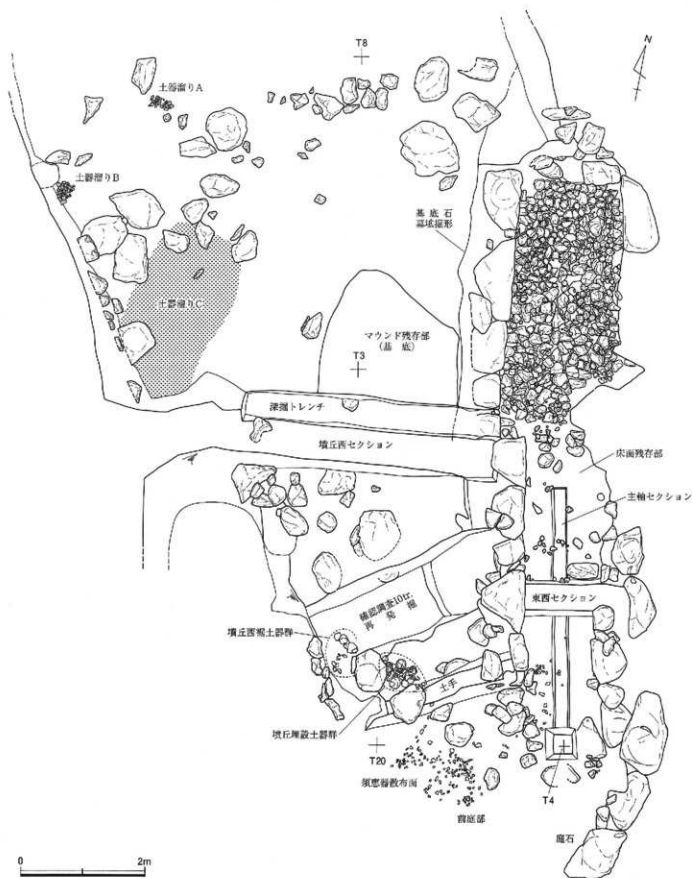
西側の四分の1程が遺存しており、確認調査トレンチ再発掘を含めた4本の土層断面(第24図A~D)と石室法量から墳丘形状を推測すると、径14m以上の円墳もしくは南北にやや長くなる楕円墳になると判断できる。墳丘の立面形態は、墳頂部並びに上部築成土を後世の削平で失っているが、石室床面から残存墳頂部(玄門石北西部付近ととらえる)まで1.2mを測る。天井石やその上を覆う封土を含めると、構築時は床面から2.5mを超える高さがあったと考えられる。小規模地形の頂部に占地する当墳は、視覚的により一層高く見せかける構築プランがあったことが窺える。残存墳頂部はT.P.+104.88mを測り、開口部方向に緩やかに下る傾斜面上に築造されている。したがって、石室基底石の配置および床面は水平ではなく、開口部に向かって徐々に下っている。その勾配は3度ぐらいの傾斜である(図版6~8)。

厳密を期しての墳丘裾部は、探入したいずれのトレンチにおいても確認されていない。また、墳丘北半部は遊歩道や既設管により、西部は流路と旧建築物の擾乱のため、南西部は造成そのものによって大きく削平されていた。ただし、前底部西側の一部では須恵器細片の散布が認められており、より低所の遺構面は削平を受けながらも局所的に遺存していた(第23図、図版11)。

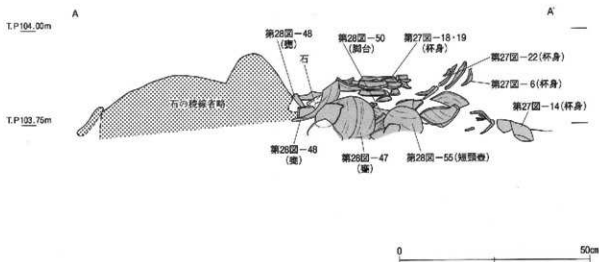
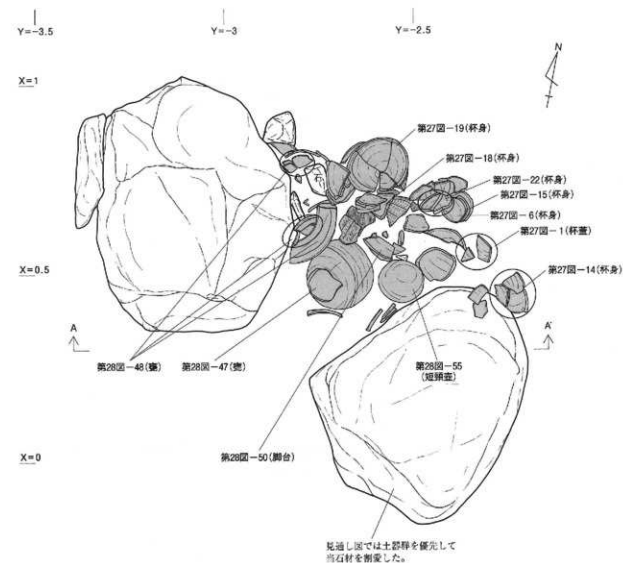
外濠列石や墳丘内列石は、墳丘遺存部では確認していない。南西部墳丘内では径60cm内外の花崗岩巨礫が2石確認された。平面配置を観察すると、石室を中心とした同心円ライン上に乗っているかのようにも見受けられるが(第25図、図版10)、列石としてそれ以上繋がらなかった。特記すべきこととして、この2石間では完形に近い須恵器を含む一群の土器類が数多く出土した(第26図、図版10)。その出土状況は、大型の甕の体部を受け皿のように用い、その中や上に口縁部を欠いた壺類や完形に復元できる壺杯類がまとめて置かれていた。特に壺杯では、破断が器体の中心点を通り真二つに割れているものがあり、意識的な一撃による半破か、もしくは土圧による自然の割れと考えられる出土状況を示していた。この状況は、Fで後述する右側室前底部における須恵器細片の散布状況と明らかに性格を異にしたものであり、遺構形成過程や古墳祭祀に伴う儀礼の過いを含め、遺構形成の段階差なども反映されている可能性が高い。現場において、セクションベルトを両遺構にかけて残したが、層位的に先後関係をとらえることはできていない。したがって、土器類の型式学的編年的位置付けと、墳丘内埋置と前底部散布という存在形態の違いと人為や認知の違いによって、基本的には墳丘内埋置が時間差の长短はあれ若干先行するものと判断している。

また、この先後関係は追葬の有無や時期にも関わる事項であり、石室内出土遺物の報告も踏まえて後述する。

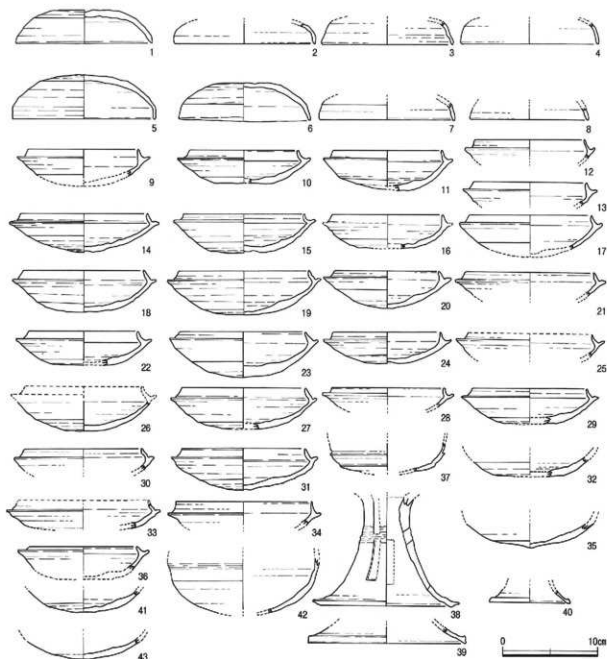
墳丘内出土遺物 出土遺物は須恵器を主体とし、その器種組成は、杯身・杯蓋・高杯・大甕・壺・脚台付長頸壺・平瓶・提瓶などである。前底部で出土した一群の土器片と比較すると、個々の破片は大きく、また復元率の高いことが概観できる(第26図、図版10)。その出土数も墳丘内が最も包蔵率が高く、八十塚古墳群の既往調査



第25図 II区 第58号墳とその周辺 (S = 1/60)



第26図 II区 第58号墳 裾部・墳丘内遺物出土状況平面図 (上) 見通し図 (下) (S=1/10)



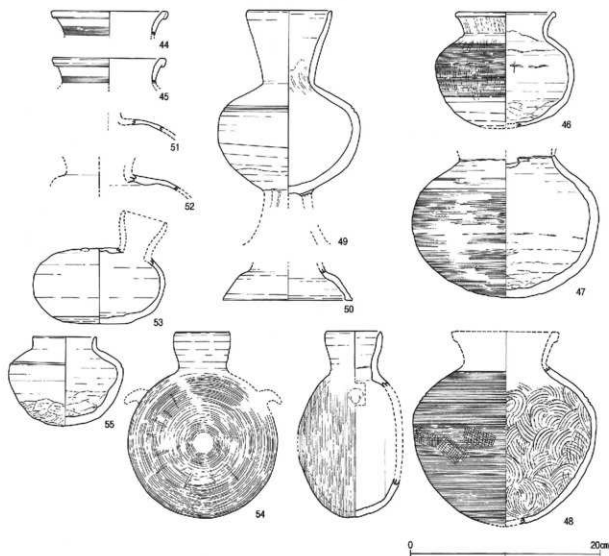
第27図 II区 墳丘内出土遺物① (S=1/4)

例には酷似したものを指摘できず、異常な出土現象を捉えたと言えよう（第27・28図、図版20～23）。

第27図一1～36は須恵器の杯で、1～8までが蓋、9以降が身である。3は、比較的手の器壁でシャープに仕上げられ、口縁端部は段を持ち、丁寧なヨコナデが施される。この土器は、高杯の蓋の可能性もある。6は、口縁部直上まで回転ヘラケズリの調整変化点が下っており、口径に比べ器高も高い。7は焼成が悪く、一見すると、土師器の形質の样に見受けられる。2～4・7・8などは図化しているが、細片である。

杯身を弁別すれば、11・19・21・27・30・31・34などが立ち上がりや器高、回転ヘラケズリのおよぶ範囲などから、他の資料より若干古い様相を呈する。一部にTK43型式を含み、TK209の古相に併行しよう。11は胎土を異にする2種類の粘土を素地にしており、焼成後の器面の色調が青灰色と灰白色に分かれて呈色する。灰白色に焼きあがる胎土の方は砂粒が多く観察できた。興味深い資料である。また、11・19・23は概ね完形に復元することができ、打撃痕も見当たらないことから、完形の状態を保って埋置されたと推測される。

37～40は高杯である。37は無蓋高杯の杯部で、外底面から口縁部の変換点に段を、その1cm上に明瞭な稜を施



第28図 II区 墳丘内出土遺物② (S=1/4)

す。脚部との接着箇所は欠損しているが、透かし孔抜き取り時の工具痕が外底面に僅かに残っている。色調は赤紫色を呈する。38～40は、脚部と裾部である。38は、太身で長脚2段の透かし孔が遺存している。1段目と2段目の透かし孔付近に3条の凹線を巡らせる。杯部は有蓋となろう。39・40も裾端部の径や造作の違いなどから、杯部形態には小異がみられよう。

第27図-41～43は、壺・甕ないし瓶の底部である。42は体部外面にカキメが観察できる。43の甕は、土師質の軟質焼成の様相を呈する。これらは、底部に偏って残存する点に一つの特徴が認められる。

第28図-44・45は、甕または広口壺の口縁部片である。外巻きの折り返し端部を形成している。弁別したが、同一個体の可能性も考えられる。両者ともに頸部にカキメを施している。

46～48は短頸の広口壺である。46は底部から体部下位まで回転ヘラケズリ、中位から肩部にかけてタタキ成形の後ナデ消し、さらにカキメを施す。内面は底部を不定方向のナデ、体部から口縁部は回転ナデを施す。47・48は、胴径がほぼ同じ大きさで、いずれも頸部で割られている。47に関して言えば、後に44・45の口縁部片と接合関係を持つことが判明したが、頸部以下は100%の残存率で、口縁部を打ち欠く際に生じたとみられる1本の亀裂が入るのみで破片化していない。成形・調整技法は、47が外面カキメの後、ヘラ状工具と指頭によるナデ消しが観察でき、48は外面に格子状タタキが一部観察できるが、密なカキメによって大半が消されている。48の内面のみ、同心円当て具痕が底部から肩部まで明瞭に観察できる。肩部外面に施される凹線の手法は同巧で、47が1条、48が3条を数える(図版20)。

第28図-49・50は脚台付長頸壺である。体部上位から肩部に最大径を持つ均整のとれた文高の形態で、底部から体部中位まで回転ヘラケズリを、体部上位から口縁端部まで回転ナデを施す。肩部には細く明瞭な2条の凹線を巡らせる。外底面には脚台との接着痕が残っており、透かし孔を抜き取る際の工具痕が観察できる。49と50に接合関係はないものの、おそらく49にも50のような踏ん張り型の脚台が付くと思われる。

51～53は、平底である。53は、口縁部を欠損するも、体部は80%が残存していた。外底面のみ回転ヘラケズリを、体部下位から頸部にかけては丁寧な回転ナデを施す。体部の扁平な形態は、背部もしくは天井部を径3cmの「円盤閉塞」で作り上げ、口縁部を体部製作時の中心軸からやや斜めにずらして接着したと考えられる。背部外面に径1cmの粘土粒が、器体と同じ胎土で1点貼り付けられている。その指紋が明瞭に観察でき、意図的に付けられていることは明白で、痕跡器官と判断する。欠損部分にもう1点あった可能性も考えられよう。

54は、提瓶である。破片の大きなものが目立ち、接合して70%程度が残存する。片側に径6.5cmの「円盤閉塞」痕が観察できる。閉塞円盤上にもカキメが施されていることから、閉塞後に仕上げるカキメ調整を行っていることが判る。また、口縁部接合時の体部切り抜き痕を内面から観察すると、曲線的な円ではなく、むしろ六角形や八角形に見えることから、ヘラ状工具などで斜切して粗回転させながら開口したことが窺える。

55は、直口の短頸壺である。完形品で、焼成は良く、胎土に1mm以下の白色粒を中量含む。体部と肩部の屈曲位に最大径を採り、その8mm上に1条の凹線を巡らす。肩部外面には自然釉が付着する。外底面は不定方向のヘラケズリで、内底面の圧痕は手持ち時の指頭圧痕と思われる。

C. 石室構造

内蔵されていた横穴式石室（第29・30図、図版6～8）は半壊以上に壊れており、構造の全体像を明らかにすることはできない。天井石すべてと上部壁石の大半を失っている。構造上先ず留意すべきことは、右側壁に立柱する玄門石を確認した点で、これを境に玄室が40cm程拡張していることから、石室形態が有袖式になることが判明した。左側壁は、玄室最奥の基底石と開口部に近い羨道側壁3石しか遺存しておらず、その間の僅かな抜き取り痕を繋いでも左側に軸があるか無いかは微妙であって断定し難い。したがって、本石室の平面プランは、右片袖式もしくは両袖式石室の2案が想定される。石室の主軸方位は、真北から11度西偏し、概ね南に向かって開口する。

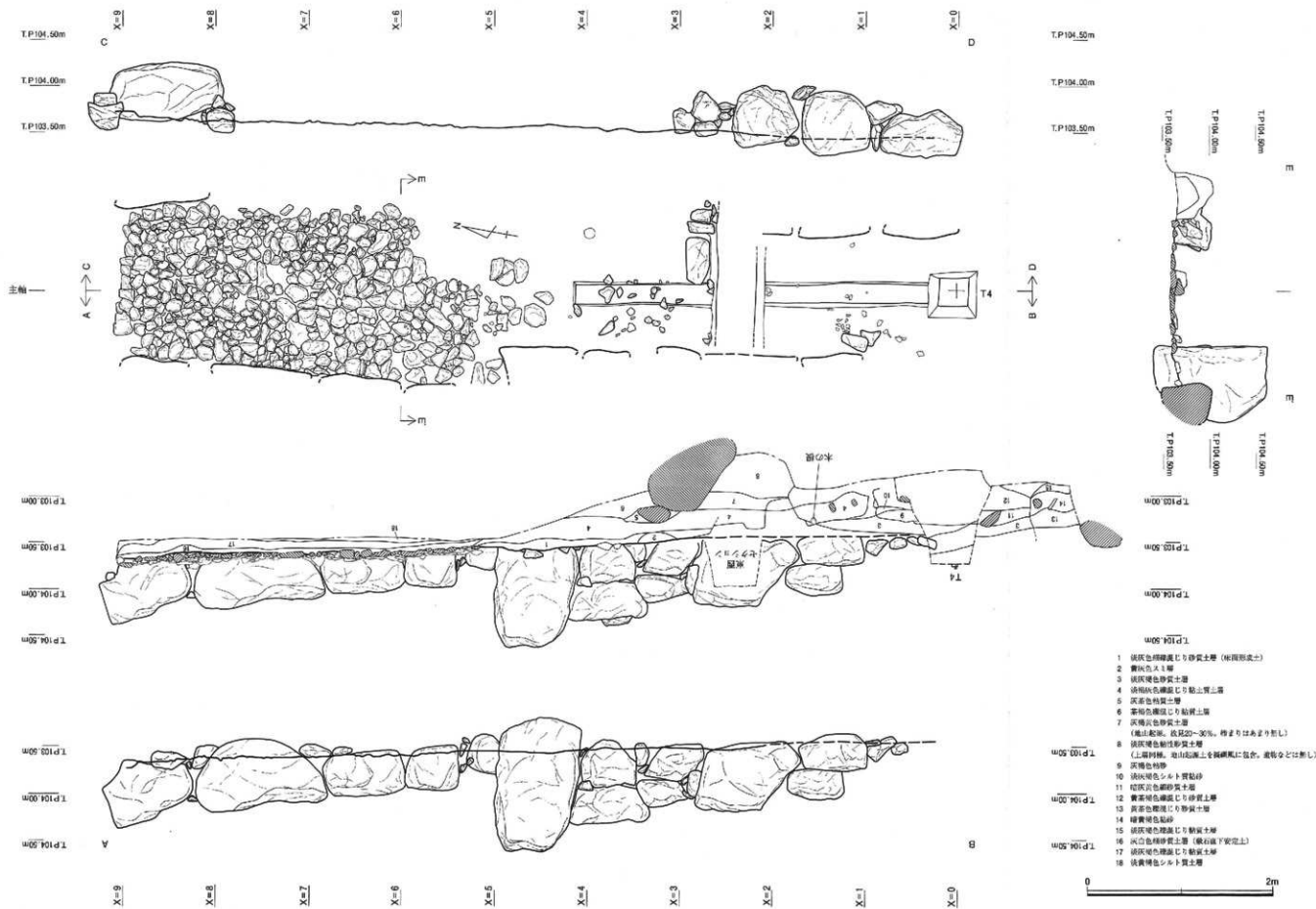
石室法量は、玄室部奥壁付近で幅1.6～1.7m、玄室長は（奥壁が無い場合、玄門石から側壁最奥まで）4.1m、羨道部幅（左側壁遺存部開口部付近）1.3m、羨道長5m以上を測る。その結果、石室長は少なくとも見積もっても9m以上を測る計算となる。

奥壁は、冒頭に述べたとおり原位置は保っていない。検出状況は、奥壁の基底が浮いて床面に載っていた状況である。奥壁と想定し得る石材は鏡石状の巨石で、幅約1.8m、高さ1.4m以上、最大厚1.4mを計測する。

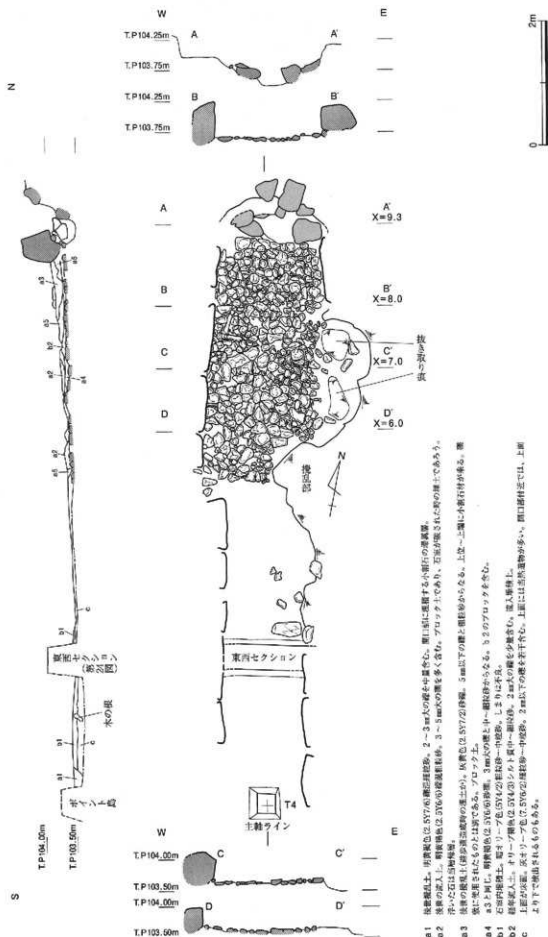
側壁に関しては、玄門石から羨道部にかけての右側壁が2段目まで遺存しており、玄室部は基底石のみ遺存していた。玄室部および羨道左側壁3石は基底石であり、この3石分の遺存長は2.4mを測る。

床面の構造は、玄室を中心とする敷石である（図版6）。八十塚古墳群では10基を超える類例が存在する。以下に床面形成の手順を整理しながら、所見を記す。まず、基盤層（地山）に含まれる巨礫を取り除き（図版8）、整地土を数層重ねる。この段階で、石室内の排水溝を構築する場合もあるが、本例では確認していない。次に、床面の構築を進める。竈床の範囲は玄室部に限られたもので、基底石際まで丁寧に嵌めこまれている。おそらく羨道部との間に敷き分けがあったものと考えられる。石材は六甲花崗岩（黒雲母花崗岩）で10～20cm大の礫を選択的に使用している。板状の割石も一部に含まれるが、大半が自然面を持つ亜円礫であり、いわゆる五郎太石・栗石クラスのものを半裁し、生じた断面（粗い平坦面）を下に、やや丸味を有する自然面を上面に据えることで共通する。これは全体に安定を図るためであろう。図版7にあるように、床面整地後にキメの細かい砂やシルト質土を置き、モルタル様に使用して、タイルを貼り並べるかのような作業工程が復元できる。竈床に使用された石材の個数は、平面カウントで約370個（左側壁側の擾乱、玄室部羨道寄りの削平部を含めず）、1m四方で算出すると、平均62～63個を使用している略計算となる。棺台など床石と別機能の単体石材は検出していない。玄門部付近では一部敷石の乱れがみられた。また、間諺石の落下も若干認められた。

初葬・追葬に伴う床面の認定に関しては、この竈床のみ床面と判断し、竈床の上下の垂直断面においても床面

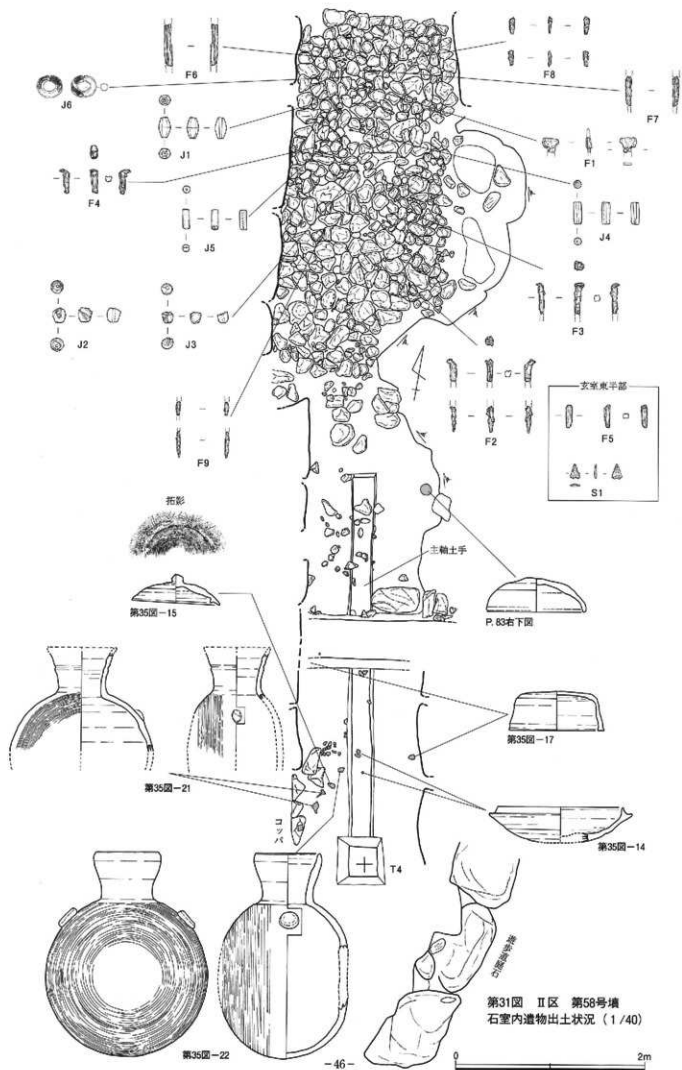


第29図 II区 第58号墳 石室展開図 主軸ライン 立面・土層断面図 (S=1/40)



第30図 II区 第58号墳 主軸ライン・石室内断面図 (S=1/60)

- a1 後部築成土。片栗色(色はSV7.6)硬砂状。2～3m大の礫を少量含む。開口部に埋まる小形石の埋蔵層。
 a2 後部の土。土。明後色(色はSV6.0)硬砂状。3～5m大の礫を多く含む。口部が埋まられた時の埋土であろう。
 a3 築成の土。土。明後色(色はSV7.2)硬砂。3m以下の礫と粗粒砂からなる。土は二層に小形石が埋まる。層状に築成されたものとは異なる。プロット上。
 a4 a3と同じ。明後色(色はSV6.0)硬砂。3m以下の礫と粗粒砂からなる。3mのプロットを含む。
 b1 石室内築成土。暗オリーブ色(SV4.2)粗粒砂(中程度)。しよりは木片。
 b2 石室内築成土。暗オリーブ色(SV4.2)粗粒砂(中程度)。しよりは木片。
 c 上記の築成土。暗オリーブ色(SV7.6)硬砂(中程度)。2m以下の礫を若干含む。土には近所遺物が多い。開口部付近では、土より下で埋められるものもある。

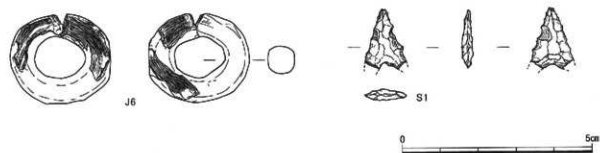
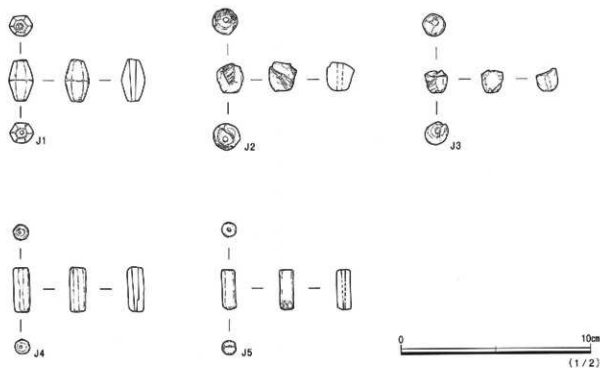


第31図 II区 第58号墳
石室内遺物出土状況 (1/40)

と認定し得る土層は無い。また、陥入遺物を除き、礫床裏込め土以下に遺物が含まれないことから、A. 初葬時床面が礫床で、追葬時も初葬時の礫床を踏襲した。B. 初葬時は土床で、追葬時に初葬時の床面を清掃・整理した後、礫床を構築した、の二案が推測される。一方、後述するように、陶器TK43～209併行期とTK217併行期の2時期にわたる須恵器を含むことから、数十年近くの間絶期を持ちながらも少なくとも2回以上の埋葬を想定することができ、後に検討を加えることとする。

用石法に関しては、基底石として側壁に縦50～70cm×横60～110cmの石材を主として横置きに用いている。石材は、すべて通有の六甲花崗岩である。基底石のみの観察にすぎないが、平面で見た内づらからの奥行きは80cm程度である。積み上げ時に平滑面や截断面を選択して内面側に持ってきており、一部は小タタキによって平坦に仕上げている。基底石の中でも奥壁と接する玄室最奥と2番目の石材は、長さ1.3～1.4mを測るやや大型のものを使用している。この傾向は、同じ敷地内で検出した第45・46号墳とも似た傾向にある(第58・64図)。目地の通し方は、2段目の遺存率が悪いが、基底石の上端レベルや右側壁の積み方から、横目地が意識されていることは明白である。側壁使用石材の形状に関しては、ある程度の選択は看取できるが、内づら長方形を呈する平坦面を持つ石材のみを使用しているとはまでは言えず、むしろ調整を加え、隙間には栗石・間詰石で覆ったと考えられる。炭道右側壁には、2段高分を1石で充填した箇所もあり、また玄室は明らかに奥壁側から基底石を設置したため、玄門石側では用材を小さくして調整を図り、全体として不揃いな観がする。

石室の全体形を推し量る契機をなした玄門石は、高さ1.3m(床面からは1.05m)、幅0.7～0.9m、奥行0.8m



第32図 II区 第58号墳 石室床面 玉類(S=1/2)、耳環・石鏃(S=1/1)

の略四角柱を呈する自然石である。このような石材を軸石として意識的に立位に使用する立柱石タイプの構築法は、この時期の畿内では基本的なものといえる。同敷地内では第46号墳も同様の軸石の使い方であり、後に比較する。接する側壁との高さを比較すると、ほぼ2.5～3段分に相当する。石室全体の立面観や持ち送りの度合いは、不明である。

なお、羨道もしくは開口部において閉塞行為を示す石材、およびそれに伴う遺構・遺物は出土していない。

D. 石室内遺物出土状況および出土遺物

石室内床面からは、耳環・管玉・切子玉・霰玉・鉄鏃などの副葬品と、木棺の構築部材である鉄釘、被葬者と考えられる骨片を検出した（第31図）。それぞれの遺物出土状況から、耳環が玄室左奥で1点、その1m手前までの範囲に切子玉1点・霰玉1点・管玉2点・骨片が検出されたことから、浮遊したものがあるにせよ、玄室左奥1/4に棺体があったことは確かなようで、棺材は鉄釘の検出から木製であったことが判る。

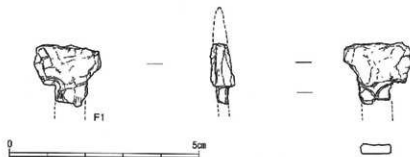
さらに、鉄釘は玄室右側1/2範囲でも検出しており、木棺腐朽過程から消極的ながら玄室奥に少なくとも2棺が並置されていたことが想定される。石室内遺物が少なく、原位置の検証が薄いことから、羨道部に至る棺体配置については全く言及できない。

以下に、類別した遺物ごとに観察結果を記述する。

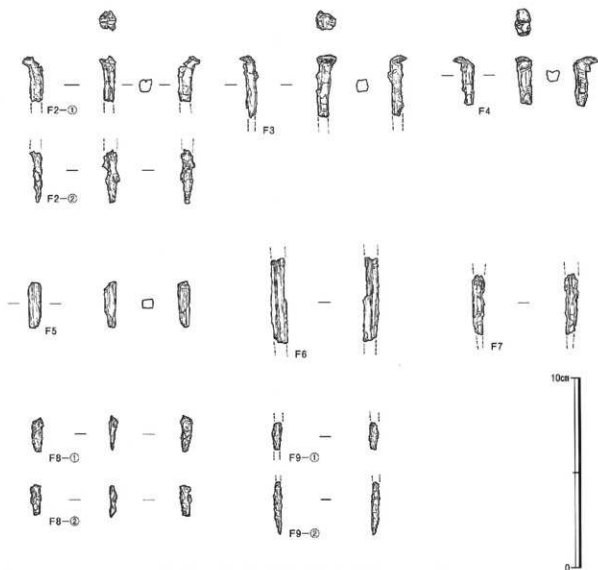
玉類・石製品・耳環（第32図） J 1は、水晶製の切子玉である。断面はやや扁平となる不整六角形であり、外面に稜線をなす截頭六角錐を二つ合せた形態となる。長さ2.2cm、中央最大径1.3cm、穿孔は通有例どおり片側穿孔で、孔径は穿孔開始側が0.4cm、出口部分が0.2cmである。穿孔径の大きい方が截頭小口面の面積が広いことから、他の穿孔玉類と同様にある程度カットした後、穿孔し、さらに仕上げ研磨を施したものと判断できる。重さは、3.7gを測る。穿孔部の観察では、紐づれ痕とも思われる小さな欠けが見られるが、使用痕とは断定できない。表面の微細な傷痕によってややくすんで見えるが、透明度の高い良質の水晶を原材とする。

J 2・3は、琥珀製の霰玉である。両者とも欠損しているが、扁球形を呈する。色調は、両者ともに暗赤黒色（7.5YR 3/4 暗褐色）を呈する。法量は、J 2が長さ1.5cm、最大径1.4cm、小口径1.0cm、穿孔径0.2cm、J 3が長さ1.15cm以上、最大径1.1cm、小口径0.7～0.8cm、穿孔径0.15～0.2cmである。穿孔部に関しては、J 2の片側に指鉤状の窪みが看取される。J 3は遺存状態が不良で、亀裂も見られ破断面も風化が著しく進んでいる。J 3はJ 2と比較して、やや小振りでスリムな形態であったようだ。

J 4・5は、碧玉製の管玉である。形態はJ 4がエンタシス状、J 5は小口径と最大径の変わらない正円柱であり、J 4の方が長さ・太さ共に一回り大きい。色調は両者ともに深緑色（7.5GY 3/1 暗緑灰色）を呈し、母材の性質によろが、J 4にはさらに濃い青緑もしくは黒色の細線状の縞目が観察できる。法量は、J 4が長さ2.3cm、最大径0.8cm、小口径0.7cm、穿孔径0.35cmと0.1cm、重さ2.7～2.8g。J 5は、長さ2.1cm、径0.65～0.7cm、穿孔径0.2cmと0.08cm、重さ1.9～2.0gである。穿孔は両者ともに片側穿孔であるが、J 4は他面側からも補足的な穿孔を行っており、穿孔部を中心に径0.4cmが指鉤状に浅く窪み、窪み内面までよく回転研磨が施されている。J 5は、穿孔時に出口部分が欠損した結果、仕上げ研磨時に破断面まで磨いている。さらに、欠損側の小口面がゆるい凸状になっていることから、本来もう少し長かったところ、欠損したため研磨しながら軸長を縮めてきたと推測される。僅かながら変形品として理解したい。



第33図 II区 第58号墳 石室床面 鉄鏃（S＝1/1）



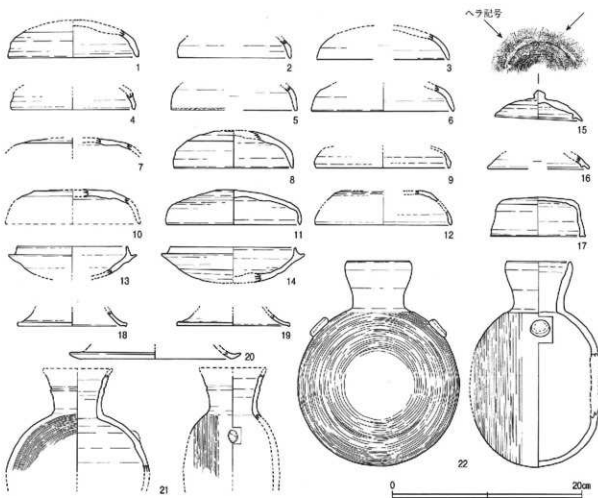
第34図 II区 第58号墳 石室内 鉄釘 (S=1/2)

J 6は、耳環である。地金は中実の銅芯であろう。内側に塗金が残存する。棒状の素材を楕円形に曲げたもので、内側塗金部分に、弱い縦しわが看取される。錆の進行していない遺存部の塗金の光沢は良好である。長径は2.6cm、短径2.3cmで、開き部分の間隔0.1~0.3cmである。断面形は隅丸の方形を呈し、最大径0.8cmを測る。重さは15.9gである。八十塚古墳群では数十点の耳環が出土しているが、その中では古い要素を保つ。

鉄鍔・鉄釘 (第33・34図) F 1は、鉄鍔の残欠と考えられる。僅かに残る鍔身と頭の部位で逆刺も欠損しているが、推測ながら棒葉式とみてよい。

F 2~F 9は鉄釘である。頭部が残っているものは3点を数え (F 2~F 4)、いずれも折り曲げた頭部である。表面の錆が著しく、棺材の木目や木質自体の遺存は認められない。F 6の側面に横方向のラインが看取できるが、木目・木質の付着かどうかの判断は困難である。上半部の断面形は、正方形のもの (F 2-①) と長方形のもの (F 3) がある。F 5~9は身部中心~下半部で、剥離や亀裂が著しい。F 8やF 9は先端部ではなく剥離して実寸を減じているものと判断される。それぞれ分離したものとみられる。

石鍔 (第32図) S 1は、サヌカイト製の石鍔である。選別精査中に確認された。凹基式打製石鍔で挾入部から先端までの長さは1.4cmを測る。先端はほぼ完存であるが、ルーペによる微細観察では0.05cm以下の小欠損が見られる。挾入部の脚部は両側とも欠損している。厚みは0.25~0.3cmである。側縁部の階段状剥離は両面加工により行っており、調整剥離の単位は細かく繊細である。刃縁はシャープさを持っており、刃潰れや再生痕跡は認められないことから、未使用状態の石鍔副葬を考える向きもあろう。報告では混入の余地も含め断言は避けて



第35図 II区 第58号墳 石室床面出土遺物 (S=1/4)

おきたい。色調は淡紫灰色 (5RP5/1)、重さ0.4gである。

骨片 図化できなかったが、骨片を確認した。35mmフィルムケースで足りる程度の量ではあるが、かううじてスポンジ質の観察できる微細片である。

土器 (第35図) 石室内からは須恵器と土師器が出土している (第34図、図版9右)。実測可能な遺物は須恵器に限られるが、土師器についても文章のみ記載する (図版24・25)。

第35図-1~16は杯であり、1~14が杯H、15・16は杯Gに分類した (西1986)。細片の遺物が多く、杯Hの身と杯Gの蓋の弁別は困難な資料が多いが、カエリの特徴などから峻別を図った。これらはいずれにせよ飛鳥I~II期、TK209新相~TK217型式の範囲であり、7世紀前半から半ばまでの時期に収まるものである。杯Hの1~12は杯蓋であり、10・11の外面調整を観察すると、回転ヘラケズリの調整の変化点がやや下位までおよび、径もあることから、他と比べると古く見てもよい。一部は床面近くで出土した。5は、口縁外面に斜め方向の工具痕が遺存している。口縁部の横ナデによる仕上げの後、さらに板状工具で端部整形を施した痕跡であり、文様を意識した調整ではないが、類品は散見される。9は、口縁部外面に暗緑色の自然釉が付着する。13・14は杯身である。2点ともにII-5段階、TK209型式に併行し、後者について回転ヘラケズリと回転ナデの調整変化点は体部中位に見ることができる。いずれも焼き締めは良好で胎土は精緻である。13は、外面に自然釉が付着しており、臥せ置き焼成であったと思われる。14は羨道開口部近くから出土した。15は完形に近い遺存率で、ゆがみが看取できるものの丁寧な仕上げである。宝珠つまみは、径1.3cm、高さ0.9cmで、定型化してはいない。外面にはヘラ記号が認められ、宝珠つまみから口縁端部にかけて1本、その中央からさらに1本が描かれる (拓影)。彫りはやや浅いように感じられるが、回転ナデの仕上げ調整が終わった後に施されているので、意識的なものと捉えた。天井部内面には、宝珠つまみを接合する際の指頭圧痕が顕著に残っている。16は、端部のみ1/20程度の

残存で、推定口径は不安定である。口径線に入るカエリや端部形態から、15とはほぼ同様のタイプと判断できる。

第35図-17は、壺もしくは瓶の壺である。全体の1/3が遺存していた。口径端部は広く面を保って仕上げられ、安定感がある。天井部外面調整は、口径部との器形変化点まで回転ヘラズリを時計回りに施す。出土位置は石室羨道内セクションベルトの最下層で、出土レベルは数石面直上レベルではなく、数cmの間層を挟んで上位で検出した。対応する土器は、墳丘部埋設土器群の方に移動している可能性がある。

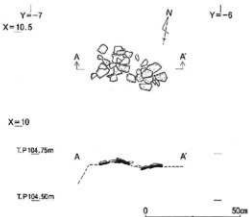
18・19・20は、須恵器高杯の脚部である。3点ともに残存率は低いが、裾端部の形態や立ち上がりから、長脚の高杯と判断される。20は復元径16.2cmを測り、やや大きくなる。

21・22は、提瓶である。いずれも20~30点の破片から接合が進んだもので、復元率は全体の50~80%程度になる。破片の出土位置の詳細は、21が石室羨道部床面・羨道部上位・前庭部から出土しており、量的には羨道内出土片が最も多い。22は石室羨道部・羨道部上位・前庭部・墳丘内・墳丘裾から分散的に出土しており、前庭部出土片が多い。複数地点の遺物片の移動動線を推測するに、①構築時墳丘内→石室内、②石室内→石室外（前庭部・墳丘内・裾）、③後世の石室内混入など多様な考え方が提示できる。今回は、この2点が当初石室内に置かれたものとし、追葬時の祭祀後、もしくは追葬時に石室外に移動したとする③の動線を仮定して、記載を進める。製作痕跡を観察すると、両者ともに片側に「円盤閉塞」が見られ、内面からみた閉塞口は径5~6cmである。カキメを施したのち閉塞しているため、胴部と円盤の接着部分のカキメが指頭圧痕によって消えている。一方、反対側の側面、すなわちロクロ接地面は当然ながら平坦面を形成する。左右肩部に貼り付けられる把手・耳は突出せず、21が短径1.0cm、長径1.5cm、22が短径2.1cm、長径2.4cmの扁平な楕円形浮文状の貼付けであり、痕跡磨光化している。

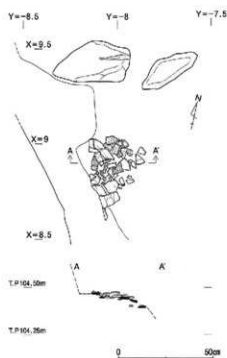
土師器は、細片のみで推定復元できる個体はなかった。石室内から出土したものは5mm四方以下の大きさの遺物もすべてカウントして91片を数える。1~1.5cm程度の破片が最も多く、破断面が磨滅していることから、土圧や後世の保存環境の良し悪しで細片化したと考えるより、人為的に粉々に破砕されたものとみてよい。破片は大きく二分でき、浅黄色の器壁の厚い破片と薄い器壁で赤褐色の精緻な胎土を持つ破片である。器壁の厚い浅黄色の土器片は壺の破片と思われる。胎土には、1mm以下の白色砂粒を少量含む。内面は板状工具によるナデが観察できる。外面は磨滅しており、不明瞭である。他方、赤褐色の精緻な胎土を持つ土器片は、細片化が著しいが、破片の中には内面調整に暗文が施されているものが散見される。磨滅が著しい他の破片も、暗文が施される破片と胎土が似ており、同一個体と推測される。暗文の特徴は、幅1mm以下の細線であり、おそらく内底面中心から口径部に向けて放射状に施されたものと判断する。外面に暗文が認められる破片は見当たらなかったが、磨滅による消失とも考えられ、時期については、西弘海福年〔西1986〕の飛鳥IVまで下げる必要はなく、既述した須恵器群G（15・16）とおそらく併行する時間のものであると思われる。

E. 周濠想定部の土器溜り（A~C）および出土遺物について

墳丘北西部裾で、土器溜りを3ヶ所検出した。それぞれA~Cと呼称する（第23・25図）。検出レベルは、T.P.



第36図(上) II区 土器溜りA (S=1/20)
出土状況平面図(上)・見通し図(下)



第36図(下) II区 土器溜りB (S=1/20)
出土状況平面図(上)・見通し図(下)

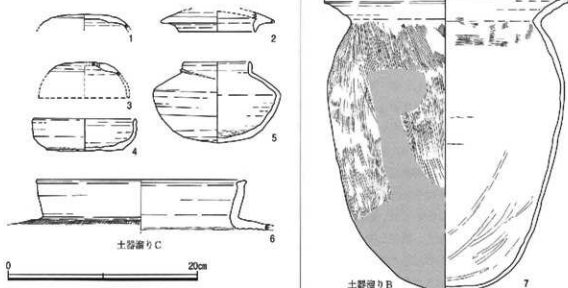
+104.5~104.75mで、土器溜りCのみ若干低いレベルで検出している。土器溜りA・Bの特徴として、いずれも土器器の甕の破片から成り、20~40cm程度の広がりを見せる。土器溜りAは須恵器1片以外はすべて土器器片、40cm四方の範囲に広がる土器溜りBはすべてが土器器片である（図版11）。口縁部片も散見され、1個体に復元できる可能性が高い（第37図-7）。破片は水平方向に検出されており、堆積層の層理に逆らって立位に突き刺さっている状況ではなかった。さらに、破片の重層性を観察しても一定の廃棄方向や流れ込みは不詳であり、むしろ、原位位置での破砕行為が推測される（第36図）。

土器溜りCは、填土削平部分と流水堆積の下層とが混層しており、平面的な検出状況は捉えていない。やや拡散した状況ではあるが、ここでは土器溜りとして扱った（第23図）。以下に、それぞれの土器溜りで出土した遺物の詳細を記述する（第37図、図版26・27）。

土器溜りAとして取り上げた土器器片は、復元の結果、甕となった。3~5cm四方の比較的大割れの破片もあり、接合できる個体も見られるが、実測可能なレベルまでは復元できなかった。破片観察では、内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土に1~2mm大の石英粒・長石粒を多く含む。外面調整は縦方向の密なハケメ（9本/cm）を、内面調整は板状工具によるナデが施される。破片の幾つかには外面にススの付着が見られ、土器溜りBの甕（第37図-7）と類似する。1点のみ混在していた須恵器片1点は、杯もしくは瓶の口縁端部であろう。実測はしていない。これらの資料のうち、土器器片は復元不能とはいえ、巻頭カラーⅣには収載した。

土器溜りB（第37図-7）は、残存率90%を超えるほぼ完形の甕に復元できた（巻頭カラーⅤ、図版26下）。器形は、丸底の底部から最大径を肩部に持つ長胴の体部、そして「く」の字に開く口縁部に至るいわゆる長胴甕である。口径が25.6cmに対して、器高31.1cmを測る。色調は、土器溜りAの甕より赤みが強く、橙色（5YR 6/6）を呈する。胴部の器壁は厚さ4~5mmで均質化され、熟練した工人の手によるものと思われる。外面調整は単位の細かいハケメ（9~10本/cm）で、胴部下位から頸部ヨコナデ直下までワンタッチで施される。外底面は、胴部と同一原体で不定方向に施す。内面調整は肩部から口縁部にかけて、同一原体のハケメが横方向に施される。内底面から胴部上位は板状工具によるナデ上げ裏が観察できる。また、外面には底部から肩部付近までススが付着している。スクリーンで図解した範囲がそれであり、体部中位以下に顕著に見られる。口縁部周縁のふきこぼれや、体部内面にはススや炭化物は観察されない。土器棺としての使途も考えうる。

土器溜りCで出土した1~6は、すべて須恵器である。1~3は、甕に復元した。1・3は杯蓋、2は長胴甕ないし瓶の蓋である。1は紫灰色に呈色し、天井部外面にオリーブ黒色の自然釉が付着する。2は、笠状に下りてくる口縁部から、やや肉厚のカエリを折り返す。色調は灰白色を呈し、白っぽい印象を受ける。4は杯身である。底部切り離しは、回転ヘラ切りである。内外面は丁寧な回転ナデを施す。5は短頸甕である。80%の残存率

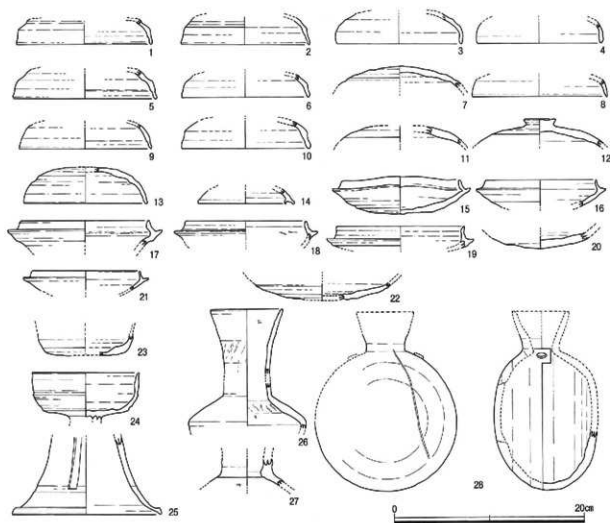


第37図 Ⅱ区 土器溜り（B・C）出土遺物（S=1/4）

で、形態は算盤玉状を呈する。外面のヘラケズリは体部中位まで施され、肩部から口縁端部にかけて丁寧な回転ナデによって仕上げられる。口縁部は短く直上に立ち上がり、立ち上がり高は1.1cmである。内底面には当て具痕が観察できる。個体の特徴として、頸部から肩部にかけて斜め方向に焼成時の蓋の融着痕が見られ、上から見た自然軸の付着範囲から、口径12~14cm程度の杯などを斜め掛けて窯に置かれた焼成状況が復元できる。釉はオリーブ色に発色する。6は、大型短頸壺の口頸部片である。口縁部は頸部より直立ぎみに立ち上がり、やや内傾する端部は面をもって仕上げる。肩部外面は、タタキの後カキメを施し、内面は当て具痕が明瞭に残る。胎土は1mm大の白色砂粒が少量観察できる。本来は有蓋器種であったと思われる。

F. 前庭部遺物出土状況および出土遺物

第58号墳の前庭部は、第25図の墳丘内で確認した2石の巨礫より外縁に相当する範囲を指し、且つ、確認調査10trより南側で、墳丘裾以南の開口部付近に相当する。墳丘内で出土した遺物片が比較的大きく、復元率が高いのに対して、前庭部は低い。なお、取り上げ時に、「前庭部」「前庭西部」、さらに第1面、第2面、下層、下々層、最下層に細かく分けて取り上げている。ただし、第1面から最下層の弁別は、明確な隔絶面や間層を挟む状況ではなく、取り上げ過程でのレベル差であり、第1面と最下層で型式編年上の時期的推移が見られなかったため、遺物実測図レイアウト（第38・39図）では各々一括した。「前庭部」「前庭西部」は、調査工程の中で当初「前庭部」として大きな範囲で取り上げていたものを、調査が進む段階で二者に表記分けした。両エリア間で接合関係が見られる遺物もあるが、ここでは、平面的に一応分けて図化した。また、前述したように、石室内出土遺物との接合関係も認められたことから、遺物の移動、移動に伴う祭祀などの行為、石室内片付けの措置などの表れであることは疑いない。器種の内訳は、圧倒的に杯類が多いが、長頸壺・広口壺や高杯・提瓶などもある。



第38図 II区 第58号墳 前庭部出土遺物（1/4）

前庭部出土遺物 出土遺物には、須恵器の杯身・杯蓋・高杯・長頸壺・提瓶や土師器の細片などが認められる(第38図、図版28・29)。第38図一 1～11・13・14は杯蓋で、15～21は杯身である。5は口縁部内面のやや上に段を有し、口縁部から天井部へ至る回転ナデは強く施される。その特徴から有蓋高杯の蓋の可能性も考えられる。同一個体ではないが、9も5と同様に端部内面のやや上に段を有する。12は有蓋高杯の蓋である。前庭西部出土破片との間に接合関係を持つ。宝珠つまみは、径3.2cmを測る。内面調整は口縁部が回転ナデを、天井部のみ一定方向のナデが観察できる。外面は重ね焼きによる焼きムラがあり、色調の明暗部が明瞭に分かれる。14は、西分類(西1986)の杯Gである。焼成が悪く、破断面で観察できる器内部分は褐色の土師質色である。15は蓋みが著しく、口縁部ラインは水平でなく、真上から見ると不整形である。受け部と立ち上がり部の境界には接合痕が観察できる。回転ヘラケズリ未調整部分とナデの境には凹状の小段が遺存しており、今回出土した遺物の中では稀な粗製品である。17は、やや白っぽい色調を呈する。口縁立ち上がり部は、内側に肥厚し、粘土紐付け足しの接合痕が遺存している。22は、底部に復元した。ただし、器種はよく判らない。外面は回転ヘラケズリと回転ナデが施され、内面は回転ナデと一定方向のナデが観察できる。

23～25は長脚無蓋高杯や高杯脚部である。23は杯部で、23が灰色、24が赤紫色を呈する。24は釉の付着状態から杯部が50°程度傾いた状態で焼成されていたことが分かる。23の外底面調整は、回転ヘラケズリ未調整で、透かし孔を切り抜き時のヘラ痕が残る。24は脚柱部の接合痕跡が僅かに残っており、径4cm弱の3方透かしを持つ脚部が付いていたことが判る。24は二段の稜を持って器形変化し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。25は、脚部で三方透かしが確認できる。裾部内面に自然釉が付着しており、焼成時は杯部を下に伏せて置かれていたことが分かる。内外面ともに丁寧な回転ナデによって仕上げられている。丈高の高杯の一部である。

26は、長頸壺である。頸部は最終調整に回転ナデをもって仕上げているが、内外面ともに製作時のシボリ痕跡が観察できる。細い頸部形態は、中心軸から左右対象にラッパ状の口縁部を持つ。体部と肩部の変化点で欠損するが、墳丘内の長頸壺と異なる点は、この変化点に1条ないし2条の凹線がみられない点があげられる。

28は提瓶である。体部片側の内面に見られる「円盤閉塞」孔の径は6.5cmで、検出時はこの円盤部分で剥離していた。製作時の底部から体部下位までは回転ヘラケズリ未調整、体部中位から閉塞後の天井部は回転ナデを施す。また、胴部製作時の天井部に施される回転ナデ部分には、実長13cmの彫りの浅い一本書きのヘラ記号が観察できる。肩部には、体部と同じ胎土の把手のボタ状の痕跡器官が貼り付けられている。

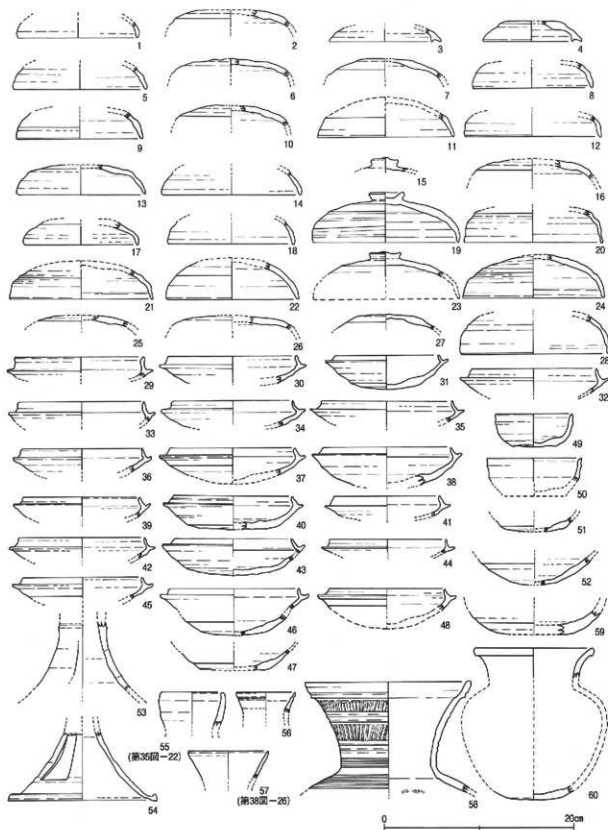
前庭西部出土遺物 第39図一 1～50が須恵器の杯身・杯蓋と高杯蓋である(第39図、図版30・31・32・33のごく一部)。杯の実測点数は、前庭部と合せて70点余りであるが、破片点数から推測すると100点近く見積れ、異常に多い。1～28は杯・高杯の蓋で、3・4は杯Gに、15・19・20・23は有蓋高杯の蓋として復元した。21や24も推定口径や口縁部から天井部へ移行する変化点の稜の作り出し方、口縁部内面の段差などから、有蓋高杯の蓋とも考えられる。29～50は杯身で、陶器編年では田辺編年のTK43型式を含み込み、TK209型式～TK217型式の古相、中村編年Ⅱ-4・5・6段階に併行する。なお、13と15が未実測の遺物片を決んで接合関係にあることが校正段階で判明したので、追記しておく。高杯の蓋とみられる。

49・50は、器形から高杯の杯部か、もしくは杯G身と思われる。49は、外底面がヘラケズリ未調整である。

53・54は、高杯の脚部で1/3～1/2が残存している。透かし孔部分で欠損している。「ハ」の字を呈する安定した形態を呈し、裾部は上に肥厚し面を持って仕上げる。外面には、透かし孔の下端のレベルに幅5mmの浅い凹線を1条巡らせている。55～57は、壺ないし瓶類の口縁部片である。遺物実測図レイアウト作成後に、再度、接合作業を行った結果、55は「石室内出土遺物」第35図-22の提瓶の口縁部と接合し、57は「前庭部出土遺物」第38図-26の長頸壺の口縁部に接合することが判明した。58は広口壺の口縁部である。頸部屈曲点から口縁端部まで9cm前後を測り、その間に板状工具を器面に押しつけ斜線を描いている。その後、2条1セットの凹線を2セット分巡らせる。僅かに残る肩部では、外面にカキメが観察でき、内面に当て具痕が観察できた。59・60は壺の底部と口縁部片である。60は墳丘内で出土した遺物片と接合した。焼成が悪く、軟質な焼き上がりである。磨減が著しいが、外面に一部カキメが観察できた。口縁端部は外巻きの玉縁状口縁である。

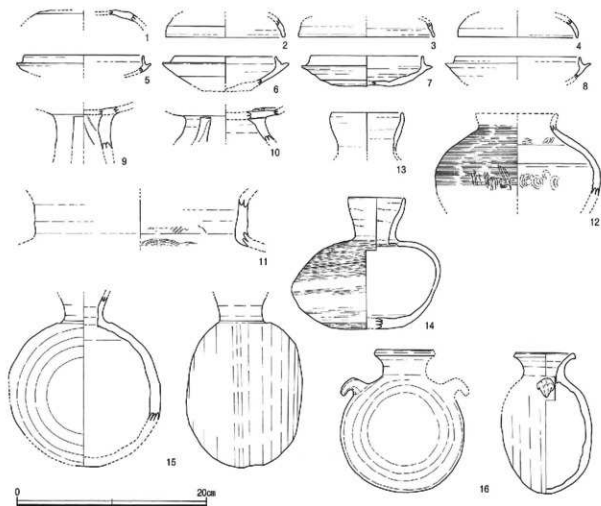
G. 墳丘裾部、義道西方のコッパ層下部、遊歩道より東の近現代盛土層出土土器など

第40図一 1～16は全て須恵器である。まず、それぞれの出土位置・帰属層位・接合関係を明確にしておきたい。



第39図 II区 第58号墳 前庭西部出土遺物 (S=1/4)

1～4が狭道西方のコッパ・割石群の下層部より出土した。この遺構は近代まで下る可能性も強く、前庭部の遺物と関連し、再移動している可能性が考えられる。5・8・10・11は、遊歩道より東方の近現代盛土層から出土した(第51図)。この中には、コンクリート塊に巻き込まれるように埋まっている遺物片もあった。6は、墳丘西方基盤層直上で検出した。7・13・14は墳丘裾部で、9は墳丘南西部のサブトレンチの破砕須恵器群から出土



第40図 II区 その他出土遺物 (S=1/4)

した。2点の提鞬のうち15は、漢道西方コッパ層下部・墳丘内・前庭部で出土した遺物がそれぞれ接合した。16は漢道西方コッパ層下部・墳丘南西裾部・石室内・前庭部・前庭西部・墳丘内から出土した遺物片がそれぞれ接合した。以下に、各遺物の概要を記載する（図版33～35）。

1～4は蓋で、いずれも細片である。1は、端部が遺存しておらず、形態などから一応、天井部とにらんで復元した。破断面を観察すると赤紫色を呈し、焼成がゆきとどいてない観がある。遺存部外面は回転ヘラケズリである。3は口縁端部片である。残存率が低く、推定径は算出できなかったが、一応図化した。端部に特徴があり、強いヨコナデを施し、内面にこころもち段を有する。2・4は7世紀に下るであろう。

5～8は杯身で、7以外は残存率1/5以下の小片である。帰属層位は前述したとおり各々異なるが、編年的位置付けでは、TK209～TK217型式の古い段階に併行する。

9は高杯の脚部である。長脚2段の三方透かしが施されており、脚部内面にはシボリ目が僅かに観察できる。

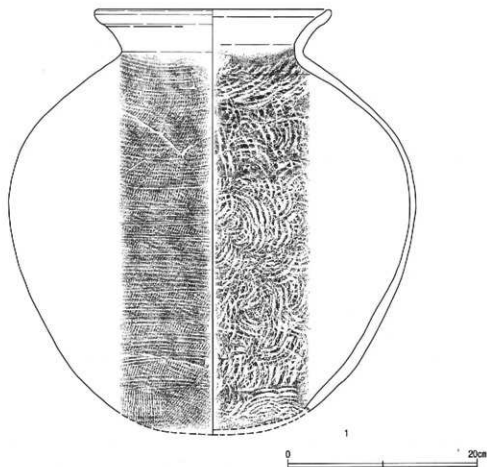
10は脚台部である。脚台の上部にどのような器形が乗るのかは不明である。僅かに遺存する内底面の平坦さから推測すると、底面の広い皿や盤・ボウルのような器形が想定され、さらに台付壺の一部とも推測される。脚台部は三方透かしが開けられ、上部との接着基部径は8.5cmを測る。内底面には、脚台部と同じ胎土の棒状粘土紐が貼り付いている。この粘土紐が意図的な目的の作業か否かは判断できない。ただし、粘土紐の上面に意識的に押圧された指頭圧痕や、重ね焼きによる溶着痕などは見られない（図版34上段）。

11は壺の頸部である。もう少し外反するかもしれない。頸部径は22.5cmを測り、頸部屈曲点下端に同心円当てて其痕が観察できた。焼成は良好で、胎土は1mm以下の黒色粒が僅かに見られるが精緻である。頸部外面には、オリーブ黒色の自然釉が付着する。

12は短頸壺である。体部中位に最大径(17.4cm)を持ち、撫で肩の器形である。外面調整は格子目タタキが散発的に観察でき、その後、強めのカキメを密に施す。内面は、同心円当て具痕の後、仕上げナデによって消そうとする意図が見受けられる。底部にかけては器厚を増していくようだ。

13は平瓶の口縁部である。推定口径は7.4cm、頸部径6cmを測る。頸部内面と、口縁部外面に一部接合痕が観察できる。14は、平瓶である。製作時に天井部(背部)を「円盤閉塞」技法で密封し、体部中位から天井部にかけてカキメ調整を行う。内側から見た「円盤閉塞」孔は7cmを測り、口縁部は斜め上方に向かって取り付けられている。口縁部の取り付けは、円盤部の範囲内で切り抜いている。したがって、全体的に口頸部の偏在度は少ない。器形は、口縁部がやや偏って取り付け方が怒り肩に、背部が撫で肩になっている。口縁部は、外上方にやや内弯ぎみに開き端部を丸くおさめる。口縁部内面には、幾筋かの接合痕が観察できる。

15・16は、提瓶である。両者を見比べると、16がひとまわり小さく、肩部に垂下する鉤状の把手が遺存している。先述した両者の接合破片の出土分布を比較すると、15がコッパ群下層から出土する後世の二次移動を除いて、墳丘内と前庭部に集約される。一方、16は左記の2エリアに加え、石室内と墳丘南西裾部でも検出されており、広がりをみせる。ただし、墳丘南西裾部と前庭部の出土片が90%以上を占め(36片/40片余)、先に検討した石室床面の第35図-21・22の提瓶(第35図)の想定移動動線の②石室内→石室外(前庭部・墳丘裾)とは弁別した。つまり、当初より石室外に存在したことも想定範囲内では考えられる。以下に、両個体の観察記録を記載する。15は、胴部高(径)15.5~16cm、体厚12cmで、「円盤閉塞」で仕上げる。外面のカキメは全く観察できず、回転ナデによって器面を整えている。小型の16は、胴部高(径)12.0~12.5cm、体厚9.5cmである。「円盤閉塞」部で剥離欠損している。口縁部は外反しながら短く立ち上がり、端部は面を持っておさめる。今回出土している他の提瓶と異なる点は、口縁部が外反しながら短く直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる形態ではないこと、さ



第41図 II区 第58号墳 西裾部ほか出土遺物(S=1/4)

らに、肩部に付けられる耳が退化した円形粒状の添加ではなく、鉤状に造作されていることが挙げられる。すなわち、16は小型品ながら他のいずれの提振よりも把手に関しては古い要素を保持していると考えられる。

第41図-1は、須恵器の大甕である(図版36下、巻頭カラーV右下)。破片の出土位置は、墳丘西裾部を主として、前庭部・墳丘内(確認調査10tr.出土遺物も含む)・石室があり、さらに後述するⅣ区の近・現代盛土層で検出した須恵器片とも接合した。復元率は70%に昇り、底部の全てと肩部2/3が欠損する。接合破片点数は150片を数え、接合はできないが同一個体片と思われるものを含めると、さらに数十片が加算される。Ⅳ区の盛土内出土遺物と接合したことは、墳丘裾部の西から南にかけて確認した庭造作による攪乱が近・現代に為された傍証であり、墳丘上部構築層や裾部の削平も該期に行われた可能性が高いと言える。

器高は残存で42.6cm(推定45cm)、口径24.6cm、体部最大径43.2cmを測る。頸部から「く」の字に屈曲する口縁部は、上外方に立ち上がり、端部は外巻きに折り返して縁帯を作る。内面調整は、体部下位に円芯が不明瞭な同心円当てで具痕が、体部中位～肩部にははっきりと同心円当てで具痕が観察できた。当て具痕跡の先後関係から、口クロの回転方向は時計回りであったことが分かる。一方、外面調整は、体部下位から肩部まで同一原体を用いた格子目タタキを施し、棒状や板目状と言っても過言ではない程の比較幅広のカキメが巡る。器面の観察を人念に行ったが、意識的な打撃痕と断定できる箇所はなかった。ただし、一個体内で大割れの破片と細片の箇所が明確に分かれることは、力学的視点で観察すれば、打点の位置や方向が推定できるのかもしれない。ここでは、一応土器破砕として捉えておく。

図化していないが、墳丘西裾と後述西方のコッパ群下層からは須恵器の大甕がもう1点出土している(図版36上)。破片の接合点数は24片から成り、その内19片が墳丘の西裾側から出土している。底部のみ残存しており、器形全体の1/10程度であるが、残存部から推測延長すると、体部最大径は70cmを超える大型品となる。器壁厚は0.8～1cmを測り、内面に同心円当てで具痕が、外面に平行タタキが施される。底部のためカキメは観察できない。今回出土した土器群の中では、最も大型品である点を強調しておきたい。

これらの須恵器甕と出土位置や法量・調整技法においてほぼ同様の出土例が、同じ岩ヶ平支群内でいくつも検出されている。例えば、岩ヶ平第10号墳E1トレンチでは、墓前祭祀ではないが、墳丘東裾部で須恵器の大型甕が出土している〔古川編1990、森岡・坂田編2005a、白谷編2006 平成17年度再発掘調査〕。器高42.9cm、最大腹径42.1cm、口径21.5cmで、内面に同心円当て具痕、外面に平行タタキの後、カキメを施しており、破砕時の打点までも観察できるこの遺物と遺構に関するその意図を「古墳と外界(墳丘外)とを明確にする結界儀礼がとり行われたとみることが最も妥当な見方」と推測している〔森岡1990〕。まさに、第41図-1や図版36(上)も破片の大半が墳丘裾部で出土し、〔森岡1990〕で示した第10号墳の「結界儀礼」に通ずる出土位置を踏襲している。墳丘盛土への土量獲得とは別の意味で、周濠・堀割の思想的存在基盤と合わせて、墳丘裾部で検出されるこうした大型土器群には、今後さらに注目する必要がある。

② 小 結

Ⅱ区は今回の調査で最も実りある発掘成果が加わった調査区である。岩ヶ平第58号墳が消滅するため、面的に掘り広げたためであるが、かなり散漫となった報告をい一度整理しておきたい。

第58号墳は径14m以上、残存高1.2mの円壇ないし楕円形の墳丘をもち、右片袖式ないし両袖式とみられる横穴式石室を内蔵していた。その規模は、残存長9m、玄室長4.1m、玄室幅1.7m、玄室残存高0.6m、羨道残存長4.9m、羨道幅1.2m、羨道残存高1.05mを計測し、不完全な遺存状況であった。墙体の残存率が低いため、立面構造全体を推し測ることは容易でないが、玄室右側壁で基底石列、玄室左側壁の一部と羨道左側壁の半分とで基底石列、羨道右側壁の多くで積石2段が確認され、右側壁側で玄門石の存在を認めた。玄門石は立柱の石材であるが、見上げ石がこの上に架槽されるにはあまりにも低く、いま1石塊状の石材を載せて羨道天井高に至るものと考えられる。つまり、大小2石から成る玄門形成と判断し得る。

盗掘や乱掘により石室内の出土遺物はきわめて乏しく、敷石床面に敷設された玄室を中心に検出された。須恵器や土師器の破片が数十点、耳環1点、管玉2点、切子玉1点、聚玉2点などの装身具が6点、鉄釘7点以上、鉄線1点の鉄製品2点がその主要なものであり、築造時期を示す土器類の出土状態はみられなかった。これに対し、石室外では多くの土器が出土し、横穴式石室の墳丘並びにその周辺に対する目配りが往時の古墳時代社

会の葬制の営為を知る上に不可欠なものであることを再確認した。

それらは、墳頭の周溝状遺構と呼んだ堀切部で検出された土器群A～C、墳丘西裾域で確認された須恵器集中部、墳丘内に埋設された須恵器群、開口部前庭で広がりをおさえた敷布された須恵器群などに分つことができ、それぞれの報告で意図の違いを考慮しつつ出土状態などを客観的に記載した。

結果として、これらの石室外出土遺物については、出土属性以外に土器の保有する年代情報が大きく影響することは間違いなく、その多くが築造時の所産のみとは断言し難い。石室内の棺体・副葬品類片付け行為など、築造後の人間活動が多分に加わったことも予測し得、第VI章において須恵器などの型式学的検討を梃子としてその性格論を再論したい。

なお、第58号墳は岩ヶ平支群F小支群の最北端を占める立地条件も加担して、八十塚古墳群の内部にあってやや特殊な位置付けが可能と思われる。これ以上のことは事実報告とします垂懸する恐れもあり、はかばかしい記述から遠のくことにもなりかねないので、章を改めて論じようと思う。

(森岡・坂田)

(3) Ⅲ区の調査概況

① 基本層序と刻印石の検出状況

当調査区は、調査地中央西寄りの緩傾斜面に設定した(第9・42図、図版12・13)。標高は、T.P.+101~102mを割り、既存住宅建設時の造成段差の下段部に相当する。当敷地の20m西には、主要な石曳き道としての機能が想定されている「どんとん川」が流下する谷地形が存在しており、採石活動における一連の石材搬出工程を考える上に重要な地点である。このような立地環境を前提として、該区の基本層序と刻印石(1・2号石材)の検出状況を記述していく(第43・44図)。

発掘を進めた結果、基本堆積は大別で6層に分層できた。セクションベルト設定時に既に取り除いていた旧庭地の造成土を0層とし、5層が地形とも関わる基盤層である。5層は黄褐色(10YR 5/6)礫質泥層で、1m大の巨礫を中心に30~50cm大、2m大の礫が散見された。粘性を帯びる締まりの良好な堆積土であることから、当層はⅠ区で確認した基盤層(7層)と対応するものと判断される。1号石材の機能していた近世初頭の遺構面の認定については、伴出の出土遺物からは明確にすることができなかった。セクションベルトで観察した層相を丁寧にみていくと、上位に土壌化がみられ、一定期間の開放状態が看取できる3層上面が該期(江戸時代初期)の機能面とみて過誤はない。

刻印石である1号石材は、調査前より露呈していた。第43図にあるように、当石材は基盤層(5層)に居残っており、少なくとも元和~寛永期の原位置を保っていることが判った。平成元年(1989)の調査で既に確認されており〔古川編1999、森岡・古川2002〕、長い間庭地に現状保存されていたものである。なお、今回の調査で上面1ヵ所にネットフュンスを張るための支柱孔と思われるドリルの穴を確認した。

2号石材は、Ⅲ・Ⅴ区の間道辺りに存在した旧邸宅庭地の囲い石として転用されていたものであり、撤去する工程で新しく見出された。原位置は保っていないものの、併刻刻印を有する準調整石であることは間違いない、報告は当節で扱うこととする。

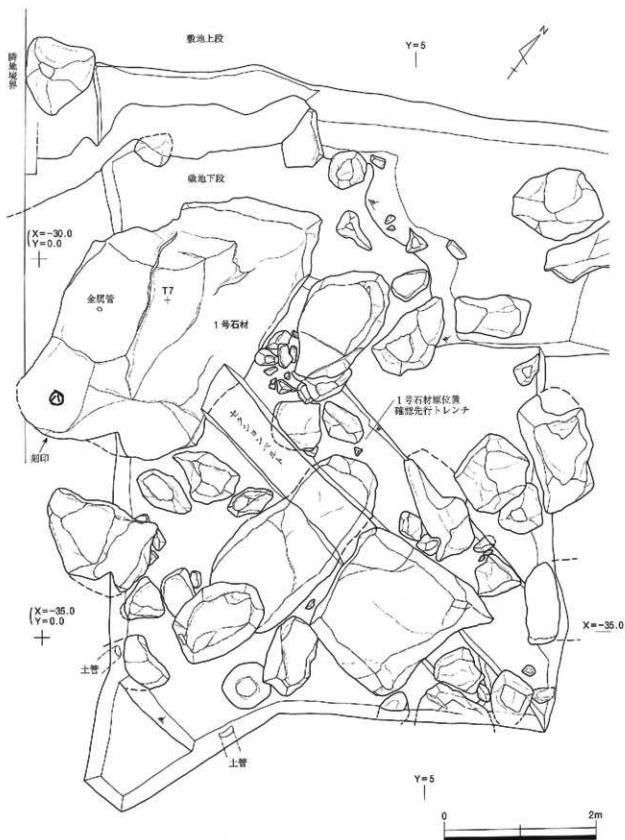
② 1号石材の観察記録と所見

当石材は、敷地内で実見できる石材の中では最も大きく、長軸4.8m、短軸2.5m、高さ1m以上の平面菱形を呈する扁平な巨礫である。石材種は六甲花崗岩で、詳細に観察すると、カリ長石が顕著でピンク色を呈する。加えて一定量の黒色粒を含み、粒度は7~10mm大のものまで取り込む。石材表面の節理は無尽に走っており、石垣用材としての使用は躊躇する荒れた岩肌を呈している。刻印面を含む全面が自然面であり、地質年代における転石とみてよい。刻印は露呈面にあるため風化しており、点彫りや線彫りの仔細な区別はつかなかった(図版12)。

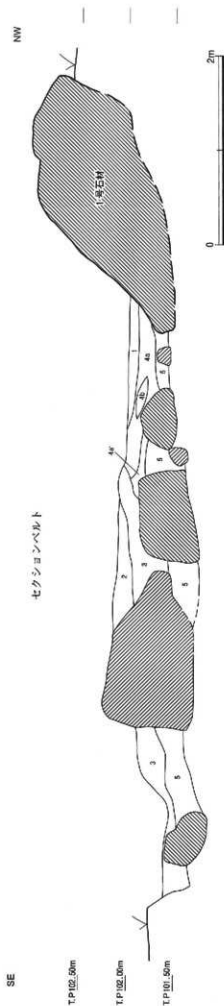
刻印は○の中に八で、その類例を岩ヶ平刻印群内に求めてみると、同種と同一し得る刻印は無いが、若狭小浜藩京極家の採石領域で多く見られる「㊦」と併刻された「八」が確認されている。刻印には、傍示刻印のほか、担当大名家紋刻印・記号刻印・数量刻印など役割・機能の違うものが多数存在するが〔村川1970、藤井1982、森岡・古川2002、森岡・坂田編2005、竹村・白谷編2006、森岡・竹村編2006など〕、「八」が具体的に何を示すかは不明である。ただし、2個以上の刻印を併刻する例が多い岩ヶ平刻印群内で、「㊦」単独で彫られた傍示石であることは、当刻印が単体でも意味を成すことの証明であり、特筆すべき存在形態とみられよう。

また、付随する採石土坑の有無に関しては、無いものと判断した。その根拠は、4層の層位的な視点と石材自体の性格という2つの視点からアプローチすることが可能である。第一は、4層灰オリーブ色(5Y 6/2)中~細粒砂が粒度淘汰の良好な流水堆積であること、さらに確認調査によって当区東端より3m東で中規模の埋没流路が確認されており、そのオーバーフローした土砂が堆積したと考えられる。さらに第43図で判るように、本来、採石土坑の特徴として、狙った石材の下端ないし下底への折りかえしまで掘り込まなければ石材の厚みが把握できないが、1号石材の周囲にはその掘削地形が全く見られなかった。セクション断面図上では、石材周りに5層上面の若干の窪みが観察できるが、4層の浸食によるものであり、仮に人為的な掘削であっても、石材自体の全形をつかんでおらず、採石土坑の意味を為してはいない。

第二は、刻印以外に該期の人為的加工痕が全くなく、当石材を石切のための母岩としておらず、採石境界などを分かつ傍示機能など、別の用途が想定される。いわゆる傍示石は類例が多く、岩ヶ平刻印群では鳥取藩池田家の「伊木三郎」の人名刻印石などは刻印のみの存在であり、欠穴痕が認められないものを通有とする。要す

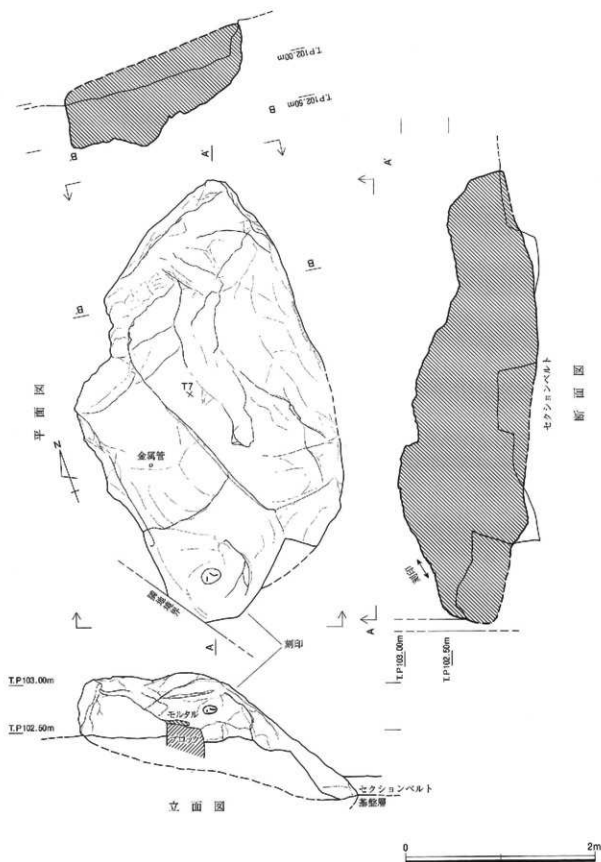


第42図 Ⅲ区 平面図 (S=1/50)



- 0 層 旧底海の造成土。石列。腐植土。当セクションは、表土除去後からセクションベルトを設定したため断面図には反映されていない。両端の上端を繋げると現況地表面となる。
- 1 層 粘土。埋設管の埋土。
- 2 層 粘土。埋設管の埋土。粘土層が厚い。やや粘性を持ち、3mm以下の礫を中量含む。上層からの植物根、枯分枝等が露出する。
- 3 層 土壌層。オリブ褐色(2.5Y6/3)腐泥じりシルト泥じり中粒砂。2mm以下の礫を若干含む、土層自体の硬まりは不良である。腐泥な炭化物チップを極少量含む、巨礫を上層を流すように堆積する流入土。当層上面には土壌化が著目され、旧表土層と判断される。
- 4a 層 巨礫層の溜り、もしくは当トレンチから東へ3～5mに流下する小谷のオーバーフロー土である。灰オリーブ色(5Y6/2)中～細粒砂。粒度の均一性は良く、流水堆積である。鉄斑文が著しい。
- 4a 層 4a層と類似する。同様に流水による堆積物。
- 4b 層 流水堆積層。灰色(7.5Y5/1)砂礫。5～7mm以下の礫と粗粒砂から成る。
- 5 層 基盤層。黄褐色(10YR5/6)硬質泥。1m以下の巨礫を中心に、0.3～0.5m・2m以下の巨礫が散見される。粘性を帯び、硬まりは良好である。1号石村の埋設管。

第43図 Ⅲ区 セクションベルト土層断面図 (S = 1/40)



第44図 III区 1号石材平面・立面・断面図 (S=1/40)

るに、上記の中規模流路は石曳き幹線道であるどんどん川へ取り付く石曳き道の支脈の道であることが想定され、刻印面はその中規模流路に向かって（南面）に彫られていることから、当石材は該期の微地形時に原位置を保った傍示石と言えよう。

③ 2号石材の観察記録と所見

当石材は既述したとおり、池の囲い石に転用されていたため、原位置は保っていない（図版12下）。今回の発掘により検出を試みたものである。したがって、第45図は調査に支障のない場所に移設した後の実測図のため、レベルや石材の傾きなどは全く任意のものである。石材種はピンク色に発色する六甲花崗岩で、雲母や角閃石が目立たないが、石英やカリ長石の比較的大きな粒子（6mm大）を取り込んでいる。石材法量は、長軸1.55m、短軸0.8m、厚さ0.5～0.6mを測る。矢穴列は1列で、これによる剖面以外はすべて自然面である。剖面は長方形であるが、石材自体は母岩にはならず端材である。矢穴痕はAタイプで7個を有し、ヤバトリは行われていない。矢穴断面形は逆台形ではなく長方形に近く、矢底調整は丁寧に仕上げられ底面を作る。矢穴個々の法量は第46図に示した測定箇所に基づき、第1表に載せた通りである。

刻印は、「」「」の併刻で、現在東六甲の丁場ではこのセットを保つ検出例は無い。「」の刻印は、岩園天神社の西に広がる邸宅内（Y70地点）をはじめ、六麓荘町2番地で松江藩尾家の「」と併刻される例（第17地点）、岩園町45番地で「」と併刻される例、字館谷の地域などでも確認されており〔森岡・竹村編2006〕、同種刻印の分布域と刻印の目的を知る上で重要である。

一方、刻印「」は、現存大阪城の石垣に類例をみることができ、松平阿波守忠英の担当箇所であったことが判っている〔村川1970・2002〕。ただし、刻印には手順刻印・記号刻印・数値刻印・石工組の定印などがあり、必ずしも担当大名や家老名、侍大將など家や人の存在を表象しているとは限らず、今後、「」や「」などの類似刻印も含めた総合的な考察が必要であらう。

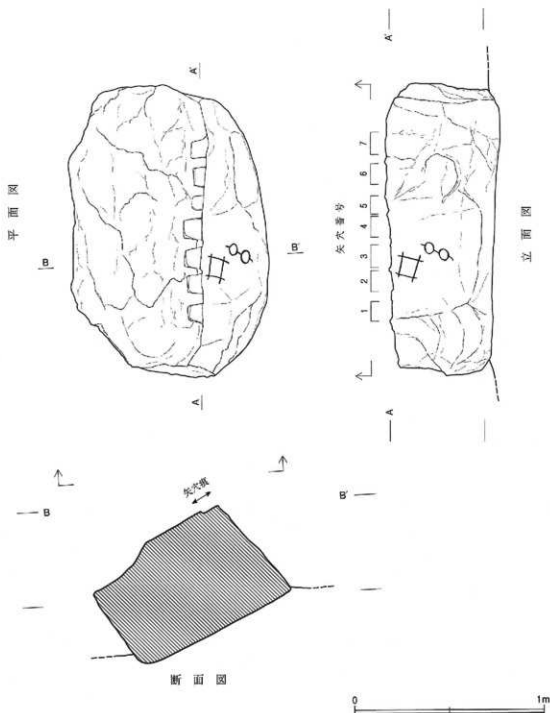
④ 出土遺物

当区からは、腐植土直下の黄色砂質土層より平瓶ないし壺の頸部細片が出土した。また、段丘礫層もしくはその再堆積層と判断した赤褐色粘質土層よりサヌカイト剥片が出土している。法量は5.2cm、3.6cm、厚さ0.9cm、重さ22.2gを測り、肌面の風化は著しい。加工痕跡・使用痕跡は無く、素材剥片である。岩ヶ平刻印群・八十塚古墳群の分布範囲では、このようなサヌカイト剥片や縄文土器・弥生土器の散布が知られており、その成果は市井の考古学者である吉岡昭が昭和17年に作成した『岩ヶ平遺跡地図』（吉岡1944、武蔵・森岡1976、森岡・坂田2005b・2006など）に記されており、周辺では縄文時代から弥生時代にかけての包含層が遺存していることを暗示する。

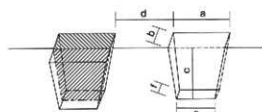
⑤ 小 結

本調査区は遺物が希薄であり、古墳も認められなかった。予想した石切場についても積極的な採石活動は認められず、傍示機能を有する刻印石1石と刻印石の遊離石材1石とを追認並びに確認した。追加例となった刻印石（2号石材）を含め、近傍に小単位の石切場が遺存すると見て大過ない。刻印や丁場の諸問題については、第Ⅵ章において若干の考察を付すこととした。

（森岡・坂田）



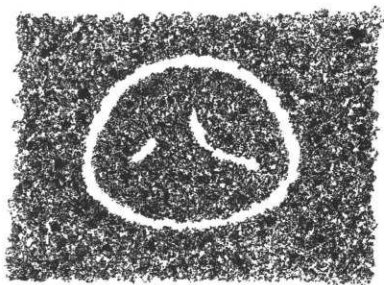
第45図 III区 2号石材平面・立面・断面図 (S=1/20)



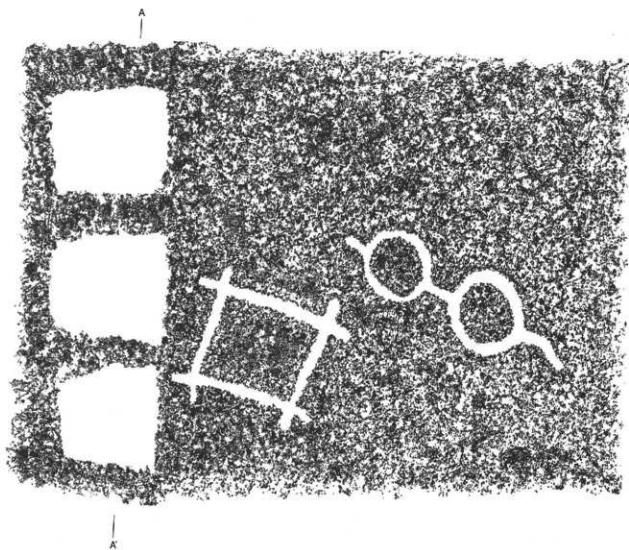
第46図 矢穴各部法量測定基準図

矢穴番号	矢穴口 長さ a (cm)	矢穴口 短辺 b (cm)	矢穴深さ c (cm)	ピッチ d (cm)	矢底長さ e (cm)	矢底短辺 f (cm)
1	10	$1.4 + \alpha$	9.6	5.5	7.5	2
2	9.9	$2.3 + \alpha$	8.6	2.5	7.5	2.3
3	11	$2.5 + \alpha$	10	4	8.6	3
4	10.5	$2 + \alpha$	$11.5 + \alpha$	4.5	9.5	$1.7 + \alpha$
5	$8.7 + \alpha$	$1.6 + \alpha$	$8.5 + \alpha$	$4 + \alpha$	$6 + \alpha$	$0.5 + \alpha$
6	10	$0.7 + \alpha$	$5.5 + \alpha$	$5 + \alpha$	8.6	$1.1 + \alpha$
7	$9 + \alpha$	$0.4 + \alpha$	$8 + \alpha$		8	$0.8 + \alpha$

第1表 2号石材矢穴計測表



第47図 1号石材刻印拓影
(S=1/4)



第48図 2号石材刻印・矢穴列痕拓影 (S=1/4)
A-Aライン左側が矢穴による剖面、右側が刻印遺存面。

(4) IV区の調査概況

① 基本層序と所見

当区は、調査地東隣地境界にそって南北に設定した（第9図、図版13）。当初は、確認調査8トレンチと12トレンチを繋げる形で平面調査をおこない、第58号墳の表遺部の調査が終了した時点で、第58号墳東裾部の遺存状況を確認するため北に約15m延長した。現地表面の標高は、T.P.+101.5~104.8mの落差を測り、勾配が比較的緩やかな傾斜地である。削平を受けていない基盤層上面の傾斜度もほぼこれにならう。

層序は、現地表面1層以下、上から現代の盛土、近・現代の盛土（2a）、3a・3b・4aとして基盤層となる。北端（T.P.+103.0~104.5m）ではG.L.-50cmに、南端（T.P.+100.5~101.5m）ではG.L.-100cmに基盤層を確認した。近・現代の盛土は北端から南端にかけて4~5単位に分けられ、旧建築物造成時の大まかな作業単位がうかがえた。近・現代盛土では、墳丘や石室が既に傷んでいることもあり、須恵器片が多数含まれていた（第52図、図版19）。また、南端で間知石の集積が見られた。これらの間知石は、平成元年度発掘調査時の現状地表面の実測図を眺めると、この集積箇所の南に石垣が造られており、その裏込めに投入されていたものと考えられる。敷地南隣地境界付近の石垣は、この間知石によって築かれている。

当区で検出した主たる遺構は、近世に比定される炉状遺構である（図版13）。

② 炉状遺構

検出位置は東隣地境界付近において、確認調査12トレンチで検出した炭層を平面的に拡張したことによって炉状遺構を検出した（第49図、図版13）。検出レベルはT.P.+101.9mで、構築面は、にぶい黄褐色（10YR4/3）粗砂混じり砂質土の②層（基本層序4a層-基盤層）である。②層の性格として、炉状遺構が形成されている凹部は、被熱もしくは①層によって変異しているが、遺構部分以外の上面は土壌化が観察できる。つまり、②層上面形成時期に当遺構が構築されたと考えられ、当エリアにおいては近世初頭に基盤層まで露呈して開放状態になっていたことが判った。

遺構の形態は、②層に含まれる1m大の花崗岩巨礫に三方を囲まれた1m四方のスペースに形成されている。この立地を見ると、場所を選んで設定されていることが明確である。また、このプランから南南西方向が焚き口に当たり、地形的にも上方が炉体、下方が焚き口となり妥当な見方である。遺存状態は良好とは言えないが、焼土は10~15cm大の塊で遺存しており、1m四方の範囲で高密度に入っている。また、I区でも検出した溶解物も若干ではあるが採取した。平面観察では、良好な保存状態を保った炉の遺構で見られるリング状に推移していく被熱変化や色調変化は視認できなかった。②層上面の炉底面でもこの様な変化は識別できなかった。

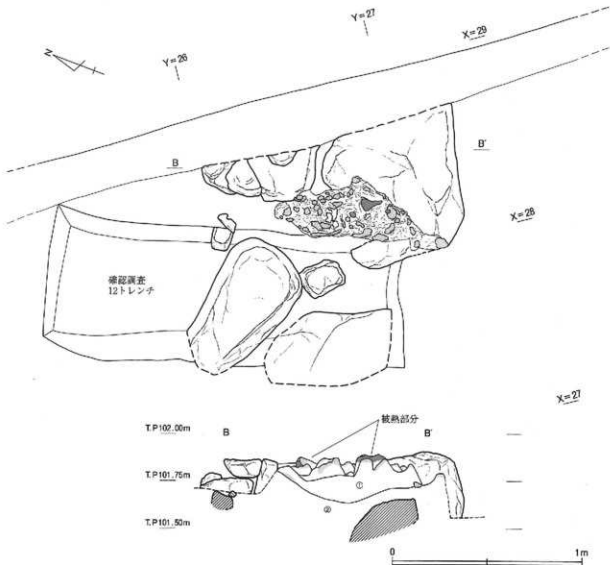
次に垂直断面での観察結果を記述する。第49図の立面・断面図は、上位を見通しの立面で、中〜下位を断面で表現した。先に述べたが、②層基盤層をすり鉢状に掘り窪め炉底面を形成し、①層として焼土・溶解物・微細な炭化物（1~5mm）などを含んだ夾雑物が充填している。土層観察メモや記録写真を再度紐解いてみたが、①層自体に灰や炭が面や層をなしている状態を確認していないことから、さほど手をかけていないシンプルな構造で、かつ短期間の作業時期であったと判断する。

遺構の性格として、該期の陶磁器類が全く出土しないことから、石工の飯場などの生活火化遺構ではなく、道具の修復・修繕用の簡易炉ではなかろうか。石切場の付帯施設として理解しておきたい。

③ 近・現代盛土に含まれる遺物の経緯

当調査区では、近・現代盛土層から一定量の須恵器片が出土した。出土した須恵器片は、ローリングを受けず比較的大きな破片で遺存していたことから、移動距離はほとんど無く、近在の墳丘に帰属するとみてよい。

そこで、発掘調査の段階では、地形的に上方にあって造成工程の解かる第58号墳が当遺物の帰属遺構として有力視されていた。その結果、内業整理段階で第58号墳墳丘西裾部で出土した大甕（第41図-1）と接合関係にあることが判った。第58号墳東半部は遊歩道造成の削平が著しく、石室の遺存状況も床面より20~30cm上に遊歩道の底盤コンクリートが貼られ、左側壁の大半は基底石まで抜き取られていた。IV区は、第58号墳を縦走してきた遊歩道の延長が通り、東隣地境界造成部と重なり大規模な削平がなされていた。当区の南北通し土層断面図（第51図）を見ると、現代盛土と基盤層間に3層が遺存していることから、東隣墳裾部の削平は近世段階に既に行われていることが判っているが、近・現代造成時にそれを再移動しており、その結果、このような須恵器片の混入

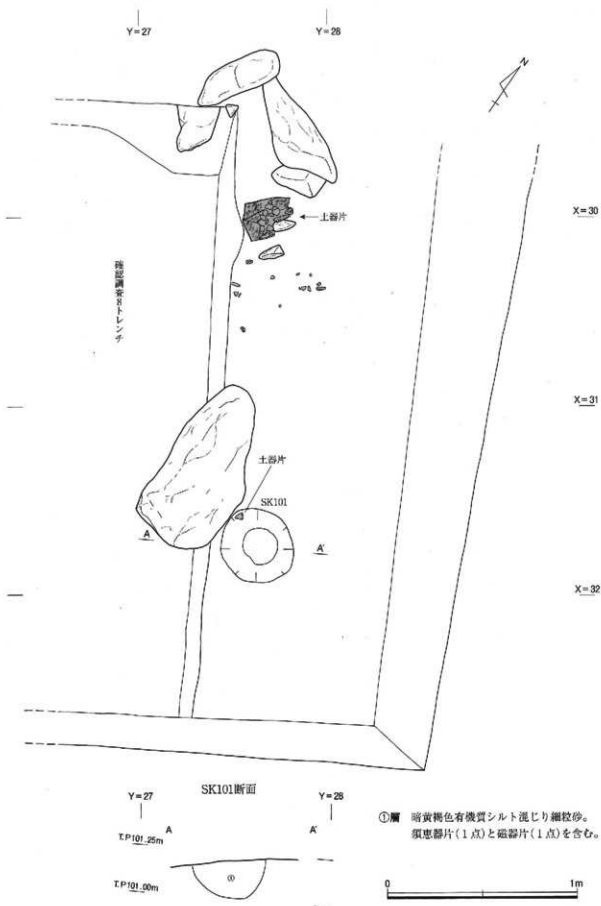


- ①層 明黄褐色(2.5Y6/8)中～細粒砂。焼土塊・ガラス質化した溶解物・炭化物チップ(1～5mm)・微量の風化花崗岩片(2mm大)を含む。②層上面の凹部に上記の夾雑物を含み埋積する。面や層をなして堆積している様子は無い。
- 焼土塊：赤褐色(2.5YR4/6)を呈し、石英・長石粒は溶けずに素地に残っている。
- 溶解物：黒褐色(2.5Y3/1)を呈し、ガラス質化している。平面的には検出範囲の外周で散見される。
- ②層 造棚の構築面。基本層序の基盤層(4層)と対応する。にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂混じり砂質土。20～100cm大の花崗岩塊を多く含む。上面に土壌化が見られる。

第49図 IV区 炉状遺構平面・立面・断面図 (S=1/20)

状況が生じていると考えられる。

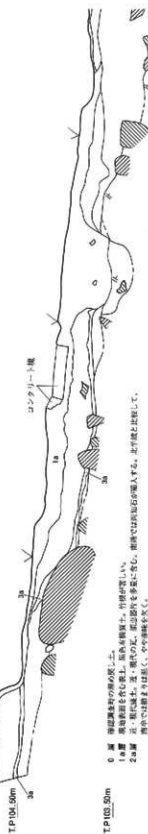
須恵器片の器種構成は、検出状況を実測した大型甕の体部片と若干の杯身が出土している。調査地内には、3基の古墳が存在し、周辺にも未確認古墳の存在が推定されているが、上記してきたように盛土の移動経緯からあえて言及するならば、第58号墳東半部の封土および周濠に含まれていた遺物と考えられるのではないだろうか。



第50図 IV区 近世遺構平面図・SK101断面図 (S = 1/20)

N

東 壁



6 層 埋蔵品層の底面

1a 層 埋蔵品層の底面

2a 層 埋蔵品層の底面

3a 層 埋蔵品層の底面

4a 層 埋蔵品層の底面

5a 層 埋蔵品層の底面

6a 層 埋蔵品層の底面

7a 層 埋蔵品層の底面

8a 層 埋蔵品層の底面

9a 層 埋蔵品層の底面

10a 層 埋蔵品層の底面

11a 層 埋蔵品層の底面

12a 層 埋蔵品層の底面

13a 層 埋蔵品層の底面

14a 層 埋蔵品層の底面

15a 層 埋蔵品層の底面

16a 層 埋蔵品層の底面

17a 層 埋蔵品層の底面

18a 層 埋蔵品層の底面

19a 層 埋蔵品層の底面

20a 層 埋蔵品層の底面

21a 層 埋蔵品層の底面

22a 層 埋蔵品層の底面

23a 層 埋蔵品層の底面

24a 層 埋蔵品層の底面

25a 層 埋蔵品層の底面

26a 層 埋蔵品層の底面

27a 層 埋蔵品層の底面

28a 層 埋蔵品層の底面

29a 層 埋蔵品層の底面

30a 層 埋蔵品層の底面

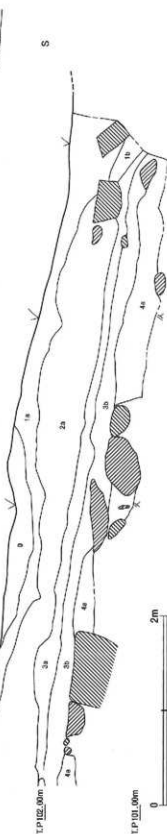
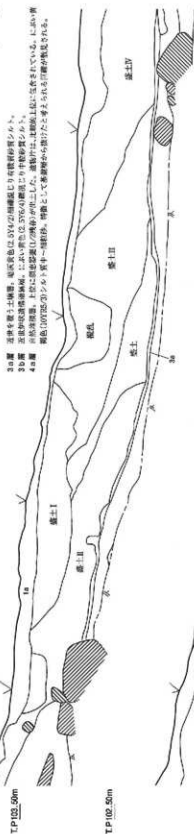
31a 層 埋蔵品層の底面

32a 層 埋蔵品層の底面

33a 層 埋蔵品層の底面

34a 層 埋蔵品層の底面

35a 層 埋蔵品層の底面



第51図 II～IV区 東壁土層断面図 (S=1/40)

遺物の接合関係では、第58号墳前庭部や墳丘西裾部と当区盛土出土遺物の接合がみられたことも、第58号墳帰属遺物が大半を占めるであろうことを有力視する証左となろう。

④ 出土遺物 (第52図)

当区からは、須恵器や焼土が出土した。盛土から出土した須恵器片が圧倒的に多く、先述した後世の刮平や造成による二次移動遺物であり、古墳時代から古代の層位には伴っていない(図版19・37上)。

第52図-1~10はすべて須恵器である。1~3は杯蓋であり、3は、宝珠つまみの付く杯Gである〔西1986〕。1・2は、形態からほぼ同時期の6世紀後半~末に比定され、丸みを持つ端部から1.5cmほど立ち上がり天井部へと続く。両者は製作手法が似ている。3は、カエリの端部が口縁端部レベルより下方に出るものであり、全体的にひずみが見られる。7世紀前半に編年される。

4・5は杯身に復元した。立ち上がりは、いずれも内傾しながら短く立ち上がる。4は体部中位に回転ヘラケズリと回転ナデの調整変化点が明瞭に観察できる。5は焼成が悪く、焼き締めがゆきとどかず暗褐色の土師質緑の焼き上がりを呈する。

6は、長頸壺や瓶頸の頸部に復元した。球体ないし扁球形の胴部から直線的に外上方に立ち上がる頸部への変換点であり、内面に製作工程の時間差や粘土紐の接合痕に由来する亀裂が観察できる。

7は、短頸壺に復元した。外底面から体部中位まで回転ヘラケズリが施され、ロクロの回転は反時計回りである。きめの細かい精緻な胎土に、0.5mm以下の砂粒を含み、全体的に白っぽい焼きあがり特徴である。

8は、壺の口縁部である。頸部からやや外弯しながら立ち上がり、外巻きの玉縁状唇部を形成する。器壁の厚い頸部内面には、粘土紐の接合痕が観察できる。口縁部外面は粗いナデによって仕上げている。

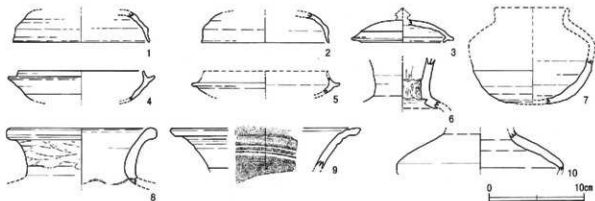
9は、壺もしくは甕の口縁部である。外上方に開く口縁部は、端部に至ってさらに外反する。外面調整は、口縁端部から1cm下に2条の凹線が巡り、さらに波長の弱い横細な波状文(9本/1cm)が施される。

10は、平瓶ないしは短頸壺の肩部である。肩部外面全体に黒オリーブ色の自然釉が顕著に観察される。頸部へとつづく内面に若干のシボリ目が観察できる。

⑤ 小 結

当調査区では発掘を進める過程で多くの遊離遺物が出土した。古墳時代に帰属する土器は、すべて古墳と関わる遺物と考えて問題ない。土地造成などの後世の改変が大きく加わり、動いた遺物の原位置を推し量ることは難しいが、近辺にもう1基の古墳が存在したことを示唆する出土状態も看取された。近世に比定した炉灶遺構は、I区で見出された火化遺構の用途や時期とも触れ合うもので、この種の遺構については岩ヶ平の石切場跡において近年増加しつつある〔古川編2003、森岡2003、森岡・坂田編2005、森岡2005〕。機能を異にする施設が近接地で有機的に存在し、ユニットとして石切場全体の石材調達・加工やその運搬工程を支えていたのだろう。こうした遺構の検出はひとえに調査面積の確保に左右されやすく、体系的な確認調査の方法論が模索されねばならない。

(森岡・坂田)



第52図 IV区 出土遺物 (S=1/4)

(5) V区の調査概況

① 岩ヶ平第45号墳

A. 位置と立地条件

当墳は調査地南端のほぼ中央に位置し、平成元年度の調査時から玄室の一部が開口していた（図版15上段）。羨道の開口部は不詳であったが、石室の想定全長からして隣地境界に接することが予測された。立地点は調査地内で最も標高が低く、T.P.+99.5～100.0mを測る。墳丘西側は、V章（3）節で記載した小谷が形成されており、東側は裾部が第46号墳墳丘西縁と触れ合う距離にある。さらに、北25mの上方には第58号墳があり、同一尾根上に立地している。当墳は、羨道の一部を除き埋没保存されるため、石室の解体調査はおこなっていない。掘削を伴う調査は、主に石室羨道部と墳丘南半部を対象とし、石室平面・側壁・奥壁の現況実測を行った。

B. 基本層序と所見

第45号墳の封土は、第45・46号墳東西トレンチと第45号墳西トレンチの土層断面観察（第54・55図）より、①～⑤層に分層することができた。まず、東西トレンチでは5 a層を、西トレンチでは基盤層を築造のベース面として、墓坑を掘り下げ、石室を構成する基底石を据えている。当墳は、東西墳丘の断り割りについて、保存のため側壁裏込めまでは掘削しておらず、明確な墓坑ラインは、羨道部の一部しか確認していない。しかし、両断面で観察できた石室側へ落ち込む45～⑤層褐色灰色細砂混じりシルト混じり細～粗粒砂が墓坑の裏込め土に相当すると判断する（第55図）。当層には、縞目状の作業単位が観察でき、基盤層のブロック土が混入している。さらに、45～③・④層は、人為的なブロック土を含む作業単位が観察できた（図版14）。

土層断面を基に第45・46号墳築造の先後関係と考えると、第45号墳→第46号墳の順列が成り立つ。第54図の第46号墳の封土が明らかに築造時の構成を維持していることや、後に築造された第46号墳の西墳丘裾傾斜に沿って2 a・3 a～3 c層が流下していることから、先の序列は明瞭である。仮に、流水層が墳裾に沿わず流れたとしても、左岸（東側）以東の断面に第45号墳の封土が観察できるはずであり、第46号墳の墳丘構築時に第45号墳の東墳丘裾部を再整地していることが予測されよう。

C. 墳 丘

調査前の墳丘の遺存状況は、石室西際まで庭池が広がり、羨道相当部には花崗岩を積んだ石垣段差が造成されていた。天井石は現況通りで（後述、近・現代に積み直されたものであるが）、石室は開口しており、玄室前縁付近から中に入れるように花崗岩を用いた階段が造られていた。したがって、左右側壁の羨道側には積み直し石材が目立った。石室内には、一見棺台とも思える径30～40cm、厚さ15cm程度の底石が6個意味ある位置に配されていた。墳丘北側は、石垣段差と西側の庭池を通過してきた遊歩道が東に周り第46号墳へと至る。

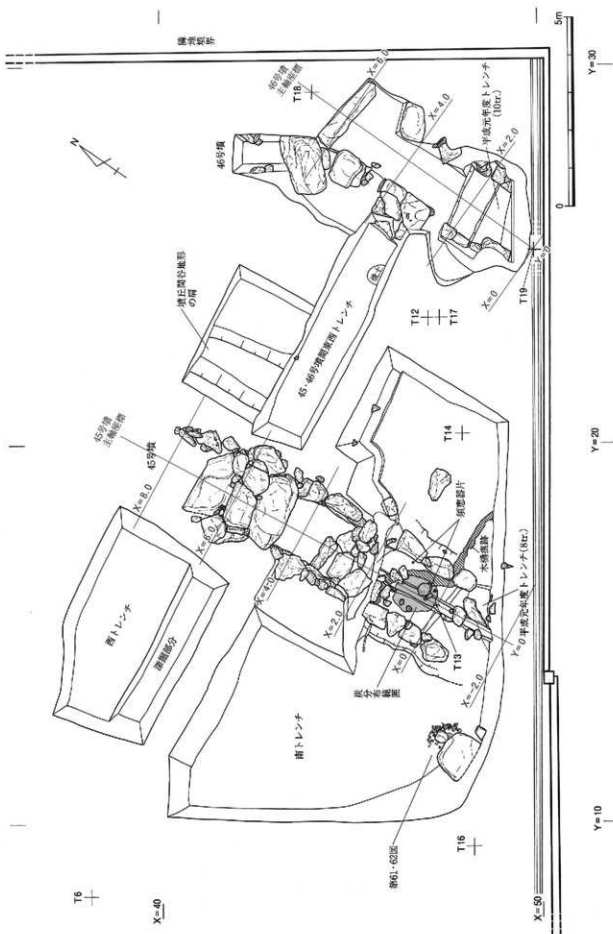
平成元年度の確認調査では、羨道部と隣地境界の接点付近にトレンチを入れ（8 tr）、床面までの深さや羨道幅などを確認している（第53・57図）。

墳丘平面形態は、西トレンチ、南トレンチ、45・46号墳間東西トレンチのいずれを参照しても墳丘盛土の遺存状態が悪く、円形か楕円形かを明確にすることはできなかった。第46号墳と連結する東トレンチでは、東側の墳丘盛土が観察できたが、生きた層はその傾斜があまりにも急であり、流出や削平などが考慮されてよい。築造当初の墳丘の規模は、推測の域を出ないが、奥壁から確認できた羨道南端までの距離が約8mであることから、主軸上で径13～16m程度に復元できよう。東西は10～12m程に見積っておきたい。

周濠は第45・46号墳間トレンチの観察では、両墳が共有する周濠もしくは先後関係にあっても同一ラインを踏襲する周濠があったと推測される。なお、外護列石・墳丘内列石などの施設遺構は確認されていない。

D. 石室構造

石室の形態は有袖式と判断する。袖を判断する玄門付近が大きく擾乱を受け、石材が積み直されているため明確ではないが、羨道部幅1.4～1.5m、玄室部幅1.7mの法量格差から有袖式と判断した。石室全長は8.5m以上で、玄室長約5m、羨道長3.5m以上になる規模とみられる。床面は、羨道部に置いたセクションベルトから判断すると、現況の露出面がおおよそ該期の床面と思われる。羨道部床面は、約2mの間のみ構築時もしくは追葬時の床面の遺存を確認することができた（第58・59図）。羨道部は、今後の建築工事によって損壊を受けるため、床面を掘り抜き排水溝の有無や基盤層の確認を行った。玄室内には繁殖してきた雑草類の草刈りのみで、掘削を伴う

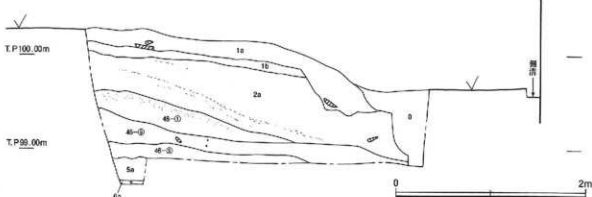


第53図 V区 遺構配置図 (S = 1/100)

N

南トレンチ東壁

S



- 0 層 南端地境弄障壁裏込めと、塩化ビニール管埋設跡。
 1a 層 確認調査時、今回の調査の埋土上。
 1b 層 表土。底層土。竹の根、磁石が混入。
 2a 層 墳丘間谷地形の粗積土。一部流水堆積が見られるが、凹部にラミナが見られないことから、すくなくとも下～中位までは人為的な堆土であろう。南に下る砂の流れは、自然堆積ではなく、作業単位と判断した。当層掘削時には、45号墳の東側墳丘部はカットされていたことが判る。
 5a 層 被焼土。焼土層を含む。黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂。焼土はブロック状に散見される。鉄分・マンガン濃が顕著である。
 6a 層 基盤層。やや赤味を帯びた褐色微塵。約0.5～1cm未満の風化花崗岩微塵が散見される。巨礫の包含が見られないことは、築造前に抜き取られていた可能性が高い。
- 46-① 遺存する最新封土。オリブ褐色(2.5Y4/4)微塵じりシルト質細粒砂。上位に5cm大の風化花崗岩粒を多く含む。驚くしきり、墳丘勾配から判断しても墳丘構築時の最終封土が遺存しているものとと思われる。
 46-② 封土。上部は黄灰色(2.5Y6/3)シルト質粗粒砂。粗粒砂と2mm大の礫からなり、やや粘性を持つ。微細な炭化物チップを極少量含む。炭化物の混入する位置は微塵層に近い。墳頂に向かって下る薄層の風量である。
 46-③ 墳丘構築直前もしくは直後に堆積して高直したと判断できる。土壌層。基盤微塵層との密接な関係から墳丘構築時に含まれている。微塵色(7.5Y5/1)中粒砂。

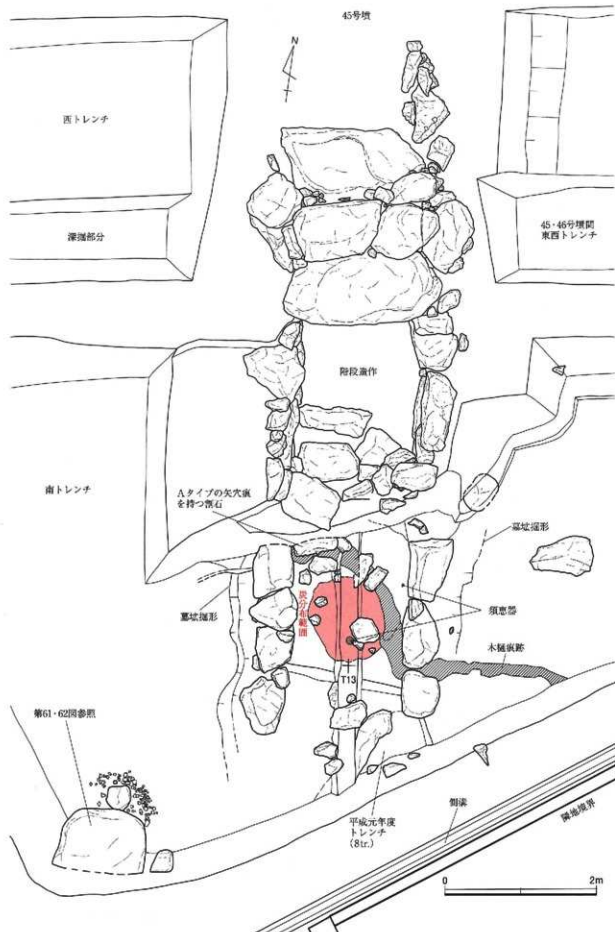
第56図 V区 南トレンチ東壁土層断面図 (S=1/40)

調査は実施していないが、玄室内の出土遺物や採取遺物はなかった。土床の検討などにより、平面図(第57図)に載せた6個の円筒形扁平石材は庭石(踏石)であり、現代に据えられたものと考えられる。

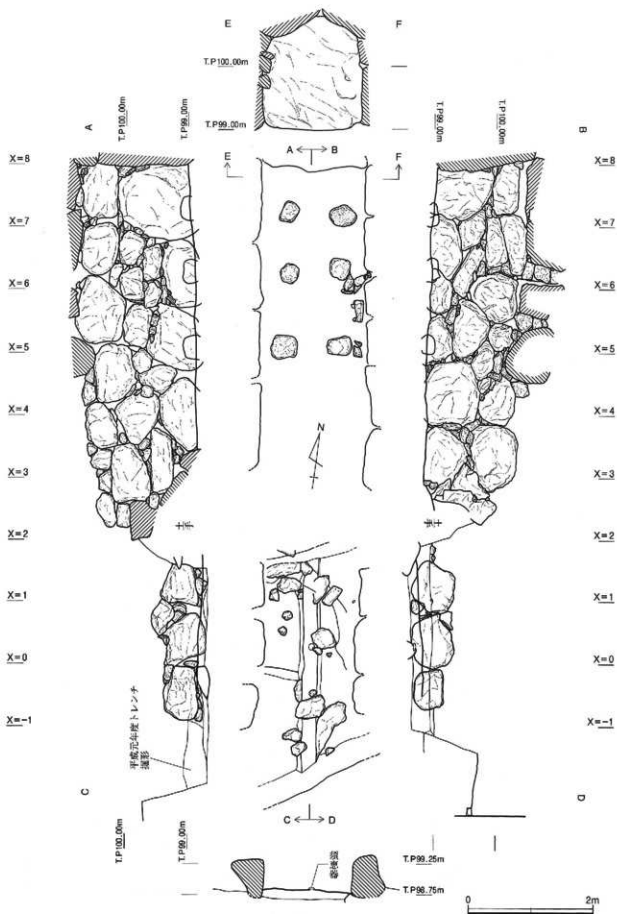
残存石材から見た用法は、側壁に縦50cm×横100cm台の石材を基本として横置きに用い、すべてが六甲花崗岩である。奥壁に接する基底石のみやや大振りな石材を使用している。積み上げ時に割断面などの平坦面を選択して内面に使用しているが、一部、小タタキによって平坦に仕上げている箇所が見受けられる。目地については、横目地を意識してはいるものの、透材に限定した厳密な選択的石材の確保ではなく、目地の凹凸や隙間に間詰めとして準大～人頭大の石材を充填しつつ、石室を築いている。縦目地の意識は全く読み取れない。

天井石は、近・現代以降の積み直しであることが明らかで、天井石下面(玄室内からの見上げ面)に幅5cm、深さ6～7cmのCタイプ〔藤川1972・1979、森岡編1998、森岡・坂田編2005など〕の矢穴痕が確認できた。Ⅱ・Ⅲ章で既述したように、当遺跡一帯は近世初頭以降採石場として活況を呈した場所であり、大坂城再築時の大規模な採石活動や、それ以降の石造品製作、石組用水路・石垣母材として、天井石をはじめ多くの石室用材が持ち出されたり、割り取られた例が見受けられる(例えば、前掲V-(2)記述の岩ヶ平支群第58号墳奥壁、同第10号墳〔森岡・古川編1979、白谷編2006〕、城山・三条古墳群の旭塚古墳例〔武庫川女子大学考古学研究会1984〕など)。この天井石がいつ再築されたかは定かではないが、Cタイプ矢穴使用採石期以降であることは間違いない。さらに、築造時堆積過程を検証すると、徳川大坂城再築時のAタイプの矢穴痕を持つ割石(鋪材)が検出されたことから、当墳構築時の天井石は、元和～寛永期に既に持ち出された可能性も考えられる。

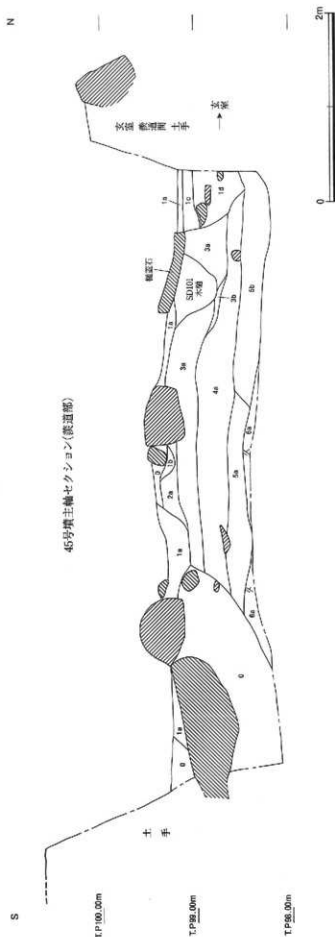
奥壁は、鏡石としての意識を有する1枚岩で構成され、幅1.6m以上、高さ1.8mの花崗岩巨礫が用いられてい



第57図 V区 第45号墳 石室・天井石平面図 (S = 1/50)



第58図 V区 第45号墳石室 平面・立面図 (S=1/60)



45号墳主軸セクション(築道部)

- 4a層 上面が赤褐色土。灰白色は5Y6/10間一中粒砂をベースに、オリーブ褐色は5Y4/4の中粒砂が塊状に散じる。3mm程度の灰化塊が散り、微細にドット状に少量混入する。
- 5a層 上面が赤褐色表面。灰白色は5Y5/10間細粒じり中粒砂。上面をフラットにするため、断面を削り土として使用する。きめが粗く、中粒クラス以上の砂を含まない。
- 5b層 上面が赤褐色表面。黄褐色は5Y5/6間細粒じりシルト泥じり細砂。少量の灰化塊を含み、きめの細かい混入した土を母材としている。
- 6a層 赤褐色。1-2号区の間層と同一。45号墳では、同じ築道時に築道土の成形・包含層の抜き取りと砂地加工がなされている。

- 0層 近代の表土。平成元年筑波大学の埋め土。
- 1a層 褐色は5Y2/10有隙間微粒じり粗粒砂。灰化塊層土。中近部ハッチング部分。筑波大学の石造墓周土層の基盤。
- 1b層 黄褐色は5Y5/6シルト泥じり粗粒砂。シルトブロックを含む。
- 1c層 黄褐色は5Y5/3以上泥じり粗粒砂。少量の細砂と粘土ブロックを含む。近縁に隣の上段土。
- 1d層 灰オリーブ色は5Y5/2間泥じり中一粗粒砂。10-15cm程度の赤石を散点含む。近縁以降の土段土。
- 2a層 明黄色は5Y6/6赤一粗粒砂。赤石粗粒砂。赤石粗粒砂の混入。
- 3a層 上面が赤褐色表面。灰オリーブ色5Y5/6間細粒じり粗粒砂。断面包含層は中層で、埋入範囲は細りを見える。灰石房表面の埋め土。上位が土層化する。
- 3b層 オリーブ褐色は5Y4/3シルト泥じり粗粒砂。断面は10cm次のシルトブロックを含む。大層下層の浮土による変質とも考えられる。

第59図 V区 第45号墳 主軸セクション (築道部) 断面図 (S=1/40)

る。石の目が数本走るものの、概ね平坦面を呈している。奥壁の厚さに関しては不詳である。

E. 近世の遺構

先述してきた採石関連遺構の他に、羨道部からは近世の遺構が検出された。玄門部付近中央から左側壁基底石の隙間を通し、墳丘外へ抜ける溝状のもので、竹樋もしくは木樋に、幅10～15cm、長さ30cm、厚さ5～8cmの花崗岩板石で蓋を施している。蓋石は羨道内の数石しか遺存していなかった。遺構の掘形は幅約15cm、検出面からの深さは5～10cmを測る。このことから、当墳の南東墳丘部分は遅くとも近世段階に削平され低平化し、開放状態にあったことが判明する。

遺構の性格として、調査地内では2箇所の石垣段差が確認されているが、耕作土層はいずれの地区でも検出していない。六蔵荘・岩ヶ平地域では、大板城関連採石場の終焉を迎えた後、近世中頃より新田開発が始まる。近隣の良好な例としては、岩ヶ平刻印群第84地点の調査結果があり、元和～寛永期の採石場と重複して、新田開発を進めた証となる遺構が検出され、たとえ急傾斜地であっても段々畑や棚田が巧みな造成技術と水利計画により経営されており、石垣段差を造り、水田が形成されていることが判っている〔森岡・坂田編2005〕。したがって、当該区の近世以降の土地利用については、農業生産域としての利用ではなく、I・IV区で確認された火を使う施設などの作業場と有機的関連をもつ休憩場や荷解場などの役割が想像されよう。その場合、第45号墳に構築された木樋による排水施設の機能に関しても、いくつかの類推が許されるだろう。

また、木樋の上面では部分的に炭層が確認されており、火を使用した痕跡も遺存していた。ただし、この炭層は近世以降どの段階のものかは不明である。

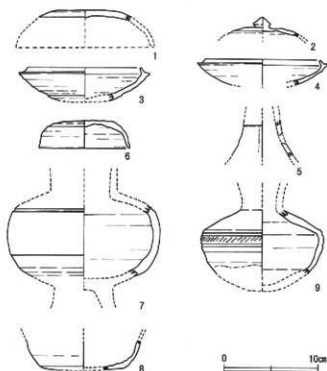
F. 羨道部遺物出土状況

羨道部からは、完形の須恵器壺類と、甕、杯身細片などが出土している（図版37）。第60図～1は杯蓋の天井部で、遺存部の外面はすべて回転ヘラケズリの範囲に収まる。完存の蓋6は、羨道部中央セクション内から出土し、埋蔵層位は5a層で床面直上である（第59図）。床面の直上ではあるものの、当墳は後世の二次的利用面（近世以降）などが床面まで到達していることや、1点のみ完形で出土する状態を考慮すれば、構築時期の遺物と考えるよりは、むしろ追葬期もしくはそれ以降の移動遺物と考えるのが妥当であろう。ロクロの回転方向は反時計回りで、天井部外面は丁寧な回転ヘラケズリ、内面は回転ナデで仕上げられる。杯蓋とみるより壺・瓶類の蓋と考えられる。また、小型の杯G身の可能性も残る。

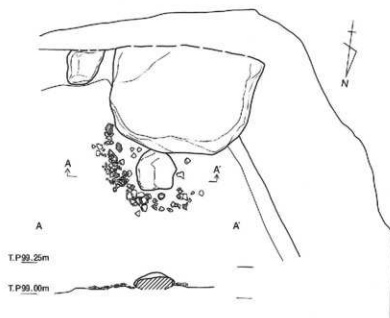
9は、羨道内と第45号墳西トレンチ②層から出土した遺物が接合した。甕の肩部で、体部の1/6が遺存している。肩部から体部への変化点外面に1条、その1cm下にさらに1条の凹線を巡らせ、その凹線間に右左がりの刻み目文を3本/cmのピッチで施す。肩部から頸部への変化点内面には、頸部製作時のシボリ目痕跡がわずかに観察できる。外面凹線文以下は回転ヘラケズリ未調整のままである。肩部から体部への変化点角度から、下彫れの器型が想定でき、口頸部は長頸となり、ラッパ状に開くのであろう。

G. 前庭部遺物出土状況

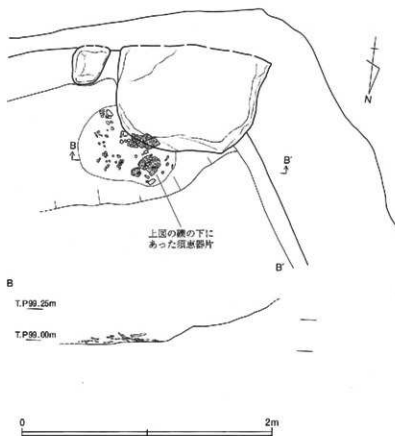
右前庭部付近（墳丘南西部）では、1m範囲のなかに土師器と須恵器が上下に分かれて散布された土器敷布の遺構を検出した（第61・62図）。出土位置については、墳丘盛土内か墳丘盛土外かの判断が重要であるが、当遺構は盛土外と判断した。検出状況は、土師器と須恵器の混在した面が上下2面あるのではなく、明らかに下面



第60図 V区 出土遺物（S=1/4）

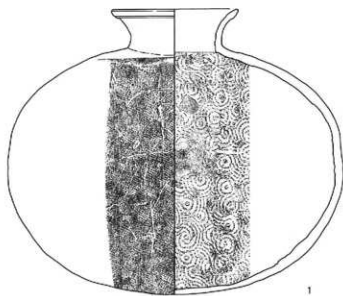


第61図 V区 土器散布面平面図(須恵器) (S=1/30)

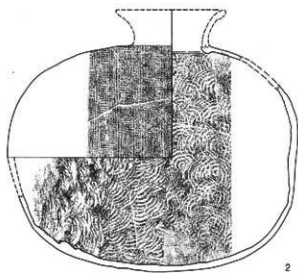
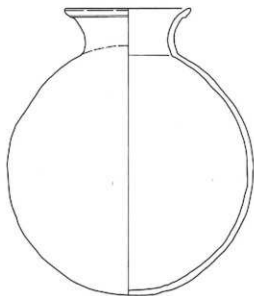


第62図 V区 土器散布面平面図(土師器) (S=1/30)

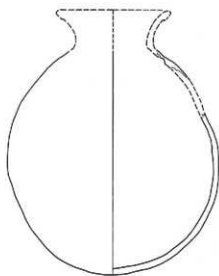
が土師器、上面が須恵器の破片によって分離されていた。下面の土師器面には、上面の須恵器片が数点突き刺さっている状況が観察できたが(第62図下)、本来は土師器と須恵器の異質な面を作ることが目的と思われ、行為の順に意図があったと判断される。須恵器面検出レベルがT.P.+99.0mで、土師器面は間層を挟まず須恵器群に接して遺存した。敷布状況は、土師器・須恵器に関わらず5~10cm四方に意図的に破砕された土器片が水平に埋積していた。用語として上下層ではなく上下面を使用しているのは、須恵器・土師器面を単体として切り離して観察した場合、須恵器・土師器の各ままとり内では遺物片どうしの重なりがあまり見られず、あくまでも敷きならされた様な検出状況を見て取ることができたからに他ならない。さらに、埋没状態や埋没環境も考慮しなければならぬが、その場合、一定方向から「放り投げる」「撒き散らす」という動的な行為ではなく、この場所に「敷く」「並べる」という静的な行為として把握された。一部の体部片では検出状況自体に接合関係が見られるグループがあるが、少なくとも当該構に関しては、原位置で完形の土師器・須恵器に打撃を加えたり、叩きつけたのではなく、近辺において破砕行為を行い、生じた破片の大半ないし一部を当該地に移動した2段階の作業工程が想定される。遺構形成過程において、①初葬時の墓前祭祀、②追葬時に初葬時の副葬品に手を加え、掻き出す、③・②以降の複次的な混入、な



1



2



第63図 V区 土器敷布面出土遺物 (S = 1/5)

ど当遺構構築時期と墳丘構築時期に時間的諸関係を想定する必要がある。

2面の遺物の動静について、以上を念頭に置いて具体的に観察した結果を記述する（図版38・39）。

上面検出の須恵器片を接合した結果、ほぼ完形に復元できた一箇体の横瓶と、体部1/2残存の横瓶の計2個体が復元できた。この組み合わせは、現地の出土状況からは想定し得なかった珍しい組み合わせと言える。第63図-1は、器高37.6cm、胴部長径44.4cm、胴部短径32.6cm、頸部径11.9cm、口径16.8～17.2cmで、焼成は良好である。胎土は精緻であり、微細な白色砂粒を若干観察することができた。色調は、外面青灰色を呈し、内面は灰色である。肩部と頸部の変化点に明瞭な接合痕跡をとどめる。外面調整は、密な格子目タキの後、丁寧にカキメによって仕上げられる。内面調整は、ロクロ成形時の底面～体部中位にかけて、同心円状で具痕が明瞭に残り、最大5cmの重複で複数が重なり合うものの、円芯を確認するのは容易である。一方、製作時の閉塞部（肩部）の当て具痕は、上記のそれより径が大きく、円芯が観察できず半円の重複として認識される。当て具痕の先後関係を見ると、ロクロの回転方向は反時計回りであることが判読できた。口縁部形態は外反しながら立ち上がり、端部は外に折り返し、外端面に玉縁まで肥厚しない程度の縁帯を作り出している。突帯の下端には1条の弱い沈線が巡る。器壁は8～10mmを保ち堅固な作りである。器体は216片の接合により成り、他に接合を断念した破片が数点存在する。

第63図-2は、残存器高30.1cm、胴部長径38cm、胴部短径28cm、頸部径9.7～10.3cmで、焼成は良好である。胎土は精緻である。色調は、内外面ともに灰色である。外面調整はタキの後、やや粗いカキメを施す。内面は、第63図-1と同様である。円盤閉塞時の体部との接合面は強い押圧の痕跡が観察できる。内面に見られる同心円状で具痕の先後関係からロクロの回転方向は反時計回りとみられる。器体は64片の接合により復元を進め、他に同一個体で復元に入れなかった11点を数える破片が存在する。

下面を構成していた土師器片は50点程を数えるが、後世の池の存在や遺存状態の悪さから器面や破断面が溶けていて接合は不可能であった。ただし、口縁部片と体部片に弁別することは可能で、やや大きめの口縁部片から類推すると、頸部から外唇しながら3～4cm程立ち上がるタイプのゆるやかな「く」の字状口縁を持つ甕である。ローリングが著しく、器面が遺存している破片はほとんど無いが、4片に外面の黒色化が観察できた。しかし、二次焼成による黒か、焼成時の黒斑かは判断できなかった。また、いま1片にハケメ調整の痕跡が観察できた。

H. 墳丘内外とその出土遺物

墳丘内墳丘間出土遺物 第45・46号墳間トレンチより須恵器の杯身片第60図-3・4が出土した。3は、色調が内外面ともに灰色で、断面では器内中央は紫赤色を呈する。胎土は3mm以下の長石粒を極少量含む。焼成は良好である。口径は12.1cmで比較的大きく、立ち上がりは内傾しながら短くたちあがる。4は、3と比較するとやや薄手の器壁を持ち、シャープに仕上げられる。中村縄年Ⅱ-6段階、田辺縄年TK209型式新相資料併行になろう。

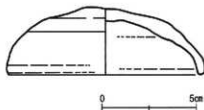
北西区表土直下出土遺物 第60図-5は、高杯の脚部である。内外面ともに丁寧に回転ナデにより仕上げられ、残存部からの推測では、透かし孔は外面から内面への切り取りで、穿孔箇所は2方向である。

墳丘外出土遺物 第60図-2は確認調査2トレンチより出土した。宝珠つまみを持つ杯蓋である。西暦年の飛鳥Ⅱ・Ⅲ期に併行するものであり、7世紀半ば以降に比定されよう。

1. レイアウトミスによる番外遺物

本書作成途上の段階において、挿図レイアウトから脱落してしまった整理済出土遺物が存在することに気がついた。余白を利用する形で、このページに補ったが、あえて挿図番号を採らずに掲載する。原因は、整理作業中に他遺跡出土資料と混同し、作図をレイアウトに編成できなかったことにあるが、過密スペースでの整理作業で生じた事故であり、二度と起こらぬよう肝に銘じたい。

その他、報告書校正時に、ほぼ完形に復元し得た土器がみられる。一つは、Ⅱ区H-13・18・25などが1個体になったもので（杯蓋）、いま一つは、Ⅱ区H-14が有蓋高杯蓋になったもので、共に実測はできなかった。



V区 出土遺物 (S=1/2)

② 岩ヶ平第46号墳

当墳は、事業地の南東隅に遺存し、新設される擁壁の外側に埋没保存されるため、石室の解体調査は行っていない。掘削を伴う調査は、羨道部に探入された平成元年度の調査トレンチと今回の確認調査トレンチを拡幅利用して石室奥壁部分のみ基底石レベルまで掘削した（図版18）。平成元年度の確認調査では、玄門石付近にトレンチを入れ（10tr.）、床面までの深さや羨道幅を確認していた（第1・2図）。

A. 基本層序と所見

第46号墳の封土は、第45・46号墳東西トレンチの土層断面観察より、①～⑫層に分層することができた。土層断面図（第54図）は第46号墳の西側墳丘部に相当する。断面観察によると、4 a層を構築面として、墓壇を掘り下げ、基底石を据えている。石室裏込めの一部まで掘削したのは、右側壁のみであるが、明確な墓壇掘形の落ち込みを検出した。右側壁内づから掘形上場ラインまで水平距離で1.8mを測り、石室主軸線で反転復元できる墓壇の横断幅は5m前後になろう。基底石裏込め土は46-⑫層で、ブロック土混じりの黄灰色礫混じりシルト混じり中粒砂である。さらに、側壁の裏込め土には46-⑩・⑪層が相当し、特徴として土壌層のブロック土を含む。一概には言えないが、土壌層のブロック土を含む封土は、古墳築造工程の中で初期段階の封土内に見られる傾向が強い。

当墳の封土は、粘土混じり砂質土を基本として作業単位が明瞭に残っていた。封土下位は比較的水平に、中位は墳裾に向かってやや下がる傾向がみられる。唯一墳丘を断り切っている第45・46号墳東西断面では、墳丘内列石は確認されていない。当初、断面図にある抜石痕が一見墳丘内列石に思われたが、石が斜め上から入っていることと、46-⑤層が石をまたいで盛られていることから、遊歩道の脇石と判断した。

前述したが、土層断面での切り合い関係から、当墳は第45号墳に後続するものと判断できる。

B. 墳 丘

当墳は調査地南端と東端の隣地境界線に位置しており、墳丘東側と開口部は隣地境界を超えてそれぞれ敷地外に延びる。墳丘西側には、近接して先に報告した第45号墳が遺存する。立地点の標高は第45号墳とほぼ同じで、T.P.+100m前後である。

調査前の墳丘の遺存状況は、全面調査を実施していないため不明である。現況では北西方向から遊歩道が延びており、右側壁4段目壁石の上面と、左側壁3段目壁石の上面にコンクリート底板が確認され、それより上部は天井石を含めて大きく損壊を被っている。

玄門部と羨道部付近は、調査地南端を東西に走る現代の石垣が築かれており、墳丘上部と玄門石より上位の石材・封土は削平されている。4段目の側壁用材が遺存している部分は、遊歩道の底板を乗せている玄室右側壁中央の2石分のみである。調査前の現状では、羨道部の一部を除き完全に埋没していた。墳丘北西裾部には、前々代の住宅に供用されていた井戸が遺存するが、湧水は止まっていた。

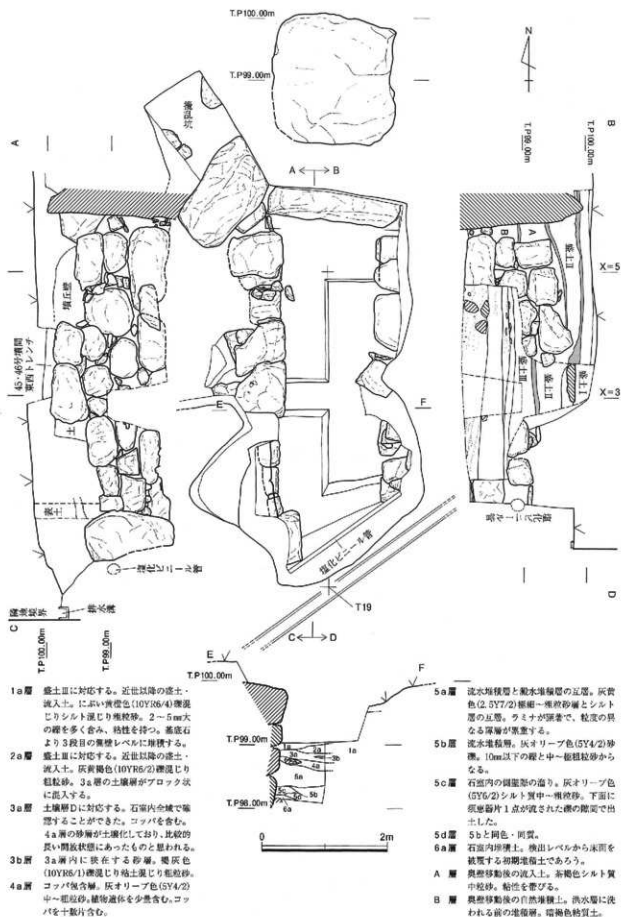
墳丘平面形態は、円形ないし楕円形になると思われるが、情報の多くが調査区外にもおよび、全容は明確ではない。墳丘西裾は遊歩道削平レベル以下の遺存状態は良好で、後述する築成土が観察された。東半部は擁壁で破壊を被っているとみて大過ない。築造当初の墳丘の規模は、推測になることを否めないが、玄室側壁から確認できた西裾部までの距離から、主軸直径12m以上に復元できよう。

外遺列石・墳丘内列石は掘削した箇所では、未確認である。

C. 石室構造

石室内全体を掘削していないが、石室の形態は有袖式と判断して誤まりない。平成元年度調査トレンチ（第46号墳南隣地境界線）の右側壁で玄門立柱石が確認されており、これをもって石室は30cm程右に拡幅する。一方、左側壁では羨道から直線的に内づらを合わせ玄室に至っていることから、右片袖式の石室となる。石室の主軸方位は、略真北を指す。

石室は玄門近くで幅1.3～1.4m、玄室最大幅は1.6mを測る。玄室長は奥壁が移動していることから、残存長になるが、4.5mを測る。奥壁は、右側壁との位置関係から推測すると、原位置から若干西に開いていることが解かる。天井石は既にすべてが無くになっている。また、石室内堆積層については後述するが、石室内床面付近でコップ状の削石が数片確認された。コップに矢穴痕跡が遺存しているものが無く、近世採石跡の残滓なのか、



第64図 V区 第46号墳 石室上面展開図 (S=1/60)

石室積上げ時の間詰石の落石結果なのかを明確にすることはできなかった。他の第45号墳・第58号墳では、いずれにおいてもAタイプもしくはCタイプの矢穴痕を確認しており、当墳の石室構築材も近世段階で用材として供された可能性は高いと考える。3古墳は同じ頃に人の出入りがあったと思われる。

石室内堆積土は、上から4枚の土壌層(A～D)と各土壌層間に3枚の盛土層(Ⅰ～Ⅲ)が観察できた。さらにその下層において、天井石崩壊後の開放期間、もしくは天井石崩壊要因につながったらしい流水堆積層を基底石レベルの石室床面近くで確認した。土壌層Aと盛土層Ⅰは、遊歩道底板より上にあるため平成元年度の調査以降の新期堆積土である。土壌層Bと盛土層Ⅱは、遊歩道造成直前に形成されたものであり、旧宅地段階の造成盛土と判断する。土壌層C・Ⅰ・Ⅱと盛土層Ⅲを合わせて30～50cmの層厚を有し、土壌層D(石室内横断セクション3a層)は10～15cmの層厚である。これら土壌層の主成は、有機質の暗褐色砂質土であり、一定期間に及ぶ開放状態が想定される。その下にはコッパを十数片を含む灰オリーブ色中～粗粒砂層が、5a層の凹部に溜っている。そして、5層の流水層もしくは洪水砂が観察できる。5層は洪水由来の砂層の様相を呈し、比較的粒度の大きい大礫クラスを包含している。八十塚古墳群の既往調査例を見ると、石室内に洪水砂もしくは洪水礫の流砂が確認される例があり(岩ヶ平支群第8号墳例〔森岡・藤岡1980〕、岩ヶ平支群第19・24号墳例〔森岡編1983〕、岩ヶ平支群第10号墳例〔森岡・和田・古川ほか1990〕など)、古墳時代後期以降の六葎荘・岩ヶ平台地上の植生や堆積環境により、古墳群が人為的破壊以外の自然災害の要因で壊れているケースも考えられてよい。当古墳では、5層の洪水砂の時期が判明しておらず、何時天井石を失ったかは解からない。5c層から須恵器片が出土しているものの、当層の堆積年代を示しているとは言えない。これまでの複数の調査所見では、江戸時代以降の段階に比定できる事例も散見される点を参考までに付記しておきたい。

用石法に関して、基底石は側壁に縦50～80cm、横90～110cm規模の石材を横置きに用い、主石材はすべて六甲花崗岩を使用している。積み上げ時に平坦面を選択して内壁面としており、一部に小タキキによって平坦に仕上げている石材があることは第45号墳と似た傾向にある。特記すべきこととして、基底石の中でも奥壁と接する最奥の石材は、両側壁ともに長さ1.4mを測るやや大型のものを使用している。目地の通し方は、横目地が意識されており、確認できた基底石に関してはすべて選択のゆきとどいた内づら長方形を呈する石材を使用している。この点において、第45号墳のそれとは様相を異にする。目地の凸凹・隙間には拳大～人頭大の石材を充填しているが、石材選択がゆきとどいているためか、このような間詰石は少ない。右側壁奥壁から2列目で見られる2・3段目を1石で補ったやや大型の石材の隙間を埋めている箇所は、小振りの板状の石材5個を重ね積みすることにより埋め合わせている。当古墳では、3～4段の側壁が遺存しているが、持ち送りは第64図の石室横断面図に見られる程度で、天井石までと数段積まれたとしても、さほど顕著に持ち送られた節はない。自然な送り方であると言えよう。

玄門石は、高さ1.4m、羨道部側面幅0.8m以上、玄室部側面幅0.6mの柱状を呈し、高さを玄室部側壁と比較すると、概ね側壁3段分に相当する。天井石はすでに無くなっているものの、石室北東部で確認されている攪乱坑に落とされ込んでいる長さ1.5m以上、幅1.1m以上の石材が天井石の一石をなしていた可能性は高い。奥壁は一枚岩により鏡石を構成し、第45・58号墳に比べて一回り大きく、玄室から見た内面の幅2.1m以上、高さ2.0mを測り、ほぼ正方形を呈する。奥壁は下端から左側壁側の範囲に石の目が数本走るものの、内面は平坦面を呈している。背面は自然面を残す半球形である。奥壁と側壁との高さを比較すると側壁4段分に相当する。

D. 羨道部遺物出土状況

羨道部と南側隣地境界界間の盛土より、第60図-7の長頸壺の胴部が1点出土した。共存遺物に近代以降の土管などがあり、遊離遺物とみられる。器壁は厚さ7～8mmを測る。胴部下位より下は回転ヘラケズリを、中位は回転ヘラケズリの後、回転ナデによって仕上げる。肩部との器形変化点に1条の凹線を巡らせる。局所に暗オリーブ色の自然釉が付着する。

③ 小 結

確認調査の追加のみに終結した第45号墳と第46号墳の2基の古墳は、今回進めた調査で石室の遺存状態や墳丘の形態・規模などの基本情報を得ることができた。その結果、このたびの宅地開発において、保存可能な部分と保存できない部分の区分を明確に示すことができ、工事の進行で損壊を受ける範囲は現地で線引きを確定した後、

記録保存のための事前調査を行った。保存できる部分については、砂を入れて埋戻しを行い、次代の発掘調査まで地下保存した。

2古墳には石室の型式差や築造の時期差が判明したが、本格的な調査を経ていないため、不明な点も多い。
詳細は今後の調査に委ねたい。(森岡・坂田)

VI 総括と考証

(1) 第108地点検出の3古墳の所見整理と二、三の問題について

① 調査の概括と保存動向覚書

調査地では3基の横穴式石室墳の発掘調査を行った。八十塚古墳群の岩ヶ平支群に属する第45・46・58号墳の3基である。前2古墳は平成元年度の予察において既に確認をみ、当時、地権者と交わした覚え書き交換によって20年近く現状保存が図られていたものである。バブル期以降、土地開発の情勢も様変わりし、努力して保護を行ってきた場所での土地の再利用と意欲が増えているのが近年の傾向である。第58号墳は、平成17年度に行った追加の確認調査により新たに発見されたものである。当初、推定された地点からは古墳を確認できていない。

3基の横穴式石室墳は、立地条件からみて同一小支群に帰属すること疑いないが、相互に奔逸なものではなく、さらに下位相の小グループを設定する場合、二つに分離することは可能である。とくに第46号墳は、小支群に属する岩ヶ平第26号墳(後述) [昭和56年度発掘調査] [森岡1986] の延長石室である可能性も高く、同一墳として認識できるか否か、将来検証すべき課題と言える。列んで選地する第45・46号墳の2基は、石室部分を中心に今回の住宅建設事業では将来に残る部分が多いため、確認調査の域にとどめ、地権者との慎重な協議の上、浜砂を入れて埋土の区別を施し保存した。第45号墳の後述部や第45号墳・第46号墳間の墳丘遺存部は、擁壁工事で埋れるため、記録を十分取る事前調査を行い、縄張りや、その後の工事に立ち会った。第58号墳は事業計画を一部見直していただく協議を地権者側と進めたが、料地でもあり翻案も保存不可能と判断されたため、全墳を前提に刻急ながら可能なだけの事前調査を実施して、止むなく記録保存の取り扱いとした。

本書の締め括りである第Ⅵ章の冒頭に経緯を改めて記し、不易なことを含め、将来に委ねた点を古墳ごとに確認しておきたい。跡跡無くその証左を失った古墳や隣接地から及んでくる未周知の古墳があったらしいことは、須恵器などの遺物集中地点がなお散在することで予想もされるが、事業地において所見を得て報告すべき古墳は、独断に走る誘いは免れないものの、以上の3墳のみとして扱いたい。

本章では、調査結果を再整理した上、抽出された問題や育まれてきた課題に関し、即製ながら若干論究する。

② 調査古墳を含む岩ヶ平支群の特徴

八十塚古墳群は岩ヶ平支群という中核の造墓集団を有し、複雑な展開をとげている [森岡1973・1979 a・1979 b、関西大学考古学研究室編2002]。古墳群70基中55基79%を占める有力な支群である。その特徴をこれまでの蓄積されてきたデータに照準を当て、端的にまとめてみよう。まず、一支群としては、分布範囲や構成基数的上で阪神間屈指の規模を誇る。その墳丘規模・形態・石室構造については、径10~20mの円墳・楕円墳を主体とし、主体構造には在地産の六甲花崗岩を使用した横穴式石室を内蔵する。墳径に10~20mと大きな幅がみられるのは、支群中に有袖式石室と無袖式石室が築造時期や分布に偏りをみせながらも並存し、無袖式石室を蔵する小規模墳が墳丘自体の下限をより広げていると言える。したがって、墳丘測量点の認識差や墳丘遺存状況による見かけの格差を除けば、有袖式石室の墳径の基本はその多くが13~18mの範囲に収まるものと考えられ、比較的均質な構成であることが窺えよう。事業地に存在する3古墳は、流失と削平を繰り返した残存状況からの推測になるが、第45号墳が径約16m、第46号墳が推定15m、第58号墳が径約14m以上と推測された。基本的には、本古墳群の等質性ある特徴を保つ古墳配置と規模・形態を踏襲するものである。

墳丘高はいずれも遺存率が悪く、群内の諸古墳についても天井石を欠失したものが大半で、同様の状況が認められる。有袖式石室を内蔵する墳丘に限ってみると、初葬時の床面から墳丘頂部までは3m前後で、墓底面から測れば、0.5mほど加算されるであろう。石室の開口方向については、南東から南西の方角の約90°の範囲に開口傾角を保つことが早くから判明している [森岡1979 bで詳述]。六甲山南東麓に派生する微視尾根上に占地する関係から、尾根斜面方向と密接な関わりがある。とくに南から南西に緩やかに下る斜面地に立地する古墳が多い当支群では、小起伏を伴う地形的制約を受け、当然ながら、上記の開口方位には、他の支群以上のバラツキが認められる。また、尾根上に占地することによって、階段的に下方から見上げる視覚的高さの確保は、それぞれ実高以上の印象を与えたに違いない。墳丘全体の詳細調査を行ったものは限られるが、現段階では対象とした

3基には墳丘内外の諸施設として際立った遺構（例えば、内区列石・外区列石・墳丘内排水溝など）はない。

3墳の石室構造を概観すれば、第46・58号墳に共通する玄門石の存在が顕目される。袖部に洒然とした略四角柱の石材を玄門立柱石とし、隣り合う側壁材の高さと比較して2.5～3段分に相当する。袖部の計画的配置、玄門石の発達、近畿圏における畿内系横穴式石室墳の構造編年上、指標となる部位であり〔太田1999・2002・2003a・2003b〕、八十塚古墳群や平支群においても、こうした特徴はストレートに反映されている。側壁用材は、普遍的に見られる在地産の六甲花崗岩の転石の特性を巧みに生かし、自然平坦面を持つ石材や割石、小タキによる面加工材などを組み合わせて石材を積み上げている。Ⅱ章でも触れたが、用材の供給地で石室構築を行える本古墳群の総合的な利点、有利性はきわめて大きく、換言すれば、そのような地理的条件・立地条件に牽引されて群自体が被葬者層の拡大を順次受け入れ、遺地範囲を次第に拡張・充足していったとも言える。

床面の構造は、整地土を敷布した土床と花崗岩などを主に利用した礫床がある。今回検出の3基の中で、床面の調査を進めた第45号墳（羨道部の一部）と第58号墳については、第45号墳で土床、第58号墳で礫床を確認した。礫床は、群内既掘墳中、13基35%の比率を占めており、その存在意義については、すでに幾度かの考察がなされている〔森岡1979b・1983b、森岡編1983・1986、合田2002など〕。第58号墳に関しては、礫の貼られる範囲が玄室部に限られ、玄門石を境として礫床はなくなる。羨道部に若干の礫が見られたが、検出状況から羨道部にまで礫が敷かれていたとは考え難い。使用される礫は一部に板状の石材が見られたが、主として10～20cm大の自然石をより扁平に予め半裁し、意識的に斜面を下に据えている。こうした傾向は、本古墳群に敷設される礫床に通用なものである。墳丘築造前の地表面は南～南東方向へ下る緩傾斜面を形成しており、その支根根上に占地していたため、石室を構築するための基壇を掘り込んで、石室を構築する基盤づくりを行う。この段階で、基盤層中に包含される巨礫を抜き取っており（図版8中・下段）、これも同様な作業工程が以前から複数墳にて確認されている。そして、幾層かの整地土を置き、礫床を据え付けるためのシルト質ペーセント状の生地（灰白色細粒砂質土）を貼って礫を嵌めていったと考えられる（図版7）。礫の抜き取り痕跡と発掘時の除去作業から確認できるもので、水分を含んだ柔らかい土に、礫を計画的に「押し嵌めた」状況が観察でき、礫床面のレベルは個々の石材の底面の据え付けで厚味を解消する努力がなされている。これらは初葬時の造作と理解した。

第58号墳は、床面の検出枚数が礫床の1枚きりであった。繰り返すが、これは追葬がなかったことを保証するものではなく、最終結果として1枚の床面しか視認できなかったということである。類推レベルでは、初葬時は土床で、追葬時にある程度の片付け行為を伴う礫床の新設が行われた可能性も考えられる〔森岡1983b・1984b〕。さらに、初葬時の礫床を追葬時も連続的に使用したと考える方が自然であろう。この点については、第58号墳に関して、出土遺物の時期差から追葬が容認される。また、金環や玉類、須臾器など副葬品の出土点数の僅少なことを考慮すれば、当然盗掘を受けていると見て大過なく、床面の観察のみに依拠した形では、遺憾ながら追葬の有無や棺位配置などを論証するデータは得られていない。この点は他の古墳と比べ、不良である。

棺材については、木質遺物は確認していないが、鉄釘が出土していることから、鉄製の釘で緊結された木棺が内蔵されていたと考えられる。埋葬者数は釘の数や位置からも不明確で、委曲を尽くせない。微小遺物については、敷石間などに早くに陥入したことも考えられ、逆にプライマリーな状態を保つものがあっただけと思われる。

石室の平面プランは、第58号墳が左側壁の遺存率がきわめて悪く、あくまでも推測になるが、やや胴張りぎみの右片袖式か、もしくは両袖式になる。他の2基の古墳では、第45号墳は両袖式、第46号墳は右片袖式もしくは両袖式と推測できる。八十塚古墳群内ではミニマムクラスの無袖式堅穴系小型石室墳を除くと、両袖式9%、右片袖式20%、左片袖式6%、無袖式43%の構成を示し、不明確な例も8基23%を占めている。

③ 築造時期と群形成および支群・小支群形成

次に、古墳築造時期の検討を踏まえ、3基の築造序列を整理しておきたい。今回検出した3基の古墳は、第58号墳→第45号墳→第46号墳の順に築かれたと考えている。その根拠は、煩苛な手続きを要しようが、第一に出土した須臾器を基本とすれば、第58号墳の墳丘・石室内や前庭部で検出した最古相遺物の時期がTK43型式ないしは僅かながら先行型式併行期に相当し、3基中最も古い時期に比定でき、岩ヶ平支群自体の造墓開始時期と大きく触れ合う。第二に土層断面観察（第45・46号墳間トレンチ）の所見を重視して、第45号墳→第46号墳の先後関係が明らかに検証できた。第45号墳羨道部中央セクション床面付近で、TK217型式併行期の杯蓋1点が出土

しているが、当資料については築造時期本来の遺物ではなく、出土位置からみても追葬時期との関わりを想定する方が利便であろう。これら2基の古墳が一對をなして計画的に小墓域を占有した可能性も考えられてよい。第三に石室構造から眺めると、第46号墳と第58号墳の玄門石の特徴や側壁の積み方、1枚の巨礫（鏡石）を使用する奥壁の使い方は類似しているものの、玄室法量や玄室平面プランには違いが認められる。第58号墳の玄室長は4.1m、玄室幅1.7m、第46号墳の玄室長は4.5m、玄室幅1.6mで、第46号墳の方が床面積が大きく、かつ平面形は長方形化が進んでいる。この傾向は、1960～1970年代に既に指摘されており〔白石1966、都出1970〕、家族構成員の追葬を視野に入れた墓制の変容、石室構造の畿内的変容を前提とした型式変化として理解可能な知見である。消極的ではあるものの第一、二で指摘した点と殊更抵触するものではない。

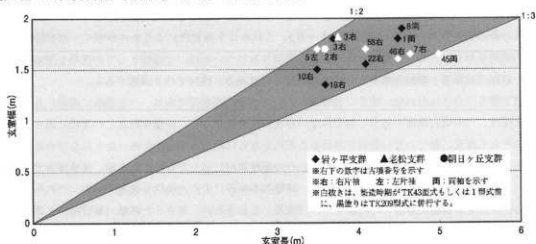
この点をいまだ確認するために、次ページに掲げた第2表を作成した。石室高や羨道部を完全に保持しきれていない八十塚古墳群の有袖式石室群にあっては、古墳被葬者の階層性を端的に示唆する石室構造部位は玄室の幅や長さであり、玄室面積である。そして、本来は玄室容積が墓室グレードの示準を反映しているよう。玄室全長に関しては、片袖や両袖といった袖形式や構築時期に左右される玄室の長大化とも関連するため、一概には言えないが、本書で報告している3墳については相対的位置を推し測ることはできるだろう。条件を満たす検討対象は限られるも、ひとまず群全体の大まかな傾向として、その大部分の古墳が玄室幅1に対して長さが2から3の割合で長室化するプランを採用することが判明する。玄室幅は袖石の形骸化、壁体埋没化が著しく、無袖化の方向性を強く志向する岩ヶ平第19号墳を除けば、概ね1.5mのラインを超えるもので共通し、1.9m以下に偏る点でも比較的均質である。群中に特大プランを誇示した玄室が存在しないこと、見方を換えれば、群中で傑出した規模を誇る大型古墳や前方後円墳を全く含まないことと密接に絡むことを改めて確認できる。第一に支群単位や小支群単位で玄室プランが数値の上で類似するものが目立つことがあげられよう。とりわけ朝日ヶ丘支群の玄室長幅比1:2のラインに近似的2基（1・2号墳）と1:2のライン上に大略乗る岩ヶ平支群の第3・5号墳は、規模を含め近似要素のみられる平面プランを採っており、群内を分つ支群間での類似性を如実にみせている。今回計測値が提示できた岩ヶ平第45・46・58号墳は概ね1:3のライン寄りの近いグループで玄室幅が近縁な関係を有し、小支群内における小グループの緊結性の高さを某か反映している点を特記しておきたい。また、玄室幅が互いに最も近く拮抗するため、そのグループ内規制が最も強く働いていることが窺えよう。

築造時期については、岩ヶ平支群の既掘墳の中では最も古く、6世紀後半の第3四半期には第45・58号墳共にその造営を開始したと判断しているが、確実なところ、第58号墳が最も早期に築造されたと考えられる。換言すれば、本小グループにおいては、最高所に立地する第58号墳が先ず造られ、続いて下降して第45号墳を構築、さらに並列するように第46号墳（第26号墳の延長石室の可能性は低い）を伴同的に築造したと推測される。3古墳の石室主軸は真北から東2度、西11度の偏角内に緊密な集中をみせ、これら3古墳の視線性は開口方位に関しても歴然としている。ところで、3古墳が空閑地を挟んで南北に大きく分離されることの主たる要因は二つ考えられる。第一は、3古墳を乗せる派生丘陵の自然段差がこの間にあって墳丘や石室の構築（テラス形成）に不適であったこと、第二はグループ内盟主墳の第58号墳固有の仮想兆域を意識的に避け、一定距離を置いた下段部に計画的に築造されたことの二点であり、岩ヶ平支群内では前者とみられる具体例が散見される。困難視される結論はこの際留保せざるを得ないが、群集墳が一定の墓域に立錫の余地なくもなく造墓活動を行ったことは考え難く、古墳間、小グループ間に生じる有機的な空白域、間断、そして衰廃の意味や本質を常々考慮する必要がある。

④ 第58号墳石室検出の装身具類について

第58号墳の出土遺物に関して、V章の記載を若干補足しつつ考察を加えたい。対象は副葬品の中では衆目を引く品目となった装身具であり、石室床面で検出された副葬品として水晶製切子玉や琥珀製素玉は本古墳群では初例のものとして貴重である。共存遺物にも耳環・碧玉製管玉などの装身具が認められ、種類の上でバラエティーに富んでいる。支群中における被葬者の階層的な位置を推測する上で特筆すべき組成を提示している。出土位置から見て、これらの装身具は初葬棺に伴うものとみてよいだろう。いまこれと酷似する装身具組成を市内の古墳例に求めると、明治42年（1909）に福原会下山人・村上五郎・西村義則の3氏が通称坊主山で採集した駒塚古墳に金環1、水晶製切子玉1、碧玉製管玉1、勾玉1、ガラス製素玉15、滑石製素玉5などがみられ、八十塚古墳群の群中諸墳よりもむしろ親和的なありかたを示している〔村上1905、勇・藤岡1976、古川1976b、森岡1984b〕。

第2表 八十塚古墳群(有袖式) 玄室幅・玄室長比率分布



古墳名	玄室長	玄室幅	石室袖形式	初葬時期
朝日ヶ丘2号墳	3.6	1.7	右片袖	TK43
岩ヶ平1号墳	4.5	1.8	両袖	TK209
岩ヶ平3号墳	3.7	1.8	右片袖	TK209
岩ヶ平5号墳	3.5	1.7	左片袖	TK43
岩ヶ平7号墳	4.65	1.65	右片袖	TK43
岩ヶ平8号墳	4.55	1.9	両袖	TK209
岩ヶ平10号墳	3.5	1.5	右片袖	TK209
岩ヶ平19号墳	3.6	1.35	右片袖	TK209
岩ヶ平22号墳	4.1	1.55	右片袖	TK209
岩ヶ平45号墳	5.0	1.65	両袖?	TK43
岩ヶ平46号墳	4.5	1.6	右片袖	TK43
岩ヶ平58号墳	4.1	1.7	右片袖?	TK43
老松3号墳	3.76	1.82	右片袖	TK43

また、類例の少ない臺玉は山芦屋古墳にガラス製のものがみられる〔勇・藤岡・森岡1977、森岡1984b〕。近隣では、西宮市具足塚古墳に耳環と碧玉製管玉が副葬されていた〔勇・藤岡・前田・古川1976〕。総じて、単独の立地の横穴式石室墳や盟主クラスの横穴式石室墳に豪華な副葬品と共に類品や近似の組成があり、本墳の装身具の組み合わせは、禁欲的に見ても市内では古色の古墳との時間的関係を堅持したものとみられよう。

⑤ 石室外の土器類の扱いをめぐって

今回の発掘調査では、石室外からも古墳と関係する土器群の遺存が各所で確認されている。出土数も石室内資料を圧倒するものであり、第58号墳の事例は検出土器の9割方を占める点、群中にあってはきわめて特異なものである。この点についても言及しつつ、検討を加えてみよう。

第58号墳では、右側壁前庭部における土器散布や周溝痕跡と不可分なA～Cの土器群、さらに墳丘埋納坑出土土器や第45号墳開口部右側の土器散布などが性格付けの必要所見である。これら須恵器や土師器が意識的な埋設および散布面をもって蒔かれていた状況について、石室内の儀礼と関わる「コトワタシ」「ヨモツヘグイ」〔小林1946・1976、白石1975〕や、追葬時の石室内片付け行為〔森岡1983・1992〕など、これまでにも試みられてきた一連の解釈ともある種密接な絡みを有しており、古墳全体として有機的な検討が要請されよう。

I区出土の須恵器は二、三点図化しているが(第22図、杯・台付長頸壺など)、全体的に7世紀に入るものが主体であり、第58号墳の背面に相当する区域だけにその由来が気にかかる。追葬期の遺物がここまで散布するとは考え難いので、これらの遊離資料は第58号墳より北側に分布する一群の古墳に伴うものと考えている。他方、IV区から出土した土器類(第52図)については、第58号墳関係の遺物を含む可能性が高い。実際、直接接合できた須恵器もあり、大破している第58号墳石室から浮動してきた破片を払拭することができない。V区の場合は微妙な土器が含まれる。第60図-3・4はいずれもTK209型式新相段階の杯身であるが、墳丘盛土内に入り込むに

は不自然な時期のものである。おそらく墳丘間の流土堆積物中に交じった遺物と解釈され、2古墳との関係では再検討が必要な資料と言えよう。Ⅱ区からは第58号墳に確実に伴う資料として周堀土器溜りCがあり、須恵器を主体とする一群の資料がみられる(第37図-1~6)。これらは7世紀代に下るものが多く、初葬時の所産とは考えにくい時期を示している。1個体分から成る土器溜りBについては、土器棺としての使用も想定之余地を残しており、石室内被葬者と類縁関係をもつ幼少児埋葬や従属埋葬も検討すべき課題である。

第58号墳で最も注目されたのは、墳丘に包蔵されていた大量の須恵器であり、一定個所に幾重にもわたって埋納された状況は、八十塚古墳群では全く例をみない存在形態を提供した。総個体数はこの遺構に限っても数10個体あり、おそらく復元し得ていない資料を含めるとそれをさらに超える出土数があったとみなされる。第27・28図は図化したものを上層確認資料をある程度意識しつつ器種本位に示したものであるが、現地調査では複数の埋設を意識して数回にわたって取り上げているため、時期差を射程に入れた検討も必要である。これらは次項に譲ることとし、ここでは器種に着目した特徴を二、三言及しておきたい。目立った杯類(第27図)と共に上層部で検出された須恵器には、台付長頸壺(第28図-49・50)、短頸の広口壺や甕(第28図-46~48)、埴輪(第28図-54)、平瓶(第28図-51~53)などの比較的豊富な器種が認められ、埋納下部に至るほど杯身が増え(第27図)、大型甕(第41図-1)の一部、長脚二段の無蓋高杯(第27図-37・38・39)などが加わってくる。この土器埋設には収納の単位を大小の容器類で示唆しつつ明らかに同一地点への土器集積を企図したことが強く窺われ、石室内副葬土器群からの移動遺物と推測することもできる。その場合は、墓室の片付けによる集積先と見なすこともでき、築造時の墳丘内供献遺物と考えた現地調査段階での所見は撤回の要もあろう。

石室狭道開口部前庭の実例は、2基の古墳でその検出状態を確認できた。第58号墳の西側開口部前庭からは須恵器杯類多数と有蓋・無蓋の高杯、壺・埴輪などの器種がみられる(第38・39図)。これらは墓前供献後、破砕された一群の土器類と思われる。また、第45号墳前庭部出土の横瓶2個体(第63図)も貴重なあり方を示す。

⑥ 出土須恵器をめぐる諸問題

調査時の凡失が多々あって十分な出土記録が残っていない恨みを残すが、巻頭写真Ⅳや図版19~37を瞥見して明らかに、古墳や被葬者自体と様々な関係を取り結んだ多数の須恵器は、出土古墳が僅かに一墳に集中したものであるため、一考を加えるに値する資質を保持した資料と言える。深化させるべき検討の課題は、生産地や製作技術の問題、型式編年上の問題、葬器・祭器として意味する器種の共有ないしは個々の古墳あるいは集団間で対照する性格の問題などが要となる論点であろう。

次に、第58号墳から出土した須恵器杯身を材料に初葬時期と追葬時期などの年代的検討を行ってみる。器種として杯身に基礎を置いたのは、既出の窯跡編年との対比が試みやすいからである。第58号墳から出土した杯身の中で層位や出土位置を先ず度外視し、口径ないしは復元口径値が有効と判断できる残存率を維持している個体(ここでは最低でも1/2以上残存)19点を選択し、データの若干を整理した。以下で扱う「立ち上がりa」は垂直高を、「立ち上がりb」は突出長(斜め実長)を表すものとする。第3・4表は、「口径」と「立ち上がりb」を基準に法量順に並べ替えたものであるが、「立ち上がりb」を選択した理由は、「立ち上がりa」が器体自体の歪みや口縁部の僅かな傾きでさえ垂直方向の高さに誤差的なノイズとして反映する現実を避けたかったためである。資料操作の誤まりはまぬがれないが、いずれもミリ単位の値で近似する箇所だけに、実長を表す「立ち上がりb」が有効と判断した。文章のみで補足しておくが、「立ち上がりa」を基準に並べ替えた場合においても第27図-13と第40図-7以外は、立ち上がり高の大きい数値、すなわち口縁部が上に突出する方から順に田辺編年MT85型式(以下、MT85型式と略す)、中村編年Ⅱ-3段階(以下、Ⅱ-3段階と略す)、さらに後続するTK43型式、Ⅱ-4段階に包括される一群に収まる点は重視されてよい。

遺物個々の編年の位置付けである「型式」や「段階」の認定については、編者2名の討議によって判断したものであり、研究者個人によって若干のブレは避けられないものといえ、ここではあえて出土須恵器そのものが有する法量(とくに口径と立ち上がりb)属性の方を優先視した。

まず、第58号墳の初葬時期を究明する前段作業として、最も古い型式に比定される一群の抽出が必要となる。今回抽出した19点と、先述した抽出基準に満たない細片も含めて通覧すると、MT85型式、Ⅱ-3段階に位置付けられる資料は、第27図-11(墳丘内出土)・第38図-15(前庭部出土)・第39図-43(前庭西)などが抽出を、

古い要素が多く見られ、この一群の須恵器杯をもって第58号墳の初葬時期を示していると仮定する。

次に、追葬時期を含めた後続の杯のグループを探る作業として、初葬時期の土器群に後出する型式の抽出を試みた。その結果、田辺編年で3型式4段階（TK43型式・TK209型式古相・新相・TK217型式）、中村編年で3段階4階梯（Ⅱ-4段階Ⅱ-5古・新相Ⅲ-1段階）に弁別できる遺物群が抽出できた。TK43型式、Ⅱ-4段階に比定される第27図-18・19・23・27・31の一群、TK209型式古相、Ⅱ-5段階古相に比定される第27図-14・33、第39図-37の一群、TK209型式新相、Ⅱ-5段階新相に比定される第27図-9・13、第40図-7（その他出土遺物）の一群、それ以外のTK217型式、Ⅱ-6・Ⅲ-1段階以降に比定される一群の土器類がある。

しかし、ここで重要となる編年的に先後関係を保って弁別された土器群の出土状況を検討すると、層位や遺物片個々の上下関係が編年の位置付けを補完するに足る証左は得られず、むしろ追葬時に初葬時の副葬遺物を一括して別型式をも共有させつつ墳丘内もしくは前庭部に埋納・散布したとみられる点が目玉される。

型式学的な問題では、古相を示す一群が八十塚群集墳、就中岩ヶ平支群の群形成初期段階の歴史的評価と関与するものであり、抽出した資料の個々に分析を加えてみる。第60図-1は、第45号墳玄室右側壁際で検出されたものであり、天井部しか遺存しない杯蓋で少々心許ない点を見るが、Ⅱ型式第3段階、MT85竈段階に比定し得る。同様に、第58号墳西半墳丘土器集積場から検出された土器の中に、支群内では最古相を呈する資料が存在することも看過できない。第3・4表のTK43段階の杯以外に、やや先行する要素をもつMT85段階の杯類が比較的低い位置に存在したことは注意されてよい。先にも指摘したように、初葬棺に伴う副葬品の多くが一括石室から片付けられ、定められた集積場に動かされたことも十分考えられるからである。

支群形成が孤立する一墳から忽然と築造を開始したとは考えにくいので、今は時間的に幅をもたせ、F小支群内の本グループから群形成が始まったと理解している。

⑦ F小支群内での位置と古墳群・支群の構成について

報告した3古墳の実態については、未掘部分も多く、将来に委ねる事項がいくつもあって半端の考察となったが、岩ヶ平支群の中でも当該3墳を含み込むF小支群は中核的な造墓活動を行っている事実を追認できた。また、同時に本小支群そのものが幾つかの小グループを形成していることも判明し、ここではそれらに対して、若干の系譜関係を見通しておきたい。第Iグループは最北端に位置して、第58号墳を形成の発端とし、支群中でも最古段階に成立したことが予測されるが、丘陵の自然傾斜の緩斜面に立地し、現状で確認できるのは第58号墳1基だけである。このグループには未確認の並列する古墳が存在することをとりあえず仮定しておく。第IIグループは

第3表 八十塚古墳群 口径の小さい順

報告書番号	口径 (cm)	器径 (cm)	高さ (cm)	立ち上がりa (cm)	立ち上がりb (cm)	編 年
第27図-20	11.2	13.1	3.4	0.8	1.1	TK209-217
第39図-31	11.2	12.6	3.4	0.6	0.6	TK217
第27図-13	11.6	13.5	3.1	1	1.2	TK209-217
第27図-15	11.6	13.2	3.6	0.5-0.6	0.8	TK217
第27図-22	11.6	14.3	3.3	0.8	0.9	TK209-217
第40図-7	11.6	13.4	3.1	0.9	1.1	TK209-217
第27図-36	11.6	13.6	3.2	0.6	0.8	TK209-217
第27図-9	11.7	13.6	3.5	0.8	1.1	TK309-217
第27図-27	12.3	14.8	4.1	1	1.3	TK43
第39図-37	12.3	14.2	3.3	0.7	1	TK209
第38図-15	12.6	15.2	3.2	0.8	1.1	MT85
第27図-18	12.8	15.1	4.0	0.9	1.2	TK43
第27図-14	13.3	15.6	3.4	0.8	0.8-0.9	TK209
第27図-19	13.4	15.3	3.9	1	1.2	TK43
第27図-23	13.4	15.4	4.1	0.9	1.1	TK43
第27図-31	13.4	15.3	3.6	0.9	1.2	TK43
第39図-43	13.4	15.5	3.2	1.1	1.3	MT85
第27図-33	13.6	15.6	4.2	0.7	1	TK209
第27図-11	13.8	15.2	3.5	1.1	1.3	MT85

第4表 八十塚古墳群 立ち上がりbの小さい順

報告書番号	口径 (cm)	器径 (cm)	高さ (cm)	立ち上がりa (cm)	立ち上がりb (cm)	編 年
第39図-31	11.2	12.6	3.4	0.6	0.6	TK217
第27図-36	11.6	13.6	3.2	0.6	0.8	TK209-217
第27図-15	11.6	13.2	3.6	0.5-0.6	0.8	TK209-217
第27図-14	13.3	15.6	3.4	0.8	0.8-0.9	TK209
第27図-22	11.6	14.3	3.3	0.8	0.9	TK209-217
第27図-33	13.6	15.6	4.2	0.7	1	TK209
第39図-37	12.3	14.2	3.3	0.7	1	TK209
第27図-20	11.2	13.1	3.4	0.8	1.1	TK209-217
第27図-23	13.4	15.4	4.1	0.9	1.1	TK43
第27図-9	11.7	13.6	3.5	0.8	1.1	TK309-217
第38図-15	12.6	15.2	3.2	0.8	1.1	MT85
第40図-7	11.6	13.4	3.1	0.9	1.1	TK209-217
第27図-13	11.6	13.5	3.1	1	1.2	TK309-217
第27図-18	12.8	15.1	4.0	0.9	1.2	TK43
第27図-19	13.4	15.3	3.9	1	1.2	TK43
第27図-31	13.4	15.3	3.6	0.9	1.2	TK43
第27図-11	13.8	15.2	3.5	1.1	1.3	MT85
第27図-27	12.3	14.8	4.1	1	1.3	TK43
第39図-43	13.4	15.5	3.2	1.1	1.3	MT85

第26・45号墳と第46号墳から成る。これらは緊結度も高く、時間を介在させつつ築造を続け、継起的にグループ形成に至った一系譜の親族集団であろう（第6図）。

岩ヶ平支群の支群構成の基礎単位は、〔森岡1979b〕を踏襲した手法で既にA～Iの小支群の設定と追加試行がなされており〔関西大学考古学研究室編2002〕、その構成墳は1墳（C・D小支群）、2墳（A・G・I小支群）、5墳（E小支群）、8墳（H小支群）10墳（F小支群）など、総じて包摂する古墳数に著しい格差が存在するが、これはひとえに調査面積や開発の進み具合、纏まりの捉え方、グルーピングの方法、加えて発見率などに起因する。そして、現象的には、下位単位である「小群」〔森岡1973・1979b〕の包含数に左右されるとみてよい。微地形に着眼した地勢的な立地論に立てば、コンタの密集度が高い傾斜地ほど群集度合いを増すことが現象として指摘でき、その典型的な姿がE・F・H小支群の稠密な分布状態によく表れていると言える。さらに憶測を逞しくするならば、当支群の活発な造墓活動がやや勾配がきつくなるドンドン川に近い丘陵斜面地をあえて志向すると見なすことは許されよう。とりわけ丘陵の上方斜面を等高線に直交して南南東に流下してくるドンドン川は、標高100mを超えるところから西方には尾根状に張り出す地形に塞がれるように流れを南東方向に変え、E・H小支群を東西に分離する。この断割された谷地形の両側斜面でとくに密集度を高めている。一方、標高85m以下の丘陵低所に選地するA～D・G小支群の古墳間隔は、数mから10m内外の距離で近接する上位の前グループとは異なり、40～80mとかなり散発的であり、上位斜面と下位斜面の築造手法や立面観処理、あるいは墓道造成など、細部の地形と関わる多様な人文的条件が絡んでのことと思われる。丘陵地とはいえ緩急地形に富む中、急斜面や平坦地の選択はかなり築造母体集団の選択意識が働いている。この点、西に位置する朝日ヶ丘支群は瘦せ尾根上の最先端という独立ピークのな立地を示しており、別支群として全く様相を異にした選地姿勢を窺わせる。また、〔森岡1973〕や〔森岡1979b〕でも既に言及しているが、南端緩斜面上に乗るA・B小支群は総じて石室主軸を磁北より等高線に平行近くまで偏角して南西方向を志向する傾向が濃厚で、岩ヶ平支群中、やはり別の規制を強く受けているように思える。下位グループは上位グループとは異なって、後続する無袖式石室の検出数が乏しく、構成墳そのものは等質的であって、この点でも際立った群形成の趣向の違いをみせている。端的に言えば、支群経営の途中段階ではなく、造墓の累積結果の反映であり、長期の築造計画の相違を意味するものであろう。しかし、支群を構成するからには、顕著な二者の様相の違いをみせる関係も歴史的には相即不離なものであったろう。

なお、支群中最北端に位置するI小支群（構成墳2基）は、58号墳からさらに北方120m程遠ざかった場所にあり、地形的には老松尾根の基幹部にも当たるため、老松支群や剣谷支群に分類すべきとする再考案〔濱野2003〕や従来からの再編成論〔古川1975〕が作用して、岩ヶ平支群に帰属させること自体が不適切とみる見解が支配的となりつつある。仮にこの小支群を支群からオミットすれば、今回の調査地点は岩ヶ平支群最北端の場を占めることになり、その経営の始期や計画性を考える際に意味ある位置環境に立地していることになるだろう。

⑧ む す び

21世紀に入り、群集墳や横穴式石室の研究は細部にわたり緻密になっており、こうした報告書のレベルでは、渉猟の行き届かない個別分析に終始した。しかし、管見に触れた報告書の中では、「播磨における横穴式石室副葬品の実態」の真相に迫った新しい手法の研究もあり〔荒木欄2006〕、石室墳における土器類の往時における取り扱いと私たちの手中にある取り扱いとの関係性を改めて考え直す契機をなした。筆者らの検討手法は旧態依然とした杯類を用いての段階区分を用いたが、本来的には田辺昭三・中村浩らの陶器編年と整合はとれないものと考えており、あくまで八十塚群集墳内部でしか有効性のない杯の形質の違いに基づく区分であり、時間を適確には表明しないグループ設定にしかすぎない。ただ、提版と平版にみられる場ごとの排他性など、葬器・祭器として用いられる須恵器の組み合わせについては、横穴式石室使用の本質が示唆されているように思われ、この報告書で提示されている数群の須恵器や土師器には、その基礎資料としての有用価値が認められるものと思う。渡辺邦雄による前庭部や墓前の地道な分析作業〔渡辺1996・1999・2002〕なども、本書における報告を再考する上に欠くことのできないものであり、将来関係づけたいと考える次第である。

（森岡・坂田）

(2) 石切場の機能的検討

旧家屋が解体され断絶した調査地は、6～7世紀に造墓活動を続けた古墳時代後・終末期の古墳群と17世紀初頭以降の石切場が重複する複合遺跡であり、これまでも類似した調査例は数多い。本節では、そのうち後者について検討する。具体的には近世初頭の徳川大坂城築城期にこの土地の持っていた有機的機能、土地利用実態の追求にあるが、個々の丁場を占有・経営したであろう藩の問題、採石場の中で演じた基本的役割、石曳き道など石材搬出ルートの問題や労働過程、検出遺構個々の具体的使途他、若干の推論を混じえつつ朴素なる考察を加えたい。

① 大坂城の割普請、石切丁場割との関わりについて

東六甲採石場においてこれまでに設定されてきた6刻印群（西から城山・奥山・岩ヶ平・越木岩・北山・甲山、最近では左記の6刻印群に加え、住吉川周辺の割石石材分布範囲についても周知されつつある〔森岡・古川2002、森岡・古川・濱野ほか2003、森岡・坂田2005c〕）の中で最も発掘調査件数が多く、藤川祐作氏、古川久雄氏らの民間調査の基礎があってデータ集積率の高い岩ヶ平刻印群内に本調査地は存在する。石切場においても普請丁場同様、割普請のような分担領域があったようで、そのエリアの実相・機制についても幸い一定の研究が進捗してきた。

本調査地周辺でその具体例を示せば、西方20mを南に流下するどんどん川を境に西側に長州藩毛利家、北西側に小浜藩京極家、北側に鳥取藩池田家、そして市境を越え西宮市域に入って再度小浜藩京極家の担当丁場が想定されている〔古川2003・2004、森岡・古川1998、竹村・白谷2005a、森岡・坂田2005b、森岡2005a・b〕。いずれも、刻印石のドットマップをベースとした実証的な分布に視点を置いた成果であるが、河川や尾根など地理的様相を有機的に加味しての推定範囲が明らかとなっている。第65図にはその実態を示すが、本調査地以南は定かになっておらず、不分明な点が多い。今回の調査では、1号石材の「㊦」、2号石材の「㊦」・「㊦」の3刻印が確認されており、これらをヒントに刻印の由来を推測してみたい。

まず、整理しておきたいことは、V章で既に報告したように、これらの刻印が担当大名に直接結びつく家紋や、家紋省略刻印とは考え難いため、別途考察の歩を進める余地がある。その方法としては、①担当丁場割の判っている採石場において類例を探索し、同伴関係を洗い出し、伴出率から主刻印を基に因果関係の類推を試みる。②供給先である大坂城の石垣の普請丁場割の信頼から分担大名の割り出しを試みる。これと同等に複数刻印の同伴関係が大きな手懸かりとなる。二つの視点からの考察が不可欠と思われる。

①について、採石場での類例に当たってみると、「㊦」は東六甲の採石場全体を通覧して現時点では当石材のみの存在である。類似するものでは「㊦」が1例検出されている。「㊦」は岩ヶ平刻印群中、若狹小浜藩京極家の丁場内で、「㊦」と併刻される矢穴痕を持つ割石である〔森岡・古川・濱野ほか2003〕。対して、1号石材は原位置を保ち、単独刻印で刻印以外の人為的な行為が加わっていない自然石であることが大きく相違する。傍示的機能が強いことは報告したとおりであり、「㊦」とは漢数字を基本としての形象の類似は認められるものの刻印の意味としては別のものと考えられる。

併刻される例はそれぞれの刻印群でも比較的多見される特徴であり、多くのケースを想定した複数の解釈も提示されている〔森岡・古川1992〕。「㊦」は東六甲採石場では初例である。類似する例として「㊦」が奥山刻印群越前福井藩の推定丁場で検出されている。「㊦」の類例は、V章で記述した。このように、「㊦」や「㊦」の刻印の本採石場での類例は乏しく、たとえ今後の調査や踏査活動において追認されたとしても、数十単位での増加は望めない刻印と考えられる。むしろ、かような僅少性が「㊦」や「㊦」の刻印としての意味や機能を表していると逆推されよう。

一方、②の手段により大坂城の石垣に類例を求めてみると、以下のようである。まず、基礎作業として、昭和34年度作成の『石垣刻印所別集』〔村川1962・1970・2002再録〕や『大坂城石垣集』〔築城史研究会2007〕を参考に、「㊦」・「㊦」・「㊦」の同種刻印が彫られている石垣を抽出する。次に『大坂城普請丁場割の図』（2種）とこれを整理した『大坂城誌』〔小野1973復刻〕を参照し、抽出した石垣の構築を分担した大名を割り出すことにより、刻印とその所用大名の関係性を、採石場と供給先である大坂城での丁場割に求める作業を進める。ただし、石垣完成後の形式的な分担境界線とその左右に意図的に彫られた刻印の存在や、刻印箇所と壁面の

対照照認、「普請丁場割の図」における当時の誤記などもあり、安直に担当大名を絞り込むことには躊躇を覚えるが、降り合う割普請間の協力・協業体制があったことは疑う余地はなく、両脇の担当大名まで含めて挙げると、以下の様になった。

「㊦」は、西外濠・北外濠・南外濠・東外濠・内濠などで約80例が確認されている。壁面積の広狭や、築石では小面のみしか検討の対象にできないうらみもあり、結果として北外濠が多く約40例を数え、内濠の30個がそれに次ぐ。分担当大名を上記した手順で引き出すと、北外濠は松平越前守、松平新太郎、越前宰相、毛利伊勢守、京極丹後守、京極若狹守、一柳監物などの名が（担当壁面距離の長い順から記す、以下同）、内濠は藤堂和泉守、松平新太郎、松平宮内少輔、山崎甲斐守、戸川肥後守が、東外濠に至っては、松平長門守の単独丁場で確認されている。西外濠・南外濠では10例ほど確認しているが、東六甲採石場でも石切丁場が見られる池田家や京極家の名が挙げられる。

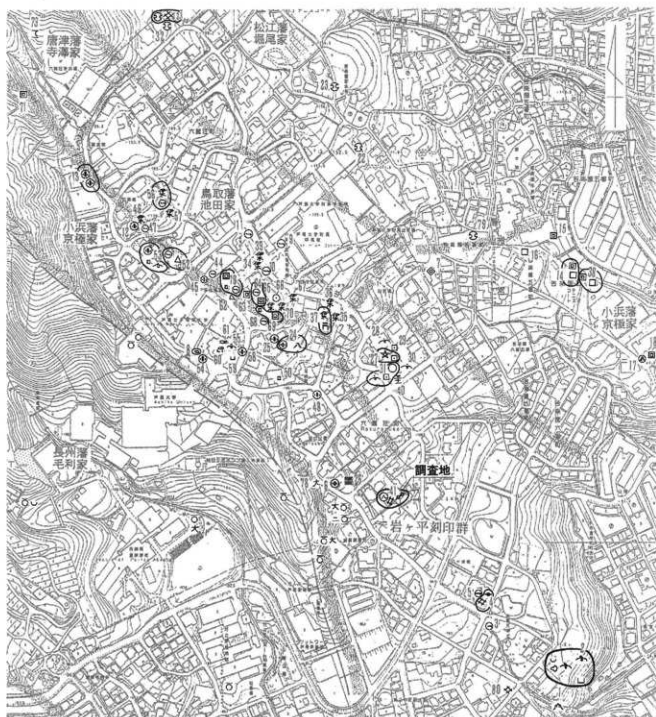
「㊦」の同種刻印は、大坂城石垣資料〔例えば、村川1962・1970、築城史研究会1970・2006、藤井1982など〕では皆無であるが、「㊦」や「㊦」の2つの円を貫通しない類似刻印は、南外濠と内濠で計4例確認でき、担当大名は松平筑前守、金沢中納言、織田河内守の名が見られる。さらに、「㊦」や「㊦」の類似する刻印は、西外濠に偏りをみせ、細川越中守・森美作・加藤佐馬助・有馬佐エ門佐・志（寺カ）沢志摩守・本田因幡守の名が確認できる。さらに、東外濠二の九個巽台東面石垣、巽台東南角より北へ4mの間で1点確認した。石垣天端から3石目に積まれている築石（平石）に彫られており、縦列に刻印が並んでいることから丁場割を示す境界線ラインに相当するであろう。このライン上には、毛利家の「㊦」や「天下」・「松平（長）門守」・「一つ柏」の刻印が確認されている。

「㊦」は、「㊦」との弁別が形態上難しいが、4本の直線の交差で作られる四角形が正方形を呈するものを「㊦」、菱形・算盤玉形を呈するものを「㊦」とした。また、刻印の上下（天地）寸法ないし法量については、格差がかなりみられるが、この際問わないものとした。まず、岩ヶ平刻印群での類例は、松江藩堀尾家の「㊦」と併刻される例、岩国町45番地では「㊦」と併刻される例、岩国町57番地では「㊦」の単独刻印が、その他、字飴谷でも確認例がある〔古川・森岡・濱野ほか2003、森岡・坂田2005c、森岡・竹村・坂田2006〕。大坂城の石垣では、「㊦」と「㊦」を合わせて西外濠だけでも100例を数え、限られた丁場に見られるのではなく、多数の大名丁場にまたがって見られる例が多い。したがって、当刻印が特定大名との関係を取り結ぶ刻印とは断言せず、石工集団の定印や手印・記号刻印といった別の意味も考える必要があらう〔森岡・竹村・坂田2006〕。

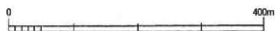
今回確認された2石材に見られる「㊦」・「㊦」・「㊦」の3刻印の類例を勘査して、雑駁ながら上記のごとく意味付けを行ってきた。「㊦」を除いて、「㊦」・「㊦」の2刻印は東六甲採石場ではそれぞれ1例を数えるのみで、供給先の大坂城の石垣では一定量確認できた。岩ヶ平刻印群の採石活動に参入した石工集団の中にこれらの刻印を使用する工人が含まれていたことは確かである。さらに、「㊦」は類似刻印として、円の数が1～5個までのバリエーションが存在しており、円を棒が貫通するものとしないもの、棒の両端もしくは片方を鍵状に屈曲させるものが存在する他、やや目立った小異も看取される。

同じ円と横棒を併用する大名家紋刻印（省略形）として、東六甲採石場でも活動領域の広い長州藩毛利家の「㊦」（一文字一星）があり、これは一文字三星を省略したものと見なされているが、「㊦」・「㊦」・「㊦」などの円の数については、やはり基本的には数を意味するものと思われる。なぜなら、省略が可能であるならば「㊦」が多くなるはずである。しかし、漢数字刻印も存在することから、今のところ何の数を表しているのかは不明である。円を貫通するかしないか、棒の端部が鍵状になるかならないかは、明らかに彫り分けているが、その意味も今のところ不明である。

「㊦」は、東六甲採石場奥山刻印群の越前福井藩松平家の想定丁場において唯一類似刻印が確認されているが、刻印「㊦」や「㊦」をもつ石材が所用される北外濠の割普請を瞥見すると、松平新太郎・毛利伊勢守・松平筑前守・一柳監物・京極若狹・京極丹後・越前宰相（松平家）の名が並ぶこと、岩ヶ平刻印群内での丁場割に長州藩毛利家・小浜藩京極家の推定担当丁場（第66回）があることは非常に興味深い。一足跳びに松平家と結びつけることは早計だが、採石場での丁場割と大坂城石垣での割普請が、一連の普請事業の中で密接な関係を持っていることは考えられてよい。



〔凡例〕(1) 各藩の石切丁場境界を示す。(2) 〇は同一調査地点を示す。(3) 刻印は模式図。縮尺は不統一。



第65図 岩ヶ平刻印群 刻印石の分布と各藩採石範囲 (1/6,000)

(古川編2003、森岡編1998、竹村・白谷2005 a・b 資料、森岡・坂田2005 a・b・c 資料の分布図・一覧表・拓影を改変して合成)

② 丁場機能からみた本調査地

石切丁場では、採石活動を支える石材の確保とそれらを実際に進めていくスペースはもとより、冒頭に記した一連の作業を円滑に行うに足るさまざまな作業を満たす空間が必要である。そして、その多機能なスペースの選地要件は、丁場という大枠のエリアの中で作業工程や地理的環境を十分勘案したものといえ、適材適所にそれぞれ機能空間を作り出していたと考えられる。徳川大板城の採石場は天下普請によるおよそ10年にわたる大事業の根幹的な存在で、与えられた石場、丁場内での効率的な作業空間の設営は石材搬出率をも大きく左右することになろう。その面でも、微地形に与えられた役割の認識は、石切場における人間活動、生産労働全体の構造を解明する上で重要な視点である。今回の調査では、当敷地内に包蔵されていた自然石（母岩）を直接割り取った遺構は検出していない。もちろん、第45・46・58号墳の諸石室の用材の一部を近世段階の採石に転用した可能性は考えられてよいが、2号石材以外に明瞭なAタイプの矢穴痕をもつ割石は限られた存在であり、第45号墳の羨道内で転用状況が確認された端石と調査前にひき上げられ、移動していた割石がみつかったにすぎず、当地で活発な石材截断行為が行われていた遺構を証するものではない（第45号墳の天井石は、Cタイプの矢穴痕が確認されているが、AタイプとCタイプの先後関係は、現時点ではCタイプが後続するものと考えている。その上限年代は不明な点が多いが、18世紀中頃あたりとみるのが無難である）。

ここで一まっ衆目を引くものに、I・IV区で検出した火化遺構がある。石工たちの鉄製造具修繕場としての関連施設や暖や炊飯をはじめ、雨水よけや休憩などのスペースとして利用していた可能性も考えられてよい。加えて想像を逞くするなら、第45号墳の羨道で検出されたAタイプの矢穴痕を持つ端石材の転用や炭痕、木燼痕の検出から、該期に石室を飯場ないしは物置場として使用していたことが推測されたことは、これまでに数例遺存した関連所見〔古川編2003〕に匹敵するものといえよう。金匠の活動拠点などが石切場でも想像されてよいと考える。横穴式石室の江戸時代における二次的使用例〔今西・森岡1973〕としても、おそらく初めての知見になるのではなかろうか。

Ⅲ区で検出した1号石材は、V章で記述したように傍示石と判断でき、丁場境界やどんどん川（幹線石曳き道）へ取り次ぐ結節点の意味を示唆するなど、なお多様な解釈が要請される。

要するに、丁場としての本調査地の役割の具体像は、純粋な採石場の要件を満たすものではなく、採石活動に伴う附属諸施設の一角が展開したと見る方が実態に則しているのではなかろうか。圧尾に際し晩達には程遠いけれど、作業本位の石材加工現場の遺構群としての濃淡の一端を明らかにできた調査地点と考えている。

（森岡・坂田）

第5表 出土遺物觀察表 (1)

[illegible]

第6表 出土遺物觀察表 (2)

[illegible][illegible]

[illegible]

第8表 出土遺物觀察表 (4)

[illegible][illegible]

行	作品名	種別	監督	脚本	原案	演出	音楽	衣装	美術	照明	編集	録音	効果	上映日	公開地	上映回数	備考
H-31	第330回	探偵活劇	伊藤	伊藤	11.9	3.6	中野実	片岡	1-37.57.91.95.96.97.98.99.100.101.102.103.104.105.106.107.108.109.110.111.112.113.114.115.116.117.118.119.120.121.122.123.124.125.126.127.128.129.130.131.132.133.134.135.136.137.138.139.140.141.142.143.144.145.146.147.148.149.150.151.152.153.154.155.156.157.158.159.160.161.162.163.164.165.166.167.168.169.170.171.172.173.174.175.176.177.178.179.180.181.182.183.184.185.186.187.188.189.190.191.192.193.194.195.196.197.198.199.200.201.202.203.204.205.206.207.208.209.210.211.212.213.214.215.216.217.218.219.220.221.222.223.224.225.226.227.228.229.230.231.232.233.234.235.236.237.238.239.240.241.242.243.244.245.246.247.248.249.250.251.252.253.254.255.256.257.258.259.260.261.262.263.264.265.266.267.268.269.270.271.272.273.274.275.276.277.278.279.280.281.282.283.284.285.286.287.288.289.290.291.292.293.294.295.296.297.298.299.300.301.302.303.304.305.306.307.308.309.310.311.312.313.314.315.316.317.318.319.320.321.322.323.324.325.326.327.328.329.330.331.332.333.334.335.336.337.338.339.340.341.342.343.344.345.346.347.348.349.350.351.352.353.354.355.356.357.358.359.360.361.362.363.364.365.366.367.368.369.370.371.372.373.374.375.376.377.378.379.380.381.382.383.384.385.386.387.388.389.390.391.392.393.394.395.396.397.398.399.400.401.402.403.404.405.406.407.408.409.410.411.412.413.414.415.416.417.418.419.420.421.422.423.424.425.426.427.428.429.430.431.432.433.434.435.436.437.438.439.440.441.442.443.444.445.446.447.448.449.450.451.452.453.454.455.456.457.458.459.460.461.462.463.464.465.466.467.468.469.470.471.472.473.474.475.476.477.478.479.480.481.482.483.484.485.486.487.488.489.490.491.492.493.494.495.496.497.498.499.500.501.502.503.504.505.506.507.508.509.510.511.512.513.514.515.516.517.518.519.520.521.522.523.524.525.526.527.528.529.530.531.532.533.534.535.536.537.538.539.540.541.542.543.544.545.546.547.548.549.550.551.552.553.554.555.556.557.558.559.560.561.562.563.564.565.566.567.568.569.570.571.572.573.574.575.576.577.578.579.580.581.582.583.584.585.586.587.588.589.590.591.592.593.594.595.596.597.598.599.600.601.602.603.604.605.606.607.608.609.610.611.612.613.614.615.616.617.618.619.620.621.622.623.624.625.626.627.628.629.630.631.632.633.634.635.636.637.638.639.640.641.642.643.644.645.646.647.648.649.650.651.652.653.654.655.656.657.658.659.660.661.662.663.664.665.666.667.668.669.670.671.672.673.674.675.676.677.678.679.680.681.682.683.684.685.686.687.688.689.690.691.692.693.694.695.696.697.698.699.700.701.702.703.704.705.706.707.708.709.710.711.712.713.714.715.716.717.718.719.720.721.722.723.724.725.726.727.728.729.730.731.732.733.734.735.736.737.738.739.740.741.742.743.744.745.746.747.748.749.750.751.752.753.754.755.756.757.758.759.760.761.762.763.764.765.766.767.768.769.770.771.772.773.774.775.776.777.778.779.780.781.782.783.784.785.786.787.788.789.790.791.792.793.794.795.796.797.798.799.800.801.802.803.804.805.806.807.808.809.810.811.812.813.814.815.816.817.818.819.820.821.822.823.824.825.826.827.828.829.830.831.832.833.834.835.836.837.838.839.840.841.842.843.844.845.846.847.848.849.850.851.852.853.854.855.856.857.858.859.860.861.862.863.864.865.866.867.868.869.870.871.872.873.874.875.876.877.878.879.880.881.882.883.884.885.886.887.888.889.890.891.892.893.894.895.896.897.898.899.900.901.902.903.904.905.906.907.908.909.910.911.912.913.914.915.916.917.918.919.920.921.922.923.924.925.926.927.928.929.930.931.932.933.934.935.936.937.938.939.940.941.942.943.944.945.946.947.948.949.950.951.952.953.954.955.956.957.958.959.960.961.962.963.964.965.966.967.968.969.970.971.972.973.974.975.976.977.978.979.980.981.982.983.984.985.986.987.988.989.990.991.992.993.994.995.996.997.998.999.1000	探偵活劇	伊藤	伊藤	11.9	3.6	中野実	片岡	1-37.57.91.95.96.97.98.99.100.101.102.103.104.105.106.107.108.109.110.111.112.113.114.115.116.117.118.119.120.121.122.123.124.125.126.127.128.129.130.131.132.133.134.135.136.137.138.139.140.1

[illegible]

第10表 出土遺物觀察表 (6)

[illegible]

引用・参考文献一覧

- 青木 敬 2004 『横穴式石室と土木技術』『古墳文化』創刊号 国学院大学古墳時代研究会
- 青木 敬 2005 『後・終末期古墳の土木技術と横穴式石室—群集墳築造における“畿内と東国”』『東国史論』第20号 群馬考古学研究会
- 秋里隆義 1796 『津律名所図会』(菟原郡)
- 浅岡俊夫 1981 『善見城』『日本城郭大系』第12巻 大阪・兵庫 新人物往來社
- 芦屋市教育委員会 1967 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳』(芦屋市文化財調査報告 第5集) 芦屋市教育委員会
- 芦屋市 1971 『新修芦屋市史』本篇
- 芦屋市教育委員会 1979 『芦屋の史跡 10. 城山古墳群と山芦屋古墳』『芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて』芦屋市教育委員会
- 芦屋市教育委員会 1988 『八十塚ヶ平10号墳現地説明会ノート』
- 芦屋市教育委員会 1997 『観覧の手引き 最新発掘! 考古学からみた芦屋展—95〜97震災復興調査の成果』
- 芦屋市教育委員会 2001a 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図 利用の手引き』(芦屋市文化財報告 第40集)
- 芦屋市教育委員会 2001b 『寺』字刷印土器と芦屋庵寺跡—第75地点発掘調査の成果から—(公開展示説明会資料)
- 芦屋市教育委員会 2006 『八十塚古墳群現地説明会資料—岩ヶ平支群第45・46号墳の確認結果と第58号墳の発掘調査並びに徳川幕末大板城岩ヶ平石切丁場・刷印石の調査—』平成18年2月5日、配布資料
- 芦屋市教育委員会 2007 『会下山から邪馬台国へ—高地性集落の謎と激動の弥生社会—』(会下山遺跡発掘50周年記念事業記録集)
- 芦屋市教育委員会・関西大学山芦屋遺跡調査団 1983 『兵庫県芦屋市山芦屋遺跡 S 4 地点現地説明会資料』
- 芦屋市広報課 2002 『刷印石の謎を解く—発掘調査からわかる大板城と芦屋の歴史—』[広報あしや] 第855号 芦屋市
- 芦屋市広報課 2005 『発掘・発見メモリアル2004—徳川大板城東六甲採石場の大規模調査終わる—長州藩毛利家の石切丁場跡を確認 岩岡町では石材を持ち出すルートなどがみつかる』[広報あしや] 第908号 芦屋市
- 網干晋教・直宮憲一・藤原 学・森岡秀人 1973 『吉志部古墳発掘調査報告』吹田市・吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室
- 寛木幸治 編 2006 『木虎谷11号墳発掘調査報告書』(赤穂市文化財調査報告64) 赤穂市教育委員会
- 天野正史 1971 『八十塚古墳群予察調査報告と今後の問題』『声の芽』23 声の芽グループ
- 有坂隆造・村川行弘 1971 『大板城と芦屋』『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 伊井孝雄 2004a 『兵庫県芦屋市八十塚古墳群 破壊の危機』『文全協ニュース』No166 文化財保存全国協議会
- 伊井孝雄 2004b 『新しいタイプの乱開発と遺跡調査問題—芦屋市の八十塚古墳群と徳川大板城採石道跡』『文全協ニュース』No167 文化財保存全国協議会
- 池田 碩 1998 『花園岩形の世界』古今書院
- 勇 正広 他 1972 『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』(文化財資料4) 西宮市教育委員会
- 勇 正広 他 1974 『具足塚—発掘調査概報』(文化財資料10) 西宮市教育委員会
- 勇 正広・藤岡 弘 1976 『古墳時代』『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 勇 正広・藤岡 弘・前田義人 1977 『書楽園の古墳—発掘調査概報—』(文化財資料18) 西宮市教育委員会
- 勇 正広・藤岡 弘・前田義人・古川久雄 1976 『具足塚発掘調査報告』(西宮市文化財調査報告書 第1集) 西宮市教育委員会
- 勇 正広・藤岡 弘・森岡秀人 1977 『芦屋市山芦屋古墳(仮称城山古墳)緊急発掘調査終了報告』(芦屋市文化財資料調査報告書No1) 芦屋市教育委員会
- 石野博信 1970 『宝塚市長尾山古墳群』『宝塚の埋蔵文化財』(宝塚市文化財調査報告 第1集) 宝塚市教育委員会
- (藤 浩一 編『論集終末期古墳』1973年所収)
- 今西純朗・森岡秀人 1973 『古墳の歴史的調査—八十塚13号墳をめぐる横穴式石室の二次的使用について—』[八十塚13号墳の測量調査] 声の芽グループ考古学研究会・兵庫県立芦屋高校史学研究部
- 岩本昌三・藤川祐作 1979 『第6章 芦屋の史跡大板城と採石地芦屋の刷印石』『芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—』芦屋市教育委員会
- 魚住悠五郎 編 1956 『芦屋市史』本篇 兵庫県芦屋市教育委員会
- 魚住悠五郎 編 1957 『芦屋市史』史料編第二(考古学資料編) 兵庫県芦屋市教育委員会
- 大岡正美 2003 『9. 文庫にみる近世初期の採石場の変遷と豊臣・徳川大板城』『徳川大板城東六甲採石場 岩ヶ平刷印群(第12次)発掘調査報告書—芦屋市六龍荘浄水場高区配水池(水道建設)築造工事に伴う唐津港採石場跡の発掘調査—』(芦屋市文化財調査報告 第44集) 芦屋市教育委員会
- 大阪城天守閣 2002 『特別展 大板再生—徳川幕府の大板城再築と都市の復興—』
- 大阪城天守閣 編 1984 『大阪城天守閣紀要』第12号(大阪城学術調査報告特集号)
- 大阪府立近畿飛鳥博物館 編 2006 『年代のものさし—陶器の須恵器—』(大阪府立近畿飛鳥博物館図録 40) 平成17年度冬季企画展・重要文化財指定記念
- 大谷女子大学博物館 2006 『札幌—雲梯群出土資料整理報告—』(大谷女子大学博物館報告書 第52冊)

- 太田宏明 1999 「畿内型石室」の属性分析による社会組織の検討『考古学研究』181（第46巻第1号） 考古学研究会
- 太田宏明 2002 「第5章 論考 3 類型化による群集墳の検討—西摂地域を中心として—」『八十塚古墳群の研究』
〔関西大学文学部考古学研究 第7冊〕
〔芦屋市文化財報告 第33巻〕 関西大学考古学研究室 編
- 太田宏明 2003 a 「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』第15号 日本考古学協会
- 太田宏明 2003 b 「畿内地域における導入期の横穴式石室」〔関西大学考古学研究室開設五十周年記念考古学論集〕 関西大学
- 大手前大学史学研究所周辺調査室 1990 「打出小橋遺跡の発掘調査」『いなわ』（文化財調査室だより）№5
- 小方泰宏 1995 「大島1号古墳の復元—後期横穴式石室の築造過程—」〔研究紀要〕（第9号） 財団法人 北九州市教育文化事業団 歴史文化財調査室
- 岡野慶隆 他 1975 「横内古墳現状・遺物報告」〔関西学院考古〕№2 関西学院大学考古学研究会
- 岡野慶隆 1987 「横穴式石室の平面図についてⅡ—畿内における主要横穴式石室の検討—」〔関西学院考古〕№8 関西学院大学考古学研究会
- 岡野慶隆・寺前直人・堀永作哉 編 2006 「川西市稲穂寺古墳発掘調査報告書」 川西市教育委員会
- 岡本良一 1970 『大阪城』（岩波新書739） 岩波書店
- 岡本良一 編 1983 『大阪城』 清文堂
- 尾崎芳雄 1966 「横穴式古墳の研究」
- 落合重信 1989 「増訂 神戸市の歴史—古代から近代まで—」 通史編 後藤書店
- 小野 清 1973 『大阪城誌 全』（付・日本城郭誌）（1899年刊行版を復刻） 名著出版
- 小野 清 1989 『大阪城誌 中』
- 梶原 勝 2001 「江戸川の施設と遺構 2 土居・土橋・石垣 石垣の名称と構造」〔図説江戸考古学研究会専号〕（江戸遺跡研究会 編） 柏書房
- 春日真実 2001 「横版の製作技法」『つばとのかめのつくり方—須恵器貯蔵具を考えるⅡ—』（北陸古代土器研究会 第9号） 北陸古代土器研究会
- 葛野 徹 2004 「〈学問・文化〉徳川大阪城の石垣探石場跡 芦屋市岩ヶ平 調査・保存の意味 兵庫」〔赤旗〕11月25日号 日本共産党
- 河上邦彦 1976 「大和の群集墳概観」『横田健一先生還暦記念日本史論叢』 横田健一先生還暦記念会
- 関西大学文学部考古学研究室 編 1983 「関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論集」
- 関西大学文学部考古学研究室 編 2002 「八十塚古墳群の研究」〔関西大学文学部考古学研究 第7冊・芦屋市文化財調査報告 第33巻〕 関西大学文学部考古学研究室
- 北垣恵一郎 1984 「横穴式石室構築技法の一考察」〔横版考古学研究論集〕第6集 吉川弘文館
- 北垣恵一郎 1987 「石垣普請」 法政大学出版局
- 北垣恵一郎 2005 「第5章第3節 近世の石切技術」〔兵庫県高砂市所在竜山石切場—竜山石採石遺跡詳細分布調査報告書—』（高砂市文化財調査報告12） 高砂市教育委員会
- 喜谷美宜 1964 「後期古墳時代研究抄史」『日本考古学の諸問題』〈考古学研究会十周年記念論文集〉
- 北野博司 2001 「須恵器の風船技法」『つばとのかめのつくり方—須恵器貯蔵具を考えるⅡ—』 前掲書
- 木下 忠 1962 「後期古墳群の諸問題」『考古学研究』33号 考古学研究会
- 木村律子・辻 有子・山口厚子・田辺真子・森岡秀人 1974 「〔資料紹介〕 芦高社会科準備室所蔵の須恵器」『芦笛』第27号 兵庫県立芦屋高等学校自治会
- 熊田種次 1949 『歴史日誌』（メモ・ノート遺稿、岩本昌三筆稿）
- 車崎正彦 2007 「古墳時代の社会—首長国から国家へ—」〔季刊 考古学〕第98号 雄山閣
- 合田茂伸 2002 「第5章 論考 4 横穴式石室の床面について」（1998成稿、2000修正）『八十塚古墳群の研究』〔関西大学文学部考古学研究 第7冊・芦屋市文化財調査報告 第33巻〕 関西大学考古学研究室 編
- 合田茂伸・西川卓志 編 1991 「兵庫県高砂市所在八十塚古墳群調査文書第2号墳 第2次発掘調査報告書」〔西宮市文化財資料第34号〕 西宮市教育委員会
- 紅野芳雄 1940 「考古小録」 西宮市談話会
- 神戸新聞社など 1961 「祖先のあしあと」Ⅳ（古墳文化後期）
- 小林行雄 1960 「旭塚古墳発掘調査概要」（調査終了報告）
- 小林行雄 1976 「黄泉戸呪」『古墳文化論考』 平凡社 初出は昭和24（1949）年『考古学集刊』第2冊
- 五束 重 1992 「Ⅳ. 葬儀論 2—類飲儀礼」『葬と供養』 東方出版
- 近藤義郎 1962 「問題の所在」『佐良山古墳群の研究』第1冊 津山市
- 近藤義郎 1966 「日本古墳文化」『日本歴史講座』1 歴史学研究会・日本史研究会
- 坂本勝比古 1997 「郊外住宅地の形成—株式会社六菰荘 六菰荘経営地」〔阪神間モダニズム—六甲山麓に花開いた文化、明治末期—昭和15年の軌跡〕 淡交社
- 先山 徹 2001 「石材の代表「みかげ石」」〔自然環境ウォッチング「六甲山」〕（兵庫県立人と自然の博物館「六甲」研究グループ 編） 神戸新聞総合出版センター
- 先山 徹 2003 「Ⅶ. 3. 六甲花崗岩の分類研究・特性からみた石垣用材」〔徳川大阪城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平印刷所

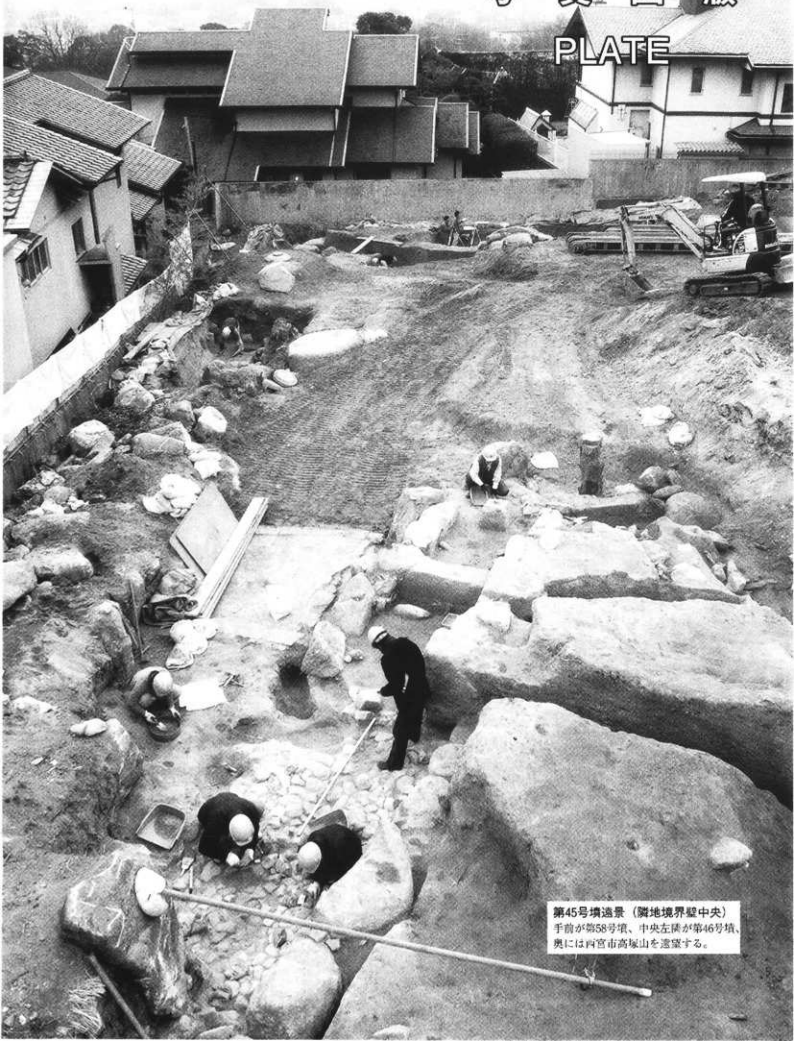
- (第12次) 発掘調査報告書—芦屋市六麓荘浄水場高区排水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩石
場跡の発掘調査—(芦屋市文化財調査報告第44集) 芦屋市教育委員会
- 先山 徹 2005 「地質学・岩石学的にみた六甲山の御影石」『天下普請を支えた石材の調査—東六甲徳川大板城石切丁
場跡—』(現地検討会資料) 主催:大阪歴史学会 後援:日本考古学協会・文化財保存全国協議会・
関西文化財保存協議会・歴史資料ネットワーク
- 佐々木幸雄 1965 「朝日ヶ丘古墳群と八十塚古墳群」『芦笛』18 兵庫県立芦屋高校自治会
- 佐々木幸雄 1967 「芦屋市内古墳分布調査所見」『芦屋市文化財調査報告 第5集』芦屋市教育委員会
- 辻沢正史 2001 「須恵器類の口縁部群像をめぐって」『つばとのかめのかつら—須恵器貯蔵具を考えるⅡ—』前掲書
- 佐田 茂 1972 「群集墳の形成とその被葬者について」『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会
- 佐藤 茂 1997 「新しい群集墳」『古代学評論』(古代を考える 別冊 第5号) 古代を考える会
- 寒川 旭・森岡秀人・竹村忠洋 2001 「芦屋庵寺跡建物基礎と関わる地蔵板」『日本考古学』第12号 日本考古学協会
- 志村 清 1970 「大坂城今昔」(日本古城友の会 編) 日本城郭資料出版会
- 白石太一郎 1966 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考—河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として—」『古代学研
究』第42・43合併号 古代学研究会
- 白石太一郎 1975 「ことどわかし考—横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって—」『標原考古学研究所論集 創立35周年記念』
標原考古学研究所 編 吉川弘文館
- 関川尚功 1978 「群集墳をめぐると問題—大和を中心として—」『阪市外縁山北麓古墳群』(奈良県史跡名勝天然記
念物調査報告 第34冊) 奈良県立標原考古学研究所
- 地質学研究会 編 1998 「堆積学辞典」朝倉書店
- 高橋一嘉 編 1997 「芦屋市所在 三条九ノ坪遺跡—被災マンション等再建事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」
〈兵庫県文化財調査報告書 第168冊〉 兵庫県教育委員会
- 高橋美久二 1995 「山陽道の駅と駅跡」『古代交通の考古地誌』大明堂
- 高橋美久二 1996 「山陽道—瓦葺き白壁未建りの駅跡」『古代を考える 古代道跡』(木下 良 編) 吉川弘文館
- 高松雅文 2006 「群集墳からみた地域支配(上)—但馬地域の分析を中心に—」『古代学研究』175 古代学研究会
- 高松雅文 2007 「群集墳からみた地域支配(下)—但馬地域の分析を中心に—」『古代学研究』176 古代学研究会
- 竹村忠洋 編 2002 「若宮遺跡(第3・4・10・16・17・25・31・32・33・34地点)発掘調査概要報告書—若宮地区住環境
整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果—」(芦屋市文化財発掘調査報告 第38集) 芦屋市教育
委員会
- 竹村忠洋 編 2004 「津知遺跡(第198・222地点)発掘調査報告書—芦屋西部第二地区震災復興地区面整備事業に伴う
震災復興調査の成果—」(芦屋市文化財発掘調査報告 第35集) 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・白谷勝世 2004 「徳川大坂城東六甲採石場岩々平削印群の発掘調査(1)—長州藩毛利家石切丁場における発掘調査
の成果—」『城郭談話会11月例会資料(2004年11月13日)』
- 竹村忠洋・山内芳子 1999 「八十塚古墳群岩々平削群(第22・57号墳)発掘調査実情報告書」芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・白谷勝世 編 2006 「徳川大坂城東六甲採石場V 岩々平削印群(第85地点)発掘調査報告書—長州藩毛利家石切
丁場における発掘調査の成果—」(芦屋市文化財調査報告 第61集) 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・白谷勝世 編 2007 「打出小橋遺跡(第41地点)発掘調査報告書」(芦屋市文化財調査報告 第66集) 芦屋市教育委
員会
- 田辺昭三 1966 「陶器古墳群」I 平安学考古学クラブ
- 田辺真人・森岡秀人 他 1979 「芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—」芦屋市教育委員会
- 地学団体研究会大阪支部 編 1999 「大地のおいたち—神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類」築地書館
- 築地書館 2006 「大坂城 石垣調査報告書(二)」
- 辻 美紀 1999 「古墳時代中・後期の土器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
- 都山比呂志 1970 「横穴式石室と群集墳の発生」『古代の日本』5 近畿 角川書店
- 寺前直人 2006 「ヨモツヘイ再考—古墳における飲食と調理の表象としての土器—」『待兼山論叢』第40号史学編
大阪大学大学院文学研究科
- 富山直人 1994 「横穴式石室考—畿内を中心として—」『大阪市文化財集』大阪市文化財協会
- 中野 咲 2005 「土師器の地域色発現過程—古墳時代中・後期の近畿地方を中心に—」三条文化財事務所学習会資
料
- 仲 彦三郎 1911 「武庫郡東部・名所旧蹟」『西摂大観』明祥社
- 中村 浩 2001 「和泉陶器 出土須恵器の型式編年」美祥書房出版
- 中村博司 1997 「徳川期大坂城石垣築造について」『建設文化としての大坂城石垣築造における土木施工技術の土木史
的調査研究』(課題番号07455206 平成7・8年度文部省科学研究(基礎研究(B))研究成果報告書)
建設文化としての大坂城石垣築造に関する総合研究会(研究代表者 天野光三)
- 中村博司 2004 「大坂城と石切丁場遺跡について」『第9回中国四国中世城館調査検討会—中国四国の城郭にみる石垣普
請—』第9回中国四国中世城館調査検討会
- 中村博司 2005 「天下普請—徳川大坂城の石垣構築をめぐって—」『天下普請を支えた石材の調査—東六甲徳川大坂
城石切丁場跡—』(現地検討会資料) 主催:大阪歴史学会前掲書

- 鍋島敬也・藤原 学 1974 『千里古窯跡群』
 並河誠所 1734 『摂津志』(日本興地通志叢刊部)
 西 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集 小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会』
 西川卓志 2000 『八十塚古墳群老松町支群第3号墳の調査』『八十塚古墳群老松町支群第4号墳の調査』『西宮市埋蔵文化財発掘調査報告書』(西宮市文化財資料 第44号) 西宮市教育委員会
 西崎定生 1961 『古墳と大和政権』『岡山史学』10
 西宮市教育委員会 1967 『香楽園五香町古墳—移築保存記録』 西宮市教育委員会
 西宮市教育委員会 編 1982 『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』(文化財資料23号) 西宮市教育委員会
 西宮市立郷土資料館 編 1994 『八十塚発掘—38年間にわたる群集墳発掘調査の成果—』
 西宮市立郷土資料館 編 1998 『紅野芳雄「考古小録」—西宮考古学のパイオニア—』
 白谷朋世 編 2006 『八十塚古墳群(第106地点)発掘調査報告書—八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳と徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平支群の調査—』(芦屋市文化財調査報告 第63集) 芦屋市教育委員会
 白谷朋世・竹村忠洋・水津真実 2006 『八十塚古墳群(第106地点)発掘調査報告書—八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳と徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平支群の調査—』(芦屋市文化財調査報告 第63集) 芦屋市教育委員会
 濱野俊一 2003 『2. 歴史的環境と周辺の遺跡』『徳川大坂城東六甲採石場 岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書』(芦屋市文化財調査報告 第44集) 芦屋市教育委員会
 原口正三 1979 『墓の中の須恵器—塚原古墳群の須恵器』『日本の原始美術4 須恵器』 講談社
 東大阪市教育委員会 1973 『山畑古墳群1』(東大阪市文化財調査報告書 第1冊) 東大阪市教育委員会
 兵庫県教育委員会 2000 『兵庫県遺跡地図—第1分冊—(発掘調査の手引き・地名表)』
 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫県遺跡地図—第1分冊—(発掘調査の手引き・遺跡地名表)』
 広瀬和雄 1975 『群集墳研究の一情況—六世紀代政治構造把握への方法論・覚書—』『古代研究』7 興隆寺仏教民俗資料研究所考古学研究室
 藤井重夫 1982 『大坂城垣柱石について』『大坂城の諸研究』(日本城郭史研究叢書8) 名著出版
 藤井祐介 1976 『旧石器・縄文時代』『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
 藤井祐介・森岡秀人 1974 『朝日ヶ丘縄文遺跡・会下山遺跡』(芦屋市文化財調査報告 第8集) 芦屋市教育委員会
 藤井祐介 1967 『八十塚E号墳発掘調査』(芦屋市文化財調査報告 第5集) 芦屋市教育委員会
 藤岡 弘 1971 『八十塚古墳群群集墳調査報告』 芦屋市教育委員会
 藤岡 弘 1986 『八十塚古墳群岩ヶ平支群(22号墳)』(兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度) 兵庫県教育委員会
 藤岡 弘・勇 正広 1978 『山戸古墳遺址』『日本考古学年報』29 (1976年版) 日本考古学協会
 藤岡 弘・橋爪康至 1966 『芦屋市内出土遺物について』(芦屋市文化財調査報告 第4集) 芦屋市教育委員会
 藤岡 弘 他 1967 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳』(芦屋市文化財調査報告 第5集) 芦屋市教育委員会
 藤川祐作 1969 『大坂築城と芦屋』『芦の葉』16号 芦の葉グループ(孔版)
 藤川祐作 1972 『摂津大坂城(六)—芦屋山中の採石場—』(城と陣屋65号) 日本古城友の会
 藤川祐作 1976 『八十刻印群の復元—徳川大坂城の研究3』『わだち』12号(孔版) わだち編集部
 藤川祐作 1979 『採石場としての岩ヶ平』(兵庫県埋蔵文化財調査集報) 第4集 兵庫県教育委員会
 藤川祐作 1985a 『徳川大坂城・東六甲採石場の西限の再考』『郷土史料室だより』85 夏・ゆり号 芦屋市教育委員会
 藤川祐作 1985b 『大坂城と採石場』『龍児』111号 加古川史学会
 藤川祐作 1985c 『摂津大坂城(十一)—徳川大坂城東六甲採石場山刻印群—』(城と陣屋シリーズ)168号 日本古城友の会
 藤川祐作 1991 『六甲山系の徳川大坂城採石場と積み出し地—芦屋市川町川見発見の新資料を中心に—』『歴史と神戸』第168号 神戸史学会
 福原潜次郎 1904 『摂津国武庫郡打出村の古墳』『考古界』5 日本考古学会
 古川久雄 1975 『八十塚古墳群における呼称統一の一試案』『八十塚12・13号墳の調査』六甲南麓群集墳調査調査団
 古川久雄 1976a 『市内出土の古墳時代遺物』『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
 古川久雄 1976b 『芦屋市打出駒塚古墳について』『武陽史学』15 武陽史学会
 古川久雄 1988 『徳川大坂城の採石場』(芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き)『芦屋市文化財調査報告 第16集』 芦屋市教育委員会
 古川久雄 1992 『岩ヶ平刻印群における池田家筆頭家老人名刻印の発見』『龍児』65号 芦の葉グループ
 古川久雄 1993 『徳川大坂城東六甲採石場—調査研究25年の歩みと課題』(考古学研究会関西例会第65回研究会発表資料) 考古学研究会
 古川久雄 2003 『岩ヶ平刻印群における採石大名と採石領域』(徳川大坂城東六甲採石場 岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書—芦屋市六龍荘浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査—』(芦屋市文化財調査報告 第44集) 芦屋市教育委員会
 古川久雄・森岡秀人・濱野俊一 他 2003 『徳川大坂城東六甲採石場 岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書—芦屋市六龍荘浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査—』(芦屋市文化財調査報告 第44集) 芦屋市教育委員会

- 古川久雄 編 1990 『芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳の調査—古墳損壊に伴う確認調査の結果—』(芦屋市文化財調査報告 第20集) 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 編 1999 『兵庫県芦屋市・西宮市所在 岩ヶ平刻印群 刻印石資料集』 摂陽文化財調査研究所
- 古川久雄 編 2002 『徳川大坂城東六甲採石場と岩ヶ平刻印群』『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 岩ヶ平刻印群(第11次)発掘調査報告書』(芦屋市文化財調査報告 第42集) 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 2004 『徳川大坂城と東六甲採石場』『第9回中国国中世城館調査検討会—中国の城郭にみる石垣普請—』第9回中国国中世城館調査検討会
- 前田 昇 1971 『第1章 芦屋の自然環境』『新修 芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 前田義人 1974 『苔園圖 5・6・7・8号墳』『西宮の文化財—埋蔵文化財—』(文化財資料7) 西宮市教育委員会
- 水野正好 1974 『群集墳の群集造とその性格—兵庫県小野市所在東野中書地区古墳群をめぐる分析—』『高山古墳群調査報告書』(小野市文化財調査報告書 第6冊) 小野市教育委員会
- 水野正好 1974 『雲雀山東尾根中古墳群の群集造とその性格』『古代研究』4 (特集・群集墳研究) 元興寺弘教民俗資料研究所考古学研究室
- 武庫川女子大学考古学研究会 1984 『兵庫県芦屋市 旭塚古墳—表六甲山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証—』
- 武庫郡教育会 編 1921 『武庫郡誌』 武庫郡教育会
- 武藤 誠 1957 『摂津国河馬郡東山出土の陶棺』『人文論究』7-6 関西学院大学人文学会
- 武藤 誠 1958 『陶棺の新資料—芦屋市岩ヶ平出土の陶棺について—』『人文論究』9-2 関西学院大学人文学会
- 武藤 誠 1977 『現地説明会資料 山芦屋古墳発掘調査の概要』 芦屋市
- 武藤 誠・村川行弘 1971 『考古学からみた芦屋』『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 武藤 誠・森岡秀人 1976 『文献解説 吉岡昭とその遺稿について』『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市
- 武藤 誠 編 1978 『創谷支群(2号墳)』『苔園圖の古墳』(西宮市文化財調査報告 第2集) 西宮市教育委員会
- 村上秋三 1905 『摂津国打出村の古墳』『考古学』8-2 日本考古学会
- 村上祐樹 1978 『兵庫県(動向)』『日本考古学年報』29 (1976年版) 日本考古学協会
- 村川行弘 1959 『芦屋八十塚古墳調査概報』(芦屋市文化財調査報告 第1集) 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1962 『大坂城と芦屋』(芦屋市文化財調査報告 第2集) 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966a 『朝日ヶ丘古墳』『八十塚古墳群』(芦屋市文化財調査報告) 第4集 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966b 『創谷1号墳』(芦屋市文化財調査報告) 第4集 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966c 『最近発見された遺物・遺跡』(芦屋市文化財調査報告) 第4集 前掲書
- 村川行弘 1966d 『苔園圖五番町古墳』(文化財資料第3号) 西宮市教育委員会
- 村川行弘 1966e 『朝日ヶ丘先土器遺跡・朝日ヶ丘縄文前期単墳遺跡・朝日ヶ丘古墳・八十塚古墳群』(芦屋市文化財調査報告 第4集) 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1970a 『現存大坂城の石垣刻印』『大坂城の謎』 学生社
- 村川行弘 1970b 『大坂城の謎』 学生社 前掲書
- 村川行弘 1970c 『芦屋庵寺址』(芦屋市文化財調査報告 第7集) 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1971 『考古学上からみた芦屋』『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所
- 村川行弘 2002 『大坂城の謎』(改訂新版) 学生社
- 村川行弘・石野博信 1964 『会下山遺跡』(芦屋市文化財調査報告 第3集) 芦屋市教育委員会
- 村川行弘・石野博信・森岡秀人 1985 『増補・会下山遺跡』 明新社
- 村川行弘・森岡秀人 1976 『新修芦屋市史』資料篇1
- 望月精司 2001 『須恵器窯の製作直跡と成形方法』『つばとめのかつくり方—須恵器貯蔵具を考えるⅡ—』
- 森 浩一 1962 『後部古墳の討論を回顧して』『古代学研究』30号 (特集後部古墳の研究) 古代学研究会
- 森岡秀人 1972 『考察とまとめ』『八十塚14号墳の測量調査』 芦の芽グループ考古学研究会・兵庫県立芦屋高校史学研究部
- 森岡秀人 1973 『向こうの山に群がる黄泉国—六甲南麓群集墳群解明への一歩—』『芦の芽』24 芦の芽グループ
- 森岡秀人 1974a 『金津山古墳墳丘断面調査の結果概要報告』 芦屋市史編集室
- 森岡秀人 1974b 『八十塚E号墳緊急立合い調査結果の概要』(プリント) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1977a 『(書評) 関西学院考古学Ⅲ—西摂地域群集墳群解明への一歩—』『芦屋』15号
- 森岡秀人 1977b 『(研究ノート) TK217型式における地方変の第2次拡散と群集墳の追跡—芦屋八十塚古墳群出土須恵器製作地の再検討—』『わだち』14号 兵庫
- 森岡秀人 1977c 『山芦屋古墳緊急発掘調査の概要—自江蘇西蜀渠建設工事に伴う事前調査—』(芦屋市文化財資料(1977) 遺跡調査No.4) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1977e 『芦屋市山芦屋古墳(仮称城山古墳)緊急発掘調査終了報告』(芦屋市文化財資料(1977) 遺跡調査No.1) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1978 『芦屋市八十塚6・7・8号墳所在地開発に伴う予察調査結果の概要』(芦屋市文化財資料(1978) 遺跡調査No.1) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1979a 『解明進む八十塚古墳群(芦屋遺跡めぐり5)』『海技通信』第340号

- 森岡秀人 1979 b 「Ⅱ 調査研究の沿革」Ⅶ 総括—八十塚古墳群の展開と岩ヶ平支群のもつ意義—『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』(芦屋市文化財報告 第11集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1982 a 「阪神地方—その過疎時代—西摂の縄文文化」展に寄せて—『地域史研究』35 芦屋の芽グループ
- 森岡秀人 1982 b 「城山南麓遺跡A地点確認調査報告書—芦屋市山戸原町・児島部建設予定地の縄文文化財予察調査結果の概要—」 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1983 a 「城山南麓遺跡B地点緊急発掘調査の概要—城山17号墳の発掘と中世建物群の部分確認—」 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1983 b 「追跡と精微配置—後半期横穴式石室墳の空間利用原理をめぐって二、三の考察—」『関西大学考古学研究室開設祭拾周年記念考古学論叢』 関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 1984 a 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第23・24・25・29号墳」『兵庫県縄文文化財調査年報 昭和56年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1984 b 「表六甲東南部における群集墳の動静」『歴史と神戸』第23巻第4号 神戸史学会
- 森岡秀人 1986 「城山古墳群第17号墳」『兵庫県縄文文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988 「兵庫県芦屋市」『角川 日本地名大辞典』28 角川書店
- 森岡秀人 1990 「Ⅴ.(3) トレンチ調査の所見」『芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳の調査—古墳損壊に伴う確認調査結果—』(芦屋市文化財調査報告 第20集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1992 「群集墳の形成」『古代を考える 古墳』(白石太一郎 編) 吉川弘文館
- 森岡秀人 1995 「海辺の古墳—摂津・金津山古墳と打出小古墳について—」『古墳文化とその伝統—西谷清治先生古希記念論文集』 勉誠社
- 森岡秀人 1996 「8. 山戸原遺跡」『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書』(芦屋市文化財調査報告 第27集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2001 「摂津国菟原郡菟原郡・賀美郡考証覚書」『考古学論叢』第5集 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 2002 「摂津・八十塚古墳群と菟原郡菟原郡・賀美郡周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』(関西大学文学部考古学研究第7号・芦屋市文化財調査報告 第33集) 関西大学・芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2003 「徳川氏再建大坂城の石切り丁場の調査と保護—芦屋市の行政的取り組みと成果を中心にして—」『石垣普請の風景を詠む—城の石垣はいかにして築かれたか—』東北芸術工科大学
- 森岡秀人 2005 a 「石切り丁場の出現—徳川大坂城・芦屋市東六甲石切場の発掘調査から—」『国際シンポジウム 韓国の倭城と大坂城—西国大名は倭城築造から何を学んだか?—』倭城・大坂城国際シンポ実行委員会
- 森岡秀人 2005 b 「六甲花崗岩巨石の大量利用と徳川期大坂城の再築をめぐって」『関西近世考古学研究XⅡ—石から見た近世文化—』資料集 関西近世考古学研究会
- 森岡秀人 2007 「飛鳥時代の終末期古墳、藤尾城関連遺構、および準高性土器跡」『平成12年度 国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—震災復興に伴う縄文文化財発掘調査の成果—』(芦屋市文化財調査報告 第65集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1979 「三条山遺跡」(芦屋市文化財調査報告 第10集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1980 「芦屋市縄文文化財調査分布地図及び地名表(第1分冊)」(芦屋市文化財調査報告 第12集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1983 「八十塚古墳群の発掘調査概報—岩ヶ平支群下小支群西地区の緊急調査成果概要—」(芦屋市文化財調査報告 第13集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1984 「3 八十塚古墳群岩ヶ平支群第23・24・25・29号墳」『兵庫県縄文文化財調査年報 昭和56年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 編 1986 「八十塚古墳群岩ヶ平第6・7・8号墳」『縄文文化財メモリアル'80~'85』(芦屋市文化財調査報告 第14集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1993 「芦屋市縄文文化財包蔵地分布地図および利用の手引き」(芦屋市文化財調査報告 第24集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1998 「徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ—芦屋系掘取工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査—」(芦屋市文化財調査報告 第31集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 2004 「前田公園建設事業に伴う前田遺跡(第20地点)発掘調査概要報告書—弥生前期水田跡の構造と水利施設—」(芦屋市文化財調査報告 第52集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 他 1973 a 「八十塚15号墳発掘調査略報」六甲南麓群集墳調査調査団(芦屋の芽グループ・兵庫県立芦屋高校)
- 森岡秀人 他 1973 b 「八十塚13号墳の測量調査—概要報告—」(六甲南麓群集墳測量調査第2報) 六甲南麓群集墳測量調査団(芦屋の芽グループ・兵庫県立芦屋高校)
- 森岡秀人 他 1977 a 「芦屋市山戸原古墳(仮称城山古墳)緊急発掘調査終了報告」(芦屋市文化財資料(1977) 遺跡調査No. 1) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 他 1977 b 「貴重な資料を築拠—山戸原古墳・縄文文化財発掘調査の記録」『広報あしや』5月号 芦屋市役所
- 森岡秀人・坂田典彦 2004 「津知遺跡(第181地点)発掘調査報告書—共同住宅建設事業に伴う遺跡西限部の様相把握—」(芦屋市文化財調査報告 第50集) 芦屋市教育委員会

- 森岡秀人・坂田典彦 2005 a 「Ⅳ. 調査のまとめ」『若宮遺跡(第42地点) 発掘調査報告書—須恵器集中遺存地点の調査と成果—(芦屋市文化財報告 第58集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 2005 b 「城郭研究の一視点—徳川大坂城東六甲採石場の発掘調査から—」『日本考古学協会第71回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 森岡秀人・坂田典彦 2005 c 「徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平切丁場跡—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果—」(芦屋市文化財調査報告 第60集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・島田竜雄 1988 「芦屋市(地誌・現行行政地名)」『角川日本地名大辞典』28 兵庫県 角川書店
- 森岡秀人・田口泰久 1991 「芦屋と大坂城」『芦屋の歴史と文化財—歴史資料展示室常設展示図録—』芦屋市立美術館
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000 「阪神・淡路大震災に伴う埋蔵文化財震災復興調査の経過と課題—芦屋市における5年間をふりかえって—」『地震災害と考古学Ⅰ—阪神・淡路大震災の被災状況と復興への取り組み—』日本考古学協会阪神・淡路大震災埋蔵文化財対策特別委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2005 「19. 八十塚古墳群第50号墳」『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書』(芦屋市文化財調査実績報告書2) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 2006 「第4章 第5節 岩ヶ平割印群(第70地点)の調査」『岩ヶ平割印群発掘調査報告書』32・33・45・67・70・79・81・91地点—平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業—。徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ(芦屋市文化財調査報告 第64集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 編 1999 「若宮遺跡(第1・2地点) 発掘調査報告書—震災復興住環境整備事業(芦屋市若宮町住宅1号館)に伴う埋蔵文化財事前調査の成果—」(芦屋市文化財調査報告 第30集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 編 2001 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き」(芦屋市文化財調査報告 第40集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷朋枝 編 1992 「平成3年度国庫補助事業 芦屋市遺跡発掘調査要報告書 月若遺跡第12次地点 月若遺跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳」(芦屋市文化財調査報告 第22集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・藤川祐作 1980 「芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表(第1分冊)」芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・藤川祐作 2005 「石切丁場の考古学—徳川期大坂城東六甲採石場の分析から—」(考古学研究会第137回関西例会発表資料) 考古学研究会
- 森岡秀人・藤田和尊 1984 「兵庫県東部—西摂地方—」『古代学研究』104 特集：各地域における最後の前方後円墳(西日本Ⅲ) 古代学研究会
- 森岡秀人・古川久雄 1992 「芦屋市立美術館博物館野外歴史資料展示における近世考古資料の一例—兵庫県芦屋市沢川町出土の大坂城陣御関係石材について—」『陣陵』(関西大学博物館学課程創立三十周年記念特集) 関西大学
- 森岡秀人・古川久雄 1998 「徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ—芦屋墓園拡張工事に伴う奥山割印群K地区内の事前発掘調査—」(芦屋市文化財調査報告 第31集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄 2002 「平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 岩ヶ平割印群(第11次) 発掘調査報告書」(芦屋市文化財調査報告 第42集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄 他 編 1979 「芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第4集 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄 編 1979 「芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査」(芦屋市文化財調査報告 第11集) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・村川義典 1996 「第6章 摂津国」『兵庫県の考古学』吉川弘文館
- 森岡秀人・和田秀寿・田口泰久 1991 「芦屋の歴史と文化財—歴史資料展示室常設展示図録—」芦屋市立美術館
- 森岡秀人・和田秀寿・古川久雄 他 1990 「八十塚岩ヶ平支群第10号墳の調査—古墳損壊にともなう確認調査—」(芦屋市文化財調査報告 第20集) 芦屋市教育委員会
- 山本圭二 2001 「Ⅵ. 考察 6 東山古墳群における鉄剣・棺金具と木槨」『東山古墳群Ⅱ』多可郡中町教育委員会、京都府立大学考古学研究室 編
- 吉岡 昭 1944 「摂津国芦屋郡土器時代文化研究」(和綴墨書)
- 吉田宣夫・金喜安孝 1997 「栗平遺跡(第31地点)」『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会
- 渡辺邦雄 1996 「横穴式石室の前庭部構造と墓前祭祀」『ひょうご考古』2 兵庫考古研究会
- 渡辺邦雄 1999 「横穴式石室における墓前祭祀」『ひょうご考古』5 兵庫考古研究会
- 渡辺邦雄 2001 「横穴式石室施設考—墳丘内暗渠と墳丘内列石を中心として—」『古代文化』第53巻第8号 財団法人古代学協会
- 渡辺邦雄 2002 「横穴式石室前庭部における祭祀施設」『古代文化』第54巻第2号 財団法人古代学協会
- 渡辺邦雄 他 1992 「神戸市東灘区生駒古墳調査報告—六甲東南麓地域の終末期古墳の調査調査と後期古墳研究動向—」(神戸大学考古学研究会調査報告 第2集)
- 渡辺 昇 他 1975 「八十塚・15号墳の調査」(六甲南麓群集墳調査報告 第3報) 六甲南麓群集墳調査委員会(芦の茅グループ・兵庫県立芦屋高校)
- 渡辺 武 1981 「大阪市 大坂城」『日本城郭大系』第12巻 新人物往來社
- 和田晴吉 2002 「石切場」『日本考古学事典』(編集代表 田中琢・佐原真) 三省堂



第45号墳遠景（隣地境界壁中央）
手前が第58号墳、中央左側が第46号墳、
奥には西宮市高塚山を遠望する。



I区 配石遺構検出状況（北から）

板状の花崗岩割石を立位に置くものと、横位に敷くものが認められる。石材については、選択的な意識が読みとれる。



I区 配石遺構検出状況（東から）

立位・横位に置かれた板状石材の組合せ状況。機能については不明である。配置からこの遺構のベースの存在がうかがわれる。



I区 配石遺構焼土・炭層検出状況（南西から）

配石遺構の面を周辺のみ残し掘り下げ、炭層との上下関係把握する。



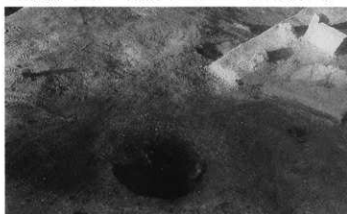
I区 配石遺構焼土・炭層検出状況（北西から）

配石遺構とSK103の上下関係。5～10cmのレベル差が確認された。



I区 SK103 四分法による掘削状況（北西から）

右下1/4区画に焼土塊を確認した。炭層の厚さは5cm前後を測る。



I区 SK101 検出状況（南東から）

明確な遺構ラインと、周辺に淡い炭化物の散布面が認められた。



I区 北壁・東壁の土層断面（南西から）

確認調査トレンチ内の巨礫は基盤層に帰属するもので、人為的なものはない。多くは無秩序な段丘礫層表層中のものと判断される。



I区 完掘状況（南西から）

下層確認トレンチを要所に追加し、ベースや下層遺跡の有無を調べて、I区の発掘調査を終了した。以上、第9・19～22図参照。



Ⅱ区 第58号墳 調査前の現況（北西から）

写真左手に第58号墳が隠れているが、調査前は草木が繁茂しており墳丘の存在すら予測し得なかった。遠方は丘陵地に建つ住宅群。付近一帯に何基の古墳が眠っているのであろうか。下草刈りからスタート。



Ⅱ区 第58号墳 玄門部付近の掘削状況（東から）

スタフ左側の黒いレンガは、戦前～戦中期に産産レンガとして多用されたものである。横穴式石室が想定外の大きさを現し始める。この下から、全長9mクラスの有軸式石室がみつかる経緯を辿る。



Ⅱ区 第58号墳 表土・攪乱土の除去途中の状況（南東から）

写真中央左寄りに玄門石を確認した。右手の遊歩道は玄門石をかすめて玄室相当部を横断し、上っていく。調査予定区外にも石室はのびていく。横穴式石室の左側壁が大破していることが判明する。



Ⅱ区 第58号墳 玄門石検出状況（東から）

写真左手が確認調査時に設けられた10トレンチの再発掘坑で、その後に姿を現わした玄門石の背面にセクションベルトを設定し、墳丘西半部の盛土築成構造も確かめる。トレンチの墳丘配置は第23図参照。



Ⅱ区 第58号墳 玄門部周辺の掘り下げ状況（東から）

写真右手が遊歩道の脇垣石。庭園の石材と石室用材、墳丘封土と攪乱土を見極めながら、丁寧な掘り下げを行う。右壁体の一部が姿を現す。



Ⅱ区 第58号墳 石室内堆積土掘削過程の状況（奥壁から）

墳丘北側（写真右手）の石材は遊歩道の脇垣石。右側壁基趾手前から2番目の石材は、上面に管路による欠損が見られる。しかし、動いてはいなかった。



Ⅱ区 第58号墳 主軸セクションベルト設定状況（北から）

写真左手前が奥壁と思われる巨石。中央右寄りの玄門石との間に、玄室空間が広がっていることが観察できる。中央遠くにみえる白い橋は、甲子園沢と西宮浜をつなぐ西宮港大橋を遠望する。中央奥、斜面を下ったところには、第45・46号墳が立地する。第9・23図参照。



Ⅱ区 第58号墳 石室遺存状況（奥壁から）

右側隙間に設けたサブトレンチにより、礎床であることを確認した。このレベルより床面までの石室内堆積土は、すべてフルイにかけて遺物の採取漏れを防いだ。その結果、石鏝や骨片などもとらえることができた。



Ⅱ区 第58号墳 奥壁底部の状況（玄室内側から）

奥壁底部の下側には、擾乱土が入っており、この巨石は遊歩道造成時にかなり移動していることが判った。ただし、奥壁石であることは疑いない。



Ⅱ区 開口部付近で検出された割石の集積（南から）

層位的に後世の採石などに伴う新石であると判断した。いわゆるコッパで人為的に集められたように出土した。羨門付近もいらわれている。



Ⅱ区 第58号墳 左側壁遺存状況（開口部側から）

写真手前右側の左側壁は、築造時の原位置を保っていることが確認された。羨道部と遊歩道が平行しており、かろうじて羨道部の側壁は破壊から免れたようである。全体的に内傾した状態で確認された。



Ⅱ区 第58号墳 床面検出状況（開口部から）

写真奥には玄室部の礎床が、羨道部は上床であった。羨道部には土層観察用の東西土手を残して、石室内堆積土のようすを調べた。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘東西セクション（北から）

写真左手が玄門石。ボールの左から、斜め下にする墓壇掘形ラインが観察できた。また、玄室右側壁基礎石の上辺と背面の墓壇の平面プランが検出された。墳丘盛土の紫成は、褐色味の強い土と黄色味の強い土を互層に積み上げ、これらは土質も異なることから、墳丘全体がひき締まる工夫を施している。第24図A参照。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘東西セクション（北西から）

西側墳丘盛土の遺存状況と墳丘崩壊後の流水堆積帯（写真右手）。墳丘全体が削平を受け、石室が崩壊した後、墳丘裾部を中心に大きく掘まり、隆起が再盛土などによって覆われている状況が知られた。これより西方にも古墳の存在が確認されるケースを想定して、トレンチ自体は延長したが、その限りにおいて墳丘や主体石室を見つけることはできなかった。第24図A参照。



Ⅱ区 第58号墳 石室床面検出状況（南から）

タイルのように敷かれた様子が、玄門石を境に無くなる状況が観察でき、玄室床面全体が敷石となっていたことが判った。玄室左側壁、羨道左側壁の損傷は著しく、1石1石の基礎石の抜き崩れは検出できなかった（右手）。羨道部床面の石材の中には、落石や遊離石材などが混じっており、須恵器なども動いている気配がある。第31図参照。



Ⅱ区 第58号墳 玄室右側壁背面の墓壇掘形（開口部側から）

掘形の底面は、赤褐色の基盤層を形成している。墓壇は壁石に効率良く接近するもので、一部に石材の形跡に合わせるように掘削された掘形ラインが把握された。壇底から浮く基盤石には一部人頭大までの根石を裏込めているようであるが、既して粘砂質の土を埋め土としている。第25図参照。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘調査状況（南西から）

現地説明会前の墳丘西半部と各所の土器の出土状況。墳丘断面（第24図B・C）には、古墳時代の土壌化した旧地表面を確認。墳丘内には多くの器種を含む特定の土器群設置がみられた。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘東西セクションベルト断面（北西から）

このセクションベルトは、墳丘築造過程を調べる重要な土層断面で、封土築成の作業単位など詳細を観察する。墳丘裾端のようがよく反映している。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘西半部の封土掘り下げ状況（西から）

石室を中心に、放射状にいくつものセクションベルトを残し、墳丘全体の築成過程を検証する。墳丘域の石規の性格付けに苦慮する。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘東半部遺存確認トレンチ（南東から）

遊歩道以東の墳丘は、すべて削平・破壊されており、盛土を除去しても封土が築成された形跡は出てこなかった。ベースには多くの礫が入る。



Ⅱ区 第58号墳

墳丘東半部の状況（北から）

散乱は石室の際まで迫っており、辛うじて残っていたことがわかる。

Ⅱ区 第58号墳 墳丘西半部の土層断面（南から）

3列のセクションベルトの土層所見を対応させることにより、墳丘築造前の地表面の状況や、墳丘各所における封土の違いや露地の様相が判った。第24図参照。



Ⅱ区 第58号墳 玄室床面検出状況
(後壁部から)

奥壁と左側壁は、遊歩道の造成により向きが変わったり、多くは抜き取られていたりする。中央は堆積土観察用のセクションベルト。



Ⅱ区 第58号墳 玄室床面検出状況
(左側壁側から)

写真左隔は、側壁の抜き取り痕。セクションベルト上に乗っているコップはかなり歪曲したもので、近世のものであろうか。この面に人の出入りのみられる石室内利用面が想定できる。上方の右側壁基底石の一部には腐や配管工事による損傷の跡がうかがわれる。



Ⅱ区 第58号墳 礫床面完掘後の石室
玄室部の検出状況 (奥壁側から)

床面は敷石とし、割石を中心とする石材を隙間なく敷いている。その数は約370個。かなりの盗掘を被っていたものの、床面がかなり完存していたのは幸いであった。第29図参照。



Ⅱ区 第58号墳 石室主軸半截状況（開口部から）

基盤層に含まれる巨礫の抜き取り痕が確認されるが、排水溝などの床面下施設はなかった。基盤層は、玄室から開口部にかけてゆるやかに下っており、旧地形の変化と石室基底の測定箇所がうかがえる。



Ⅱ区 第58号墳 玄室床面半截状況（奥壁側から、清掃前）
詳細を観察すると、厚さや平面形の異なる個々の石材をパズルのよう
に上手く嵌め込んで隙間をなくす工夫を行っている。



Ⅱ区 第58号墳 石室主軸半截状況（奥壁側から）

右側壁背面に明確な墓竈矩形が検出された。上部體石では、墓竈自体はもっとゆとりのある空間をもつものと思われる。



Ⅱ区 第58号墳 礫床の取り除き状況（奥壁側から）

左手前の礫床抜き取り痕を観察すると、モルタル状のつなぎ土に礫を押し嵌めた様子がうかがえる。凹凸が礫床材のネガを示している。



Ⅱ区 第58号墳 玄室床面敷石使用石材

石材の種類は黒雲母花崗岩で、大きさは10～30cm大のバラツキがみられるが、主に自然面を表面に置く共通性がみられた。



Ⅱ区 第58号墳 玄門石付近の床面下縦断面土層

南に下る基盤層の緩やかな傾斜と巨礫の抜き取り痕に覆土を丹念に施して床を形成する状況が知られた。築造に伴う土木工事の重要な工程である。第29図参照。



Ⅱ区 第58号墳 玄室床面断制断面

(東から)

床面を自然堆積層や複数の人為層に分けて分層掘削し(a～c)、床面造成・整地工程を確かめる。巻頭カラーⅡ・第29図参照。



Ⅱ区 第58号墳 羨道石材抜き取り痕

(東から)

床面形成時に障害となり、基盤層から抜き取られた石材は、側壁に使用されているかもしれないし、廃棄されたかもしれない。第29図参照。



Ⅱ区 第58号墳 石室羨道床面下に現れた石材抜き取り痕

(東から)

床面からの深さを考えると、1mを超える巨礫がこの場所に露呈していたことが推測できる。抜き取り痕に堆積した土層について、観察を加える。第29図参照。



Ⅱ区 第58号墳 玄室床面鉄釘出土状況（東から）
今回出土した鉄釘の中では、遺存率が高い方の資料。
巻頭カラーⅤ（上段）F6。



Ⅱ区 第58号墳 石室床面遺物出土状況（南東から）
現地説明会当日の副葬品など出土場所パネル設置状況。



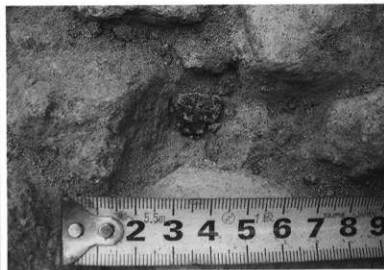
Ⅱ区 第58号墳 玄室床面耳環出土状況（東から）
敷石の隙間に落ち込むようにして確認された1点のみの耳環。盗掘を
まぬがれた副葬品の一つ。第31図および巻頭カラーⅤを参照。



Ⅱ区 第58号墳 玄室床面切子玉出土状況（南から）
やはり石材のない部分で確認された八十塚古墳群初めての切子玉。第
31図および巻頭カラーⅤ（上段）を参照。



Ⅱ区 第58号墳 玄室床面管玉出土状況（南西から）
同様に敷石の隙間から顔をのぞかせた管玉。管玉はもう1点確認され
ている。第31図および巻頭カラーⅤ（上段）を参照。



Ⅱ区 第58号墳 玄室床面鉄釘出土状況（南から）
鉄釘以外の鉄製品は微量である。欠損品であるが、鉄鑑と判断した。
第31図および巻頭カラーⅥ（上段）F1を参照。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘裾部遺物出土状況（西から）
写真右下のコツハは近世以降の石場による擾乱である。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘裾部遺物出土状況（西から）
墳丘西側裾部墳丘内からは、完形に近い須恵器の壺や杯が出土した。



Ⅱ区 第58号墳 確認調査10トレンチの残存出土遺物（西から）
大型の甕の体部片である。第41図参照。一連のもので、接合した。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘内土器集積部出土状況（東から）
壺・甕・杯・提籃・平瓶などが重なり合って姿を見せ始めた。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘内遺物出土状況（北西から）
ほぼ完形に復元できるものが多い。この場所に異常な数の埋没。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘内土器集積部上層出土状況（接写）
口縁部のみ打ち欠いた壺や故意に割られた杯が多数見られる。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘内遺物出土状況（西から）
完形土器を取り上げた後の下層出土遺物。まだまだ土器の集積は続く。



Ⅱ区 第58号墳 墳丘内土器集積部出土状況（北東から）
最下層出土遺物の検出状況。層序の検討に必要な出土状況であった。

Ⅱ区 第58号墳 墳丘西側裾部土器
溜りA検出状況 (北から)
土器溜りは、基盤層から10～15cm上で出土
した。第23図参照。



Ⅱ区 第58号墳 西墳丘裾部土器溜りA
検出状況 (北から)
土器片のそれぞれが水平方向に一定の接地
面をもって堆積している。原位置での破砕行
為が推測される。第36図(上)参照。



Ⅱ区 第58号墳 前庭部西側遺物散布
状況 (南から)
写真奥の墳丘内出土遺物に完形品が多いの
に対して、手前の前庭部西側の土器散佈面は
細片ばかりが目立つ状態である。それぞれの
出土状況に対して合理的な説明を加える必要
がある。第25図参照。





Ⅲ区 調査前の状況（北西から）

手前の大きな石が1号石材で、右切丁場が存在した。周辺の石材も露頭しているものが多いが、性格は不分明。発掘開始。



Ⅲ区 セクションベルト設定状況（北西から）

浮き石を取り除き、1号石材の性格と周囲や石場機能面を調べる。



Ⅲ区 採拓作業風景

採拓は、天候・温度に気を配り、熟練した技術がかなり必要だ。



Ⅲ区 2号石材（刻印石）移設後の状況

底池の圓い石に転用されており、移動の過程で確認された。第45図参照。



Ⅲ区 表土除去後の状況（北西から）

鍔石（円形）が左から右へと並び、同じタイプの石材が第45号墳の石室内に置かれていた。この面は、土地利用の一時期を示している



Ⅲ区 完掘状況（北から）

予測された鍔石土坑はなく、刻印石は自然石で原位置を保っている。



Ⅲ区 1号石材の刻印

露呈面に彫られているため、経年変化により風化している。縦径19cm。



Ⅲ区 2号石材刻印面とAタイプの矢穴列直

2種類の刷印が併刻されている。矢穴は刻印面から彫られ、割られた。第48図参照。

IV区 近・現代の盛土層より出土した
遺物の出土状況 (西から)
須恵器の甕体部片がまとまって出土した。
第50図参照。Ⅱ区第58号墳の墳丘西裾部から
出土した大甕と接合することが判明し、第58
号墳に所属する土器の造成移動と考えられる。
この土器の実測図は、第41図-1参照。



IV区 炉状遺構検出状況 (西から)
確認調査トレンチ土層断面で観察できた焼
土塊断面部分と広がり。検出面が近世初頭と
触れ合う可能性は高い。第49図参照。



IV区 炉状遺構発掘状況 (西から)
花崗岩巨礫を背面に負い、焼土塊が限られ
た範囲に留まっている。最近、急増している重
要な石場の火化遺構だ。第49図参照。





V区 調査前の状況（西から）

旧家屋の庭池の庭い石や転石が辺り一面に見られる。中央が第45号墳の天井石で、庭の中に築山状に残っていた。古墳や石室は、平成元年段階の状況を比較的に保って時が流れたようだ。第2・9図参照。



V区 第45・46号墳間先行トレンチ設定状況（西から）

手前が第45号墳の天井石、奥が第46号墳。墳丘の重複関係を実証的に調べる目的で、この東西方向のトレンチを掘り下げた。第53図参照。表土および工作物を除去した状況。マウンドはこれからだ。



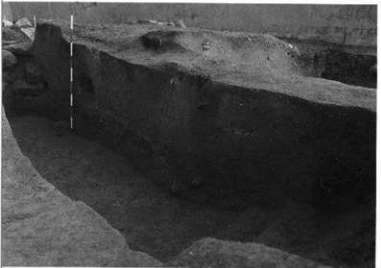
V区 トレンチ設定状況（北西から）

第45・46号墳間のトレンチや、第45号墳の墳丘の東側、西側に入れたトレンチの調査状況。第45号墳供送部の多くは、擁壁工事で壊れるため、墳丘の南半部は全体を掘り下げるよう努めた。第9・53図参照。



V区 調査状況全景および南方の景観（北西から）

中央やや右寄りの梯子が架かる部分に第45号墳があり、左手の事業地の隅に第46号墳が遺存する。昭和55～57年にかけて調査を進めたF小支群の宅地が前面に広がる。遠くに大阪湾海面を望む。第2・9図参照。



V区 第45・46号墳間トレンチ掘削状況（西から）

両墳の先後関係を墳丘断面から見きわめる重要な土層断面である。ボールはひと目盛20cm。上部掘削の過程において撮影。左手が第46号墳。



V区 第45号墳 透景（東から）

第46号墳から第45号墳側面と、刻印石の存在するⅢ区を見通す。Ⅲ区に造営された古墳はないらしい。西から東に向けての地形傾斜も判る。



V区 第45号墳 調査前の状況（現況開口部から）

竹や雑草が生い茂り、積み直しの天井石が架かっているが、石室の態をなす。天井石を欠く石室が多いだけに、貴重な存在である。



V区 第45号墳 下草除去後の状況（現況開口部東寄りから）

石室は玄室部を中心に再利用されており、出入りのための階段が石材を用いて造られていた。これから石室内の清掃発掘にかかる。



V区 第45号墳 羨道部および墳丘残存部検出状況（南から）

羨道部側壁基底石は原位置を保っており、南へ続いていた。



V区 第45号墳 羨道部検出状況（天井石から）

このアングルから眺めると、無袖式石室のようにみえるが、石室幅を考慮すれば、有袖式になることを疑う余地がない。ただし、支門付近のようすは、石材の積み直しが著しく、よく判らない。第57図参照。



V区 第45号墳 石室全景（羨道部から）

石室前半部の崩壊状況のわかる現地説明会当日の状況。羨道部では炭化物面と蓋石を持つ木槨痕跡が検出された。「流土」の左下にはAタイプの矢穴痕を持つ礫石が検出され、石室内で木槨施設などに伴って転用されていることが知られた。



V区 第45号墳 羨道部（右側壁から）

左下隅にAタイプの矢穴痕を持つ礫石がみられ、床近くで江戸時代以降の遺構が確認された。石切丁場と関連する形で、横穴式石室の再利用の一端が確認されたのは初めてのことであり、注目される。第57・58図参照。



V区 第45号墳 玄室内の状況
(狭道部から)

奥壁は一枚岩で、天井石は斜めに架かっている。一見して動いていることが判る。床面には棺台状の石材配置がみえてとれるが、後述のものである。第58図参照。



V区 第45号墳 壁体測量中の玄室内の状況
(奥壁側から)

現状の開入口部と、一部の側壁は、積み直し石材である。手前の円形石材は棺台ではなく、底石の転用とみられる。飛石のような石材を再利用したものか。階段を造っていることと共に興味深い。防空壕などの近代の利用が考えられてよい。



V区 第45号墳 天井石下面状況
(奥壁側から)

天井石には幅4～5cm、深さ6cm程度のCタイプの矢穴列痕が観察できた。このことから、岩ヶ平第10号墳同様、天井石は一度動かされ、近世以降に積み直されていることがわかった。右室を再構築する意図がうかがわれ、興味深い実例がまた1つ増えた。



V区 第45号墳 前庭部西側遺物出土状況（墳丘上から）
盛土層を取り除くと、遺物散布面が確認された。上層の巨礫は原位置を保っており、下層遺物は数cmのところに遺存していた。



V区 第45号墳 前庭部西側遺物出土状況（西から）
意図的に破砕された須恵器片が面を成して多数出土した。第61図参照。
墓前祭祀の一端かもしれないが、後に復元を終えた器種を見て、さらに意図的なものであることが推測された。



V区 第45号墳 前庭部西側遺物出土状況（東から）
上下2面にわたって検出したが、上面では須恵器の散布面が一定の広がりを見せた。八十塚古墳群全体を通して、開口部西側を占める前庭からの確認例が多いという特徴が認められる。



V区 第45号墳 羨道部遺物出土状況（左側壁から）
主軸セクションより、定形の須恵器杯身が出土したため、扇状に残す。この須恵器は床面に臥せるように置かれていた。7世紀代のもの。機能面の一端を反映している。柱状土層断面に羨道部の地層状況を示す。



V区 第45号墳 前庭部西側遺物出土状況（北から）
写真左半の須恵器片を取り上げると、下面からは土師器片が多数検出された。時期差と敷布目的の検討が一つの課題となる。第62図参照。



V区 第45号墳 墳丘東側の状況（南から）
墳丘東側は、近世以降の暗渠によって擾乱を受けていた。ボールが暗渠の方向を示す。



V区 第46号墳 調査前の状況（北東から）

平成元年度確認トレンチの掘削。写真中央壁際の露呈石材が供道と玄室を分かつ玄門の立柱石。石室幅を把握する調査痕跡。



V区 第46号墳 右側壁玄室相当部

左手下の立柱石が玄門石。右手の高い位置を占める2石が当墳で唯一残っていた4段目の玄室側壁材。石室には土が充填。第64図参照。



V区 第46号墳 玄室相当部試掘状況〔I〕（奥壁側から）

石室内流入土の地質状況を検証するため、一部を壁体に押し掘り下げる。小石塊が見え始めたが、とくに床面の気配ではない。さらに掘り下げることにする。ボールの目盛は20cm単位で石室幅を示す。



V区 第46号墳 玄室相当部試掘状況〔II〕（奥壁側から）

引き続き掘削、石室内には天井石とみられる石材は1石も落ちていなかった。角礫を含む流水堆積の様子を観察できた。石室内のこのような所見は、岩ヶ平8号墳などとも共通する要素であり、周辺での地質環境や自然変化の一端を示唆していよう。



V区 第46号墳 玄室深掘トレンチ（右側壁から）

奥壁は避難し、原位置を保っておらず、左側壁端との接触部には隙間が見られる。第58号墳同様に働いていることが判明した。



V区 第46号墳 玄室全景（奥壁側から）

右側に立柱状の玄門石を持ち、右片袖式の石室になる可能性が高い。

V区 第46号墳 墳丘封土の状況（玄室右側壁裏込め部分）

左手に幕状形跡のラインが確認できた。調査前は竹が生い茂り、土層は根根が著しく、この断面に出ている。ベースは石室に向って下がる。



第22図-1



第22図-2



第22図-3



第22図-4



第52図-10



第52図-1



第52図-2



第52図-7



第52図-4



第52図-5



第52図-5



第52図-6



第52図-9



第22図-3



第22図-4



第52図-10



第52図-1



第52図-2



第52図-7



第52図-4



第52図-5



第52図-5



第52図-6



第52図-9



第28圖-49



第28圖-48



第28圖-46



第28圖-55



第28圖-53



第28圖-44・45・47



第27图-6



第27图-29



第27图-1



第27图-10



第27图-5



第27图-38



第28图-54



第28图-54



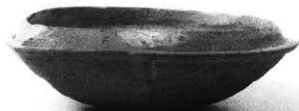
第27图-11



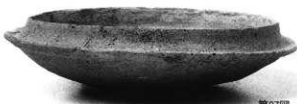
第27图-31



第27图-27



第27图-18



第27图-13



第27图-36·41



第27图-19



第27图-9



第27图-20



第27图-23



第27图-15



第27图-33



第27图-22



第27图-14



第27図-2



第27図-3



第27図-4



第27図-7



第27図-8



第27図-16



第27図-12



第27図-17



第27図-21



第27図-25



第27図-28



第27図-30



第27図-37



第27図-32



第27図-35



第27図-39



第27図-40



第27図-43



第27図-42



第27図-2



第27図-3



第27図-4



第27図-7



第27図-8



第27図-16



第27図-12



第27図-17



第27図-21



第27図-25



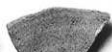
第27図-28



第27図-30



第27図-37



第27図-32



第27図-35



第27図-39



第27図-40



第27図-43



第27図-42



第35圖—17



第35圖—11



第35圖—21



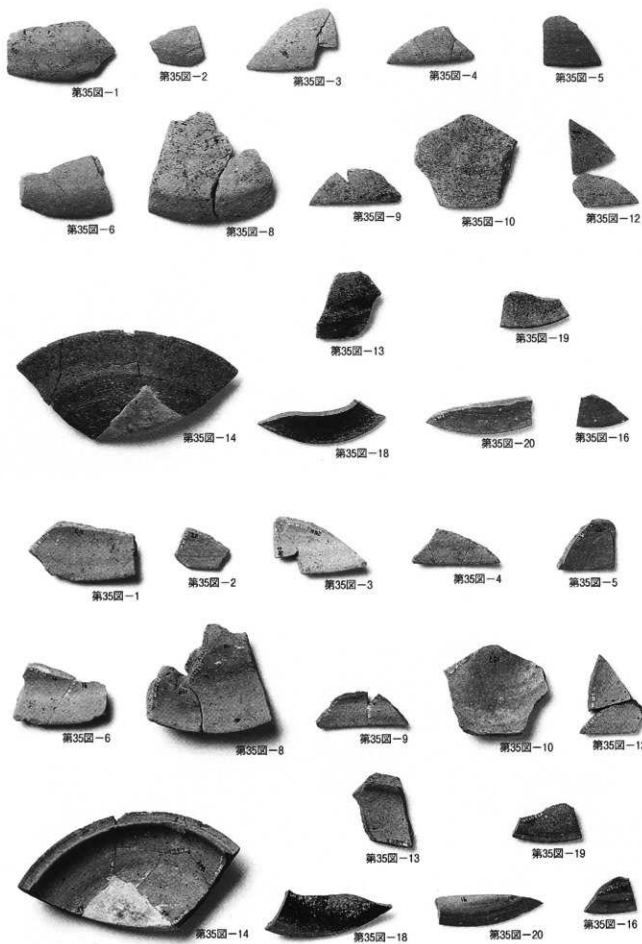
第35圖—15



第35圖—22



第35圖—22





第37図-4



第37図-6



第37図-7



第37図-5



第37図-1



第37図-2



第28図-51



第28図-52



第37図-3



第28図-50



第37図-1



第37図-2



第28図-51



第28図-52



第37図-3



第28図-50



第38图-12



第38图-24



第38图-13



第38图-15



第38图-25



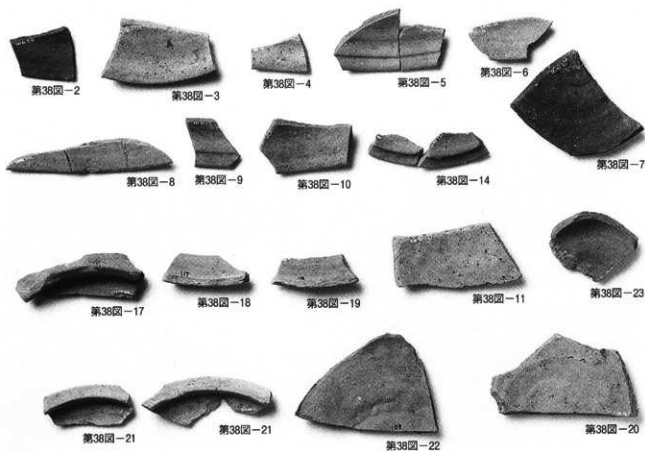
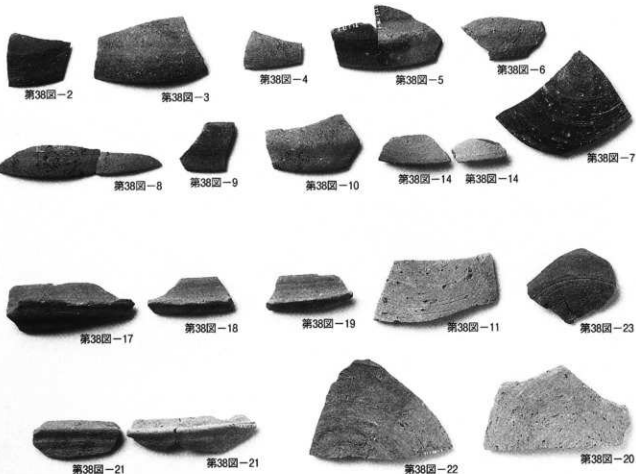
第38图-16



第38图-28



第38图-26





第39圖-43



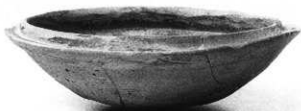
第39圖-11



第39圖-37



第39圖-4



第39圖-31



第39圖-19



第39圖-38



第39圖-40



第39圖-24

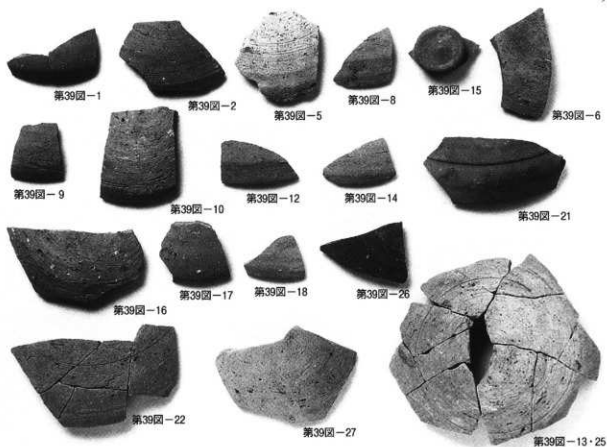


第39圖-49

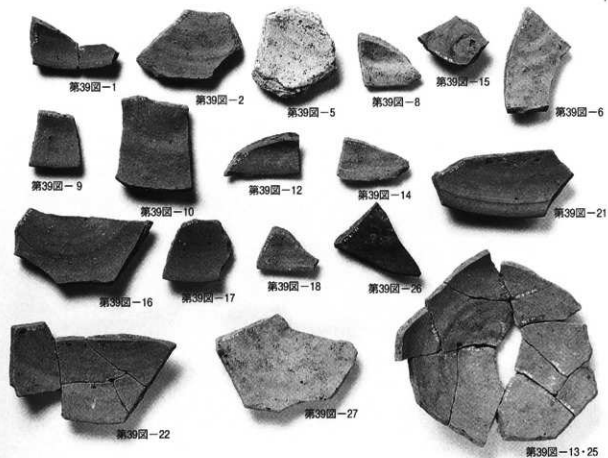


第39圖-23

外面



内面





第39圖-58



第39圖-54

外面



第39圖-29



第39圖-30



第39圖-33



第39圖-34



第39圖-35



第39圖-36



第39圖-42



第39圖-44



第39圖-45



第39圖-46



第39圖-48



第39圖-56



第39圖-56

内面



第39圖-29



第39圖-30



第39圖-33



第39圖-34



第39圖-35



第39圖-36



第39圖-42



第39圖-44



第39圖-45



第39圖-46



第39圖-48



第39圖-56



第39圖-56



第39图—60



Ⅱ区填丘下層



Ⅱ区填丘内



第40图—7



第40图—6



第40图—16



第40图—16



第40図-10



第40図-10



第40図-14



第40図-14



第40図-15



第40図-15

外面



第40図-1



第40図-2



第40図-3



第40図-4



第40図-5



第40図-8



第40図-9



第40図-9



第40図-13



第40図-11



第40図-12



第40図-12

内面



第40図-1



第40図-2



第40図-3



第40図-4



第40図-5



第40図-8



第40図-9



第40図-9



第40図-13



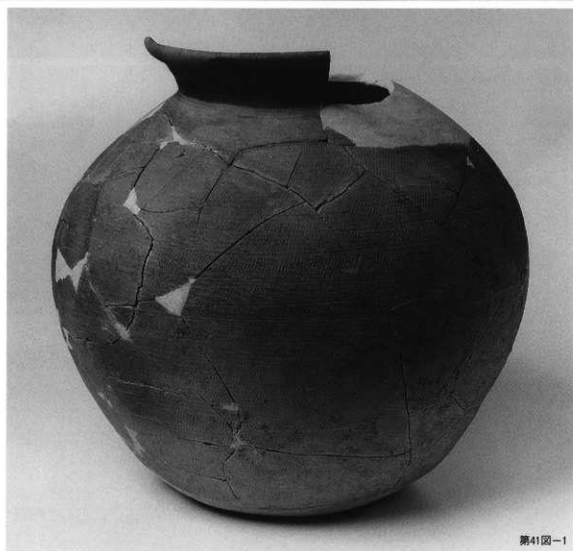
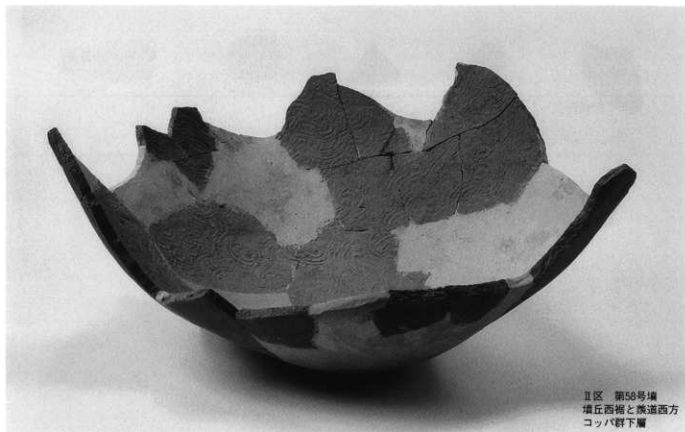
第40図-11



第40図-12



第40図-12





第52図-3



第52図-8



第60図-6



第60図-2

外面



第60図-1



第60図-3



第60図-4



第60図-5



第60図-7



第60図-8

内面



第60図-1



第60図-3



第60図-4



第60図-5



第60図-7



第60図-8



第63図-1



内面
土器製作痕



第63図-1



第63圖-2



内面



第63圖-2

編集余滴

このところ、市街地北東部に当たる岩園町・六麓荘町界限での発掘調査が続いている。六麓荘町では平成19年2月1日、「芦屋市地区計画の区域内における建築物の制限に関する条例」(いわゆる「豪邸条例」)が施行され、400平方メートル以下の小規模な開発に規制がかけられ、この地域独特の街並み造りが始まっており、全国的にも珍しい開発行政として注目されている。当該地にはバブル経済時に一部実施された確認調査により、横穴式石室墳2基が見つかっており、周辺にはなお未確認の古墳が存在すると予想されたため、新たな土地利用計画が進捗した現段階では、改めて事業地全体に眠る埋蔵文化財の取り扱いを決定するための確認調査を実施した。その結果を踏まえて実施されたのが今回の発掘調査である。

発掘の対象となった八十塚古墳群は、1970年代初頭の学生時代から県立芦屋高校の史学研究部や芦の芽グループの方々や墳丘や石室の測量調査を手掛け、村川行弘氏や石野博信氏をはじめとする関西学院大学考古学研究会等の参加を得て進められた初期の調査を引き継いで今日に至るが、多くの発掘調査の蓄積が見られる。一方、徳川氏大阪城の石垣用石採石場の発掘調査も21世紀に入ってからは大規模化しており、多岐に及ぶ調査視点が加わってきている。本現場では昔年の課題がずっしりと重しとなって作業を進めたが、今般確認された第58号墳は無袖式の小石室と想定されて全体を掘り広げていくうちに、袖をもつ長い横穴式石室であることが判明し始め、調査を予定していなかった箇所へも広がって、この意表を衝く「想定外」に同名は育ざめることとなった。また、遺物量も想像した以上に多く、調査・整理活動では色々な局面に出くわした。

今年度は、文化財ボランティア活動が、歴史フォーラム、市民講座や遺物整理などで軌道に乗り出てきたため、復元作業などではベテランの方々にその多くを依存した。整理費が底をつくぐらい出土量があったので、大変ありがたいことであり、献身的な修復作業のお陰で多くの土器類を可能な限り図化し、写真に収めることができた。また、現地調査や報告書作成作業で細かな連携を取りつつ外部の技能者の手も借りることになった。調査や報告書の編集が過密化している昨年、平成17年度の頃より採られ始めた方向であるが、文化財保護行政全体を円滑に実施していくには、主体性をはっきりさせ、緊密な調整と連絡の下、可能な限り工夫をしつつそれを進めることは、急がれる事業者に対しても時宜を得たものであったと思う。今後、改善すべき点は多々あろうが、ボランティアの方々の積極的な協力を含め、三者四者の「協働」をも視野に入れた合理的な今後の文化財調査のあり方を模索していきたい。

本書では、事実報告を行うのが関の山であった。今編集を終えて不十分な点ばかりが目立つ。繰り返すが、岩ヶ平第58号墳は考古学的に予想以上に厄介な調査データをもたらした。発掘現場では即答ができなかっただけでなく、基礎整理が終了した今でも「土器の出土状態などに、なぜか。」という疑問が付き纏う。資料の操作や歴史的な評価でその質や解釈、結果に真理とは異なる歪みが生じた場合の責任は、両名にあることを最後に断っておきたい。そして、現地作業から報告書の刊行に至るまで、多くの点でご協力を受けた事業者並びに本書作成に携わった多数の方々に対し、改めて深く感謝の意を表したい。

(森岡秀人・坂田典彦)

報告書抄録

ふ り が な	やそづかこふんぐん・いわがひらいしきりば							
書 名	八十塚古墳群・岩ヶ平石切場（徳川大板城東六甲採石場 Ⅶ）							
副 書 名	岩ヶ平第45・46・58号墳と第108地点の発掘調査成果							
巻 次								
シ リ ーズ 名	芦屋市文化財調査報告							
シ リ ーズ 番号	第67集							
編 著 者 名	森岡秀人・坂田典彦							
編 集 機 関	芦屋市教育委員会 生涯学習課 文化財担当							
所 在 地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精進町7番6号					TEL. 0797-31-9066		
発 行 年 月 日	2007年(平成19年)3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
八十塚古墳群 徳川大板城 東六甲採石場 岩ヶ平刻印群	兵庫県 芦屋市 六麗荘町 170番地 2、3、4	28206	YS108	34度 44分 54秒	135度 18分 48秒	20051206 } 20060225	約1,541㎡	宅地造成 に伴う 事前調査
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
八十塚古墳群 徳川大板城 東六甲採石場 岩ヶ平刻印群	古 墳 (横穴式石室) 生産遺跡 (採石場跡)	古墳時代 (後・終末期) 江戸時代 (元和・寛永期)		横穴式石室 3基 (岩ヶ平支群 第45・46・ 58号墳) 採石跡 刻印石2石 割石 火化遺構	須恵器・鉄鍬 鉄釘・耳環 管玉・切子玉 霰玉・骨片 陶磁器 (古墳時代) (近世)	3基の横穴式石室墳(古墳時代後期)の発掘調査並びに確認調査を実施し、岩ヶ平第45・46号墳を事業地に地下保存。岩ヶ平第58号墳は記録保存の取り扱いとした。これらの古墳グループは八十塚群集墳の同支群中古い様相をもつ。また、徳川大板城の採石場としては、2石の刻印石や火化遺構の調査を行った。		



岩ヶ平第58号墳の石室には一体何人ぐらいの被葬者が永遠の眠りについたのだろうか。発掘調査での手廻りはほとんど得られなかった。玄室にはこの写真のように成人4名がぎりぎり暮ることのできる空間がある。

休憩時間に、しばし死の世界、黄泉の世界へと旅立つ調査関係者。

表紙写真 現地説明会開催日の市民見学風景

当日、寒い中、180名程の考古学・古代史ファンや一般市民が公開された古墳や大板城採石場の発掘調査説明を聞き入った。

裏表紙写真 今回の調査地点で出土した土器たちとその修復作業

古墳の残り具合からは、想像できぬ出土数であり、多くの方々のご協力を得て、洗浄・註記・復元の諸作業が行われた。初めて確認された横塚など、須恵器の出土が目立った。

芦屋市文化財調査報告 第67集

八十塚古墳群・岩ヶ平石切場

(徳川大坂城東六甲採石場 VII)

— 岩ヶ平第45・46・58号墳と第108地点の発掘調査成果 —

2007年(平成19年)3月31日 印刷発行

発行者 芦屋市教育委員会

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL 0797-91-9066

編集者 芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課(文化財担当)

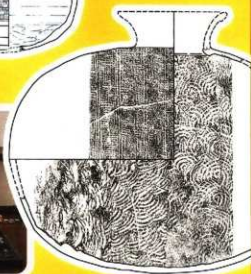
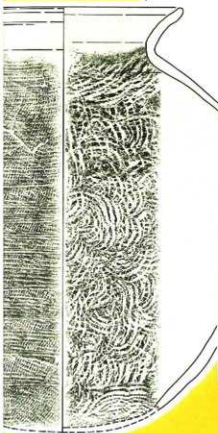
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL 0797-31-9066

印刷所 水山産業株式会社

〒653-0012 兵庫県神戸市長田区二番町3丁目4-1

TEL 078-577-3757(代)



2007.3

Ashiya City Board of Education, Japan